

福岡市
今宿五郎江遺跡
Imajuku Gorôe Site

II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集

1 9 9 1

福岡市教育委員会

今宿五郎江遺跡 II 正誤表

頁	行	誤	正
II	1	昭和59年度に	昭和59年度から61年度
II	26	調査期間1985年(昭和60年)	調査期間1984年から1985年
IV	27	S D遺構実測図(1/400, 1/800)	SD50, 100遺構実測図(1/400, 1/800)
V	5	第36回SD遺構実測図(1/100)	第36回SD遺構実測図(約1/130)
1	11	昭和60年11月から	昭和59年11月から
7	3	台地上に位置し	台地上に位置し
7	9	竪溝が数多くあり、	溝跡が数多くある。
11	7	これが約100mほど	これが約60mほど
11	7	互層が約10mほど	互層が50mほど
11	17	北面から約75m程度	北面から約10m程度
15		15行から32行 P17の最後に入る。	
15	18	10区分できる。E-26'-N	10区分できる。i. E-26'-N
15	18	中期は、	中期では、
15	26	18, 36, 50, 70で後期に	18, 36, 50後期に
16	11	---46, 69の6棟	---46, 69の5棟
16	27	---15, 59の8棟である。	---15, 59の7棟である。
17	18	---65, 117の10棟である。	---65, 117の9棟である。
39	10	弥生時代中期初葉	弥生時代中期中葉
39	15	この北大池も	この北古池も
39	29	SD-036から	SD-36から
40		SE-01のスケール	0 3m
41	15	不整形な竪込み	不整形な竪込み
41	23	遺構部考えられる。	遺構と考えられる。
43	11	中期の遺構が	中期の遺物が
43	15	竪は北東に	竪は北東に
47	6	後期末土器IV層から	後期末土器はIV層から
47	7	Tab. 22, 23に	Tab. 22, 23に
47	8	生活用品で第108-35, 36	生活用品で第108遺35, 36
56		第36回SD遺構実測図(1/100)	第36回SD遺構実測図(約1/130)
63		第38回 10008	第38回 10083
64	4	大型の石斧	大型の石斧
64	16	斜片鏃の範中に入る	斜片鏃の範中に入る
69	20	1b基部上がりふくらみ	1b基部よりふくらみ
92	17	外反気味に立ち上がる。(72.82--	外反気味に立ち上がる (72.82--
99	23	赤色赤土が	赤色顔料が
150		遺物登録番号71 PL.46	PL.46をトル
152		遺物登録番号171 PL.	PL.46をイレ
152		遺物登録番号172 PL.	PL.46をイレ
152		遺物登録番号176 PL.46	PL.46をトル
154		遺物登録番号264 PL.	PL.49をイレ
160		遺物登録番号564 PL.49	PL.49をトル
161	24	推定最大幅約16cm. で	推定最大幅約16cm.
168	29	脱脂土、	脱脂土、
203	16	1間×1間が36棟	1間×1間が20棟
203	16	1間×2間が26棟	1間×2間が22棟
203	17	1間×3間が5棟	1間×3間が6棟
203	17	2間×2間が4棟	2間×2間が1棟
203	30	1間×1間が12棟	1間×1間が9棟
203	30	1間×2間が16棟	1間×2間が13棟
203	30	2間×2間が9棟	2間×2間が11棟
PL.	46	00176	00176
PL.	46	00071	00171

福岡市 今宿五郎江遺跡

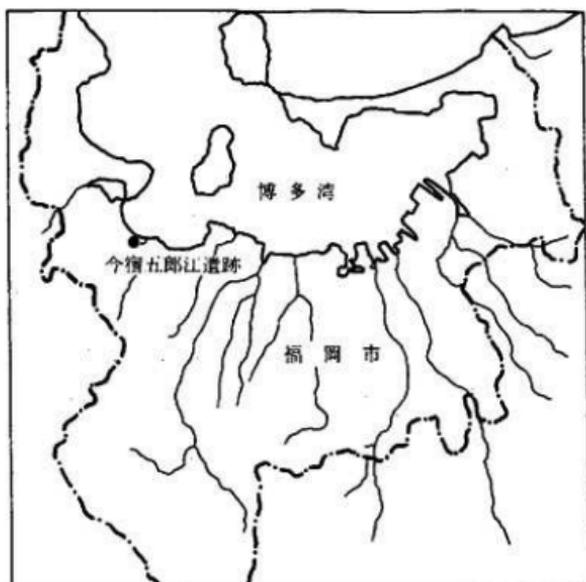
Imajuku

Gorôe

Site

II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集



遺跡略号 IJG 2次
遺跡調査番号 8407

1 9 9 1

福岡市教育委員会



今宿五郎江遺跡SD-100, SD-50全景



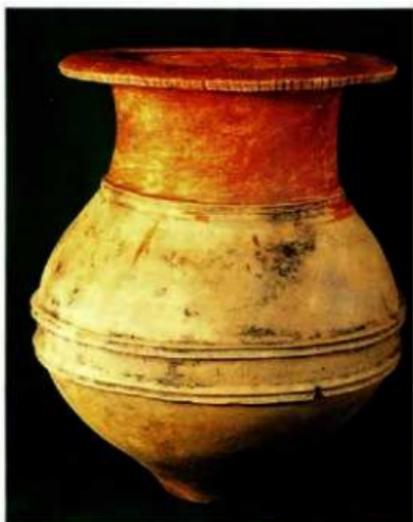
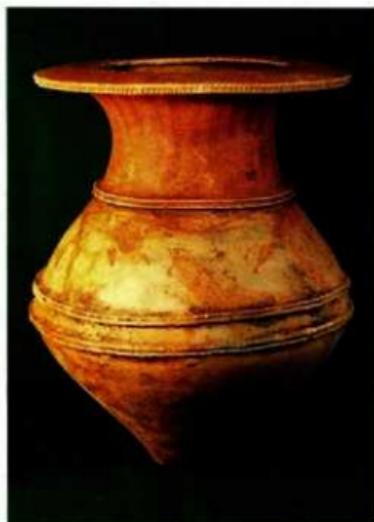
今宿五郎江遺跡全景



1. 水銀朱塗棒状木器



2. 銅鐸型銅製品



3. 4. SE-01出土遺物

序

近年、福岡市では都市圏拡大に伴い道路網の整備が急速に行われています。その反面、埋蔵文化財の保存も重要な課題となっています。

今津湾に臨む今宿地区は、福岡市内でも貴重な文化財と自然に恵まれた地域です。弥生時代の石斧製作所跡として全国的に著名な今山遺跡をはじめとして国指定史跡の元寇防塁・丸隈山古墳・大塚古墳や天然記念物の含紅雲母ベクマタイト等、数多くの文化財があります。

今回報告します今宿五郎江遺跡は、国道202号線とバイパスを接続する新設道路(福岡志摩前原線)建設に伴い土木局と事前協議を重ね、やむを得ず現状保存出来ない所について事前に発掘調査を実施しました。

調査の結果、祭祀用と考えられる小銅鐸や農耕具・漁撈具等、古代人の生活をしのばせる道具類が数多く出土しました。

本書が地域の皆様ならびに市民の各位の文化財保護のご理解を深められる上で広く活用されるとともに、学術研究の文野においても貢献出来れば幸いです。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表するものです。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例 言

1. 本書は福岡市西区今宿に所在する道路新設工事に伴い、福岡市教育委員会が昭和59年度に実施した埋蔵文化財の調査記録である。
2. 本書に収録した遺跡は周知の遺跡である今宿五郎江遺跡【福岡市埋蔵文化財分布地図(西部II)今宿、112】〔分布地図の地名ではA-5今宿五郎江遺跡となっているが、字名は五郎江のため遺跡名を今宿五郎江遺跡とした〕の近接地で、昭和61年福岡市教育委員会発行「今宿五郎江遺跡I」の西側近接地に位置する。
3. 遺構・遺物の実測は二宮忠司、佐藤一郎、大庭友子、久保寿一郎(現福岡県大牟田南高等学校嘱託)が行ない、製図は濱石正子、入江のり子、榑斐久美子、二宮、大庭、久保、斎藤美紀枝、真名子順子、渡辺ちず子が行なった。
4. 写真撮影は現場写真を二宮、佐藤、大庭が行ない、遺物写真は濱石哲也、大庭が行い写真現像、焼付けは青柳恵子、日名子節子が大庭の指導のもと、これに当たった。
5. 銅器型銅製品の鉛同位体比分析を東京国立文化財研究所の馬淵久夫先生、平尾良光先生にお願いし玉稿をいただいた。『考古学雑誌』第75巻第4号(1990.3)に「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」にも今宿五郎江銅の分析結果が掲載されている。ご一読していただきたい。また、本田光子氏には赤色顔料の原稿を掲載していただいた。
6. 本書の執筆は木製品の項を久保が、遺構・石器は大庭が、他を二宮が行なった。
7. 本書の編集は二宮が行なった。
8. 本報告書に関する記録・遺物類は整理後、福市教理文センターに収蔵・管理される。
9. 土器の押図内番号は登録番号で1は00001を示す。また石器も同様で1は10001を示す。鉄器も1が20001を示し、木器も1が30001からの登録番号である。
10. 調査・整理に当たって多くの先生方のご指導を受けた。特に九州産業大学の森貞次郎先生、名古屋大学の渡辺誠教授、愛媛大学の下條信行教授、九州大学の故岡崎敏先生、西谷正教授、田崎博之、柳田純孝、松村道博、小林義彦、小畑弘己氏には指導・助言を受けた。また、土木局の方々には色々な便宜を図っていただいた。記して感謝したい。調査に当たって作業員の方々、整理業務の方々の努力によって本書を完成することができた。記して感謝したい。

遺跡調査番号 8407 遺跡略号 IJG 2次 調査期間 1985年(昭和60年)

調査地地籍 西区今宿字五郎江他 分布地図番号 112-A-5

開発面積 21,200㎡ 調査対象面積 7,000㎡ 調査面積 6,000㎡

本文目次

第I章	はじめに	1
	1. 発掘調査に至る経過	1
	2. 発掘調査の組織と構成	1
	3. 試掘調査報告	3
第II章	遺跡の位置と歴史的環境	7
第III章	調査の記録	11
	1. 調査の概要	11
	2. 土層	13
	3. 検出遺構	14
	1) 獨立柱建物	14
	(1) 鎌倉・室町時代の獨立柱建物群	14
	(2) 弥生時代の獨立柱建物群	16
	2) 井戸・土壇・Pit	39
	3) 溝	43
	(1) SD-100	43
	(2) SD-50	45
	(3) その他の溝	47
	4. 出土遺物	62
	1) 石器	62
	2) 土器	91
	(1) SD-100出土の土器	91
	(2) SD-50出土の土器	98
	(3) 井戸・土壇・Pitの出土遺物	98
	3) 木器	161
	4) 今宿五郎江遺跡・2次調査出土の赤色顔料について	167
第IV章	SD-100出土の銅鐸型銅製品について	197
	今宿五郎江遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比について	199
第V章	まとめ	203
	1. 遺構について	203
	2. 銅鐸型銅製品について	204
	3. 遺物からみた生活様式について	205

挿図目次

第 1 図	試掘調査位置図(縮尺1/1,000).....	2
第 2 図	試掘調査検出遺構・土層図-1(縮尺1/50).....	4
第 3 図	試掘調査検出遺構・土層図-2(縮尺1/50).....	5
第 4 図	周辺の遺跡(縮尺1/25,000).....	8
第 5 図	今宿五郎江遺跡調査地点(縮尺1/8,000).....	10
第 6 図	遺跡周辺の地形図(縮尺1/31,250).....	12
第 7 図	掘立柱建物遺構配置図(縮尺1/400).....	18
第 8 図	掘立柱建物実測図-1(縮尺1/100).....	19
第 9 図	掘立柱建物実測図-2(縮尺1/100).....	20
第 10 図	掘立柱建物実測図-3(縮尺1/100).....	21
第 11 図	掘立柱建物実測図-4(縮尺1/100).....	22
第 12 図	掘立柱建物実測図-5(縮尺1/100).....	23
第 13 図	掘立柱建物実測図-6(縮尺1/100).....	24
第 14 図	掘立柱建物実測図-7(縮尺1/100).....	25
第 15 図	掘立柱建物実測図-8(縮尺1/100).....	26
第 16 図	掘立柱建物実測図-9(縮尺1/100).....	27
第 17 図	掘立柱建物実測図-10(縮尺1/100).....	28
第 18 図	掘立柱建物実測図-11(縮尺1/100).....	29
第 19 図	掘立柱建物実測図-12(縮尺1/100).....	30
第 20 図	掘立柱建物実測図-13(縮尺1/100).....	31
第 21 図	掘立柱建物実測図-14(縮尺1/100).....	32
第 22 図	掘立柱建物実測図-15(縮尺1/100).....	33
第 23 図	掘立柱建物実測図-16(縮尺1/100).....	34
第 24 図	掘立柱建物実測図-17(縮尺1/100).....	35
第 25 図	SK遺構実測図(縮尺1/40).....	38
第 26 図	SE-01・SK遺構実測図(縮尺1/30,1/40).....	40
第 27 図	SD遺構実測図(縮尺1/400,1/800).....	42
第 28 図	SD-100遺物出土状態(縮尺1/80).....	44
第 29 図	SD-50遺物出土状態(縮尺1/120).....	46
第 30 図	SD遺構全体図(縮尺1/400).....	50
第 31 図	SD遺構図(縮尺1/100).....	51

第 32 图	SD 遺構图(縮尺 1/100)	52
第 33 图	SD 遺構图(縮尺 1/125)	53
第 34 图	SD 遺構图(縮尺 1/100)	54
第 35 图	SD 遺構图(縮尺 1/100)	55
第 36 图	SD 遺構图(縮尺 1/100)	56
第 37 图	SD 遺構图(縮尺 1/100)	57
第 38 图	SD-100 · SE-01 出土石器実測图(縮尺 1/2、1/3)	63
第 39 图	SD-100 出土石器実測图-1(縮尺 1/4)	65
第 40 图	SD-100 出土石器実測图-2(縮尺 1/4)	66
第 41 图	SD-100 出土石器実測图-3(縮尺 1/3)	67
第 42 图	SD-100 出土石器実測图-4(縮尺 1/3)	71
第 43 图	SD-100 出土石器実測图-5(縮尺 1/3)	72
第 44 图	SD-100 出土石器実測图-6(縮尺 1/2)	77
第 45 图	SD-100 出土石器実測图-7(縮尺 1/2)	78
第 46 图	SD-100 出土石器実測图-8(縮尺 1/2)	79
第 47 图	SD-100 出土石器実測图-9(縮尺 1/2)	80
第 48 图	SD-100 出土石器実測图-10(縮尺 1/4)	81
第 49 图	SD-100 出土石器実測图-11(縮尺 1/4)	82
第 50 图	SD-100 出土石器実測图-12(縮尺 1/6)	83
第 51 图	SD-20 · SD-100 出土石器実測图(縮尺 1/4)	84
第 52 图	SE-01 · SD-100 出土石器実測图(縮尺 1/4)	85
第 53 图	SD-110 出土石器実測图(縮尺 1/4)	86
第 54 图	今宿五郎江遺跡出土石器形式分類(縮尺不統一)	93
第 55 图	SD-100 出土石器実測图-1(縮尺 1/4)	101
第 56 图	SD-100 出土石器実測图-2(縮尺 1/4)	102
第 57 图	SD-100 出土石器実測图-3(縮尺 1/4)	103
第 58 图	SD-100 出土石器実測图-4(縮尺 1/4)	104
第 59 图	SD-100 出土石器実測图-5(縮尺 1/4)	105
第 60 图	SD-100 出土石器実測图-6(縮尺 1/6)	106
第 61 图	SD-100 出土石器実測图-7(縮尺 1/4)	107
第 62 图	SD-100 出土石器実測图-8(縮尺 1/4)	108
第 63 图	SD-100 出土石器実測图-9(縮尺 1/6)	109

第 64 图	SD-100 出土土器实测图-10(縮尺1/6)	110
第 65 图	SD-100 出土土器实测图-11(縮尺1/6)	111
第 66 图	SD-100 出土土器实测图-12(縮尺1/4)	112
第 67 图	SD-100 出土土器实测图-13(縮尺1/4)	113
第 68 图	SD-100 出土土器实测图-14(縮尺1/4)	114
第 69 图	SD-100 出土土器实测图-15(縮尺1/4)	115
第 70 图	SD-100 出土土器实测图-16(縮尺1/4)	116
第 71 图	SD-100 出土土器实测图-17(縮尺1/4、1/6)	117
第 72 图	SD-100 出土土器实测图-18(縮尺1/4)	118
第 73 图	SD-100 出土土器实测图-19(縮尺1/4)	119
第 74 图	SD-100 出土土器实测图-20(縮尺1/4)	120
第 75 图	SD-100 出土土器实测图-21(縮尺1/4)	121
第 76 图	SD-100 出土土器实测图-22(縮尺1/4)	122
第 77 图	SD-100 出土土器实测图-23(縮尺1/4)	123
第 78 图	SD-100 出土土器实测图-24(縮尺1/4)	124
第 79 图	SD-100 出土土器实测图-25(縮尺1/4)	125
第 80 图	SD-100 出土土器实测图-26(縮尺1/4)	126
第 81 图	SD-100 出土土器实测图-27(縮尺1/4)	127
第 82 图	SD-100 出土土器实测图-28(縮尺1/4)	128
第 83 图	SD-100 出土土器实测图-29(縮尺1/4)	129
第 84 图	SD-100 出土土器实测图-30(縮尺1/4)	130
第 85 图	SD-100 出土土器实测图-31(縮尺1/4)	131
第 86 图	SD-100 出土土器实测图-32(縮尺1/4)	132
第 87 图	SD-100 出土土器实测图-33(縮尺1/3)	133
第 88 图	SD-100 出土土器实测图-34(縮尺1/3)	134
第 89 图	SD-100 出土土器实测图-35(縮尺1/2)	135
第 90 图	SD-100 出土土器实测图-36(縮尺1/2)	136
第 91 图	SD-100 出土土器实测图-37(縮尺1/2、1/3)	137
第 92 图	SD-100 出土土器实测图-38(縮尺1/4)	138
第 93 图	SD-100 出土土器实测图-39(縮尺1/4)	139
第 94 图	SD-100 出土土器实测图-40(縮尺1/4)	140
第 95 图	SD-100、200Pit 出土土器·鉄鏝·玉尖測図(縮尺1/1、1/2)	141

第 96 図	SD-50出土土器実測図-1(縮尺1/4)	142
第 97 図	SD-50出土土器実測図-2(縮尺1/4)	143
第 98 図	SE-01出土土器実測図-1(縮尺1/4)	144
第 99 図	SE-01出土土器実測図-2(縮尺1/3、1/4)	145
第100 図	Pit内出土土器実測図-1(縮尺1/4)	146
第101 図	Pit内出土土器実測図-2(縮尺1/2、1/3、1/4、1/6)	147
第102 図	各SD出土土器実測図(縮尺1/3、1/4)	148
第103 図	出土木器実測図-1(縮尺1/6)	174
第104 図	出土木器実測図-2(縮尺1/6)	175
第105 図	出土木器実測図-3(縮尺1/6)	176
第106 図	出土木器実測図-4(縮尺1/6)	177
第107 図	出土木器実測図-5(縮尺1/4、1/6)	178
第108 図	出土木器実測図-6(縮尺1/6)	179
第109 図	出土木器実測図-7(縮尺1/6)	180
第110 図	出土木器実測図-8(縮尺1/4)	181
第111 図	出土木器実測図-9(縮尺1/6)	182
第112 図	出土木器実測図-10(縮尺1/4、1/6)	183
第113 図	出土木器実測図-11(縮尺1/4)	184
第114 図	出土木器実測図-12(縮尺1/4)	185
第115 図	出土木器実測図-13(縮尺1/4)	186
第116 図	出土木器実測図-14(縮尺1/6)	187
第117 図	出土木器実測図-15(縮尺1/6)	188
第118 図	出土木器実測図-16(縮尺1/6)	189
第119 図	出土木器実測図-17(縮尺1/6)	190
第120 図	出土木器実測図-18(縮尺1/6)	191
第121 図	出土木器実測図-19(縮尺1/6)	192
第122 図	出土木器実測図-20(縮尺1/10)	193
第123 図	出土木器実測図-21(縮尺1/10)	194
第124 図	出土木器実測図-22(縮尺1/10)	195
第125 図	出土竹籠実測図(縮尺1/2)	196
第126 図	銅鏝型銅製品実測図(縮尺1/2)	198
第127 図	鉛同位体比分布の概念図	201
第128 図	銅鏝型銅製品の鉛同位体比	202

図版目次

<p>PL. 1 1 遺跡全景(北から) 2 遺跡全景(南から)</p> <p>PL. 2 1 南台地全景(南から) 2 SD-100南台地全景(北から)</p> <p>PL. 3 1 SD-50・100全景(北から) 2 SD-100・南台地遠景(北から)</p> <p>PL. 4 1 SD-200全景(西から) 2 中央台地遺構検出状態(北から)</p> <p>PL. 5 1 南台地SB・SD検出状態(南から) 2 SB・SD・SK検出状態(北から)</p> <p>PL. 6 1 SB・SD・SK検出状態(南から) 2 SB検出状態(東から)</p> <p>PL. 7 1 SB・SD検出状態(東から) 2 SB・SD検出状態(東から)</p> <p>PL. 8 1 SB・SD検出状態(東から) 2 SB検出状態(東から)</p> <p>PL. 9 1 SB検出状態(東から) 2 SB検出状態(東から)</p> <p>PL. 10 1 SE-01・SD-100検出状態 2 SE-01検出状態から(南から)</p> <p>PL. 11 1 SE-01遺物出土状態近景 2 SE-01遺物出土状態近景</p> <p>PL. 12 1 SE-01完掘状態(南から) 2 南台地2区遺構検出状態(南から)</p> <p>PL. 13 1 2区SD-100検出状態(北から) 2 2区遺構検出状態(北から)</p> <p>PL. 14 1 2区SB・SD検出状態(北から) 2 2区SB・SD検出状態(北から)</p> <p>PL. 15 1 SD-50・100検出状態(北から) 2 SD-50・100近景(南から)</p>	<p>PL. 16 1 SD-100銅鐸出土状態遠景(南から) 2 銅鐸出土状態近景(南から)</p> <p>PL. 17 1 銅鐸出土状態近景 2 SD-100遺物出土状態(南から)</p> <p>PL. 18 1 SD-100遺物出土状態(東から) 2 SD-100竹籠出土状態</p> <p>PL. 19 1 SD-100遺物出土状態 2 SD-100遺物出土状態</p> <p>PL. 20 1 SD-100遺物出土状態 2 SD-100遺物出土状態</p> <p>PL. 21 1 SD-100遺物出土状態 2 SD-100遺物出土状態</p> <p>PL. 22 1 SD-100遺物出土状態 2 SD-100遺物出土状態</p> <p>PL. 23 1 SD-100遺物出土状態 2 SD-100遺物出土状態</p> <p>PL. 24 1 SD-50全景(東から) 2 SD-50遺物出土状態</p> <p>PL. 25 1 SD-50遺物出土状態近景 2 SD-50遺物出土状態近景</p> <p>PL. 26 1 SD-50遺物出土状態近景 2 SD-50遺物出土状態近景</p> <p>PL. 27 1 SD-50舟出土状態 2 SD-50木器出土状態</p> <p>PL. 28 1 SD-50木器出土状態 2 SD-50木器出土状態</p> <p>PL. 29 1 SD-50木器出土状態 2 SD-50木器出土状態</p> <p>PL. 30 1 SD-50木器出土状態 2 SD-50木器出土状態</p>
--	---

PL. 31	1	SD-100土層断面	PL. 32	1	SD-100土層断面
	2	SD-50土層断面		2	中央台地土層断面
PL. 33	1	中央台地土層断面	PL. 34	1	北台地遺構檢出狀態
	2	中央台地土層断面		2	北台地遺構檢出狀態
PL. 35		北台地柱穴礎盤檢出狀態			
PL. 36		石器-1			(縮尺不統一)
PL. 37		石器-2			(縮尺不統一)
PL. 38		石器-3			(縮尺不統一)
PL. 39		石器-4			(縮尺不統一)
PL. 40		石器-5			(縮尺不統一)
PL. 41		石器-6			(縮尺不統一)
PL. 42		土器-1			(縮尺不統一)
PL. 43		土器-2			(縮尺不統一)
PL. 44		土器-3			(縮尺不統一)
PL. 45		土器-4			(縮尺不統一)
PL. 46		土器-5			(縮尺不統一)
PL. 47		土器-6			(縮尺不統一)
PL. 48		土器-7			(縮尺不統一)
PL. 49		土器-8			(縮尺不統一)
PL. 50		土器-9			(縮尺不統一)
PL. 51		銅鑄型鋼製品			(縮尺不統一)
PL. 52		木器-1			(縮尺不統一)
PL. 53		木器-2			(縮尺不統一)
PL. 54		木器-3			(縮尺不統一)
PL. 55		木器-4			(縮尺不統一)
PL. 56		木器-5			(縮尺不統一)
PL. 57		木器-6			(縮尺不統一)
PL. 58		竹籠			(縮尺不統一)

表 目 次

Tab. 1	掘立柱建物計測表-1	36
Tab. 2	掘立柱建物計測表-2	37

Tab. 3	Pit一覽表-1	58
Tab. 4	Pit一覽表-2	59
Tab. 5	Pit一覽表-3	60
Tab. 6	Pit一覽表-4	61
Tab. 7	出土石器一覽表-1	87
Tab. 8	出土石器一覽表-2	88
Tab. 9	出土石器一覽表-3	89
Tab. 10	出土石器一覽表-4	90
Tab. 11	出土土器一覽表-1	149
Tab. 12	出土土器一覽表-2	150
Tab. 13	出土土器一覽表-3	151
Tab. 14	出土土器一覽表-4	152
Tab. 15	出土土器一覽表-5	153
Tab. 16	出土土器一覽表-6	154
Tab. 17	出土土器一覽表-7	155
Tab. 18	出土土器一覽表-8	156
Tab. 19	出土土器一覽表-9	157
Tab. 20	出土土器一覽表-10	158
Tab. 21	出土土器一覽表-11	159
Tab. 22	出土土器一覽表-12	160
Tab. 23	出土木器一覽表-1	169
Tab. 24	出土木器一覽表-2	170
Tab. 25	出土木器一覽表-3	171
Tab. 26	出土木器一覽表-4	172
Tab. 27	出土木器一覽表-5	173
Tab. 28	小銅鐸の鉛同位体比測定結果	200

付 図

付図-1 今宿五郎江遺跡第2次調査遺構配置図(縮尺1/200)

付図-2 今宿五郎江遺跡第2次調査土層図(縮尺1/60)

第I章 はじめに

1. 発掘調査に至る経過

福岡市西南部では、近年、人口の増大に伴って交通の整備が急務となり、国道202号バイパスの建設が急速に押し進められている。それに伴って国道202号線とバイパスとの接続をはかる新設道路計画、福岡志摩原線(幅20m、延長距離1km)の計画が、昭和58年に埋蔵文化財課に提出された。この地区は『福岡市埋蔵文化財分布地図(西部II、今宿112)』に「A-5、今宿五郎口遺跡」(分布地図の地名はA-5、今宿五郎口遺跡となっているが、字名は五郎江のため遺跡名を今宿五郎江遺跡として再登録する。)として登録されている周知の遺跡の周辺部にあたり、遺跡の広がり予想されたため、事前審査班が昭和59年4月から5月に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、南側50mは剛平が著しく遺構の遺存状態が悪く、調査対象外とした。また、北側は泥炭層と砂の互層が約200m程続き、その後は砂丘となっている。この結果、発掘調査対象面積は20m×350mの7,000㎡であった。

埋蔵文化財課はその結果をもとに土木局道路建設課と協議を行ない、昭和60年11月から発掘調査を実施することにしたが、東側に用水路があるため、水田耕作の必要上から調査区を二つに分け第一区を11月から、第二区を昭和61年1月から開始し昭和61年3月をもって終了した。

2. 発掘調査の組織と構成

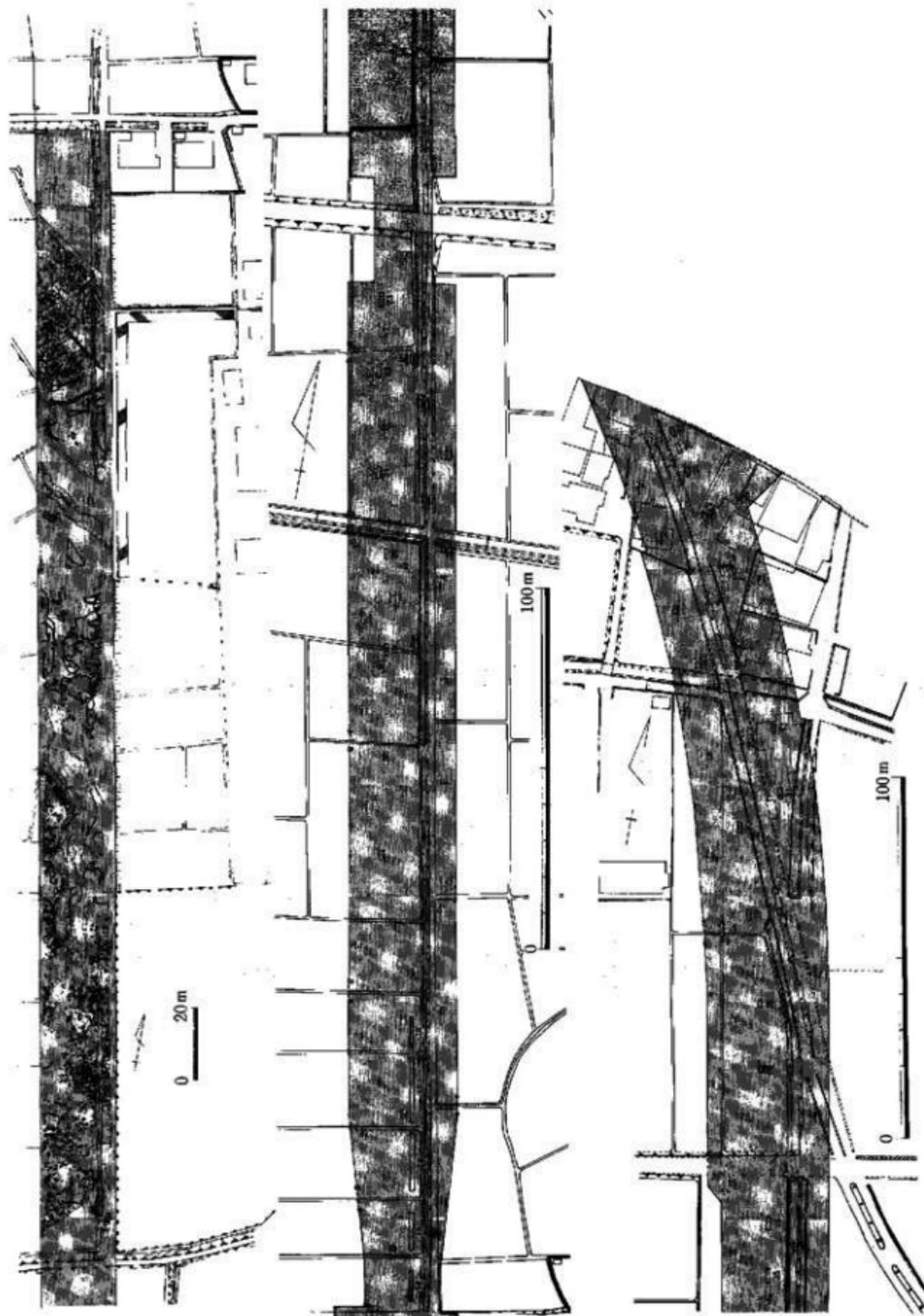
調査委託 福岡市土木局道路計画課

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第1係

教育長	佐藤善郎(前任)	井口雄哉
教育次長	尾花 剛(前任)	河野清一
部長	河野清一(前任)	川崎賢治
課長	生田征生(前任)	柳田純孝
係長	折尾 学(前任)	飛高憲雄
事務	岸田 隆(前任)	中山昭則 松延好文
試掘調査	山崎純男(主事)	山崎龍男 田中寿夫(技術担当)
発掘調査	二宮忠司(主事)	佐藤一郎

調査・整理補助 大庭友子 久保寿一郎 高橋賢治 村上かをり 藤村佳公忠

発掘・整理作業 榎光雄 牛尾豊 尾崎達也 太田孝房 鬼丸邦広 広田義美



第1圖 試掘調査位置圖 (縮尺1/1,000)

真名子時雄 三苫宗澄 結城弥澄

有吉貞江 池 弘子 伊藤みどり 上原チヨ子 牛尾秋子 牛尾シキヨ

尾崎八重 大内文恵 金子ヨシ子 菊地栄子 倉光ナツ子 白坂フサヲ

正崎由須子 柴田シズノ 柴田タエ子 清水文代 末松信子 杉村文字

惣慶とみ子 多田映子 田中タツ子 津田和子 典略 初 富永純子

西嶋和子 西嶋タミエ 西嶋初子 西納テル子 西納トシエ 能美八重子

野坂三重子 原 早苗 平田政子 平野ミサヲ 藤野ふじ子 古井モモコ

藤 タケ 細川ミサヲ 真鍋チエ子 松本愛子 松本マサ子 松本フジ子

松本トシエ 真名子ゆきえ 山西人美 山本チエ子 山下サノエ 結城シズ

結城信子 結城千賀子 吉岡貞代 吉岡タヤ子 吉岡連枝 吉岡竹子

吉竹早苗 吉積ミエ子 脇山美代子 脇坂ミサヲ

整理作業 青柳恵子 飯田千恵子 太田頼子 尾崎京子 亀井律子 北島藤子

斎藤美紀枝 清水優子 平田ミサ子 日名了節子 内山孝子 藤崎洋子

真名子順子 渡辺ちず子 京塚ハツミ

3. 試掘調査報告

試掘調査担当：山崎純男主宰、山崎龍男、田中寿夫担当

当該地は西側に大塚古墳を含む大塚遺跡群、東側に今宿五郎口遺跡(五郎江遺跡)群に挟まれた南北に長い範囲で、高祖山山麓から派生する低丘陵の末端に立地する。このことから遺跡の存在が十分に予測された。

試掘調査は路線に沿って各水田ごとに試掘トレンチを設定し、南から北へトレンチ番号を付した。各トレンチ検出遺構、土層についてその報告に基いて記す。

トレンチー1、遺構面までの深さは30～45cm、全体に上層やpitを検出した。遺構覆土は黒褐色粘質土で、遺構がのる地山面は黄灰色粘土(砂質)である。時期は弥生時代。

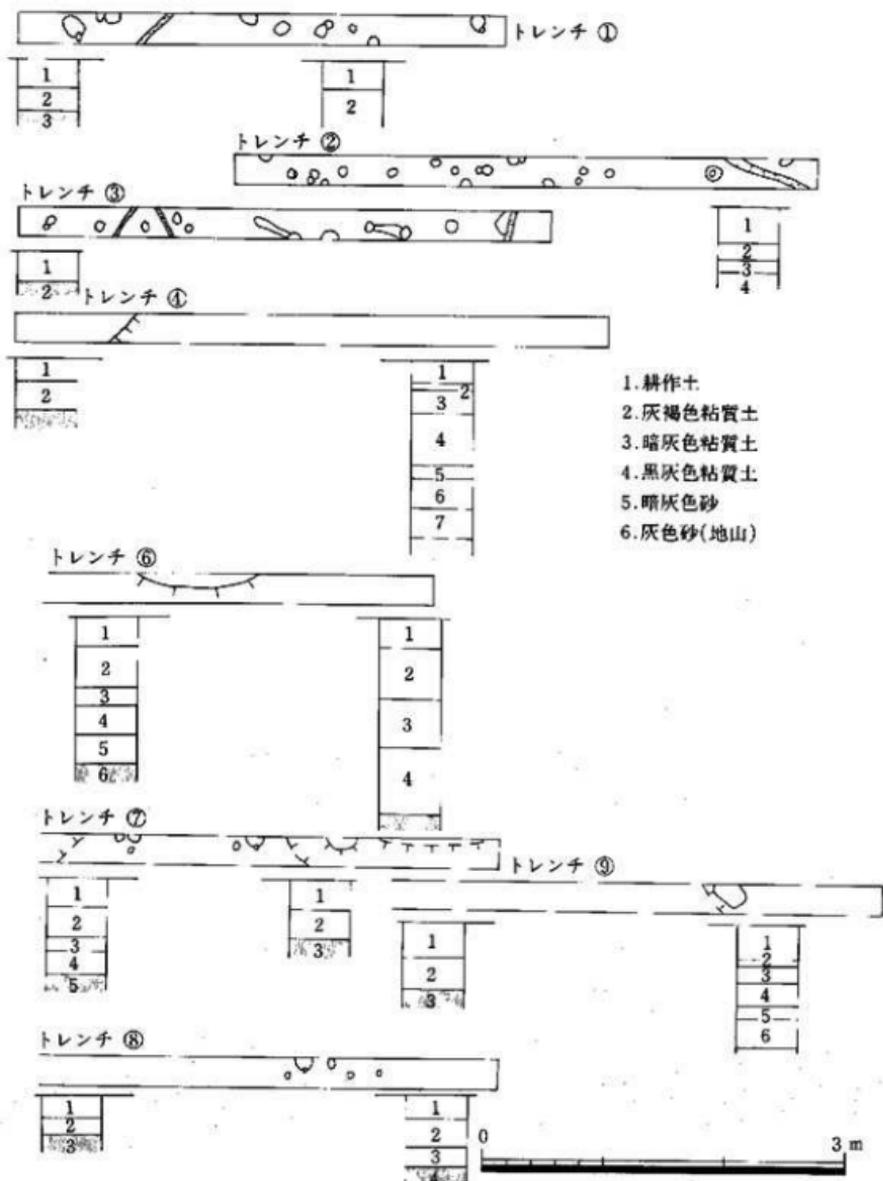
トレンチー2、pitや上層、溝を全面に検出した。Pitの大きさは20～60cmである。

トレンチー3、遺構面の深さは25～55cmである。全面に遺構を検出した。

トレンチー4、台地部から谷部になる。谷部の深さは1.5m以上。谷部には弥生時代後期の土器が上層を中心に多量にふくまれていた。

トレンチー5、谷部である。下層からは木器も出土した。

トレンチー6、谷部である。北側に砂の堆積が認められ、溝状遺構らしきものを検出した。地山は灰色砂で深さは1.25mである。谷部は1.65mで青灰色シルト、谷部上層には多量の土器が、下層には木器の存在の可能性がある。



第2図 試掘調査検出遺構・土層図-1 (縮尺1/50)

- トレンチャー 7、谷部から台地部になる遺構面の深さは0.5~0.8mである。
- トレンチャー 8、台地部であるが、削平がひどい。Pitがまばらに認められた。地山は淡灰褐色粘質シルト~明黄褐色粘質シルトである。
- トレンチャー 9、台地部から谷部になる。地山面までの深さは0.55~1.15mである。地山は明褐色粘土から青灰色砂質粘土であり、土層観察で現代から4面の水田が確認出来た。
- トレンチャー 10、谷部である。地山面までの深さは1.1~1.25mで、地山は淡青灰色粘質シルトである。地山直上に砂がかぶり水田の可能性はある。
- トレンチャー 11、台地部である。全体にPitが密集して検出された。焼土が一面に広がる所があり、住居址の存在する可能性がある。地山面迄は浅く0.4~0.45mで地山は淡明褐色粘質土である。
- トレンチャー 12、台地から谷部に移る地点で、深さは0.4~0.8mとなる。地山は明褐色~明灰褐色粘土(砂混じり)である。
- トレンチャー 13、地山面までの深さは0.8~1.15mと北側が深くなる。地山は淡青灰色粘土である。堆積土は耕作土の下に黒色粘土、黒灰色粘質土である。遺構・遺物は検出されなかった。
- トレンチャー 14、15、地山面迄の深さは2.0~2.2mである。地山は灰色シルト(砂質)、堆積土は黒灰色、黒青灰色粘土である。遺構・遺物は検出されなかった。
- トレンチャー 16、地山面迄の深さは1.2~2.0mで北側が高くなる。地山は灰色粘土である。堆積土は暗茶褐色粘質砂、暗灰色粘質砂である。遺構・遺物は検出されなかった。
- トレンチャー 17、地山面迄の深さは0.95~1.05mである。地山は淡灰褐色粘質シルト。堆積土は暗青灰色砂混り粘土である。南側で耕作土下に溜池上の落ち込みが認められた。遺構・遺物は検出されなかった。
- トレンチャー 18、地山面迄の深さは0.8~1.05mで北側が高くなる。土層状況はトレンチャー 17とほぼ同じ。遺構・遺物は検出されなかった。
- トレンチャー 19、20、1.0m程盛土されている。深さは2.7m程掘り下げた。遺構・遺物はなし。
- トレンチャー 21~26、盛土は0.8~0.9m、2.1~2.7m迄掘り下げたが遺構・遺物はなし。
- トレンチャー 27~30、2.2m迄掘り下げたが湧水が酷く、砂質で壁の崩壊が著しく掘り下げることが出来なかった。
- トレンチャー 31~36、2.7m迄掘り下げたが、遺構・遺物は検出出来なかった。

第II章 遺跡の位置と歴史的環境

糸島平野と早良平野を二分する大起丘陵地である叶岳・長垂山・高祖山塊に挟まれた東西約6km、南北約2kmの小平野が今宿平野である。遺跡は高祖山から派生した北麓の低丘陵先端部にヤツデ状に広がった台地上に位地し、国土地理院発行『福岡』1/50,000(NI-52-10-11、福岡11号)の左上端より下に21.3cm、右に4.4cmで、ほぼ東経130°16'24"、北緯30°34'24"に位置する。本遺跡の周辺には、数多くの遺跡が分布する。西には伊都国に比定されている三雲・平原遺跡に代表される前原平野があり、縄文時代から歴史時代にわたる数多くの遺跡が周知され、また、新しく発見されている。

北には、弥生時代前期の石斧製作所跡として知られる呑山遺跡を始めとして、長浜貝塚・今津貝塚があり、鎌倉時代・室町時代には、日宋貿易の港として繁栄した痕跡が数多くあり、特に勝福寺²²西側では、約200体の人骨(頭部と体部が別々に埋葬され体部だけが火葬されている)と共に多くの陶磁器が出土した。また、国史跡・元寇防塁が長浜海岸に保存されている。

今津湾を挟んで南には、弥生時代前期に生産が開始され、中期には大分県・熊本県まで供給された玄武岩製大型型剣刃石斧の原産地であり、かつ生産地の今山遺跡²³がある。この今山から国の天然記念物に指定されている(含紅雲母ペグマタイト岩脈)のある長垂山までは砂丘地帯である。この砂丘地帯には、今宿松原遺跡、今宿横浜遺跡²⁴があり、弥生時代前期から中期にかけての遺構(土墳墓、燂棺墓等)が検出されている。また今山遺跡の初源は、弥生時代前期前半²⁴であるところから、この砂丘地帯は、弥生時代前期以前から形成されていたと考えられる。

東には、古代の官道である広石峠があり、早良平野へとつづくがこの官道沿いには、多くの古墳群が群集している。その中で、峠の西側台地に竪穴系横口式石室で知られる鑑先前方後円墳²⁵を初めとして数多くの古墳群や弥生時代の遺跡がある。

西には縄文時代晩期の遺構を検出した新聞遺跡や、古墳時代の須恵器窯跡の新聞古窯址等が山麓斜面にある。弥生時代の遺跡も最近発見されつつあるが、古墳時代前期から中期には、この地域に前方後円墳12基(東から鑑先古墳、本村古墳、イヤゾノ古墳、大家古墳、小松原1号墳、2号墳、下谷1号墳、2号墳、八幡神社古墳、山の鼻1号墳、2号墳、丸隔山古墳)が築造されている。古墳時代後期にも山麓低位から中位にかけて数多くの群集墳が形成され、墓域的要素を強く持つ地域である。また、古代から中世の遺跡も最近発見されている。国道202号線バイパス建設に伴う発掘調査で女原遺跡²⁶から古墳時代の竪穴式住居址、掘立柱建物、中世水田等が検出されている。また、徳永地区の調査では、谷部から奈良時代～平安時代にかけての青磁(越州青磁)が多量に出土している。



第4図 周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

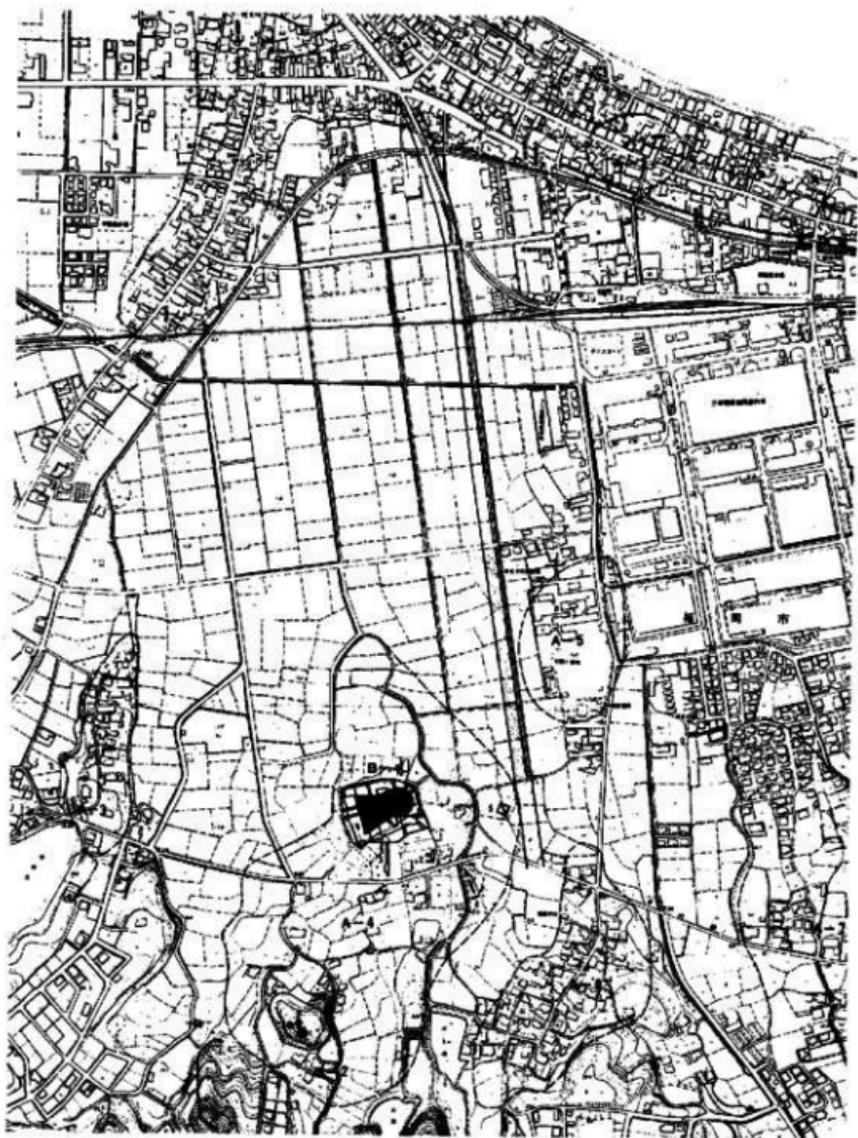
今宿五郎江遺跡周辺では、古くから弥生時代の遺跡として三菱電気工場内遺跡があるが、その内容については不明である。この遺跡から南に約500mの所に青木遺跡^{註7}がある。弥生時代後期から中世までの遺物が出土している。遺構は、弥生時代後期の掘立柱建物、甕棺墓等と中世の掘立柱建物、溝等である。この遺跡で注目すべき遺物は石斧の量の多さである。石材は玄武岩製であることから今山遺跡の石斧との関連をかんがえるが、報告者は今山の石斧製作地からのものではないと考えている^{註8}。

このほか今宿五郎江遺跡の南側に高田遺跡がある。弥生時代後期から古墳時代にかけての竪穴式住居址群が検出されている。また、今宿五郎江遺跡の東側に今宿小学校がある。昭和59年に校舎の改築工事に伴う調査で弥生時代後期の溝、井戸状遺構が検出されている。この遺跡を今宿五郎江遺跡第1次調査^{註9}として行っている。

昭和63年に今宿五郎江遺跡第2次調査地点の東側を調査した。これが第3次調査で、SD-100のつづく部分とその北側部分の調査である。検出遺構はSD-100北側の溝につづくもので、下層から弥生時代中期の土器と共に木器が出土し、上層から後期の土器が層をなして出土した。

今宿五郎江遺跡第2次調査に先立って行った試掘調査と工事立会の調査を行った結果、今宿小学校北側部分から急激に台地が落ち、泥炭層と砂の互層で、これがトレンチ17付近までつづく。その長さ約200m程度である。トレンチ18と19の間あたりから古砂丘が認められ、ほぼトレンチ23付近までつづく。トレンチ24から26にかけて泥炭質の粘土が認められ、砂丘が切れていることが判明した。トレンチ27からは今山から長垂山につづく古砂丘の南側に位置するものである。これらのことから今津湾の内湾としてこの部分まで広がっていたことが判明した。中央部に約60mの幅で砂丘が広がり、湿地帯が2ヶ所にあることが判明した。弥生時代中期の段階では、今宿周辺部は、海水面低下に伴う砂丘の発達、ラグーンの形成があったことが判明した。弥生期における海水面は約-2m程度低下していたことが証明されている^{註10}。今回の調査で弥生期には今津湾の内湾として大きな湿地帯が前面に広がっていたことが明らかとなった。

- 註1 亀井明徳「博多の中国陶磁地図」 初出1975～1976 『日本貿易陶磁史の研究』
註2 福岡市教育委員会『今山遺跡(1)』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集 1968
註3 福岡市歴史資料館『福岡平野の歴史—緊急発掘された遺跡と遺物』 1977
註4 福岡市教育委員会『今山・今宿遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 1981
註5 福岡市教育委員会『鑑先古墳』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集 1984
註6 福岡市教育委員会『大家遺跡・女原遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第224集 1989
註7 福岡市教育委員会『青木遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集 1986
註8 福岡市教育委員会『青木遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集 1986 P.37
註9 福岡市教育委員会『今宿五郎江遺跡Ⅰ』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集 1986
註10 井関弘太郎『沖積平野』 東京大学出版会 1983



第5圖 今宿五郎江遺跡調査地点 (縮尺1/8,000)

第三章 調査の記録

1. 調査の概要

遺跡の発掘調査は国道202号線とバイパスとの接続をはかる幅20m、長さ1kmの道路新設工事に伴うものである。試掘調査の結果、南50mは削平が著しく遺構の遺存状態が悪く調査対象外とした。また、北側部分については湿地部分と砂丘部分との調査の有無について検討したが、砂丘地帯の確認については工事の立会調査とし、台地部分の全面調査とした。

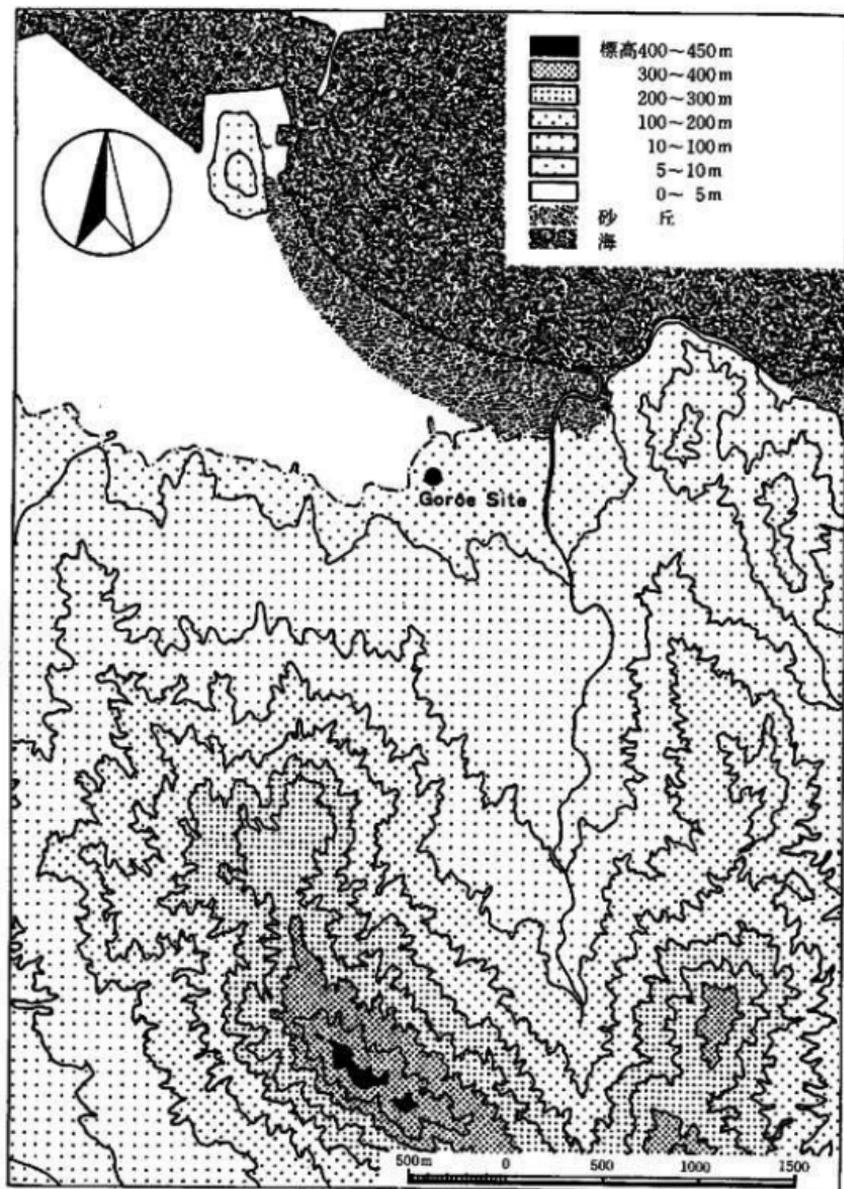
北側砂丘地帯については、深さ約5mまで確認したが、試掘結果とほぼ同様の結論が得られた。台地落ちから約30mまでは泥炭層と砂との互層である。そのあと上部は砂が堆積し、下層に砂と泥炭層の互層となる。これが約100mほどつづき再度、砂と泥炭層との互層が約10mほど続く。その後、砂丘部分に続く砂層が厚く堆積していた。

この結果、台地から古砂丘までの間にもう一つの砂丘があり、両側に湿地帯が存在していた事が明らかとなった。第6図に示す遺跡周辺地形図からみると台地部分は3～5mの標高を持ち一段高いが、台地落ち部分は0～3mでかなりの比高差をもつ。今山から長垂山にかけての古砂丘地帯は発掘調査の結果²⁾から弥生時代前期(板付I式段階)以前から形成されていたと考えられる。これらのことから今山と対岸の浜崎山(毘沙門山)との狭い入江から考えて、広い内湾状を呈し、多くの河川が流れ込む状況であり、そこにラグーン状の地形が形成されたものと考えられる。

台地部分の発掘調査は南北に幅広いトレンチ状のものとなったが、遺構の広がり把握するには非常に重要な調査であった。発掘調査対象面積は20m×350mの7,000㎡であるが、実際の発掘調査面積は6,000㎡強であった。北側から約75m程度で段落ちが認められた。

北側台地は鎌倉時代から室町時代にかけての溝、土塹、掘立柱建物(2間×2間、2間×3間が主体)46棟を検出した。中央部、南側台地の内SD-200、SB-28が鎌倉時代から室町時代にかけての遺構で、他は弥生時代の遺構のみの検出である。遺構は南側に溝、土塹、掘立柱建物(2間×3間が主)72棟、井戸等が検出され、中央部ではSD-50と大溝のSD-100がある。

南側台地は、掘立柱建物とした72棟の内、28棟ほどは竪穴式住居址の可能性が高い。遺跡の時期は、殆どの柱穴(堀方内、柱底内)より弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土していることからこれらの時期と考えて良い。SD-50はSD-100を切る形で検出された。形状は楕円形を呈し、30m×50m程度と考えられる。SD-100は南東から北西に向かって流れるが、一部南側に張り出す形状を呈する。すぐ東に近接する調査地点でも同様に南東方向へ続く様相を示していた。西側は調査例がないため遺構の様相は明らかに出来ないが、おそらく北西側に続き内湾に流れ込むものと考えられる。



第6図 遺跡周辺の地形図 (縮尺1/31,250)

2. 土層(付図-2)

南側台地は、水田耕作土、床土(黄褐色土)の下層は、暗褐色土の包含層である。しかしこの包含層は、南側に部分的にしかない。その下層は、暗黄褐色粘土で遺構面である。

北側台地も南側台地と同様で耕作土、床土の下層に遺構面である赤褐色粘土となる。北側台地は、調査区北側より10mで段落する。その土層は、暗灰褐色土、砂層、泥炭層、砂層、泥炭層とつづき、北側に傾斜しながら砂と泥炭層の互層がしだいに厚くなる。

付図-2で示した土層図は、南台地と北台地を結ぶ土層図で、SD-100の土層図が①~③、中央台地部分の土層図が④・⑤である。

①はSD-50と100の横断面土層である。I層は耕作土、II層は床土、III層は灰褐色土層で鎌倉~室町時代にかけての遺物が出土している。IV層は暗褐色土層で古墳時代初期の土器(小型丸底壺等)が出土している。この面までは、ほぼ自然堆積である。V層は黄褐色粘質土層でSD-50上面で凹状の削り出しを呈する。VI層は、黒色土層である。SD-50は暗黄褐色粘土からの切り込みで、このVI層は最上面の土層である。この層より多量の弥生時代後期の土器、石器が出土している。VII層は暗黒褐色砂層であるが、SD-50と100とは、色彩が多少異なる。SD-50は、黒色が強く、黒色砂層であるのに対して、SD-100は暗黒褐色砂層である。SD-100から出土した銅鐸型銅製品は、この層と上層との境に出土したが、銅鐸型銅製品内につまった上はVII層の砂層で、上層の黒色土は混入していない。この層からは中期末の土器が出土している。SD-100のVIII層は荒砂が多量に入り流れが急であったことが伺える。SD-50のVIII層は、黒褐色粘質土で、多量の木器、土器の出土が区層の砂層までつづく。SD-100の区層は砂と泥炭層の互層で、この層からは中期中葉から前葉の土器を中心に出土している。SD-100は①~②にみられるように途中で一度立上がり、再度溝状を呈する。南側の溝状の土層は基本的には、同様である。

③~④の基本層序は、盛土、耕作土、床土(黄褐色土)、III層、明褐色土、IV層、鉄分を多量に含む明灰褐色土である。これは、SD-100のIV層と同一層序で、ほぼこの層序までは、均一である。また鉄分を多く含むことから水田面の可能性が高いが、畦畔状の検出は認められなかった。V層は、灰褐色土である。VI層は黒褐色土であるが、SD-50はこの層位から切り込まれている。VII層とした層位が、これに当たる。荒砂である。

SD-50の底面土層は、青灰色粘土層で、これはSD-100につづくが、SD-50と100の境をなす土層は、青灰色シルト層である。SD-50の形成は、VI層の暗黒褐色砂層で区別でき、この面からの掘削と考えてよい。下層に黒色土と砂層の互層内に多量の木器と土器を出土するが、時期は土器から弥生時代後期の環濠と考えられる。

3. 検出遺構

調査対象面積7000㎡ではあるが、台地の傾斜にそって幅20m、長さ350mの南北に長いトレンチである。銅鑄型製品を出土したSD-100がほぼ中央部を流れ、北側台地、南側台地に分けられる。南側台地には、弥生時代の柱穴、溝、井戸、掘立柱建物、環濠が検出された。中央台地では、SD-100のほか、土壌、溝が検出できた。この中央台地は、南北台地より約1mから1.5mの比高差が認められる。SD-100は、南北台地を二分しながら北西方向へ流れている。北台地の段落から考えて、ヤツデ状に広がる台地の谷部であり、ラグーン状に広がる湿地帯に流れ込むものと考えられる。

北側台地には、土壌、溝、柱穴、掘立柱建物を検出した。掘立柱建物は、弥生時代のものではなく、鎌倉から室町時代にかけての建物群である。

掘立柱建物、井戸、土壌、pit、溝について記載しておく。

1) 掘立柱建物

南側、北側台地から約118棟の掘立柱建物が検出できたが、柱穴の数からまだ数十棟建物が建つと考えられるが、図面上の操作となるので図示していない。南側台地から弥生時代の建物が72棟、北側台地から鎌倉～室町時代の掘立柱建物が46棟検出した。

(1) 鎌倉・室町時代の掘立柱建物群

鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物は、北側台地に集中している。南側台地にはSB-48の1棟(1間×1間)が検出されたにとどまった。ただ柱穴内からの出土遺物を手懸りとしたため、南台地には1棟のみの検出となったが、柱穴の個数から考えて、この台地にも同時期の建物が建つ可能性は大いにある。

1間×1間の建物 (第8図、13図、Tab. 1、2)

1間×1間の建物としてSB-48、74、86、89、97、102、104、113、116、の9棟がある。桁行が3.0mから3.8m、梁行が、2.5mから3.4mである。柱穴の大きさは、さほど大きくなく、50cm前後のものである。柱穴底面に礎盤(石)を入れているものがある。この時代の建物として1間×1間の建物は狭すぎると思われる。一つには調査区の関係でその延長を調査できなかったことが要因である。

1間×2間の建物(第9図、10図、Tab. 1、2)

1間×2間の建物としてSB-71、72、75、79、87、90、92、101、103、106、114、115、117の13棟がありこの建物の最大数をはかる。桁行、梁行とも寸法が定まっていない。桁行の最大は2.9mで最小が1.7mである。梁行は、最大が3.4m、最小が2.0mである。柱穴自体も1間×1間と同じく小さな柱穴が多い。桁行の中間柱穴は、上下どちらかにずれがある。

2間×2間の建物(第11図、12図、Tab. 1、2)

2間×2間の建物は、SB-73、76-78、88、95、96、99、108、110、118の11棟である。桁行、梁行とも柱間が異なることと、中間の柱が、どちらかにずれているのは1間と2間の建物と同じである。SB-77は、西側と南側に廂を持つ。柱穴には、柱根が残るものと礎盤が残っているものがある。礎盤は、77のほかは76、78、88、96があり、柱根は、73、77にある。

2間×3間の建物(第12図-14図、Tab. 2)

2間×3間の建物は、SB-81、82、91、94、100の5棟検出した。SB-81は桁行が1.3mから2.1mと不揃いであるのに対して梁行は、ほぼ揃っている。これに対してSB-91は桁行が2.1m、梁行が2.6mで揃っている。このことは、この遺跡では非常に珍しい。

SB-94は、一応2間×3間としたが、梁行が不揃いで、西側に廂までつく様相を示している。桁行は、ほぼ等間隔を持つ。SB-82は、柱穴が小さく、並びも不揃いであるが、柱間が通ることから建物とした。SB-100は、桁行、梁行とも揃っているが、梁行中央部の柱穴だけが浅い。他の柱穴は深く、全体をこの深い柱穴でささえると考えれば、建物は建つと考え掘立柱建物とした。

以上が各建物の詳細である。鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物は47棟であるが、建物配置について考えると(狭い範囲であり、東西にかなりの建物が建っていたと考えられるが、調査区内だけで、その方向性、同時性を考察する)次のようになる。

弥生時代の掘立柱建物で同じ方向性を持つものは10区分できる。E-26°-Nの方向をとる。中期は01、05、12、42、後期が23、39、54がある。2、E-12°-Nの方向をとる建物、中期では02、04、08、後期は43、60、61がある。3、E-80°-N方向をとる建物として中期では、03、06、12、16、24、25、35で後期は19、35、41、49がある。4、E-15°-N方向をとる建物は中期では、07、10がある。5、E-13°-N中期では、09、30、33、34で後期45がある。6、E-37°-N方向をとるもので中期の建物は11、59で後期には20、57、63がある。7、E-19° Nの方向をとる建物で中期は、13、後期に22、56がある。8、E-36°-Nの方向をとる建物で中期には、15、28、32、35、51、52で後期はない。9、E-50°-Nの方向をとる建物で、中期～後期に29、後期に63、68がある。10、90°の方向を持つ建物では中期から後期に18、36、50、で後期に37、62がある。鎌倉から室町時代にかけての建物では9つに区分できる。1、E-67°-N方向をとる建物として71、99、2、E-53°-Nの方向をとる建物として72、77、100、108がある。3、E-40°-Nの方向をとる建物として73、118がある。4、E-74°-N方向をとる建物は、74、78、81、115がある。5、E-6°-N方向をとる建物は、75、87、96の3棟である。6、E-58°-N方向をとる建物では、76、82、101、104、110の5棟ある。7、W-34°-N方向をとる建物は88、113である。8、W-55°-N方向をとる建物は、91、106である。9、E-2°-N方向は90、117の2棟である。

(2) 弥生時代の掘立柱建物群(第15図～24図、Tab. 1、2)

南台地には、数多くの柱穴を検出した。掘立柱建物の確認は、現場で行なったものが殆どである。図面での確認も行なったが、柱穴掘方内出土の遺物、柱痕内出土の遺物を重視した。南台地からは72棟の掘立柱建物を検出した。このほか図面上で確認したものもあるが、確認がもてないため、記載からはずす。

掘立柱建物で出土遺物の確認、柱穴掘方、柱痕の大きさ等からその時期を決定し、柱根跡内出土遺物からは、その時期およびそれ以前(柱穴掘方内遺物を検討)とした。柱穴掘方内遺物からは、その時期以降として取扱った。時期別に図示し、説明する。

弥生時代中期の掘立柱建物(第15図～17図、Tab. 1、2)

1間×1間の掘立柱建物(第15図、Tab. 1、2)

1間×1間の建物は、SB-02、24、25、46、69の6棟である。掘り方内より中期中葉の土器が出土。台地全体が削平を受けているため、この1間×1間は、竪穴住居址の柱穴とも考えられる。SB-02、26を除く他の4棟の柱穴は大きく掘立柱建物の可能性が高く、SB-69には柱痕も残る。

1間×2間の掘立柱建物

1間×2間の建物は、SB-04、09、27、42の4棟である。桁行は2.0m～2.3m、梁行は3m～3.7mである。柱根内出土遺物から中期中葉の建物である。

1間×3間、2間×2間の掘立柱建物(第16図、Tab. 1)

1間×3間の建物は、SB-21である。桁行1.7m、2.1m、梁行は2.5mである。南側桁行の柱穴が削平されている。柱根内出土遺物は中期中葉である。2間×2間の建物は、SB-31である。柱穴の状況からもう1間延びることも考えられる。柱痕跡内の遺物から中期中葉を示す。

弥生時代中期末から後期初頭にかけての掘立柱建物(第17図～19図、Tab. 1)

上記の中期掘立柱建物は、ほぼ中期の中におさまるものであるが、ここに記載する建物は、弥生中期末から後期にかけての時期である。ただ中期末としたものも後期の可能性が強いため広く後期初頭を中心とした掘立柱建物として一応記載する。

1間×1間の掘立柱建物(第17図、Tab. 1、2)

1間×1間の建物は、SB-01、03、06、12、13、15、59の8棟である。柱穴掘り方の大きさも揃っている。桁行は、2.2m～3.0m、梁行も2.4m～3.5mと区々である。柱穴掘り方内より弥生中期末の土器が出土している。

1間×2間の掘立柱建物(第18図、19図、Tab. 1、2)

1間×2間の建物は、SB-17、18、29、30、32、34、36、64、118の9棟である。この内118は調査区外に延びる可能性もあるが、現段階ではこの範疇としておく。桁行の柱間隔は、1.8m～3.5m、

梁行は2.5m～3.4mを計る。SB-30は、桁行の柱間隔が3.0m～3.5mと広く、1間×3間の長さとはほぼ等しい。またSB-34も柱筋が含まない。

1間×3間の掘立柱建物(第19図、Tab. 1)

1間×3間の建物はSB-08、10、35の3棟である。柱穴の形状、大きさはその建物で揃っている。桁行の柱間隔は、2.0m～2.8m、梁行は2.0m、2.5m、3.3mを計る。

弥生時代後期後半の掘立柱建物(第21図～24図)

弥生時代後期後半とした掘立柱建物として27棟検出できた。柱穴掘り方内、柱痕跡掘り方より出土する土器を手がかりとした。厳密には後期中葉の土器(形式分類Ⅳ式からⅤ式の遺物)が出土している。

1間×1間の掘立柱建物(第21図、Tab. 1)

1間×1間の建物は、SB-07、11、22、23、56、57、62、63の8棟である。この建物も上記で記した様に竪穴式住居の柱穴としての可能性を持つ。形状は、ほぼ正方形の22、23、57、62、と長方形の07、11、56、63がある。また07と56は1間×2間、2間×2間の可能性もある。間隔はほぼ3.5m前後と広い。長方形の梁行は1.8m～2.6m程度でおさまる。SB-22、23を除いて、ほかの柱穴の掘り方は大きく、柱痕跡も大きく約0.3m～0.5mである。柱穴内掘り方から後期の遺物が出土している。

1間×2間の掘立柱建物(第22図、23図、Tab. 1、2)

1間×2間の建物は、SB-19、20、39、40、41、50、55、65、117の10棟である。1間×1間として考えた方がよい。39は2間×2間以上と考えた方がよい。14を除くと、弥生時代後期における掘立柱建物として主体をなすものである。

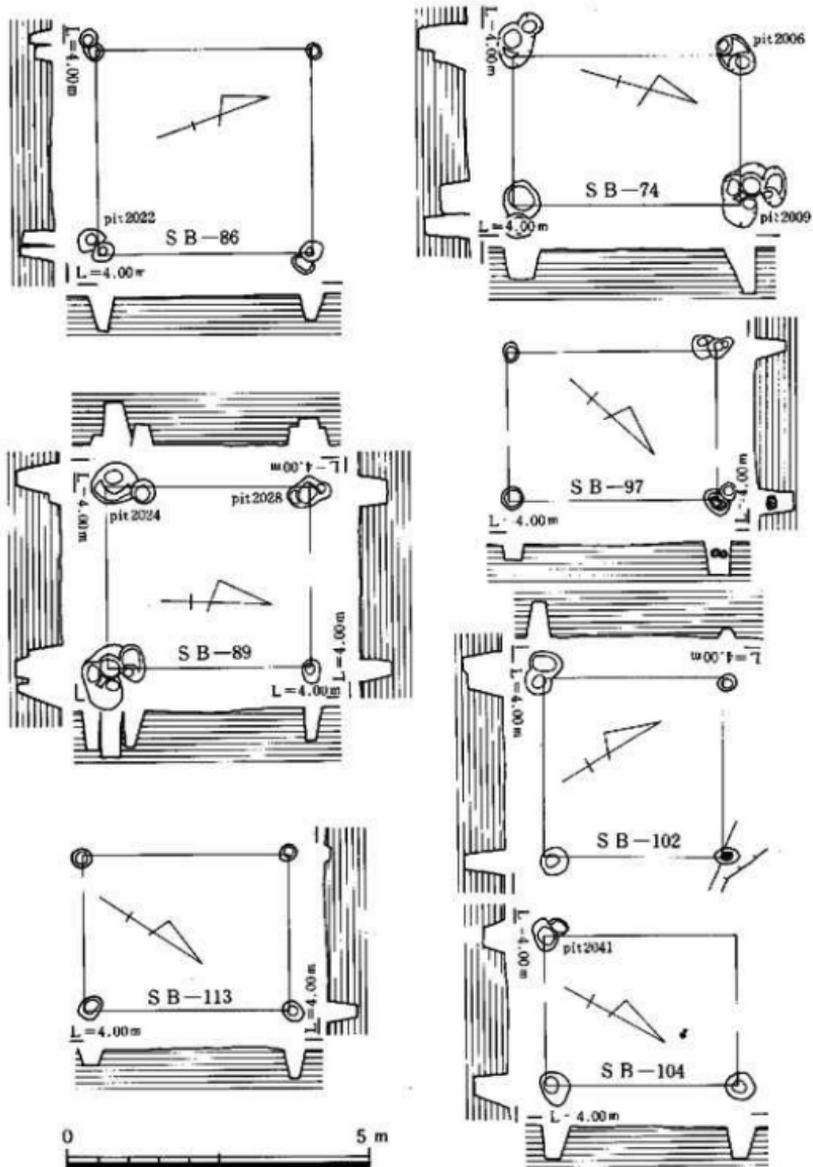
桁行は、1.8m～2.9m、であるが2.2mがその主流を占める。梁行は2.2mから3.5mとさまざまである。梁行の柱穴は他の柱穴より深い。柱穴掘り方自体もその大きさ、深さおよび柱痕跡の大きさ等も揃っている。SB-50は代表的な建物であるが、桁行が3.0m×3.0m、梁行が2.8m、柱穴掘り方、大きさが平均0.9m×1mで底面に石の礎盤を敷いているのが3ヶ所ある。この柱痕跡からみると柱自体の大きさは約0.5mである。

1間×3間、1間×4間、2間×3間の掘立柱建物(第24図、Tab. 1)

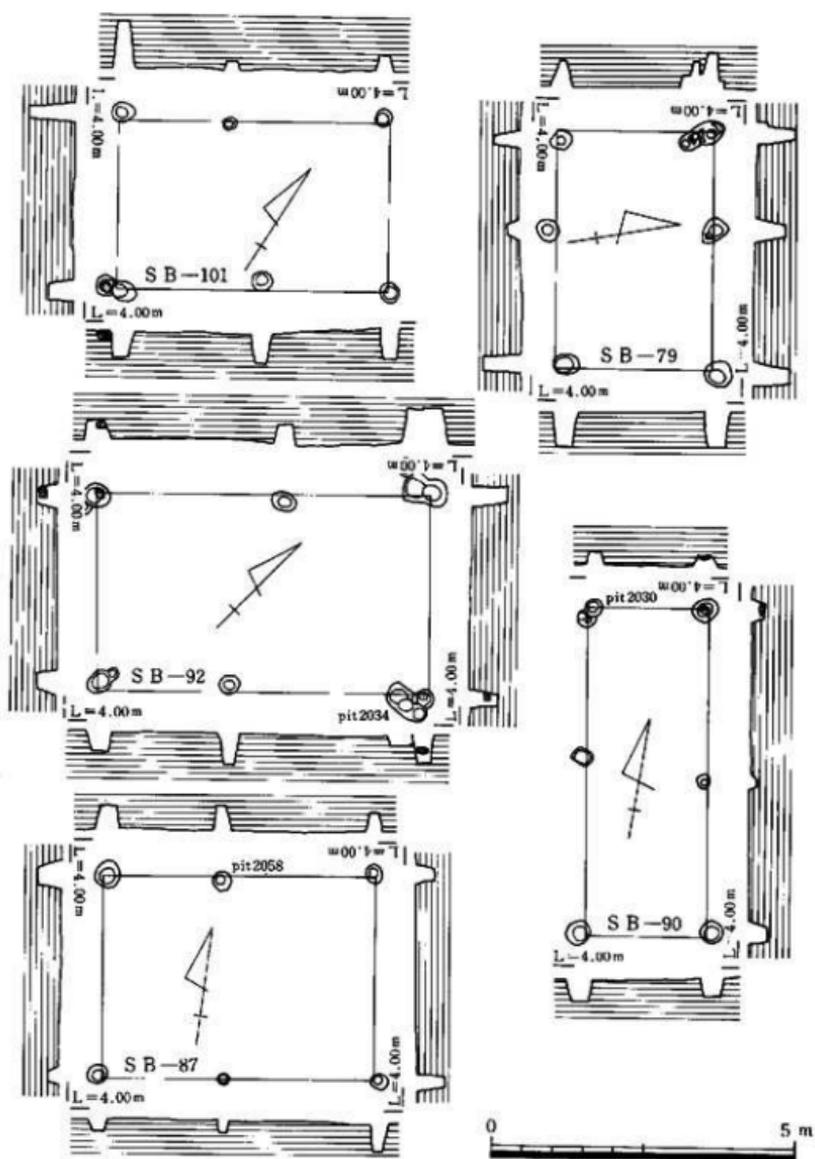
1間×3間の建物は、SB-43、54で建て方によっては2間×3間となる可能性を持つ。桁行が2.0m～2.3m、梁行が2.0mである。1間×4間の建物は、SB-37で、1.2m～2.1mの桁行を持ち、梁行は2.8mを計る。2間×3間の建物は、調査区外にも延びているため桁行の間数は不明である。桁行の間隔は1.7m～2.2m、梁行は1.8m～1.9mを計る。



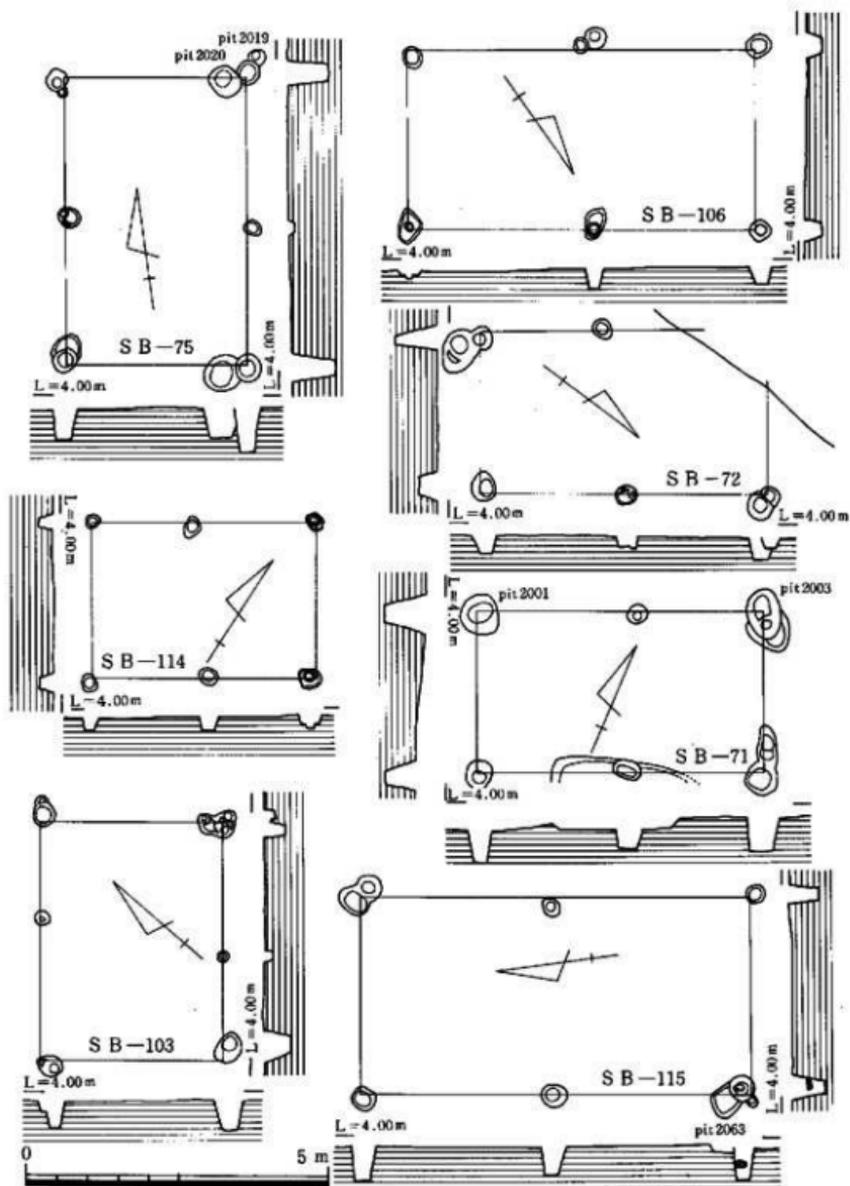
第7圖 掘立柱建物遺構配置圖 (縮尺1/400)



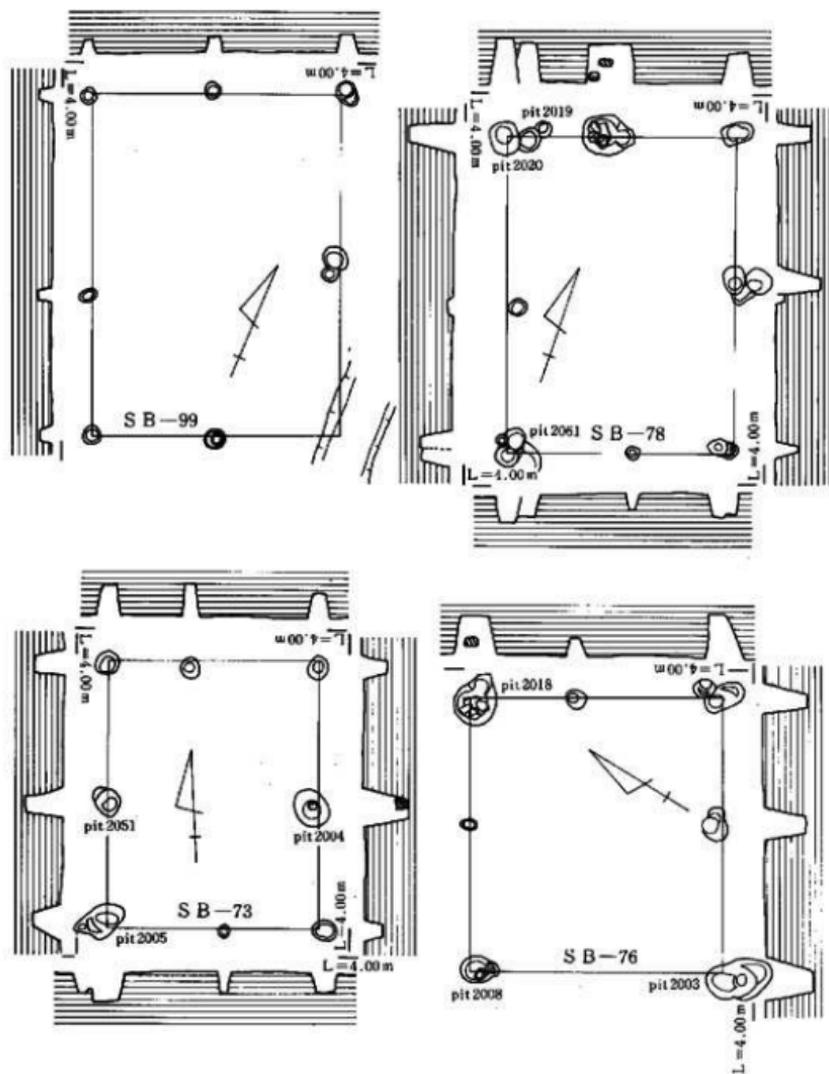
第8图 掘立柱建物实测图-1 (縮尺1/100)



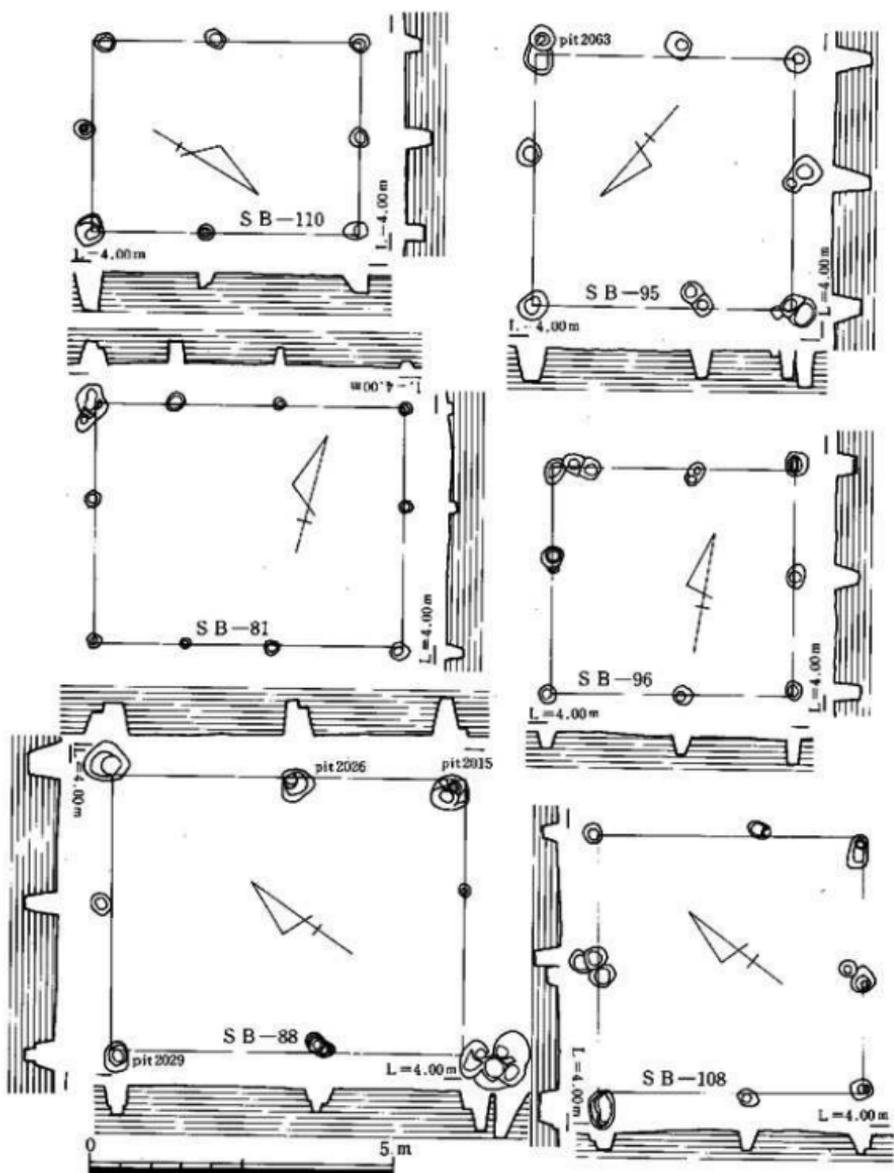
第9图 掘立柱建物实测图-2 (缩尺1/100)



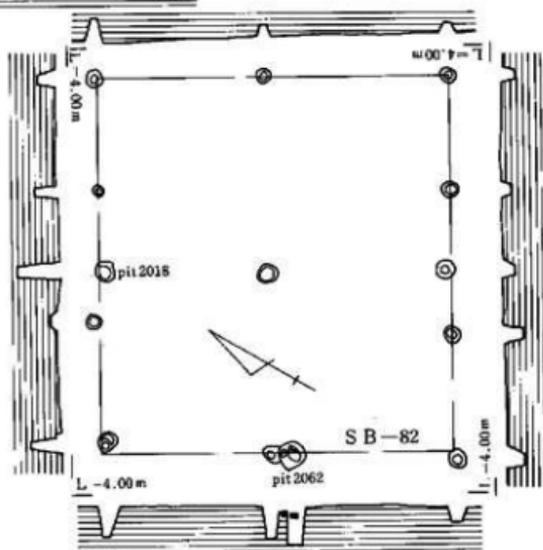
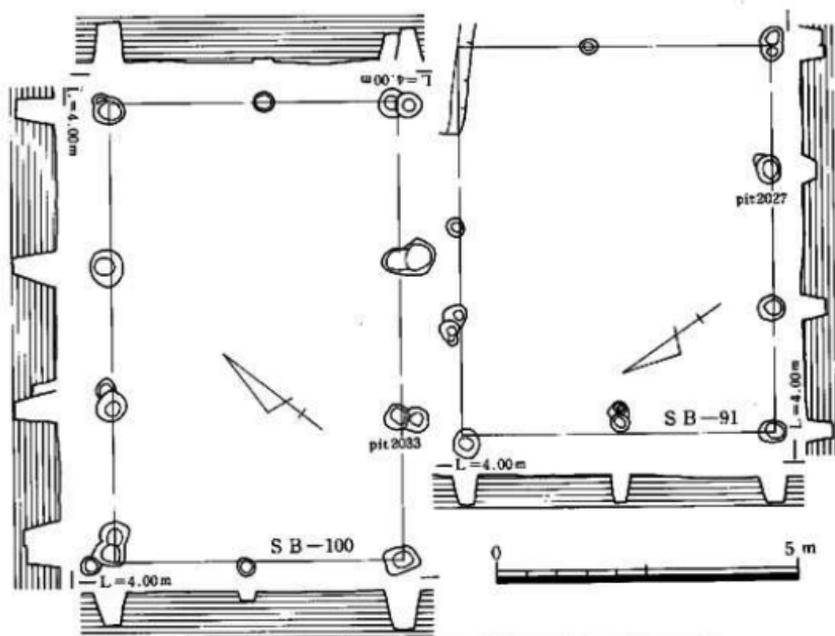
第10图 掘立柱建物实测图-3 (縮尺1/100)



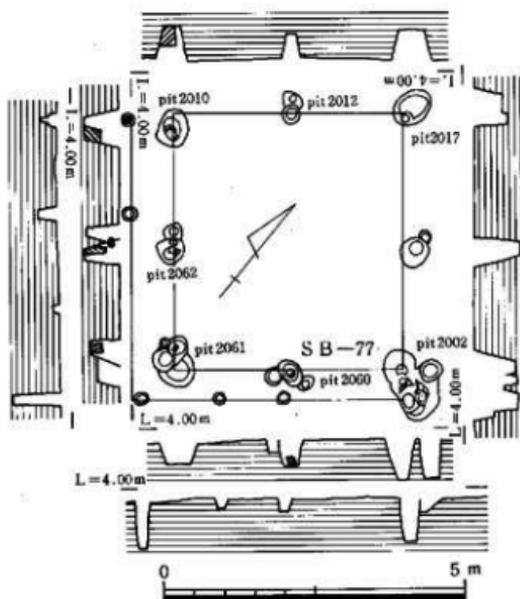
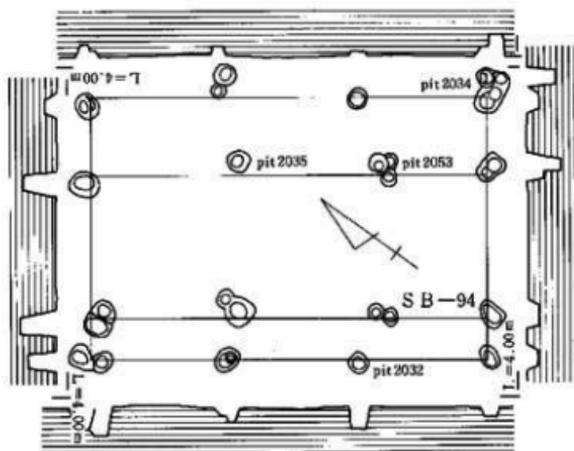
第11図 掘立柱建物実測図-4 (縮尺1/100)



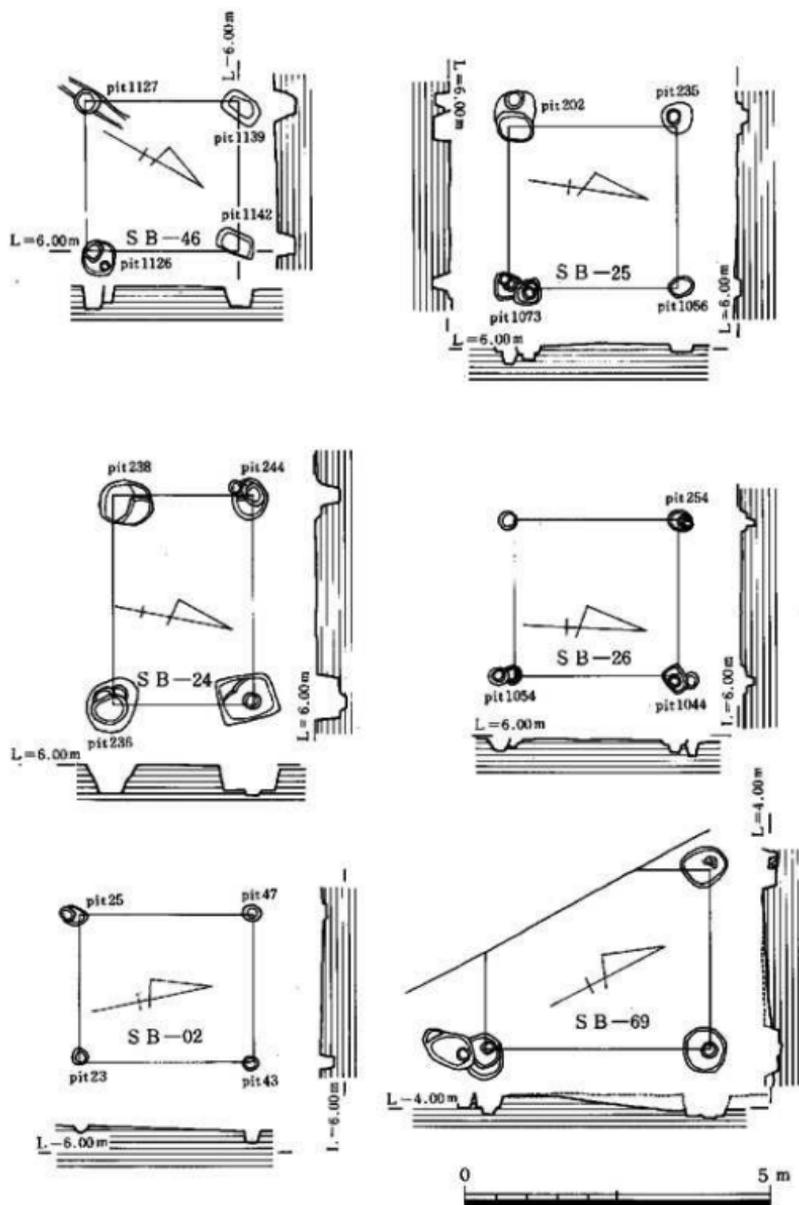
第12图 掘立柱建筑物实测图—5 (缩尺1/100)



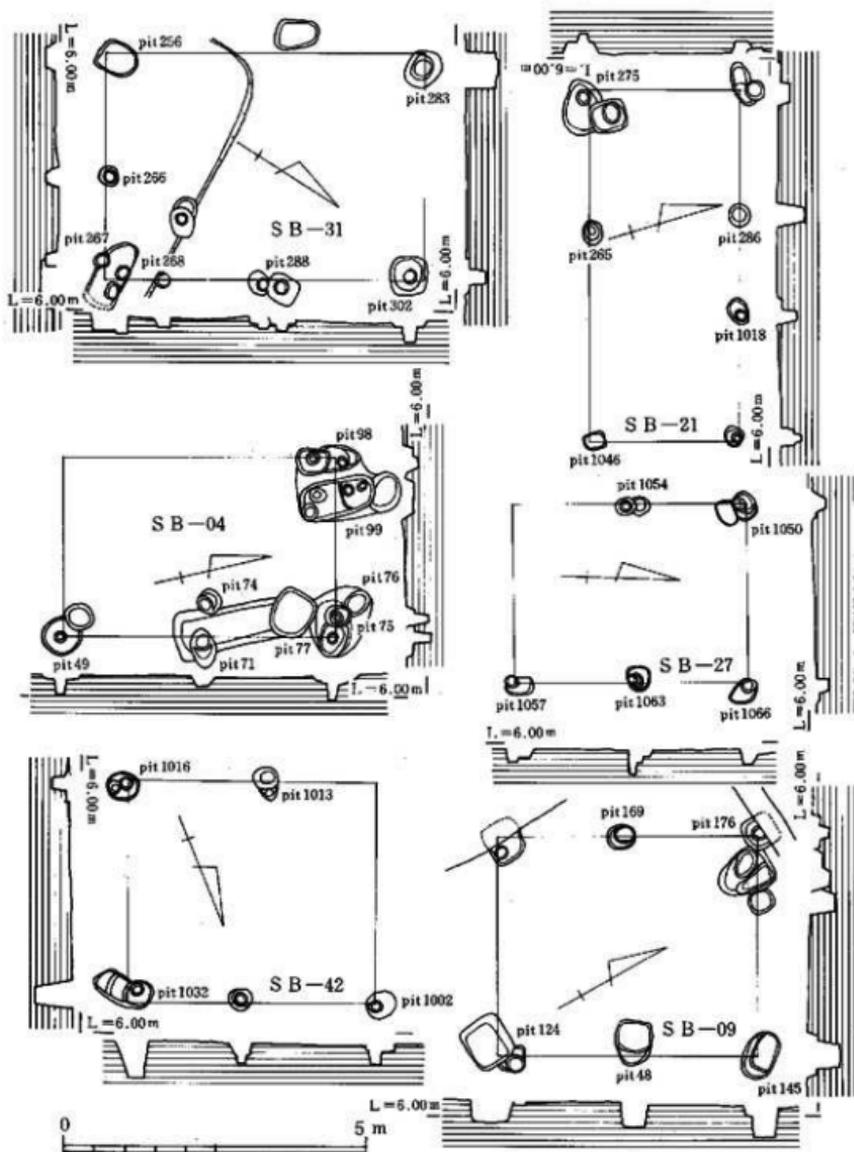
第13图 掘立柱建物実測図-6 (縮尺1/100)



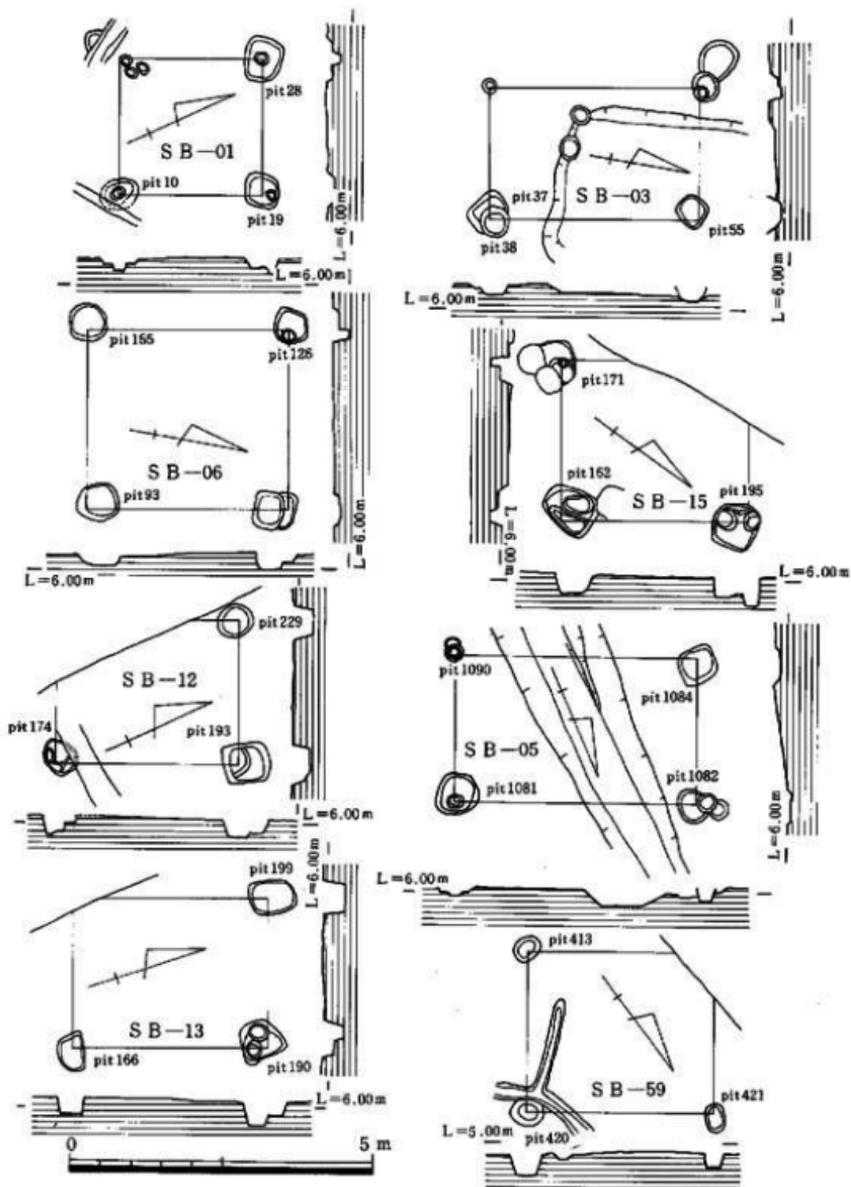
第14図 掘立柱建物実測図-7 (縮尺1/100)



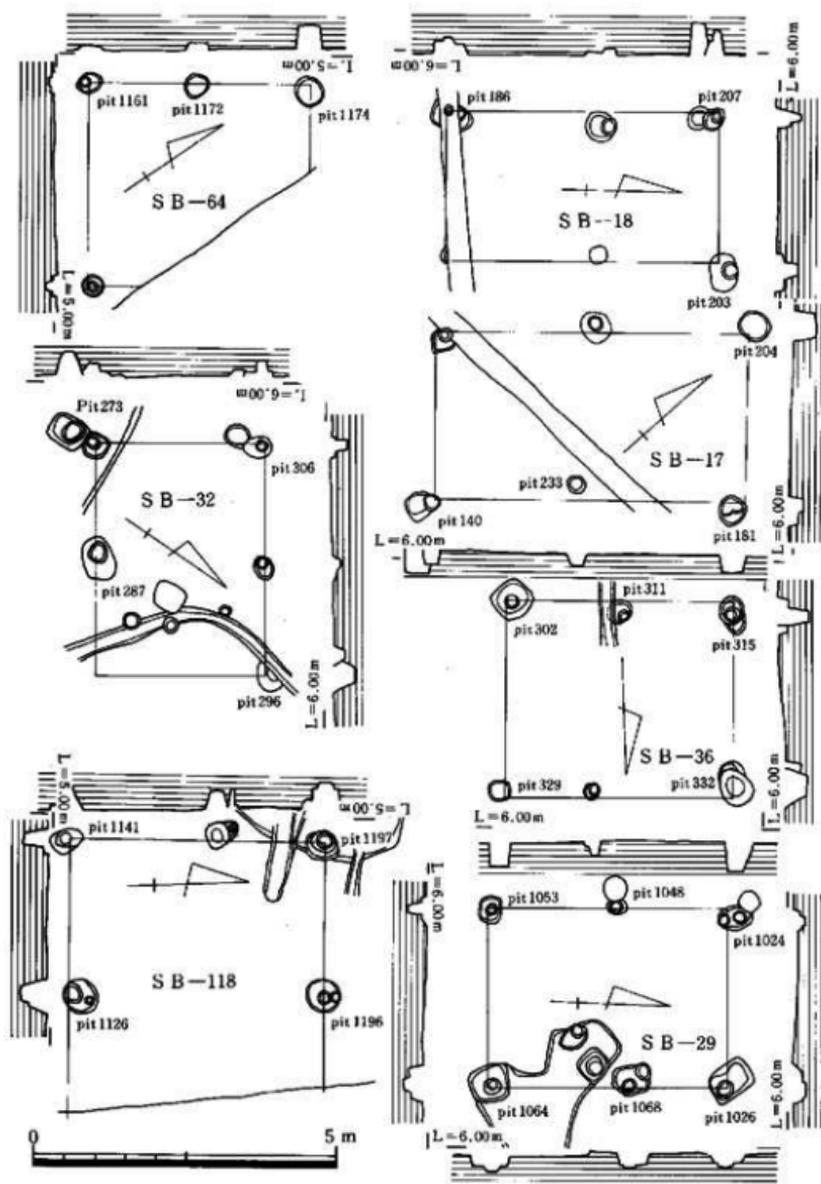
第15圖 掘立柱建物実測圖-8 (繪尺1/100)



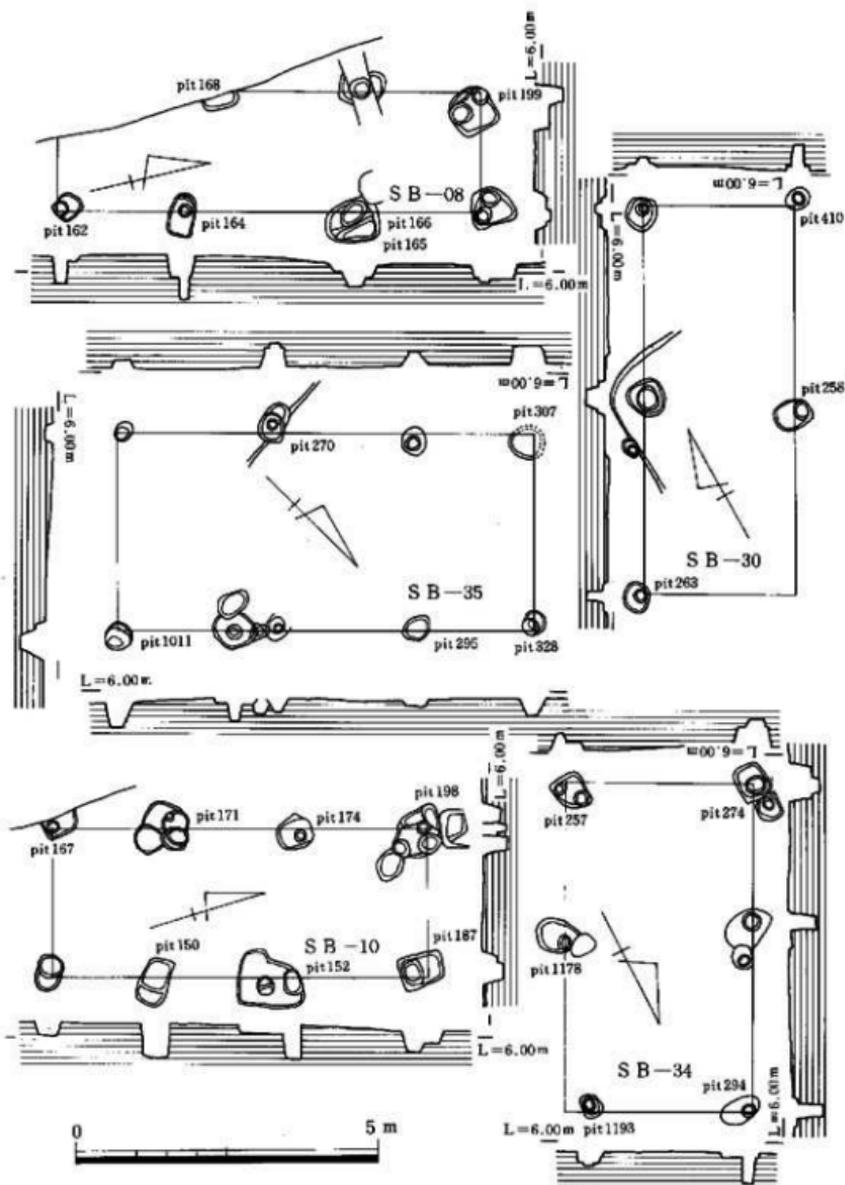
第16图 掘立柱建物实测图-9 (縮尺1/100)



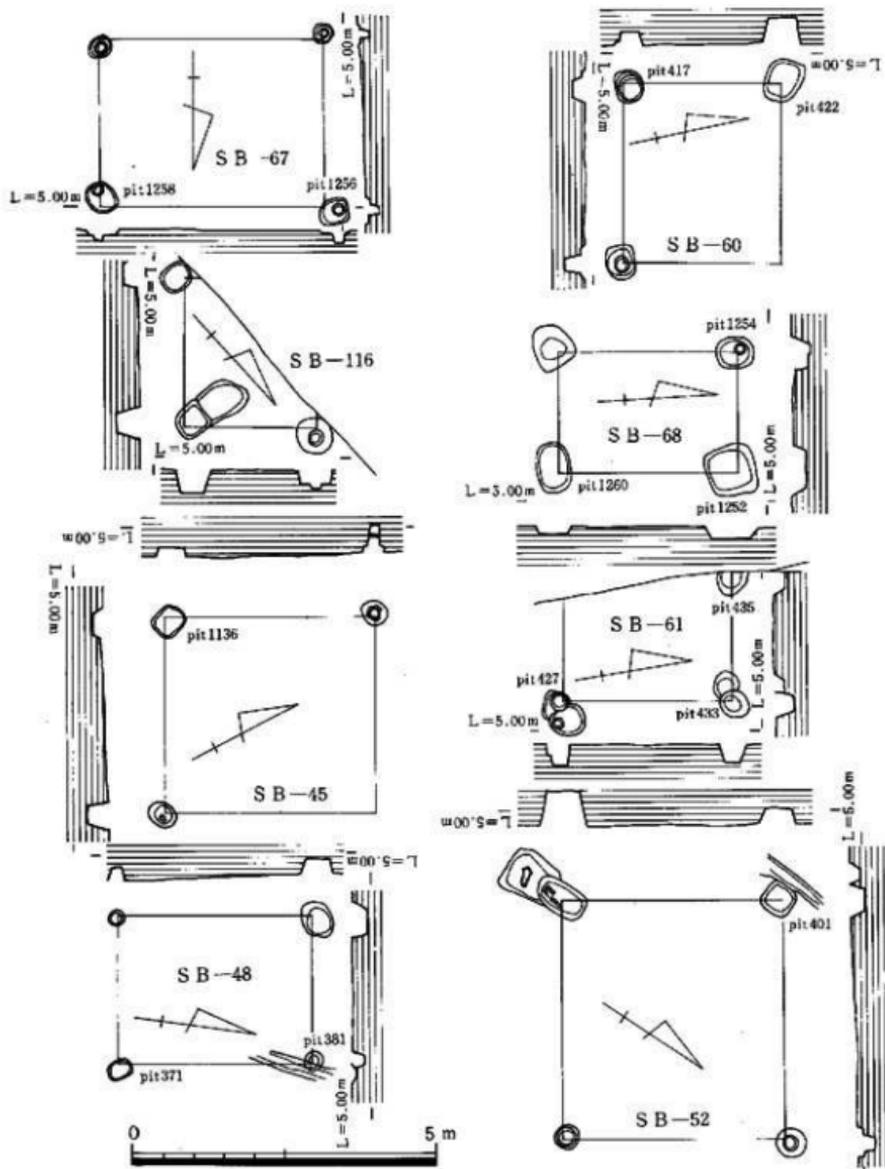
第17图 掘立柱建物实例图-10 (縮尺1/100)



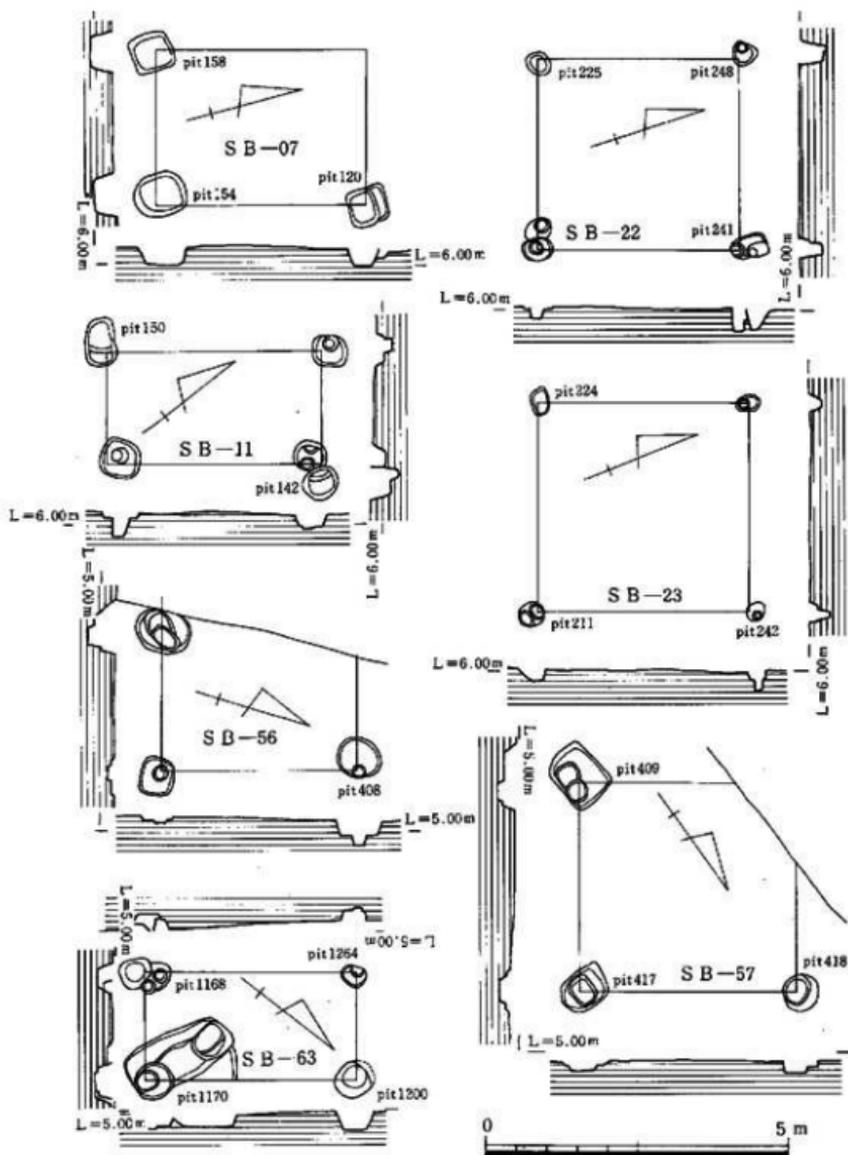
第18图 据立柱建物实测图-11 (缩尺1/100)



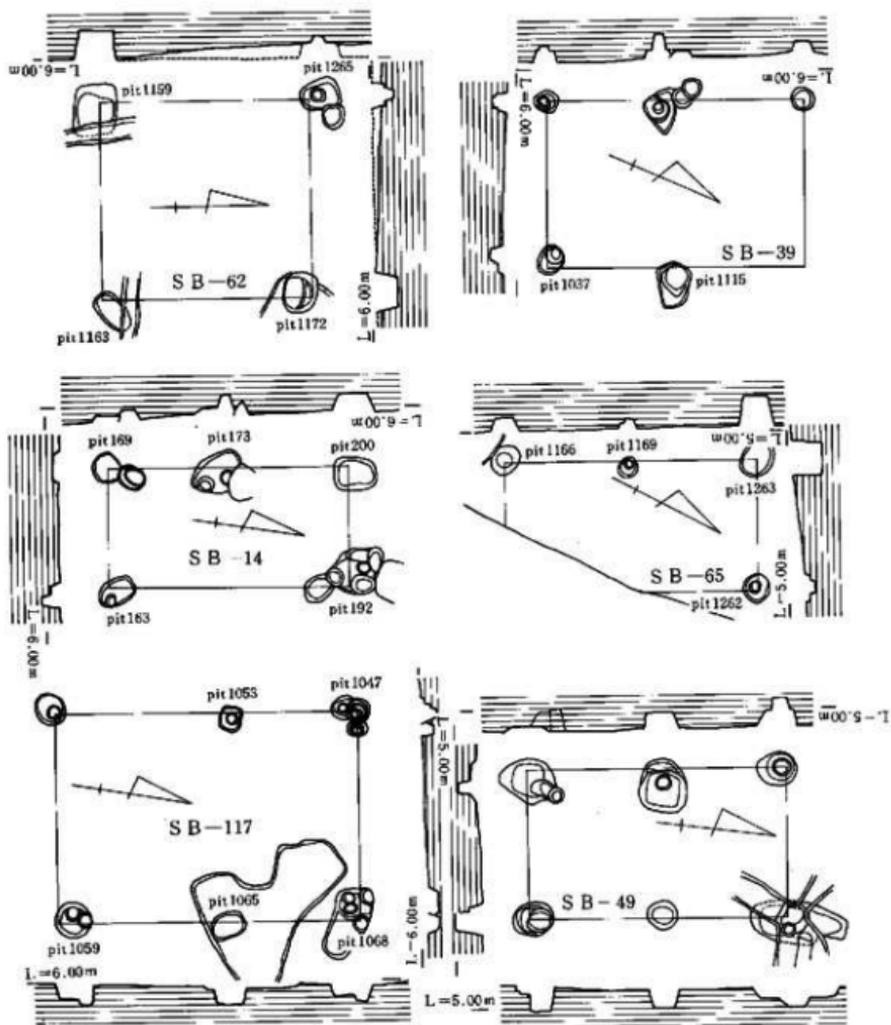
第19图 掘立柱建物实测图-12 (縮尺1/100)



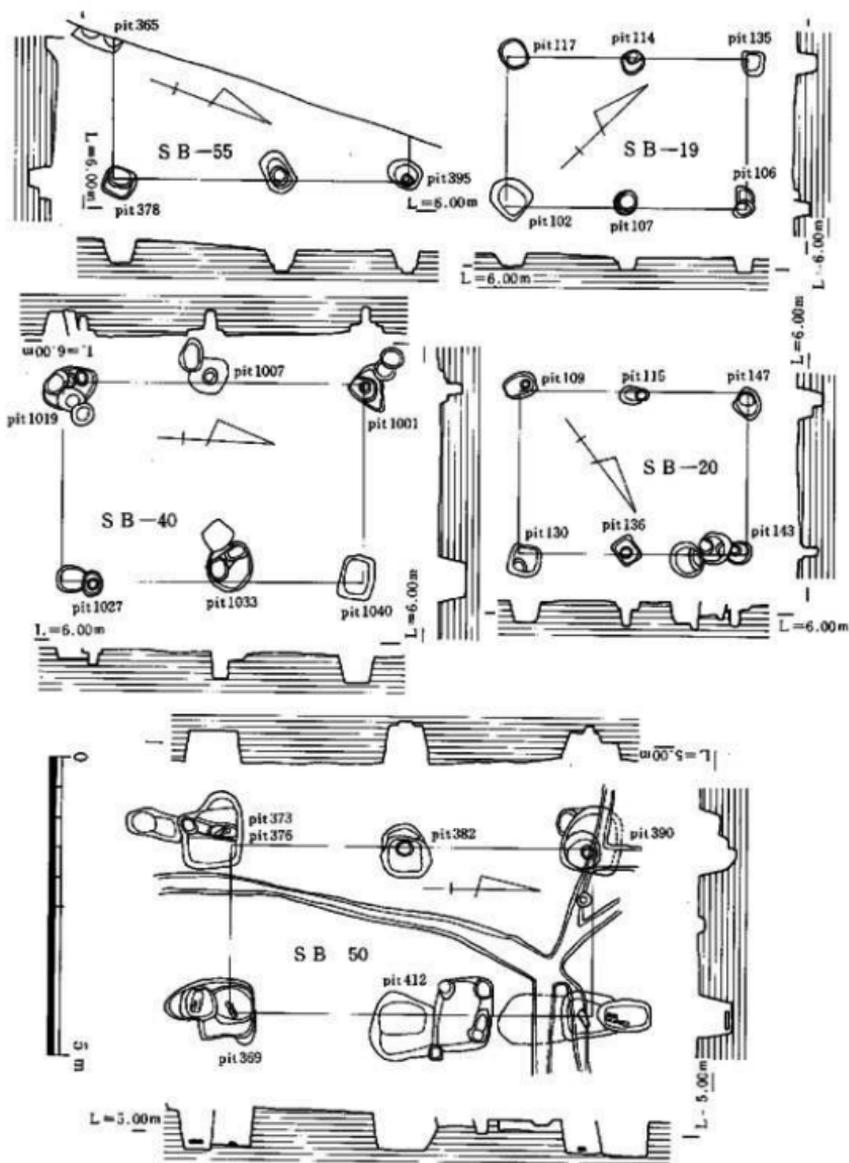
第20图 掘立柱建物实测图-13 (縮尺1/100)



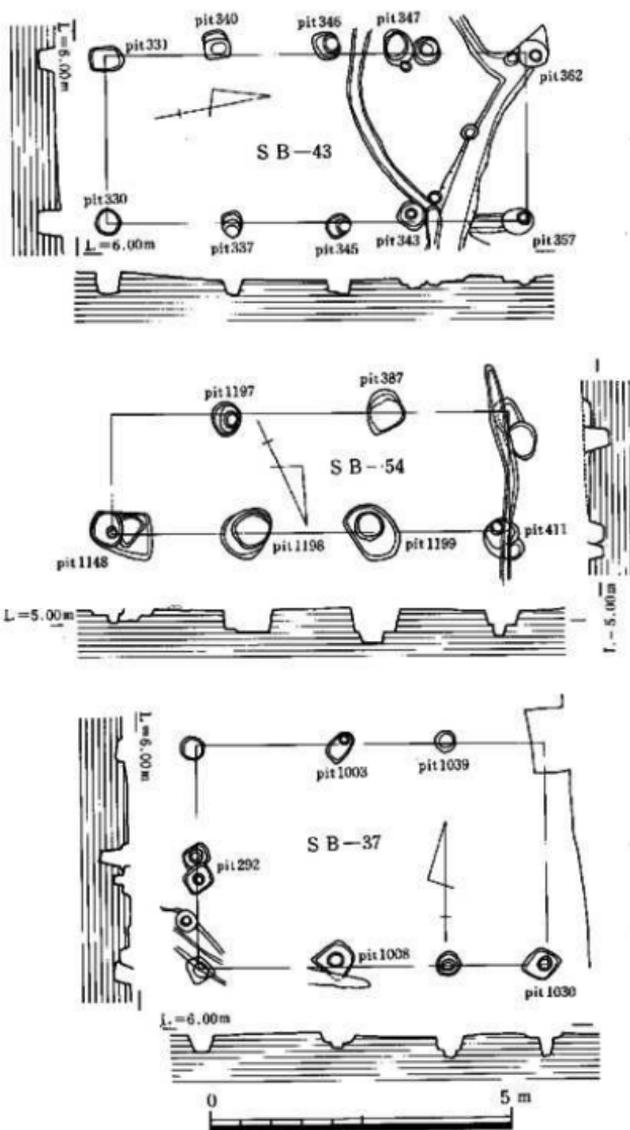
第21圖 掘立柱建物実測図-14 (縮尺1/100)



第22图 掘立柱建物实测图-15 (縮尺1/100)



第23图 掘立柱建物实测图-16 (縮尺1/100)



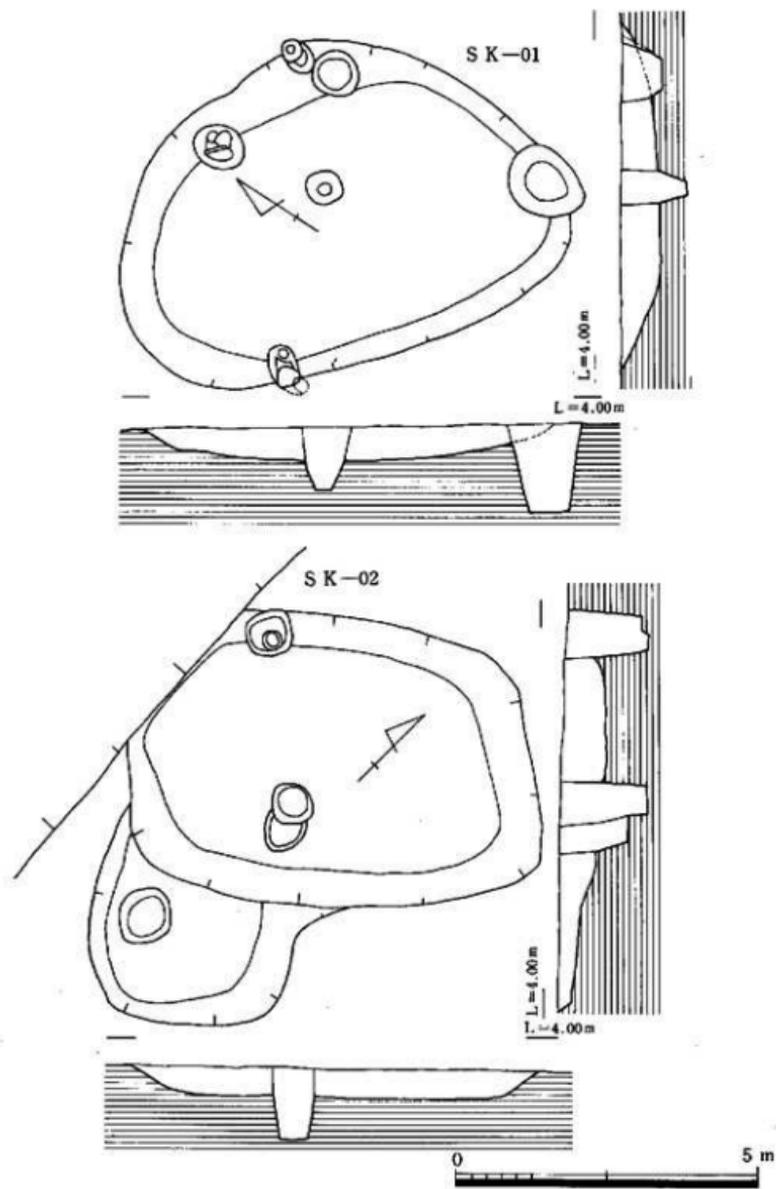
第24图 掘立柱建物実測図-17 (縮尺1/100)

挿入	S B	時期	間×間	桁行(m)	梁行(m)	方向	Pit番号	備考	P.L
17	01	養生中期末	1×1	2.4	2.3	E-25°W-N	5, 10, 11, 19, 28	5より礫石(10089)	5-1
15	02	"	1×1	2.85	2.45	E-12°-N	23, 25, 43, 47		5-1
17	03	"	1×1	3.5	2.2	W-10°-N	37, 38, 52, 53, 55		5-1
16	04	"	2×1	2.3×2.2	3.0	E-12°5'-N	49, 71, 74, 75, 76, 77, 96, 99	75よりミニチュア墳(00227)	5-1
17	05	養生中～後	1×1	4.0	2.45	W-67°-N	1081, 1082, 1084, 1090	1084より高坏	12-2
17	06	養生中期末	1×1	3.3	3.0	W-10°-N	93, 126, 135	93より石楯(00642)	6-2
21	07	養生中～後	1×1	3.5	2.6	E-15°-N	120, 154, 158		6-2
19	08	養生中～後	3×1	1.1×1.1×1.1	2.0	E-13°W-N	162, 164, 165, 166, 168, 169		6-2
16	09	養生中期末	2×1	2.25×2.1	3.6	E-30°-N	124, 145, 148, 169, 176		6-2
19	10	"	3×1	1.7×1.2×1.3	2.5	E-17°-N	156, 152, 167, 171, 174, 187, 198		6-2
21	11	養生中～後	1×1	3.5	1.85	E-37°-N	118, 142, 150, 223		6-2
17	12	養生中～後	1×1	3.0	2.4	E-24°-N	174, 193, 229		6-2
17	13	"	1×1	3.2	2.5	E-19°-N	166, 190, 199		6-2
22	14	養生後期	1×1	4.0	2.0	W-9°-N	163, 169, 173, 192, 200		6-2
17	15	養生中期末	1×1	3.7	3.1	W-35°W-N	162, 171, 195		6-2
16	16	養生中～後	2×1	2.4×1.5	3.3	W-14°-N	185, 186, 185, 206, 218		9-2
18	17	養生中～後	2×1	2.6×2.6	2.8	E-42°-N	140, 181, 204, 233		9-2
18	18	"	2×1	2.5×2.0	2.5	90°	186, 203, 207		9-2
23	19	養生後期	2×1	2.0×2.0	2.5	E-45°-N	182, 186, 187, 112, 114, 117, 125		6-2
23	20	"	2×1	2.0×1.8	2.7	W-53°-N	106, 115, 130, 136, 143, 147		6-2
16	21	養生中期	3×1	1.1×1.7×1.1	2.5	W-73°-N	265, 275, 298, 1018, 1046		6-1
21	22	養生後期	1×1	3.9	3.2	W-71°-N	225, 241, 248		8-2
21	23	"	1×1	3.5	3.5	W-68°-N	211, 224, 242		8-2
15	24	養生中期	1×1	3.5	2.3	E-79°-N	236, 238, 244		8-2
15	25	"	1×1	2.8	2.7	E-81°-N	202, 236, 1056, 1073		9-2
15	26	"	1×1	2.7	2.6	W-4°-N	254, 1044, 1054		9-1
16	27	"	2×1	2.0×1.9	3.0	W-4°-N	1050, 1054, 1057, 1063, 1066		13-2
28	28	"	2×1	2.9×2.6	2.1	W-17°-N	1016, 1021, 1060, 1067		14-2
18	29	養生中～後	2×1	2.3×1.7	3.0	E-5°-N	1824, 1825, 1826, 1827, 1828, 1829, 1830, 1831, 1832		14-2
19	30	"	2×1	3.0×3.5	2.5	E-29°-N	258, 263, 276, 297, 410		5-2
16	31	養生中期	2×2	3.0×2.3	1.8×2.0	W-20°W-N	256, 256, 287, 288, 288, 282	256よりミニチュア墓合	5-2
18	32	養生中～後	2×1	2.0×1.9	2.8	E-53°-N	273, 287, 296, 306		5-2
33	33	"	3×2	1.0×1.2×1.2	1.5×1.8	E-25°-N	255, 291, 1006		5-2
19	34	"	2×1	2.7×2.7	3.1	E-27°-N	287, 274, 294, 1178, 1190		8-1
19	35	"	3×1	1.5×2.4×1.3	3.3	W-44°-N	270, 285, 286, 287, 288, 1068, 1069, 1070, 1071, 1072		5-1
18	36	"	2×1	1.9×1.9	3.3	90°	302, 311, 315, 329, 332		6-1
24	37	養生後期	3×2	1.2×1.9×1.7	1.9×1.8	90°	292, 1003, 1008, 1030, 1039		14-2
38	38	"	2×1	2.1×1.7	1.8	W-74°-N	291, 1034, 1037, 1183		14-2
22	39	"	2×1	2.2×2.1	2.8	W-23°-N	1037, 1115		14-2
23	40	"	2×1	2.4×2.6	3.3	W-3°-N	1001, 1007, 1008, 1027, 1033, 1040		14-2
41	41	"	2×1	2.1×2.2	3.5	W-10°-N	1027		14-2
16	42	養生中期	2×1	1.9×2.2	3.7	W-68°-N	1002, 1013, 1016, 1032		14-2
24	43	養生後期	4×1	1.2×1.8 ×1.5×1.9	2.8	E-11°-N	338, 337, 340, 343, 345, 346, 347, 348, 349		7-2
44	44	養生中～後	1×1	3.6	2.7	E-15°-N	341, 348, 361		7-2
20	45	養生後期	1×1	3.5	3.3	W-62°-N	1136		13-2
15	46	"	1×1	2.5	2.5	E-59°-N	1126, 1127, 1139, 1142		13-2
47	47	養生中～後	1×1	3.3	4	E-25°-N	367		8-1
20	48	鎌倉一室町	1×1	3.2	2.5	W-7°-N	371, 381		8-1
22	49	養生後期	2×1	2.2×2.1	2.5	W-8°-N	370, 377, 382, 389, 391	371, 381より養生土器, 高古付式	8-1
23	50	養生中期	2×1	3.0×3.0	2.8	90°	369, 373, 376, 382, 390, 412		8-1
51	51	養生中期	1×1	2.5	2.2	E-5°-N	403		7-1
20	52	養生中期	1×1	4.0	3.7	E-56°-N	401	養生土器	7-1
53	53	"	1×1	4.4	2.3	E-10°-N	1158	出土品なし	7-1
24	54	養生後期	3×1	2.3×2.9×2.3	2.0	W-66°-N	387, 411, 1146, 1183, 1187, 1198, 1199		7-1
23	55	"	2×1	2.7×2.2	2.2	W-22°-N	365, 378, 395		7-1
21	56	"	1×1	3.3	2.7	W-17°-N	408		7-1
21	57	"	1×1	3.6	3.5	W-54°-N	408, 417, 418		7-1
58	58	"	1×1	3.4	2.7	W-40°-N	418		7-1
17	59	養生中～後	1×1	3.1	2.7	W-54°-N	413, 420, 421		7-1
20	60	養生後期	1×1	3.0	2.6	W-78°-N	417, 422		7-1
20	61	"	1×1	2.8	2.0	E-10°-N	433, 427		7-1

Tab. 1 掘立柱建物計測表-1

緯度	S B	時期	間×間	折行(m)	進行(m)	方向	Pit番号	備考	P.L	
22	62	養生後期	1×1	3.5	3.3	90°	1159, 1163, 1172, 1265		14-1	
21	63	*	1×1	3.5	1.8	W-38°-N	1168, 1170, 1200, 1264	L200出土品なし	14-1	
18	64	養生中一様	1×1	1.8×1.9	3.4	E-35°-N	1161, 1172, 1174		14-1	
22	65	養生後期	2×1	2.0×2.2	2.2	W-28°-N	1166, 1169, 1262, 1263	1306, 1308, 1302より出土品なし 1303よりラジウム	14-1	
66	養生	1×1	3.5	3.0	90°	1266, 1267				
20	67	養生後期	1×1	3.7	2.8	90°	1256, 1258			
20	68	*	1×1	3.0	2.0	E-4°-N	1252, 1254, 1260			
15	69	養生中期	1×1	3.7	3.0	E-25°-N	447, 454			
70	鎌倉	2×1	2.0×1.2	2.2	E-40°-N					
10	71	*	2×1	2.5×2.3	2.7	E-67°-N	2001, 2003	2001より土師器, 青磁 2003より土師器, 青磁, 赤磁	34-1	
10	72	*	2×1	2.5×2.3	2.7	W-37°-N			34-1	
11	73	鎌倉-室町	2×2	2.0×2.5	1.9×1.6	E-4°-N	2004, 2005, 2050, 2051	2004, 2005, 2051より土師器 2005より土師器, 赤磁 (2002)	34-1	
8	74	*	1×1	3.8	2.5	W-15°-N	2006, 2009	2006より土師器 2009より土師器	34-1	
10	75	*	2×1	2.3×2.5	3.0	E-67°-N	2019, 2020	養生土器	34-1	
11	76	*	2×2	2.5×2.1	2.5×2.1	E-58°-N	2003, 2008, 2018	2003より土師器, 赤磁, 赤切り 2008より土師器, 赤磁, 赤切り 2018より土師器, 赤磁, 赤切り	34-1	
14	77	*	2×2	2.0×2.3	1.9×1.9	W-30°-N	2003, 2008, 2018	2003より土師器, 赤磁, 赤切り 2008より土師器, 赤磁, 赤切り 2018より土師器, 赤磁, 赤切り	34-1	
11	78	*	2×2	2.8×2.5	1.9×1.9	W-15°-N	2019, 2020, 2061	2019, 2020より土師器 2061より土師器	34-1	
9	79	*	2×1	2.3×1.7	2.6	W-80°-N			34-1	
80	養生後期	3×2	2.1×2.2	2.5×1.8	W-35°-N	2061		出土品なし	34-1	
12	81	鎌倉-室町	3×2	2.1×1.4×1.5	2.4×1.6	E-76°-N			34-1	
13	82	*	3×2	1.9×2.2×2.1	2.8×3.0	E-50°-N	2062		出土品なし	34-1
83	*	1×1	2.6	2.0	E-25°-N				34-1	
84	*	2×1	2.0×1.3	3.1	E-20°-N	2025		土師器	34-1	
85	*	3×2	1.2×1.8×1.8	2.6×0.9	E-75°-N				34-1	
8	86	*	1×1	3.6	3.4	E-20°-N	2022		土師器	34-1
9	87	室町	2×1	2.0×2.5	3.4	E-82°-N	2068		御付置 (0025)	34-1
12	88	*	2×2	2.8×3.0	2.4×2.2	W-34°-N	2015, 2026, 2029		須恵器, 土師器	34-1
8	89	*	1×1	3.4	3.0	W-3°-N	2034, 2028		土師器, 赤切り	34-1
9	90	*	2×1	2.6×2.9	2.0	W-95°-N	2030		土師器, 赤切り	34-1
13	91	*	3×2	2.1×2.3×2.1	2.6×2.6	W-35°-N	2027		土師器, 赤切り	34-1
9	92	*	2×1	3.1×2.4	3.3	E-46°-N	2034		土師器	34-1
93	*	3×1	1.8×1.4×2.7	3.2	E-35°-N				34-1	
14	94	*	3×2	2.3×2.2×2.1	4.4	W-35°-N	2032, 2034, 2035, 2053		土師器	34-1
12	95	鎌倉-室町	2×2	2.8×1.5	1.7×2.5	E-50°-N	2063		出土品なし	34-1
12	96	*	2×2	2.2×1.8	2.0×1.8	E-81°-N				34-1
8	97	*	1×1	3.5	2.5	W-42°-N				34-1
98	*	2×1	1.9×1.6	3	E-10°-N				34-1	
11	99	*	2×2	2.4×3.3	2.0×2.1	W-27°-N				34-1
13	100	室町	3×2	2.5×1.4×1.7	2.6×2.2	E-51°-N	2033, 1086		養生土器, 土師器, 赤切り	34-1
9	101	鎌倉-室町	2×1	2.4×2.1	2.8	E-58°-N				34-1
8	102	*	1×1	3.0	3.0	W-58°-N				34-2
10	103	*	2×1	1.8×2.2	3.0	E-49°-N				34-2
8	104	*	1×1	3.2	2.5	W-29°-N	2041		青磁	34-2
105	室町	1×1	3.1	2.8	E-88°-N	2043, 2044		土師器	34-2	
10	106	鎌倉-室町	3×1	2.8×3.0	3.0	W-55°-N				34-2
107	*	1×1	2.6	2.4	E-75°-N				34-2	
12	108	*	2×2	1.7×2.7	2.4×1.9	W-38°-N				34-2
109	*	2×1	1.5×1.5	3.0	W-45°-N				34-2	
12	110	*	2×2	1.9×2.4	1.6×1.5	W-31°-N				34-2
111	*	2×1	2.5×2.5	3.5	W-68°-N				34-2	
112	*	1×1	2.7	2.3	E-75°-N				34-2	
8	113	*	1×1	3.4	2.6	W-34°-N				34-2
10	114	*	2×1	1.9×1.8	2.6	E-55°-N				34-2
10	115	*	2×1	3.3×3.2	3.3	E-73°-N	2041, 2063	2041より土師器 2063より土師器	34-1	
20	116	鎌倉-室町	1×1	2.5	2.3	E-43°-N				34-1
22	117	*	2×1	2.8×2.2	3.5	W-10°-N	1047, 1048, 1049, 1053, 1059-1-2, 1080, 1083, 1086 1-2-3		1062より養生土器, 土師器, 赤切り	14-2
18	118	*	2×1	2.6×1.9	2.5×1.7	W-88°-N	1126, 1141, 1196, 1197			13-2

Tab. 2 掘立柱建物計測表-2



第25図 SK遺構実測図 (縮尺1/40)

2)井戸・土壇【SK】・不整形土壇【SX】・Pit

井戸【SE-01】(第26図、38図、98図、PL.43,10,11)

南台地の北側、SD-100に近接する位置から検出された。調査開始時には形状が一部、袋状を呈することから貯蔵穴と考え掘り始めたが、湧水点が高く水量が豊富であること等から、井戸とした。平面上の形態は二段形成で、隅丸長方形を呈する。上面は長軸2.0m、短軸1.5mで深さ0.2mの浅い掘り込みを呈する。下面は長軸1.5m、短軸1.0m、深さ1.0mの二段掘りの構造を呈する。深さは1.2mしかないが、これは遺構面自体が0.5m~0.7m程削平を受けていることから本来は約2m程と考えられる。

出土遺物は丹塗りの大型壺形土器の完形品(第98図350、351)鉢形土器、甕形土器、器台、石剣(第38図68)等である。井戸の使用時期として出土遺物から弥生時代中期初頭の甕形土器がある。新しい時期を示す土器として弥生時代後期初頭の遺物があり、この時期までの使用期間と考えられる。

土壇【SK-01~09】(第25、26図)

SK-01~07は北台地から、08、09は南台地から検出した。図示したのは01~06である。01は掘立柱建物の柱穴により切られているが、現状では浅い皿状を呈する。この北大地も削平が著しく0.5~0.7m程度は削平されている。平面の形状は楕円形を呈し、長軸3.0m、短軸2.1mを測る。出土遺物から鎌倉時代と考えられる。

02は掘立柱建物に切れ、別な柱穴を切る。平面形状は、隅丸長方形を呈し、長軸2.7m、短軸2.0mを測る。西側は削平を受けている。この削平は北側に段落ちする部分に当たり、この遺構を切るにより02より新しい段落ちであることが判明した。02の断面は01と同じ皿状を呈し、深さ0.2mを測る。出土遺物から室町時代と考えられる。

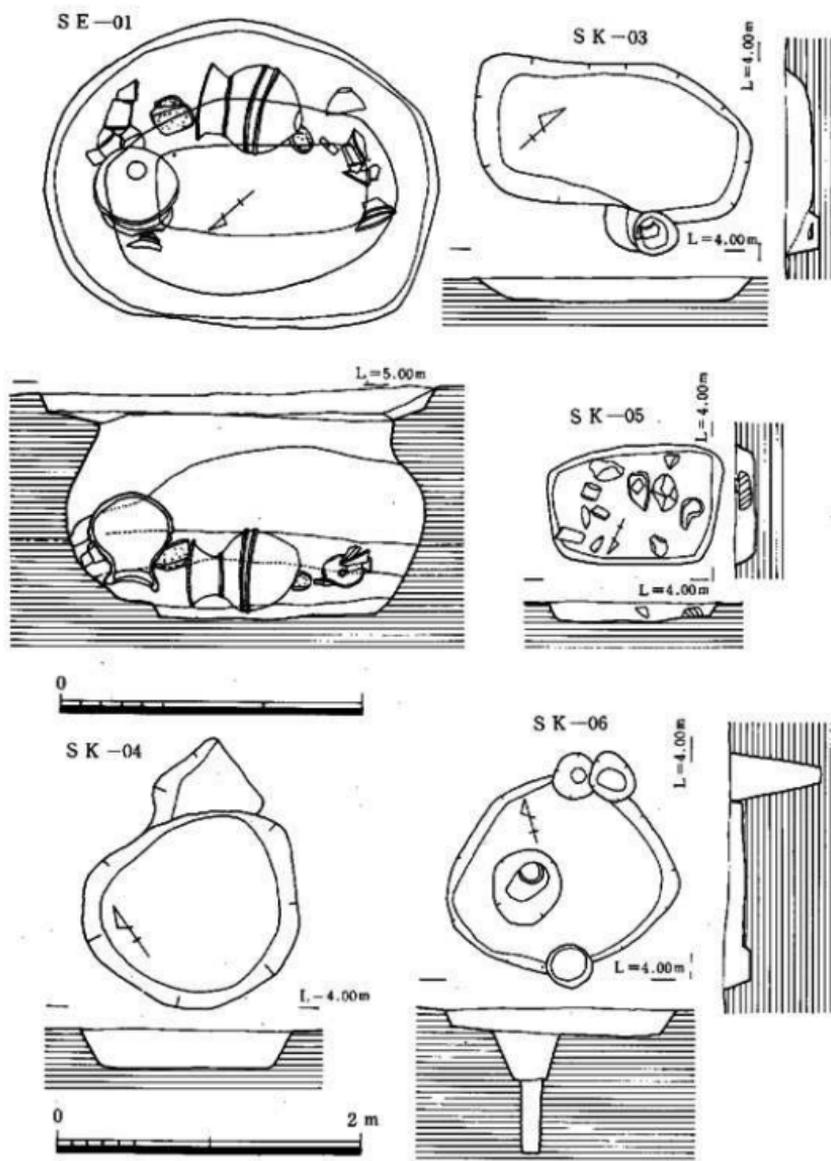
03は平面形隅丸長方形を呈し、長軸1.85m、短軸0.95m、深さ0.15mと浅い皿状を呈する。土壇墓とも考えられる形状を呈する。出土遺物は砥石と細片の白磁から室町時代の遺構である。

04は平面形状が1.4mの円形を呈し、深さ0.25mと浅い。

05は平面形状が長方形を呈し、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.15mである。0.35m程の焼けた石が11個ほど配置されている。出土遺物は殆ど出土せずその時期、性格は不明。

06は平面形状が1.5mの円形を呈し、掘立柱建物の柱穴により切られている。調査時には、柱穴の掘方とも考えられたが、覆土が異なることから土壇とした。出土遺物から鎌倉時代~室町時代の土壇である。

07は図示しなかったが、SD-036から切られ平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸は2.8m、短軸は1.2m、深さ0.3mの皿状を呈する。出土遺物から鎌倉時代~室町時代にかけての土壇である。



第26図 SE-01・SK遺構平面図(縮尺1/30、1/40)

08と09は図示しなかったが南台地にある。08は南側は調査区外で、その全容を知ることは出来なかった。平面形状は長方形を呈し、長軸1.8m±、短軸1.2m、深さ0.3mでSD-01に切られている。出土遺物は弥生時代中期末の遺物しか出土していないことからこの時期の土壌と考えられる。

09は南台地中央部より南に下ったところに位置する。平面形状は長方形を呈し、長軸5.2m、短軸3.3m、深さ0.25mを測り、床面は平坦である。調査時には竪穴住居址として登録したが、調査を進める中で柱穴がまったく検出できず、周辺の柱穴も捉えることが出来なかったため一応土壌として記載した。しかし、近年、古墳時代の住居址からもこの手の遺構が検出され土器を多量に出土している例(野方中原遺跡、野方柳原台遺跡、飯盛遺跡等)があり住居址として考えているが増加している。出土遺物は中期末から後期にかけてのもので時期もこの時期としてよい。竪穴住居址として考えても良いのかも知れない。

不整形土壌(SX)

不整形土壌とした遺構は、形状が不整形であることと、大型の柱穴とも考えられないものを登録した。図示は紙面の都合上省略した。

南台地にSX-01から09がある。中央台地にSX-10から21までがある。この他にも不整形な掘込みはあるが、出土遺物がないことから時期の確定が出来ないため登録番号は付していない。

01は二次調査時に検出した。東側が未調査のため詳細な形状は不明であるが、おおよそ不整形な楕円形を呈する。SD-33や柱穴によって切られている。長軸2.0m±、短軸1.5m、深さ0.3mを測る。出土遺物から弥生時代後期の遺構と考えられる。

02はSD-13の東側に位置する。調査時は掘立柱建物の柱穴と考えていたが、形状から不整形土壌とした。長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.5mを測る。出土遺物から弥生時代中期の遺構である。

03はSD-21の西側に位置し、調査区外に一部入る。形状は不明。出土遺物から弥生時代中期の遺構と考えられる。

04から06はSD-28、50、100に囲まれた部分に位置する。形状は不整形の長方形で、浅い皿状を呈する。

07から09はSD-50の中に位置する。07、09はSD-50によって切られている。形状は不整形の長方形を呈する。出土遺物から弥生時代中期の遺構と考えられる。

10から21は中央台地に位置する。その殆どが意味不明の遺構であるが、遺物が出土しているところから登録している。時期は弥生時代中期から後期初頭の土器が出土している。

Pit.

遺物が出土したPit.を登録した。掘立柱建物、竪穴住居址の柱穴と考えられるが明確には出来なかった。Tab.3、4に一覧表を付した。



第27图 SD遗址平面图 (縮尺1/400, 1/800)

3)溝

溝状遺構は大小含めて47条検出した。その内訳は南台地から36条、中央台地から1条、北台地から10条である。時期は弥生時代中期から室町時代と幅がある。各溝について詳細に述べる。

(1) SD-100

台地の中央を切る形で検出した。幅20mの調査区であるため、その方向がどのように流れているのか不明である。調査開始時は幅広い旧河川ないしは台地落ちと考えていた。試掘調査の結果からも同様の報告を受けていたが、調査を継続していくうちに土層断面や土器の包含層、木器の出土等から溝である確証を得たため溝の登録を行った。

包含層中には弥生時代後期の土器、青磁、白磁等の土器が出土した。土層(付図-2)のIV層がこれに当たる。V層は間層で暗褐色砂質土である。VI層は黒色土(黒褐色粘質土)で遺物は弥生時代後期の物だけしか出土していない。VII層は暗黒褐色砂層で一部弥生時代中期の土器を包含する。VIII層は荒い砂(茶褐色砂)で、中期の遺構が包含されている。この荒砂から考えて水の流れが急激であったことが考えられる。IX層は(砂茶褐色砂)と泥炭層(黒褐色粘質土)との互層で、ここから中期の遺物とともに多量の木器が出土した。

出土遺物の中で銅鐸型銅製品がこの溝から出土した。出土地点は第27図に図示している。出土状態は横に倒れた状態で、紐は北東に向けて出土した(PL.16-1、2、17-1参照)。土層はVI層とVII層の間に出土したが、銅鐸の中に入り込んだ土はVII層の砂である。このことから銅鐸は破棄された時点の現位置を保っているとは考えられず上流から流れて来た可能性が高い。それは銅鐸の中に入っていた土が砂であり、VI層の黒褐色粘質土はまったく混入していないことでVI層が堆積する前にすでに銅鐸は破棄されていたと考えられる。

SD-100の上流は東南方向である。しかし、この方面には河川はない。ヤツデ状に広がる台地であることから東側にある湿地帯を結ぶ流路の可能性が高い。しかしこれは今後の調査例をまわって判断すべきものである。このことは西側の流れる方向も同様である。しかし台地を分断して流れるこのSD-100、中央部の台地はどの様になるのか非常に重要なことである。推定を許されれば恐らくこの部分がヤツデ状に窪む湿地帯で、南台地と北台地とは連続しないものではないかと考えている。すぐ東に近接する調査地点でも東南方向へ続く様相を示しており、これは東に近接する今宿小学校内遺跡(今宿五郎江遺跡I)の所在する台地と南台地を二分する様相を示すものである。

SD-100は台地の縁辺を沿いながら北西から上流に向かう。台地の南側では入り江状に入り込む。そこからさらに東南の台地沿いに沿っていると思われる。南台地との比高差は1.5mあり、これがSD-50付近では0.9mである。中央台地との比高差はあまりなく0.55mである。確認できる範囲で、長さ59m、最大幅13m、最小幅6mで、入り江状部分の長さ19m、幅9mを測る。



第28圖 SD-100遺物出土狀態 (縮尺1/80)

SD-100はSD-50によってえられる。中央部が深く二段になるが深い部分が南台地の入り江部分まで入り込んでいる。一段目は東に伸びる様相を示す。北西側は一段目が曲線を描きながら下流へ伸びるが、二段目は、深さを増しながら北西方向に進む様相を呈する。中央台地は上面に僅かながら砂を含む。水量の多い時には中央台地まで砂を運んだものと思われる。東側中央部には、一段高い部分があり、一段目の段落ちがここで二分される。この形状から考えて中央部の高い部分が東に延び溝を二分すると考えても差し支えない。昭和62年に近接する東側を発掘調査が行われた。調査者によると「調査の結果、二分する北側の溝が幅3m~4m、深さ0.7mで東に続き、今宿小学校内まで続く様相を示している。この溝は二層に分けられ、上層から弥生時代後期初頭の土器が全面に包含されている。下層からは中期の土器と共に木器が出土した。また、この周辺一帯は湧水点が高く、水の量が多く木器や自然遺物がよく残っていた。」これはSD-100と同じ様相を示している。

第28図は遺物出土である。土器、石器、木器が多量に出土しているがこの図はIX層上面のもので下層からは多量の遺物が出土した。特に土器は祭祀用土器と考えられている丹塗土器が主体で、壺形土器(第65図252、352、362等)特に袋状口縁土器(第73図111、230等)や甕形土器(第55図60、67、386等)、高環(第82図166、178、181等)、蓋付壺形土器(第85図)等で時期は、弥生時代中期中頃のものであった。最下層には中期前半の土器も含まれている。

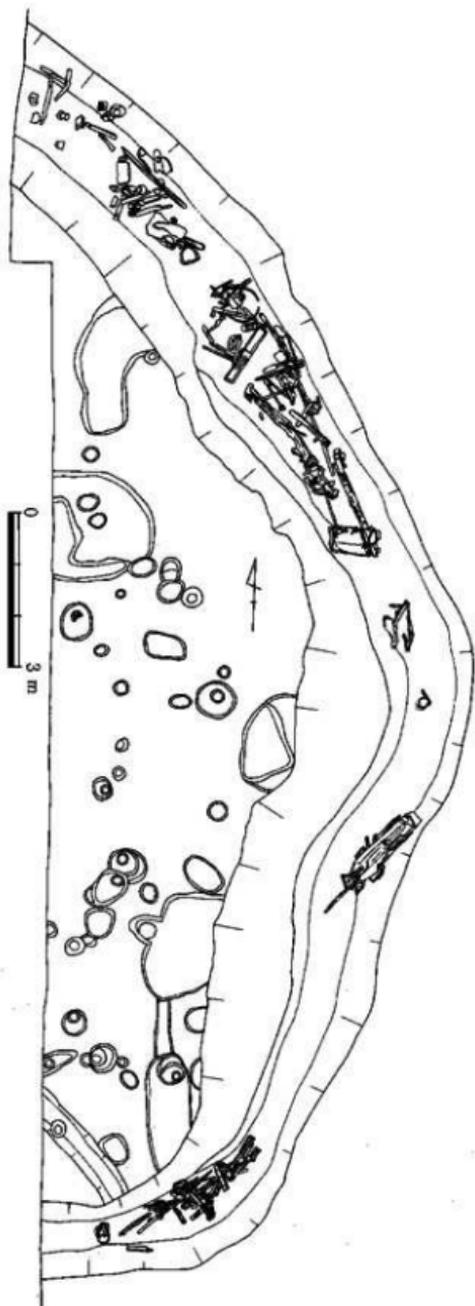
石器も多量に出土している。その多くは石鏃(第43図から47図45、48、56等)、紡錘車(第48図)、大型哈刃石斧(第40図、41図)、砥石、磨石(第49図から54図)等である。特殊遺物として石剣、石戈等も出土した。

木器も多量に出土した。その殆どがIX層からの出土である。鋤類、鍬類、フォーク状木器類等の農耕具(第104図から107図)、石斧柄、たも網、竹籠等の狩猟具、漁撈具(第110から111図、125図)と生活工具、きぬた、織物の部品、木碗、しゃもじ等(第108図、109図、113図、115図)や建築材等が出土している。特記すべきものとして模型の舟(第111図)が出土している。

竹籠は南の入り江状の溜り部分から舟の部材か建築部材と考えられる(第123図224)の上面から出土した。現存する部分では、その用途は明確に判断出来ないが、恐らく三角形を呈する籠状のものと考えられる。

(2) SD-50

SD-50はSD-100の中央部東側に位置し、SD-100を切る形で検出した。約1/5程度しか検出できなかった。SD-50とSD-100との切り合い関係はSD-100が土層図(第29図、付図-2)の第VI層にみられる如く後期初頭には、殆ど埋まった状態で、そこにSD-50の溝が形成されている。形の上ではSD-100を切った形となる。基盤層第IX層は同じであるが、上層出土遺物は溝上端部がVI層と同一になることから東側面は一段低い形状を呈する。西側は調査対象外のため詳



第29圖 SD-50遺物出土狀態 (縮尺1/120)

細は不明であるが、北側はSD-100に沿って廻るものと考えられる。恐らく環壕と思われ、楕円形を呈し、その規模は35m×50m程度であろう。溝の幅は2.5m、深さは1.5mで溝の底面直上に多量の土器、木器が出土した。

土器は第96図、97図に図示したものの以外にもコンテナ50箱程出土した。図示したものは弥生時代中期から後期末までの土器であるが、主体をなす第VII層出土の土器は後期初頭の土器で、この溝の時期を決定できる資料である。中期土器、後期末土器IV層からの出土である。

木器は図示した約1/4がSD-50からの出土である。Tab.-22,23に一覧表を掲載した。

生活用具で第108-35,36の竪杵、きぬたとして45,49がある。また椀も5点(113図76-80)程出土し、杓子もある。織物具の部材として112図-236,116図-220もある。

農耕具として103図-2,3,7の平鋏、二又鋏として9,15,四又鋏が10,平鋤の28,着柄式の二又鋤81,209があり、杷31も出土している。

狩猟具として手網(たも)が図示(111図-60-62)した以外にも多量に出土している。舟材として226,235や浮子状木製品54,56もある。

建築部材は角材・板材等多量に出土している。118図-228の梯子も出土した。

(3) その他の溝

SD-200は中央台地の北側、北台地の段落ち部分に形成された溝である。東南から北西に流れ、幅3.5m、深さ0.7mで二段形成となる。この溝からは瓦、土師器、須恵器、青磁、白磁が出土している。ここで注目すべき遺物は瓦である。格子目文の平瓦、丸瓦で、鎌倉時代から室町時代にかけたこの付近に瓦を葺いた建物が存在していたことを物語る遺物である。

SD-01からSD-45

SD-01からSD-45は調査開始時は使用目的が明らかにできず溝自体つながるものと終了するものがある。遺跡全体が約0.5m-0.7m程削平を受けているところから溝自体は連続していた可能性が高い。区別上名称を付したが連続する可能性のものは後で記載する。

SD-01 南側端に検出された。SX-08を切る状態で、S字状を呈し、南側・西側の調査区に延びる。現存する長さ12m、幅0.3m、深さ0.3mを測る。出土遺物は弥生時代後期の遺物が出土している。

SD-02,03,04 02と04は途中で切れるが一本の溝と考えられる。02は中間部を新しい方形の竪穴によって切られているが、さらに南につづく様相を示す。SD-03は02から枝分かれをし、東に延びるが、現代の擾乱によって破壊されている。SD-04は02の延長上にあり、西に大きくカーブする02と接続する形をとる。04はさらに西に延びる様相を示す。02,04の形状はS字状を呈するところは01の形状と類似している。長さは02,04の計が19m、幅は両方とも0.3m、深さは0.3mを測る。出土遺物は弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土し、覆土は弥生時代

後期と同じ暗茶褐色粘質土である。

SD-05 SD-05は東西に走る溝であるが、覆土から新しい時期の遺構で、溝底面には竹・小枝等による暗渠施設が配されていた。現代まで続く水路からの吸水・排水用暗渠である。ただし明らかに現代の水田区画の溝とは異なりを示すものである。古代の条里制に伴う溝とも考えたが、水路はその可能性を残すとしてもSD-05は現代よりそう遠くない時代の産物であろう。覆土は灰褐色粘土で、現存する長さは15m、幅0.3m、深さ0.5mを測る。出土遺物はない。

SD-06 SD-09の西側に位置し、弧状を呈する。両側は削平され消滅しているが、恐らく延びていたものと考えられる。北側はSD-19に接続されるものと考えられる。現存する長さは、8.5m、幅0.3m、深さ3mを測る。覆土は暗褐色粘質土で、出土遺物は中期末から後期の土器が出土した。

SD-07 SD-06の西側5.5mに位置し、06と同じ弧状を呈する。西側は調査区外に延びるが、北側は消滅している。SD-20に接続するものかもしれない。覆土、出土遺物とも06と同じ様相を示しており、同時期と考えられる。

SD-08 SD-06の東側に位置し、東側調査区外にも延びる。南東側から西に延びる溝は、水路によって切られているが水路西側から延び始め、SK-09の北側から北方向へ向い約5mで切れる。北東側に再度出現し、北東に向かって延びる。東側は調査区対象外のため明確に出来なかがほぼ一周するものと考えられる。現存する長さは20m、幅0.3m～0.4m、深さ0.3mを測る。現存する溝で囲まれた面積は65㎡である。覆土、出土遺物は06と同様である。

SD-12 SD-10、11、13の主流をなす溝で08に接続する可能性もある。10、13、19、20が流れ込む。溝自体はSD-08、13、15、20と同一のもので一區画をなすもので、東側が明確にできないが、現存する溝の長さ(12、13、15)は22.5m、幅0.3m～0.6m、深さ0.3m～0.5mである。溝に囲まれた面積は99㎡である。覆土は暗茶褐色粘質土で、出土遺物は弥生中期末から後期の遺物が出土した。

SD-10 SD-15、19、24と同一溝で、ほぼ一周する。形状は隅丸方形を呈し、12、32に切られる。溝に囲まれた面積は121㎡を測る。溝の長さ38m、幅0.3m～0.4m、深さ0.3mを測る。覆土は暗褐色粘質土で、出土遺物は中期末が主体を占める。

SD-11 SD-10の西側に位置し、SD-12によって切られる。またSB-19の柱穴によっても切られている。北側は消滅し、その方向は不明である。覆土は暗黒褐色粘質土で、出土遺物は中期の遺物が出土している。現存する長さは2.7m、幅0.3m、深さ0.2mである。

SD-14 SD-10、13に直行する方向で10、13とは接続していないが、SD-12、13、15と10、19、24との関連からその可能性はある。SB-48の柱穴に切られている。覆土から中期の遺物が出土した。

SD-15 SD-12、13と一連の溝である。東側は水路によって切れ、調査区外に延び、24と

の接続で13,16と合流する。覆土は暗褐色粘質土で、中期末から後期にかけての遺物が出土している。溝の長さ8.5m、幅0.3m、深さ0.3mを測る。

SD-24 SD-15とはほぼ並行し、13,16との合流地点まで並行する。SD-15との間を考えると幅1.2mで広い土手を彷彿させる。長さ8m、幅0.3~0.4m、深さ0.3mで、覆土、出土遺物は15と同じである。

SD-16 SD-15から西に延びた24と合流する地点から北側にずれ約6m延びる。24からも途中から北側に延びる溝があり、16に合流する。16には中間から南に約2.4m延びる小溝が付属する。覆土、出土遺物は15,24と同じ様相を示し、幅0.3m、深さ0.3mを測る。

SD-18 SD-13の北側延長上に位置する。溝は連続せず、各溝の合流地点より北約1mから始まり約5.5m続き消滅している。しかし両側とも延びるものと考えられる。幅0.3m、深さ0.3mで覆土、出土遺物は13と同じである。

SD-19 SD-10,24と同じ溝内である。覆土、出土遺物は10,24と同じ様相を示している。19の西側に合流する22がある。22は19と合流し、24との接合部分で北に弧を描きながら西側へ続き、約4mのところで消滅する。長さは12m、幅0.3m、深さ0.3mを測る。出土遺物、覆土は19と同じ様相を示す。

SD-20 SD-09,13の合流地点から南西に延び、19と合流しさらに南西へ続き約1.5mで直角に北に曲がり、19と合流し、さらに直角に西の方へ続く。13,19と同一溝である。

SD-21 西から延び、20と並行し、19と合流して弧を描きながら北に向かって消滅する。

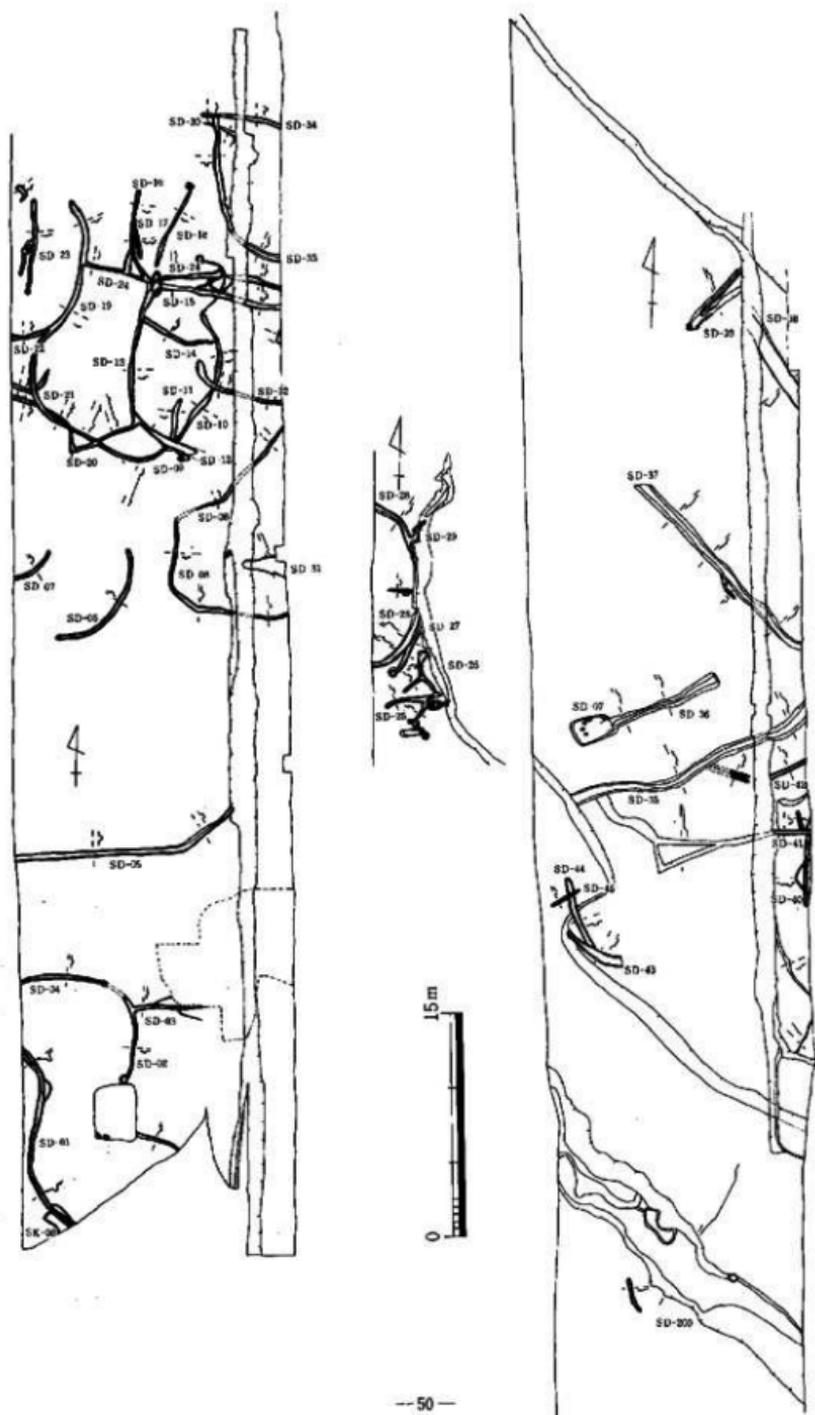
SD-33 東側に位置するが24と並行し西側に延び、水路を挟んで北に進み34と合流する。34は33と9m離れた北側から直線的に西に延びる。この33と34で一区画形成されるが、東側が調査区外のため、その規模は不明である。覆土は両方とも暗黒褐色粘質土で、出土遺物は弥生時代中期の範疇に始まる。

SD-28 SD-100によって切られる形状を呈するが、調査時の掘り過ぎの可能性もある。形状は楕円形を呈する。27が合流し、29は28から分かれ北側に流れる。覆土は暗褐色粘質土で、覆土中より中期末から後期にかけての遺物が出土している。

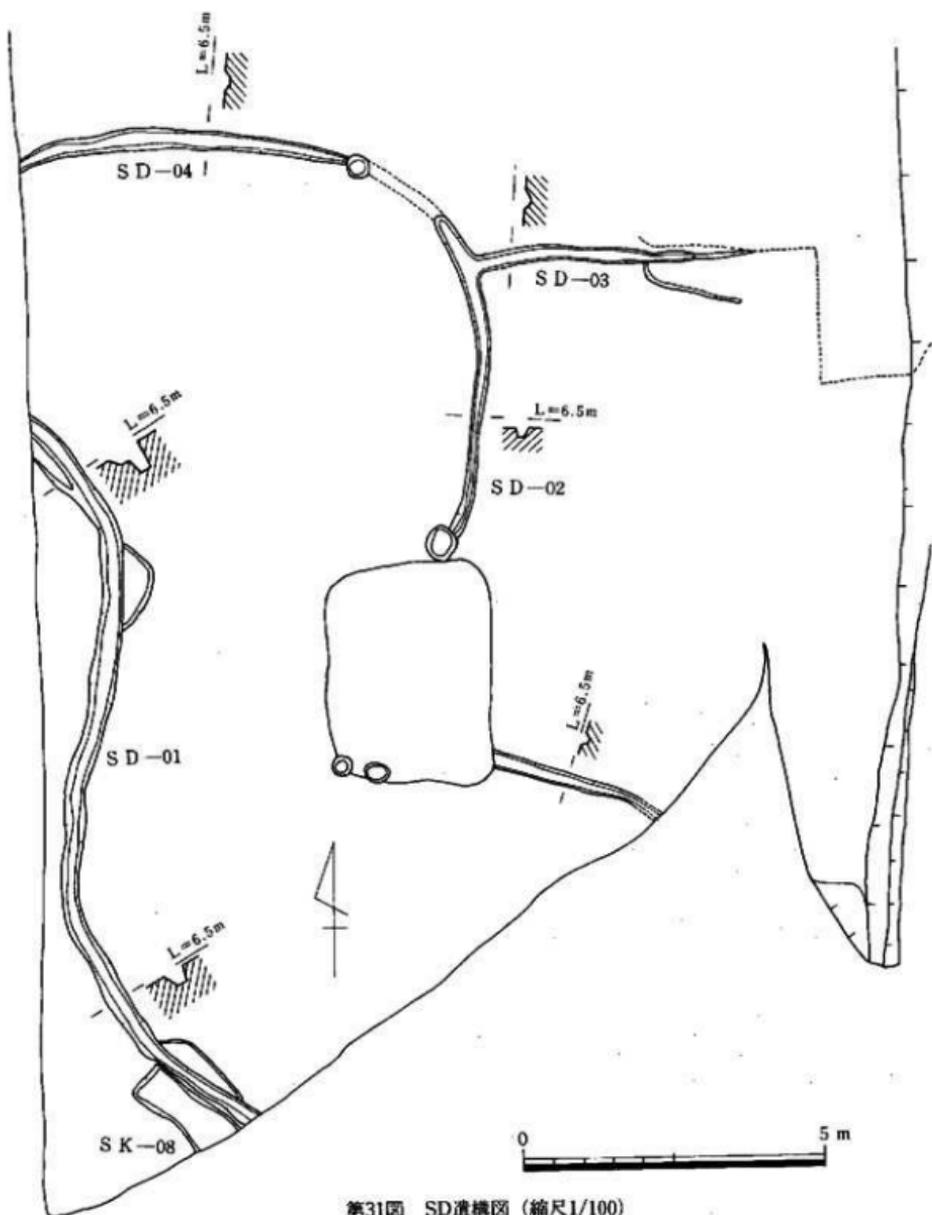
SD-35から45は北台地に検出された。すべての溝より弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土している。覆土は暗茶褐色粘質土である。

35は北台地の南側は東西に流れ、西側は段落ちする。36は35の5m北に位置する。35と並行して走るが約7mで消滅し、西側はSK-07で切れる。両方とも幅0.7m、深さ0.4mを測る。

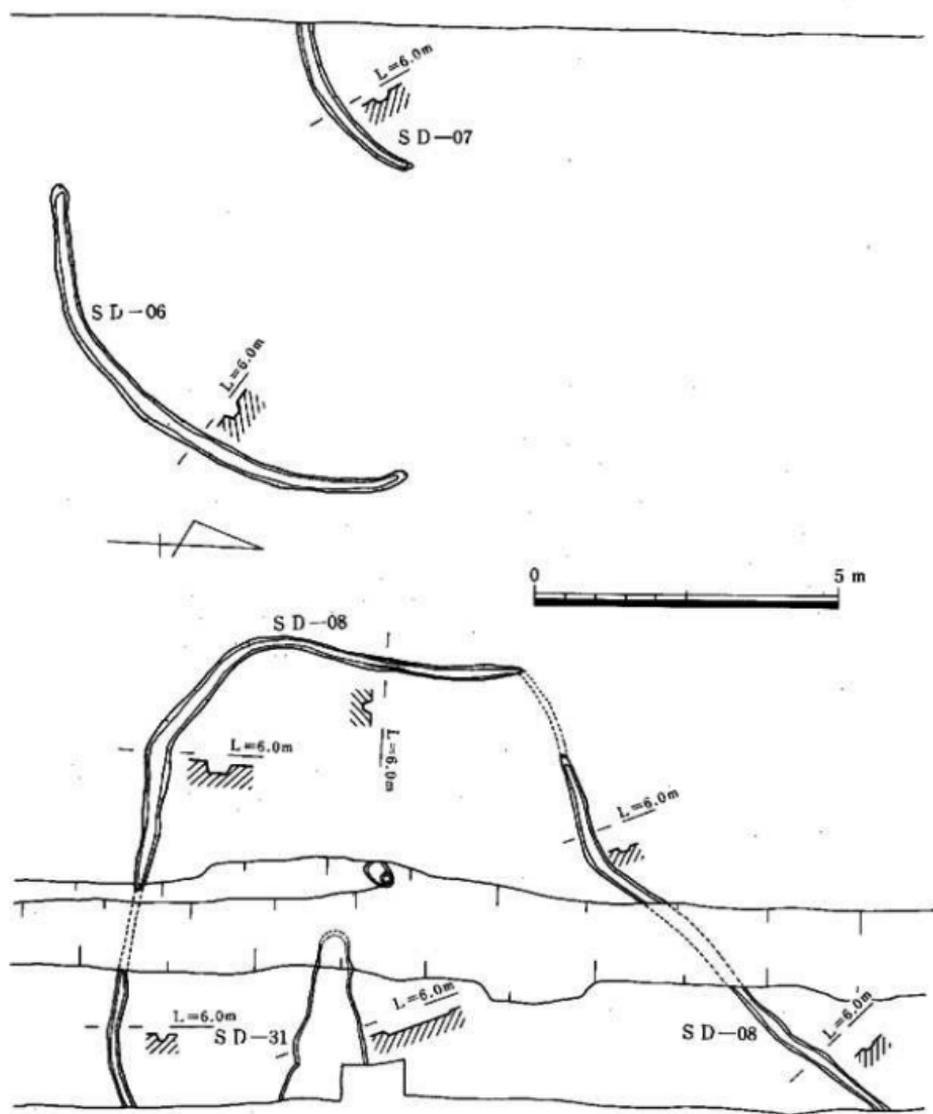
37は35より北5mから北西に向かって約15m延びた所で消滅している。幅、深さ、覆土、出土遺物とも35と同じである。38は北台地の北側に位置し、水路によって消滅している。39も38と同様に南西から北東に続く。40から45は幅0.3m、深さ0.3mで覆土、出土遺物は35と同じである。



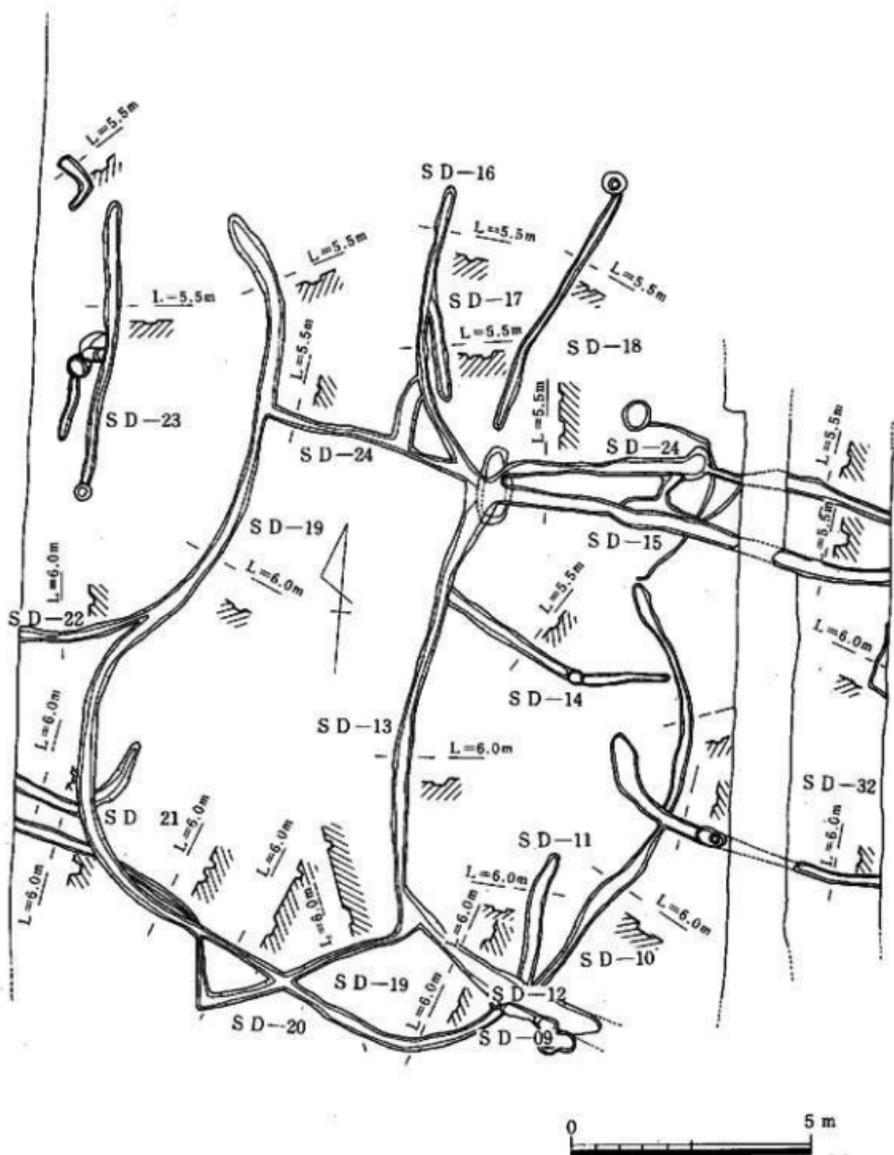
第30圖 SD遺構全体圖 (縮尺1/400)



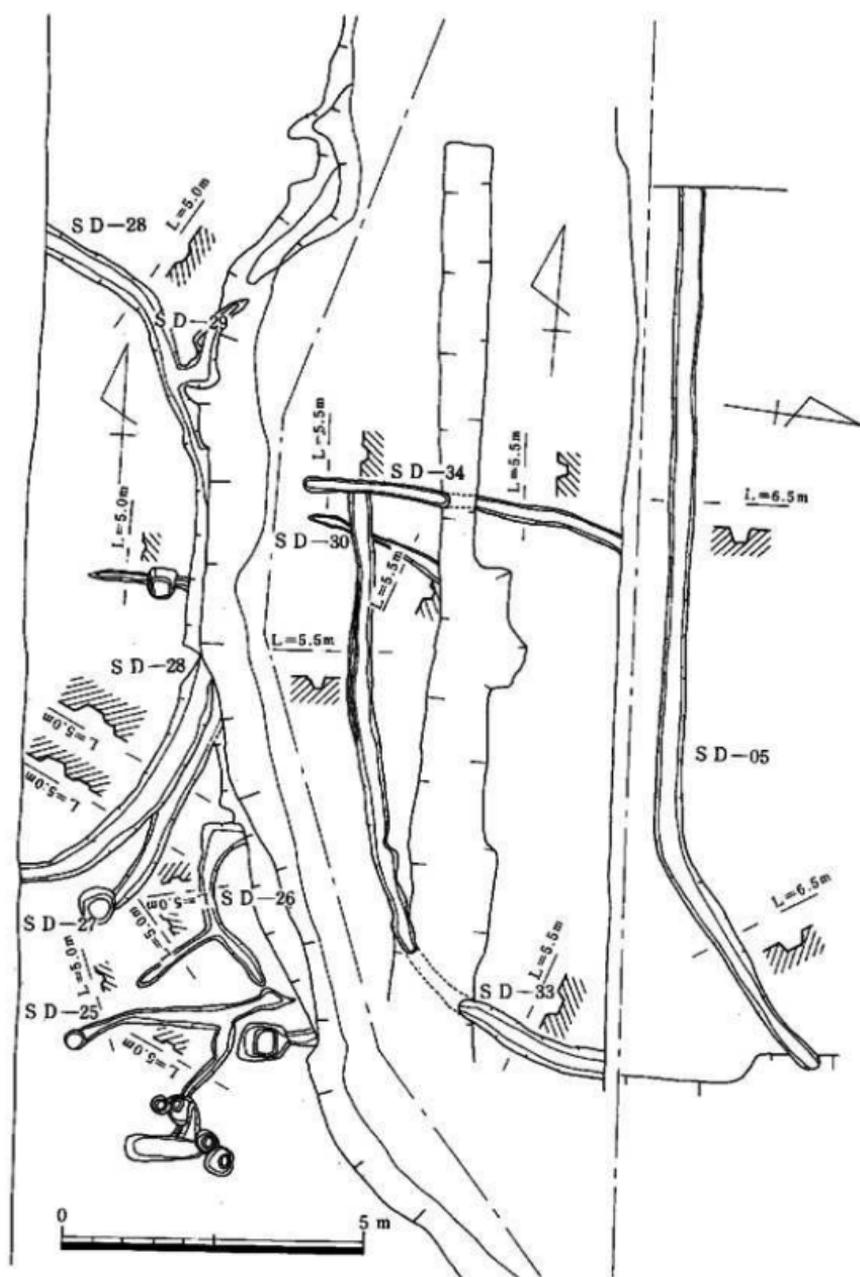
第31圖 SD遺構図 (縮尺1/100)



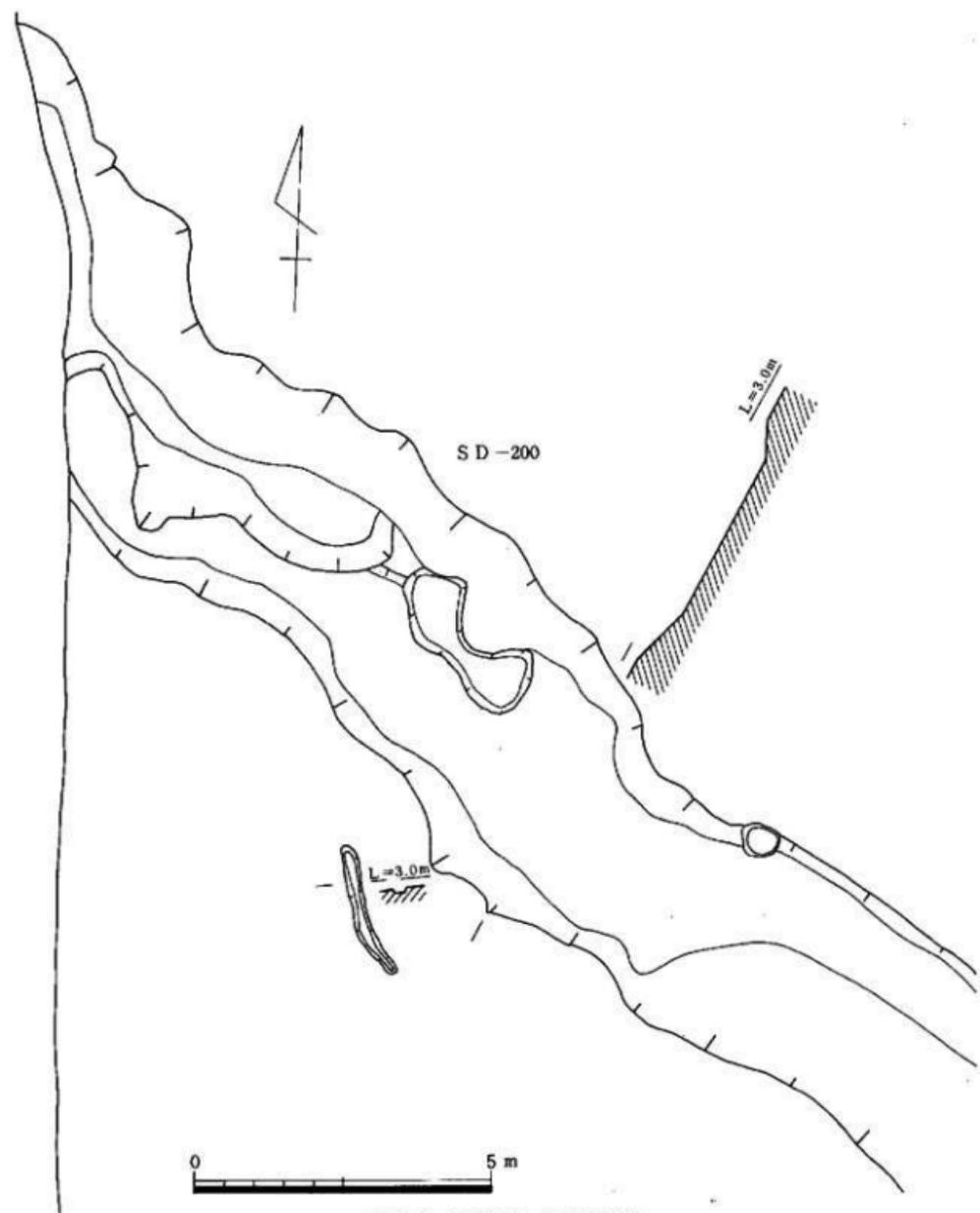
第32図 SD遺構図 (縮尺1/100)



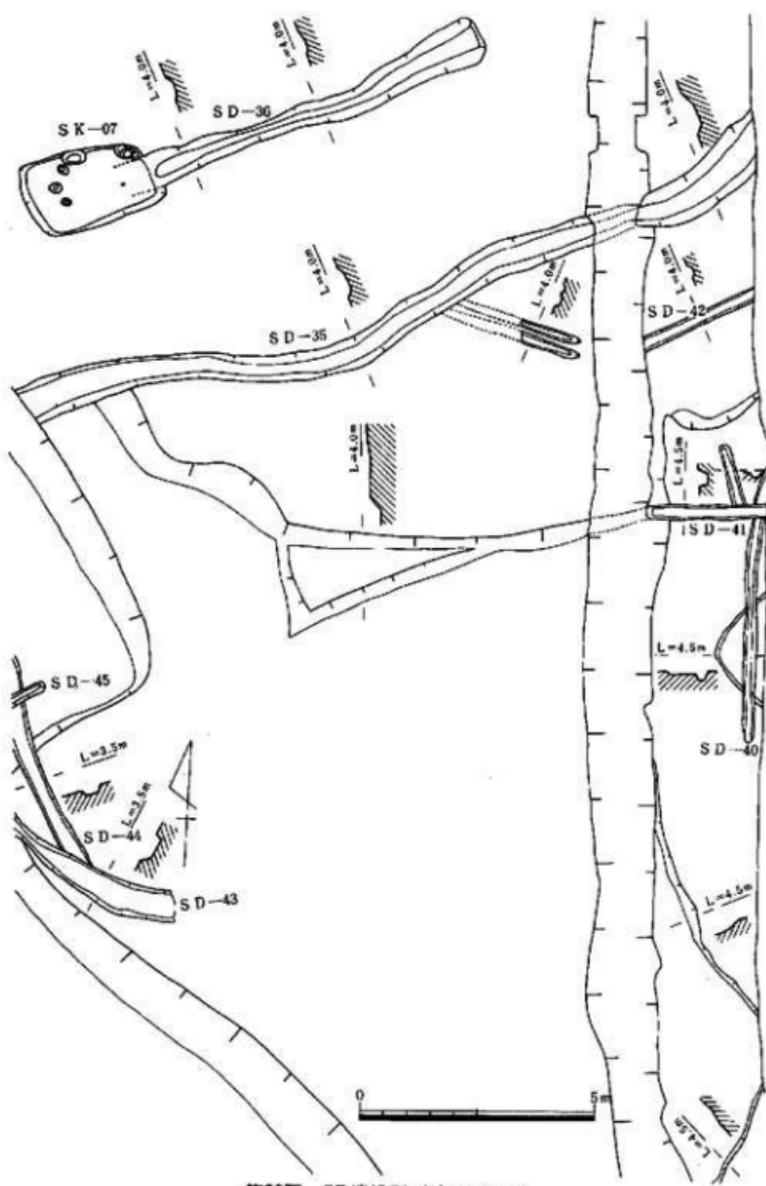
第33図 SD遺構図 (縮尺1/125)



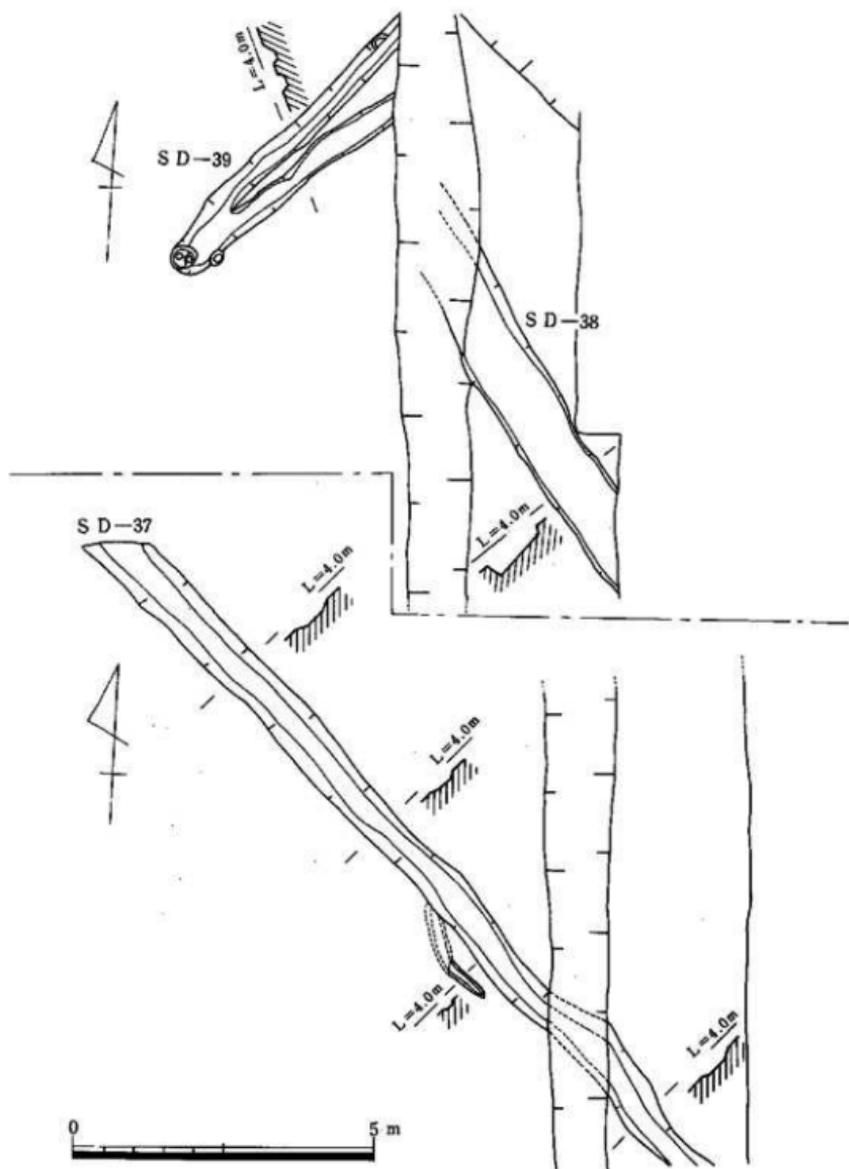
第34图 SD遺構図 (縮尺1/100)



第35図 SD遺構図 (縮尺1/100)



第36圖 SD遺構図 (縮尺1/100)



第37圖 SD遺構図 (縮尺1/100)

pit 番号	個	S B	時 代	pit 番号	個	S B	時 代	pit 番号	個	S B	時 代	pit 番号	個	S B	時 代
1	21		新生中期	64	4		新生中期-後期	127	13			190	23	13	新生中期-後期
2	7		" "	65	2		" "	" "	" "			191	15		新生
3	11		新生中期-後期	66	55		" "	129	20			192	61 ₁	14	新生後期
4	4		" "	67	13		新生中期-後期	130	42 ₁	20	新生後期	193	25	12	新生中期-後期
5	6	01	新生中期-後期	68	1		" "	131	3			194	4		新生
6	3		" "	69	3		" "	132	4			195	26	15	新生中期末
7	2		" "	70	5		" "	133	3			196	23		新生
8	3		" "	71	37		" "	134	14			197	22		新生中期末
9	4		" "	72	1		新生中期-後期	135	45	19	新生後期	198	4	10	新生中期末
10	8	01	新生中期末	73	7		" "	136	9	20	" "	199	27	13	新生中期-後期
11	7	01	新生中期末	74	11	04	新生中期末	137	2			200	37	14	新生後期
12	3		" "	75	23 ₁		" "	138	1			201	11		新生
13	2		" "	76	30		" "	139	3			202	4	25	新生中期
14	3		" "	77	13		" "	140	22	17	新生中期-後期	203	4	18	新生中期-後期
15	3		" "	78	3		新生中期-後期	141	5			204	1	17	" "
16	1		" "	79	4		" "	142	18	11	新生後期	205	5		新生
17	11		新生中期-後期	80	7		" "	143	17 ₁	20	(土層 2.5%) 新生後期	206	13	16	新生中期
18	2		新生中期	81	5		" "	144	24		新生後期	207	19 ₁	18	新生中期-後期
19	49	01	新生中期末	82	2		" "	145	6	09	新生中期末	208	3		新生
20	1		新生中期末	83	5		" "	146	4		新生	209	17		新生中期
21	2		" "	84	24		" "	147	20	20	新生後期	210	12 ₁		" "
22	7		" "	85	10		" "	148	32	09	新生中期末	211	26	23	新生後期
23	24	02	新生中期末	86	8		新生中期-後期	149	21		新生	212	9		新生
24	13		新生中期-後期	87	3		" "	150	49 ₁	10	新生中期末	213	13		新生後期
25	13	02	" "	88	30		" "	151	3		新生後期	214	11		" "
26	35		" "	89	26		" "	152	4	10	新生中期末	215	2		新生
27	1		新生中期	90	12		新生後期	153	39		新生中期-後期	216	33		" "
28	59	01	新生中期末	91	13		新生中期-後期	154	61	07	新生中期	217	19		" "
29	45		新生中期-後期	92	8		" "	155	31	06	新生中期末	218	19	16	新生中期
30	5		" "	93	39 ₁	06	新生中期末	156	1		新生	219	3		新生
31	3		" "	94	10		新生中期-後期	157	1		" "	220	23		新生後期
32	1		" "	95	1		" "	158	39	07	新生中期	221	6		新生
33	4		" "	96	4		" "	159	4		新生	222	7		新生後期
34	1		" "	97	10		" "	160	3		" "	223	11	11	新生中期
35	6		" "	98	5	04	新生中期末	161	33		新生後期	224	8	23	" "
36	2		" "	99	39	04	" "	162	25	08	新生中期-後期	225	23	22	新生後期
37	48	03	新生中期末	100	8		新生中期-後期	163	7	14	新生後期	226	13		新生中期
38	5	03	" "	101	12		新生中期	164	17 ₁	08	新生中期末-後期	227	134		新生後期
39	6		新生中期-後期	102	35	19	新生後期	165	4	08	" "	228	10		新生
40	1		" "	103	5		新生中期-後期	166	13	08	" "	229	10 ₁	12	新生中期-後期
41	4		" "	104	4		" "	167	40	10	新生中期-後期	230	8		新生
42	34		" "	105	6		" "	168	2	08	" "	231	1		" "
43	5	02	" "	106	18	19	新生後期	169	4	09	" "	232	1		" "
44	3		新生中期-後期	107	6	19	新生後期	170	24		新生後期	233	10	17	新生中期-後期
45	6		" "	108	3		新生	171	13	10	" "	234	3		新生
46	6		" "	109	8	20	新生後期	172	15 ₁	15	新生	235	1	25	新生中期
47	6		" "	110	6		新生中期	173	12	14	新生後期	236	15	24	" "
48	14	02	新生中期	111	5		新生	174	8	13	新生中期末	237	1		新生
49	10	04	新生中期末	112	27	19	新生後期	175	5		新生後期	238	25	24	新生中期
50	3		新生中期-後期	113	25		新生中期	176	3	09	新生中期末	239	34		新生
51	1		" "	114	2	19	新生後期	177	65		新生後期	240	10		新生後期
52	18	03	新生中期末	115	2	20	" "	178	3		新生	241	2	22	" "
53	51	03	" "	116	11		新生	179	2		" "	242	1	23	" "
54	7		新生中期-後期	117	28	19	新生後期	180	1		" "	243	26		新生中期
55	1	03	新生中期末	118	3	11	新生中期	181	24	17	新生中期-後期	244	12	24	新生後期
56	9		新生中期-後期	119	12		新生	182	2		新生	245	39		新生後期
57	3		" "	120	56	07	新生中期	183	5		新生後期	246	12		" "
58	3		新生	121	6		新生	184	6		新生	247	5		新生
59	9	09	新生中期	122	15		新生中期	185	13	16	新生中期	248	41	22	新生後期
60	12		" "	123	12		" "	186	12	18	新生中期-後期	249	2		新生
61	1		" "	124	30	09	新生中期末	187	42	10	新生中期末	250	53 ₁		" "
62	27		" "	125	40		新生	188	8	16	新生中期	251	5		" "
63	3		" "	126	24	06	" "	189	19	16	" "	252	7		" "

Tab. 3 Pit一覽表-1

pit 番号	個	S B	時 代	pit 番号	個	S B	時 代	pit 番号	個	S B	時 代	pit 番号	個	S B	時 代
253	17		中生中期	316	6		中生	379	2		中生	442	10		中生
254	29	26	中生中期	317	3		中生	380	1		中生	443	38		中生後期
255	2	33	中生中期-後期	318	2		中生	381	1	48	中生土層 砂岩 (厚砂岩)	444	13		中生
256	3	31	中生中期	319	2		中生	382	34	49 56	中生中期	445	12		中生
257	14	34	中生中期-後期	320	3		中生	383	10		中生	446	8		中生
258	1	30	中生	321	1		中生	384	9		中生後、中生後	447	15	69	中生中期
259	15		中生	322	3		中生	385	3		中生	448	10		中生
260	6		中生中期	323	1		中生	386	8	5, 1	中生	449	5		中生
261	6		中生中期-後期	324	7	1	中生中期	387	7	54	中生後期	450	7		中生
262	9		中生	325	17		中生	388	2		中生中期	451	0		中生
263	2	30	中生中期-後期	326	3		中生	389	1	49	中生後期	452	0		中生
264	1		中生	327	1		中生	390	17	50	中生中期	453	2		中生
265	26	21	中生中期	328	6	35	中生中期-後期	391	8	49	中生中期	454	18	69	中生中期
266	7	31	中生	329	10	36	中生	392	6		中生後期	455	5		中生
267	15	31	中生	330	7	43	中生後期	393	2		中生	456	9		中生
268	2	31	中生	331	22	43	中生	394	4		中生	457	151		中生
269	34		中生	332	50	36	中生中期-後期	395	3	55	中生	458	1		中生
270	51	35	中生中期-後期	333	17		中生	396	7		中生	459	7		中生
271	1		中生	334	1		中生中期	397	2		中生	460	9		中生
272	1		中生	335	8		中生	398	33		中生				
273	8	32	中生中期-後期	336	4		中生	399	14		中生	592	1		中生
274	2	34	中生	337	8	43	中生後期	400	64		中生				
275	1	21	中生中期	338	5		中生	401	1	52	中生中期(後期)	1000	2		中生
276	5	30	中生中期-後期	339	2		中生	402	8		中生				
277	9		中生	340	69	43	中生後期	403	1	51	中生中期				
278	11		中生中期	341	9	44	中生中期-後期	404	4		中生				
279	4		中生	342	2		中生	405	4		中生中期				
280	2		中生	343	14	43	中生後期	406	2		中生				
281	5		中生	344	1		中生	407	5		中生				
282	1		中生	345	5	43	中生後期	408	9	56	中生後期				
283	5	31	中生中期	346	23	43	中生	409	29	57	中生				
284	3		中生	347	13	43	中生	410	8	39	中生中期-後期				
285	1		中生	348	11	44	中生中期-後期	411	4	54	中生後期				
286	82		中生中期	349	2		中生	412	14	50	中生中期				
287	33	32	中生中期-後期	350	0		中生	413	18	59	中生中期-後期				
288	2	31	中生中期	351	24		中生	414	15		中生後期				
289	15		中生	352	3		中生	415	5		中生				
290	2		中生	353	0		中生	416	0		中生				
291	16	33	中生中期-後期	354	9	5, 1	中生	417	20	57 55	中生後期				
292	2	37	中生後期	355	6		中生後期	418	9		中生				
293	1		中生	356	2		中生	419	2		中生				
294	8	34	中生中期-後期	357	5	43	中生後期	420	6	59	中生中期-後期				
295	4	35	中生	358	6		中生	421	34	59	中生後期				
296	4	32	中生中期-後期	359	7		中生	422	41	60	中生後期				
297	3	30	中生	360	7		中生	423	26		中生				
298	13	21	中生中期	361	17	44	中生中期-後期	424	0		中生				
299	5		中生後期	362	13	43	中生後期	425	7	1, 1	中生				
300	11	35	中生中期-後期	363	8		中生	426	0		中生				
301	8		中生中期	364	2	1	中生	427	—		中生				
302	21	31	中生	365	1	56	中生後期	428	16	61	中生後期				
303	5	38	中生	366	5		中生	429	18		中生				
304	5		中生	367	4	47	中生中期-後期	430	31		中生				
305	2		中生	368	1		中生	431	49	61	中生中期-後期				
306	4	32	中生中期-後期	369	99	5, 1	中生	432	0		中生				
307	11	35	中生	370	7	49	中生	433	—	61	中生後期				
308	6		中生	371	1	48	中生	434	15		中生				
309	4		中生後期	372	4		中生	435	19		中生				
310	30		中生	373	4	50	中生	436	0		中生				
311	18	36	中生中期-後期	374	106	5, 1	中生後期	437	8		中生				
312	13		中生	375	32	1	中生	438	0		中生				
313	57		中生中期	376	29	50	中生中期	439	2		中生後期				
314	2		中生	377	23	49	中生後期	440	4		中生				
315	29	36	中生中期-後期	378	1	55	中生	441	2	1	中生後期				

Tab. 4 Pit—覽表—2

pit 番号	個			pit 番号	個			pit 番号	個			pit 番号	個		
	S	B	時 代		S	B	時 代		S	B	時 代		S	B	時 代
1001	17	40	学生後期	1064	7	29	学生中期-後期	1127	15	46	学生中期	1190	1	4	学生中期
1002	8	42	学生中期	1065	3	AEX	学生中期	1128	12		学生中期	1191	6		学生中期
1003	10	37	学生後期	1066	7	27	#	1129	2		#	1192	6		#
1004	2		学生	1067	2	28	AEX 29	1130	13		#	1193	1	34	学生中期-後期
1005	18		#	1068	1	1	#	1131	8		#	1194	2	38	学生後期
1006	12	32	学生中期-後期	1069	10		学生後期	1132	4		学生中期	1195	1		学生
1007	50	26	学生中期	1070	12		学生中期	1133	5		学生	1196	3		学生
1008	15	37	学生後期	1071	12		学生	1134	7		#	1197	2	54	学生
1009	14		学生	1072	10		学生後期	1135	1		不明? 破石	1198	2	54	#
1010	3		#	1073	11	25	学生中期	1136	1	45	学生後期	1199	30	54	学生後期
1011	4	35	学生中友-後期	1074	24		学生	1137	8		学生後期	1200	-		学生後期
1012	8		学生	1075	7		#	1138	19		学生	1201	50		学生後期
1013	36	42	学生中期	1076	35		学生後期	1139	110	46	学生中期	1202	9		学生後期
1014	5		学生	1077	2		学生	1140	61		学生後期	1203	7		学生後期
1015	2		学生後期	1078	5		#	1141	15		学生	1204	1		学生
1016	34	28	学生中期	1079	5		#	1142	6	46	学生中期	1205	5		学生
1017	10		学生	1080	1		#	1143	1		学生	1206	14		学生
1018	26	21	学生中期	1081	2	05	学生中期-後期	1144	4		#	1207	6		学生
1019	42	40	学生後期	1082	2	05	#	1145	2		学生中期	1208	5		学生後期
1020	16	28	学生中期	1083	1		学生	1146	10		学生	1209			学生
1021	4		学生	1084	7	06	学生後期	1147	6		#	1210	1		学生
1022	13		#	1085	43	35	AEX 100	1148	3	54	学生後期	1211	5		学生
1023	17		学生後期	1086	23		学生後期	1149	3		学生	1212	1		学生
1024	10	29	学生中期-後期	1087	14		学生	1150	1		#	1213	2		#
1025	4		学生	1088	10		#	1151	14		#	1214	2		#
1026	30	29	学生中期-後期	1089	1		#	1152	3		#	1215	5		学生、貴重部
1027	8	41	学生後期	1090	1	06	学生中期-後期	1153	2		#	1216			学生
1028	3		学生	1091	3		学生中期	1154	6		#	1217	1		学生・石膏
1029	7		#	1092	1		学生	1155	10		#	1218	3		#・石膏
1030	15	37	学生後期	1093	7		学生後期	1156	11		学生後期	1219	6		学生
1031	4		#	1094	12		#	1157	12		#	1220	2		学生
1032	46	42	学生中期	1095	23		#	1158	-	53	学生中期				学生中期
1033	8	40	学生後期	1096	25		#	1159	37	62	学生後期	1251	4		学生後期
1034	13	38	#	1097	1		学生	1160	1		学生	1252	12	68	学生後期
1035	3		#	1098	9		#	1161	2	64	学生中期-後期	1254	9	68	学生後期
1036	5		学生	1099	-		#	1162	2		学生	1255	11		#
1037	6	30	学生後期	1100	3		学生	1163	3	62	学生後期	1256	4	67	学生後期
1038	2		#	1101	5		#	1164	1		学生中期	1257	2		学生
1039	3	37	#	1102	3		#	1165	2		#	1258	20	67	学生後期
1040	20	40	#	1103	2		#	1166	4	05	学生中期-学生土層	1259	1		学生
1041	2		学生	1104	6		#	1167	2		#	1260	1	68	学生後期
1042	19		学生後期	1105	3		#	1168	7	63	学生後期	1261	9		学生
1043	2		学生	1106	52		学生後期	1169	3	65	学生中期-学生土層	1262	3	65	学生中期-学生土層
1044	6	26	学生中期	1107	6		学生中期	1170	15	63	学生後期	1263	9	65	#
1045	1		学生	1108	2		#	1171	3		学生	1264	24	63	学生後期
1046	7	21	学生中期	1109	7		#	1172	7	64	学生中期-後期	1265	2	62	#
1047	1	AEX	学生	1110	3		学生中期	1173	41		学生後期	1266	1	66	# (層G)
1048	2	AEX	学生中期-後期	1111	11		#	1174	41	64	学生中期-後期	1267	1	66	# (層G)
1049	2	AEX	学生中期	1112	6		#	1175	15		学生後期				
1050	1	27	#	1113	47		学生中期-後期	1176	3		#				
1051	11		学生	1114	6		#	1177	4		#				
1052	3		#	1115	6	39	学生後期	1178	6	34	学生中期-後期				
1053	21	AEX	学生中期-後期	1116	7		学生	1179	4		学生後期				
1054	4	27	学生中期	1117	3		#	1180	4		#				
1055	1	10	学生	1118	10		#	1181	2		#				
1056	5	25	学生中期	1119	7		#	1182	1		#				
1057	1	27	学生	1120	2		#	1183	7	54	学生後期				
1058	12		学生後期	1121	2		学生中期-後期	1184	1		#				
1059	13	AEX	学生	1122	4		#	1185	2		#				
1060	2	28	学生中期	1123	2		#	1186	1		#				
1061	6		学生	1124	8		#	1187	5		学生				
1062	2		#	1125	9		#	1188	1		#				
1063	1		学生中期	1126	27	46	学生-空町	1189	1		#				

Tab. 5 Pit一覧表-3

pit 番号	備	S B	時 代	SD 番号	備	時 代	SK	備	時 代
2001	2	71	聯合-土層 浮石	1	881	粘土後期	01	231	不明
2002	1	77	聯合-土層 浮石	3	54	粘土	02	2	不明
2003	11 ¹	71	聯合-土層 浮石	4	92	"	04	2	室町
2004	3	73	聯合-土層 浮石	5	23	"	10	30	粘土後期
2005	1	73	聯合-土層 浮石	6	197	粘土後期	11	48	粘土中期
2006	3 ¹	74	"	8	73	" 中期	12	8	粘土、室町
2007	1		"	9	55	" 後期	14	6	室町
2008	19	76	"	10	14	" 中期	15	10	鎌倉
2009	1 ¹	74	"	11	16	"	16	1	粘土
2010		77	"	13	77	" 後期			
2011	1		粘土	15	67	" 中層 1(白磁土)	SE		
2012	3	77	"	16	6	" 後期	01	10	粘土中期
2013	1		室町、土層	17	2	"			
2014	1		室町、土層	18	11	"	SX		
2015	2	88	室町、土層	19	242	" 中期	01	103	粘土-土層(土層)1(土)
2016	2		"	20	105	" 後期	07	15	"
2017	6	77	"	21	2	粘土	08	32	粘土後期
2018	17 ¹	76	"	22	6	"	09	3	粘土
2019	2	72	粘土土層 浮石	24	47	" 後期			
2020	2	72	"	25	14	"	SC		
2021	1		室町、土層	26	18	"	01	390	粘土中期
2022	6 ¹	86	室町-土層 土層	27	77	" 中期			
2023	2		室町、土層	30	135	" 後期			
2024	1	89	室町、土層	50	135	" 中期-後期	SK:25	74	
2025	5	84	聯合-土層 浮石	101	5	" 後期			
2026	1	88	室町、土層	102	14	粘土	W-2	2	
2027	2	91	" 土層 浮石	103	120	" 粘土、鎌倉、室町			
2028	19	89	室町、土層	104	15	粘土	P-13	1	
2029	1	88	" 土層、土層	105	9	"	P-21	2	
2030	8	90	" 土層、土層	106	11	" 後期	P-24	29	
2031	1		粘土	107	41	粘土	P-18	1	
2032	1	94	室町、土層	108	25	"	P-17	1	
2033	4	100	" 土層、土層	110	1	" 後期	P-18		840700344
2034	-	92	" 土層	111	8	"	P-23		840700042
2035	1	94	" 土層	112	5	"			840700053
2036	1		" 土層	113-1	268	粘土後期?点	P-24		840700076
2037	4		" 土層	114	119	" (鎌倉1点)			
2038	1		室町、土層	115-1	96	" 中期-後期			
2039	1		" 土層	116	5	粘土			
2040	3		" 土層	117	1	鎌倉 互置土層			
2041	1 ¹	104	聯合-土層 浮石	118-1	2	" 白磁			
2042	1	115	"	119	6	" 瓦、白磁			
2043	1	185	室町、土層	200-13	40	"			
2044	1	185	"						
2045	-		"						
2046	1		" 浮石						
2047	3		" 浮石、土層						
2048	7 ¹		" 浮石、土層						
2049	2		"						
2050	1	73	聯合-土層 浮石						
2051	1	73	"						
2052	8		"						
2053	1	94	" 土層						
2054	3		" 瓦、土層						
2055	-		"						
2056	2 ¹		"						
2057	1		不明						
2058	0	87	室町 白磁						
2059	-		"						
2060	-	77	"						
2061	-	77	粘土後期						
2062	-	77	鎌倉-室町						
2063	-	77	"						

Tab. 6 Pit-覽表-4

4、出土遺物

各遺構から数多くの遺物が出土した。大きく分けて、弥生時代の中期から後期にかけての遺構より出土した遺物と鎌倉時代から室町時代の遺構より出土した遺物に分けられる。特に弥生時代中期末から後期にかけての遺物を出土したSE-01からは完形の壺形土器、石剣等を始めとして多種多様の遺物が出土している。最も遺物が多量に出土した遺構は、SD-100である。土器、石器は言うに及ばず多量の木器が出土した。木器には農耕具、狩猟具、漁撈具、機械具と思われる部材等が出土し、生活に必要な用具が殆ど揃った感がある。また、SD-100から銅鑄型銅製品が出土したことは銅鑄研究の上からも非常に重要なことであり、新聞紙上に大きく取り上げられ注目を集めた。

SD-50は、環濠であるが一部分しか調査が出来なかったので、その規模等は推測の粋をでないが、溝からの出土遺物は生活用具が多量に出土している。特に舟の部材、櫓、たも網、碇、石斧柄等が出土している。また、SD-100からも模型の舟が出土している。SD-50、100から出土した石器のうち最も興味深いものは、大小多種多様な石錘である。使用用途の違いにより色々な形態を持つことである。

弥生式土器は丹塗りの土器が大半を占め、祭祀用に用いられたと考えられる。

鎌倉時代から室町時代にかけての遺構は北台地を中心に分布するが、遺物も青磁、白磁、土師器等が出土している。ただ溝内から格子目紋の瓦が出土していることは大きな意味を持つ。

出土遺物について概略を述べてきたが、石器、土器、木器の順でその詳細を記載していく。

1) 石器

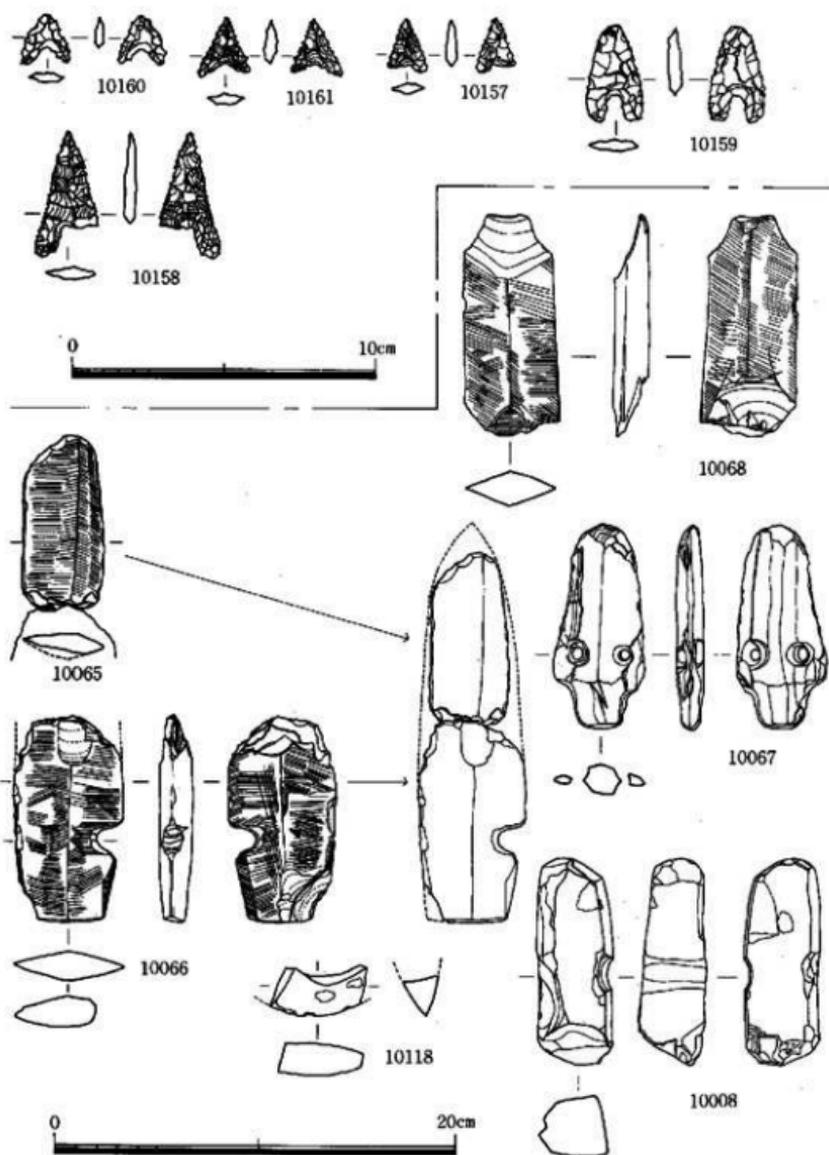
石器はSD-50、100を中心に数多く出土している。石鎌、石剣、石戈、太型蛤刃石斧、石庖丁、石錘、防錘車、砥石、磨石、叩き石等が主な出土遺物である。特に、太型蛤刃石斧、石錘、防錘車、砥石、磨石の出土点数は多く、形態的にも多種多様である。これは用途による相違と考えられる。各石器について詳細を述べる。

石剣(第38図 PL.36,37)

SE-01から出土した68と、Pit253、SD-100から出土し接合した65と66がある。68は先端部及び基部を欠損しているが、基部の部位に近い。図面下端の中央部分に稜が二条となる部位がある。これから上端に向かって一条の稜によって断面菱形の形状を呈する。両側辺中央部付近から鋭利な研ぎだしを行っている。中央部下端の両側面は僅かながら稜を持ち断面六角形を呈する。

研磨は丁寧で磨きの掛かった状況である。石材は頁岩である。

65と66は接合するもので65がSD-100からの出土、66がPit253(SD-100より約60m離れている)である。基部は平坦に研磨されている。基部中央から研ぎだしによる稜が形成されている。右側面に挿入部分があり、これを境として側面の形状が異なる。下端は稜を持ち、上端は三



第38图 SD-100、SE-01出土石器实测图(缩尺1/2, 1/3)

角形に研ぎ出されている。これが中子の役目をもつと考えられる。石材は結晶片岩である。

67は変成岩の石材で造られた石戈である。SD-100からの出土であるが、かなりのローリングを受けている。先端部を欠損している。

118は蛇紋岩製の磨製石斧でPit59より出土した。刃部のみであるが大形の石斧と考えられる。

83は柱状挟入片刃石斧で、SD-100より出土した。刃部を欠損している。一部敲打が残るが完成品として考えて良い。おそらく使用時に破損したものであろう。

石鏃(第38図 PL.36)

石鏃は5点で全てSD-100からの出土である。

157は二等辺三角形を呈する黒曜石製の石鏃で挟入は浅く脚部が不揃いである。全面に二次加工を施す。158は大形で二等辺三角形を呈する黒曜石製の石鏃で、片脚を欠損する。挟入が深く、細かな全面への二次加工により丁寧に仕上げられている。両側辺は細かな押圧剥離により、のこぎり状を呈する。159はサヌカイト製の石鏃で先端の一部を欠損する。脚は広がりを見せず、中央よりまっすぐに下がる形態で、挟入部は深く逆U字形を呈する。大剥離面及び主要剥離面の一部を残し二次加工の剥離も大まかである。160は二等辺三角形を呈する、サヌカイト製の石鏃で完形である。二次加工は大まかで、大剥離面及び主要剥離面の一部を残す。主要剥離面の挟入部への二次加工は施されていない。いわゆる剥片鏃の範中に入る。161は二等辺三角形の黒曜石製石鏃で完形である。主要剥離面の二次加工は大まかであるが、大剥離面の剥離は全体に、丁寧に押圧剥離によって仕上げられている。挟入はやや浅い。

石斧(第39,40図, PL.39,40,41)

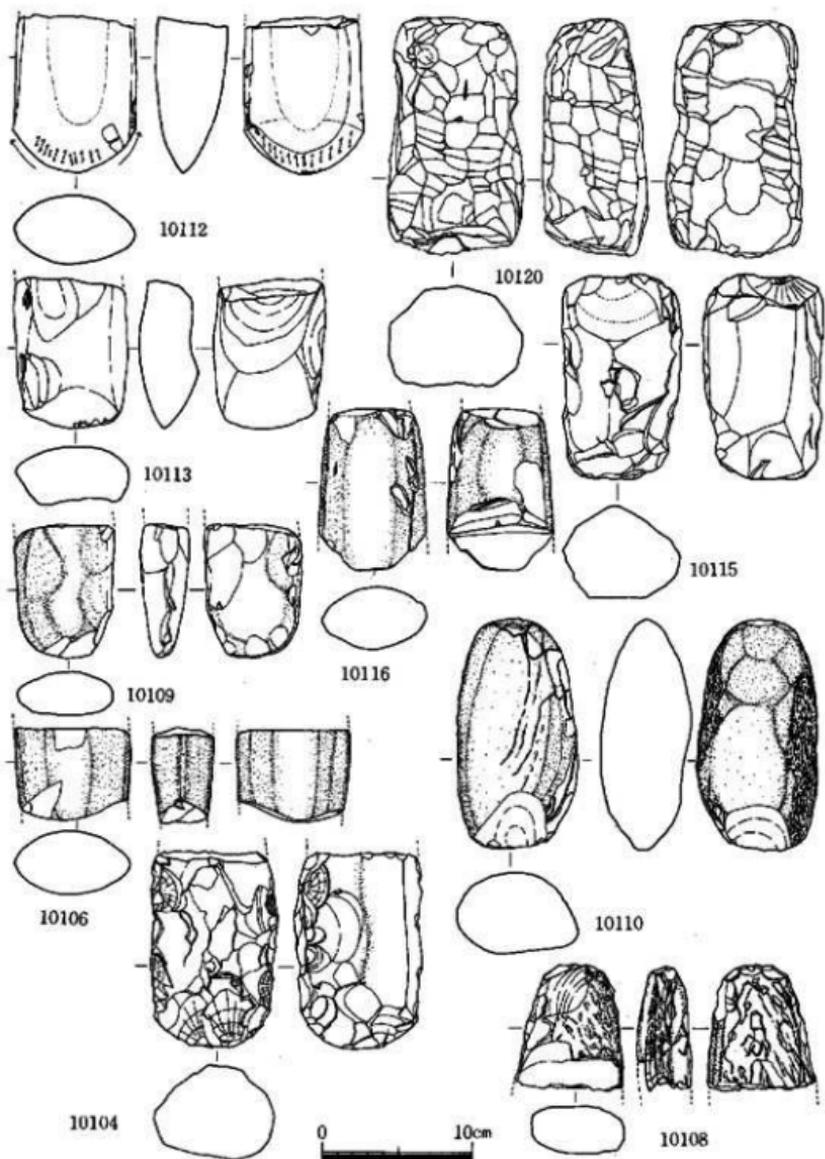
石斧は多数出土し、内16点を図示した。形態により区分を行った。

磨製石斧(101,102,104~110,112,113,116)

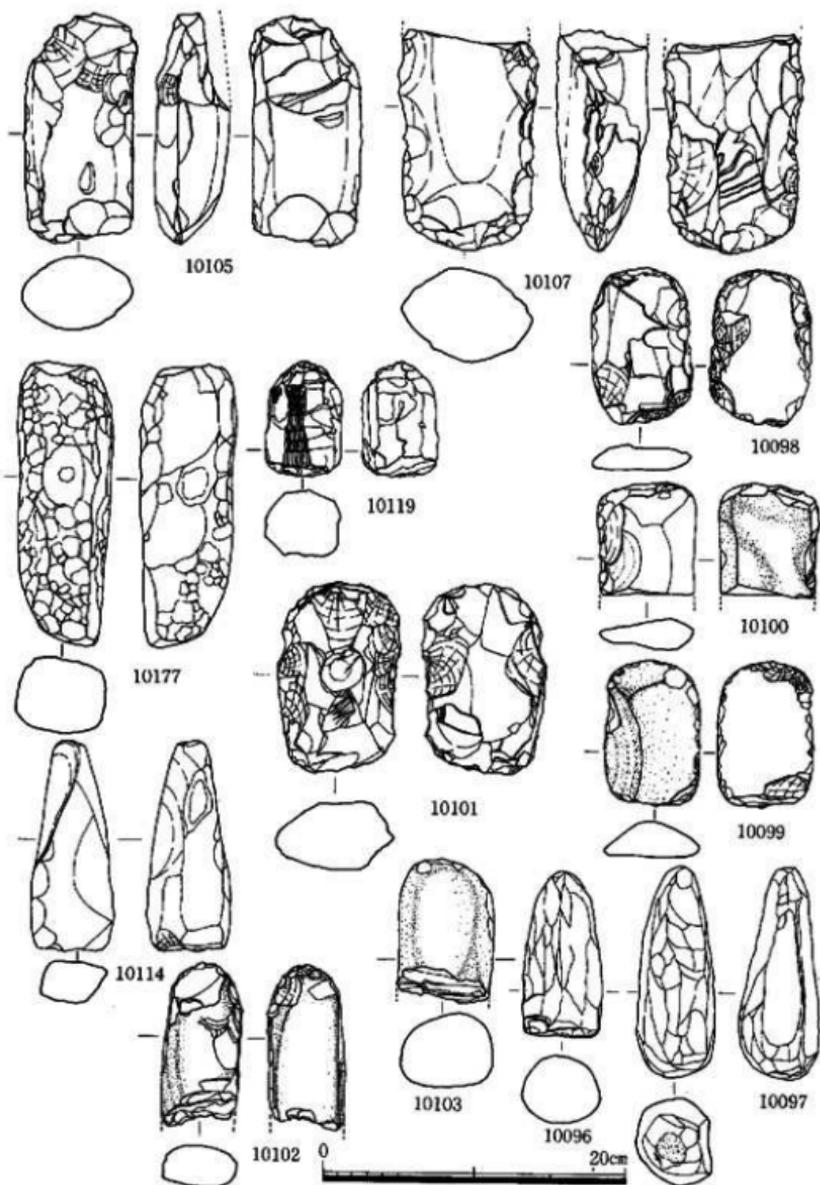
112は太型蛤刃石斧で、石材は堅くて緻密な玄武岩を使用している。全体に研磨を施す。特に刃部は丁寧な研磨が加えられ、刃部角度61°のシャープな刃部に仕上げられている。横断面は楕円形を呈し、石斧として完成はしているものの、使用時により基部を欠く欠損品である。SD-100からの出土である。

102,106,109,113,116は研磨段階まで進んだ石斧である。106は、基部及び先端を欠損、109,113は基部、116は先端を欠損する。102は粘板岩製の磨製石斧である。体面に研磨を施す。断面は楕円形を呈し基部の一部を欠損する。106はSD-200、他4点は、SD-100からの出土である。

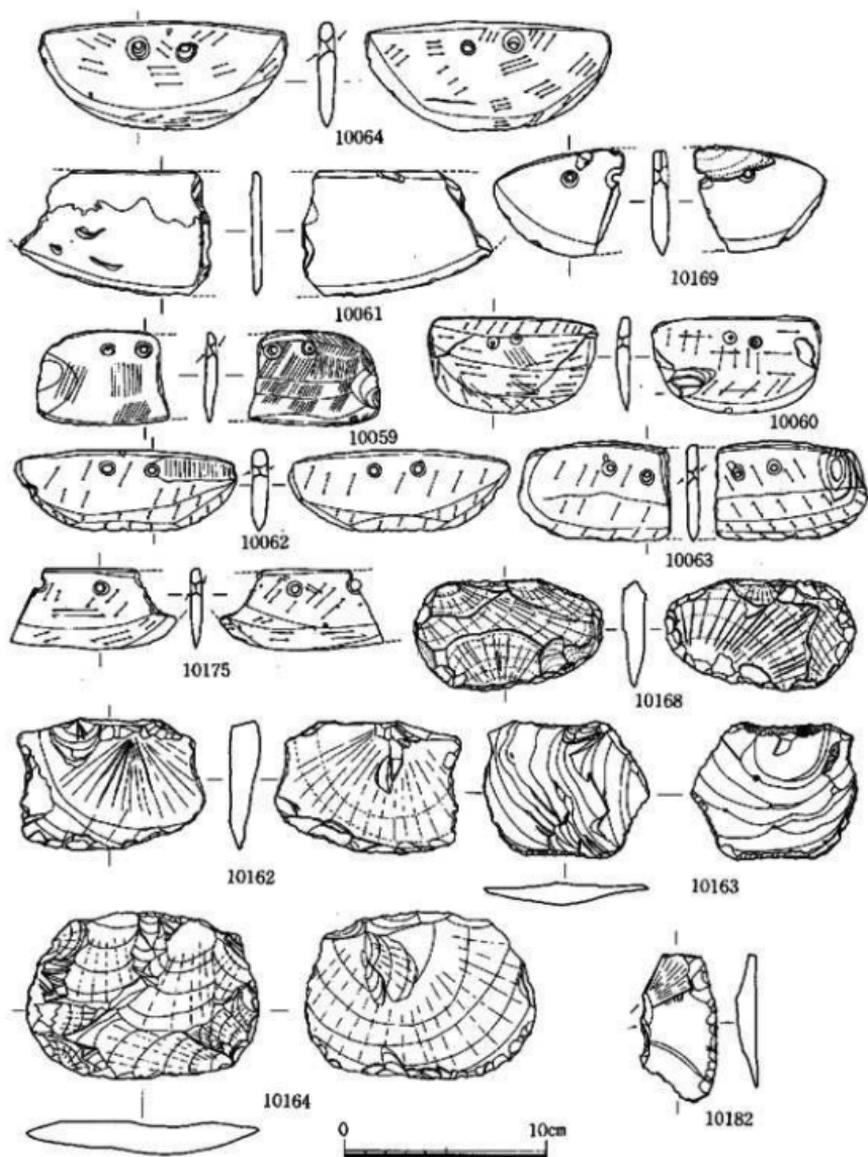
101,104,105,107,108,110,は敲打段階の石斧である。101,104,107は太型蛤刃石斧の未製品で、剥離面を多く残す。101,104は敲打面が一部しかなくこの工程に入った直後の物である。107は片面が打裂の状態で片面だけ敲打を加える。2点とも身が厚く石材は良質の玄武岩を使用



第39圖 SD-100出土石器夾測圖-1 (縮尺1/4)



第40图 SD-100出土石器实例图-2 (缩尺1/4)



第41图 SD-100出土石器实测图-3 (缩尺1/3)

している。105は太型蛤刃石斧の未製品で、敲打はかなり進んでいる。基部の一部を欠損するが、打裂時のものであろう。横断面は楕円形を呈する。108は小形の石斧未製品で、全体に敲打を与える。基部を欠損。先端の剥離は敲打時のものと思われる。横断面は楕円形を呈する。110は太型蛤刃石斧の未製品で、敲打段階は終了し、片側は研磨段階に入っている。形状は完形で、完成間際の石斧である。敲打段階の石斧は全て玄武岩製で、SD-100からの出土である。

115は打裂段階で身が厚い太型蛤刃石斧の未製品で、Pit-1217からの出土である。

柱状石斧(117)

117は柱状石斧の未製品で基部の一部を欠損する。全体に敲打時の凹みが観察できる。中央よりやや基部寄りと、先端の一部に新しい使用痕が認められる。横断面は、隅丸方形を呈する。

打製石斧(98~100, 114)

98~100、114は打裂時に出来る剥片を利用した扁平打製石斧である。98は横割きの剥片で、側面に二次加工を施す。断面は扁平を呈する。99、100は剥離面を多く残し、側面に二次加工を加える。断面は扁平を呈する。114は縦長の剥片を利用した石斧で、断面は方形を呈し、両端部は薄くなる。4点とも玄武岩製で、SD-100からの出土である。

石庖丁(第41図、PL.38)

未製品を含む9点の出土で、形態的にII類に分類できる。I類 形状が半月形を呈するもので、61、62、64、69、175がこれにあたる。II類 形状が方形を呈するもので、59、60、63がこれにあたる。I類 61は穿孔をもたない大形の石庖丁である。形状は半月形を呈し、約1/2を欠損する。表面の剥落が著しい為、研磨方向は不明。凝灰岩製でSD-100からの出土である。62、64、169、175は、2個の穿孔を有し、孔は両面から穿たれている。全面に丁寧な研磨を施す。62、175は他2点に比べ、幅が狭く横に細長い形状を呈する。62の両肩はやや下がり気味である。64はSD-50、他はSD-100からの出土である。61は凝灰岩製、64は輝緑凝灰岩製、62、169、175は安山岩製である。II類 59、60、63は2個の穿孔を有する方形の石庖丁である。孔は両面から穿たれ、全面に研磨を施す。59の左側孔は右側の孔よりも小さい。60は刃部角度32°の片刃の石庖丁である。右側孔は左側孔の斜め上方に位置し、バランスがとれていない。59、60は安山岩製、63は凝灰岩製で、共にSD-100からの出土である。168は剥離工程の段階である未製品。輝緑凝灰岩製で、SD-100からの出土である。

スクレーパー(第41図、PL.38)

162は、平坦打面からの横長剥片を利用したもので、両面とも一回の剥離により剥取している。断面三角形を呈し、両側辺部と下部に両面から二次加工を施し、刃部となす。

163は、自然面を打面とするが、表面は2つの方向からの剥取が認められ、計3方向の剥離方向を持つ。端部に細かなリタッチが認められるが、使用時に刃こぼれしたものであろう。

164は、幅広い横長剥片を利用したものである。打面は大まかな調整面を持つ打面である。表面の剥離方向は上からの1方向だけである。周辺部に両面から二次加工を施し、スクレーパーとしている。

182はスクレーパーとするより使用痕のある剥片と考えられるもので、調整打面からの剥離で厚みの薄い剥片を剥取している。刃部には細かな剥離痕が認められる。使用時による刃こぼれと考えられる。

162, 164は玄武岩、163, 182はサヌカイト製で182はPit-263、他はSD-100からの出土である。石錘(第42~46図 PL.36, 37, 39)

未製品、欠損品、又紙面の都合上図示出来なかった物を含む46点が出土した。その形態から、5形式に分類をおこなった。

I類 大型でドーナツ状を呈し、中央に円孔を有するもの。

II類 中型で上部が尖がり気味にせばまり、下部が幅広になる分銅型。

III類 最大径が中央にあり、上部、下部共せばまり、端部は丸味をもつ上下左右対称型。

IV類 円形で側面に抉入をもつ断面扁平形。

V類 特殊な形態を呈するもの。

I類 断面の形態の相違により、さらに細分を行なった。

1a 大型で丸味をもった円筒状を呈し、幅と高の対比が約1対1である。45, 48, 57がこれにあたる。45, 57は中央の円孔の他に、側面下部から底部に貫く副孔を有する。45は全面に加工痕を残す。今回出土した石錘の中で一番大きく、2.320gを計る。48は1/2を欠損する。

1b 基部上りふくらみもちやみ立ち上がり頭部で丸く修め、高より幅が大きい。47, 56がこれにあたる。47は約1/2を欠損する。一部に火を受けた痕跡を残す。56は中央の円孔の他に、側面下部から底部に貫く副孔を有する。

1c 断面が扁平を呈するタイプ、46, 51~54がこれにあたる。51は中央の円孔の他に、上面左端より底部左端に貫く方形の副孔を有する。側面及び上面の一部に加工痕を残す。52は面取り段階の未製品である。53は約2/3を欠損する大型の石錘である。中央及び上方に孔を穿ち、側面は丁寧な研磨を施す。体面に加工痕を残す。54は基部径と上面径がほぼ同一な長さの石錘で、全面に研磨が施されている。穿孔部分には、ノミ状工具による加工痕を残す。46は1/3を欠損する大型の石錘で、不純物の多い滑石を使用する。

1d 断面は最大径が基部にあり、ふくらまず頭部で丸く修めるタイプで、55がこれにあたる。55は全面に加工痕を残す大型の石錘である。中央の穿孔部分にもノミ状工具による加工痕を残す。I類の石錘は全て滑石製で、SD-100からの出土である。

II類 基部の形状の相違でさらに細分を行なった。

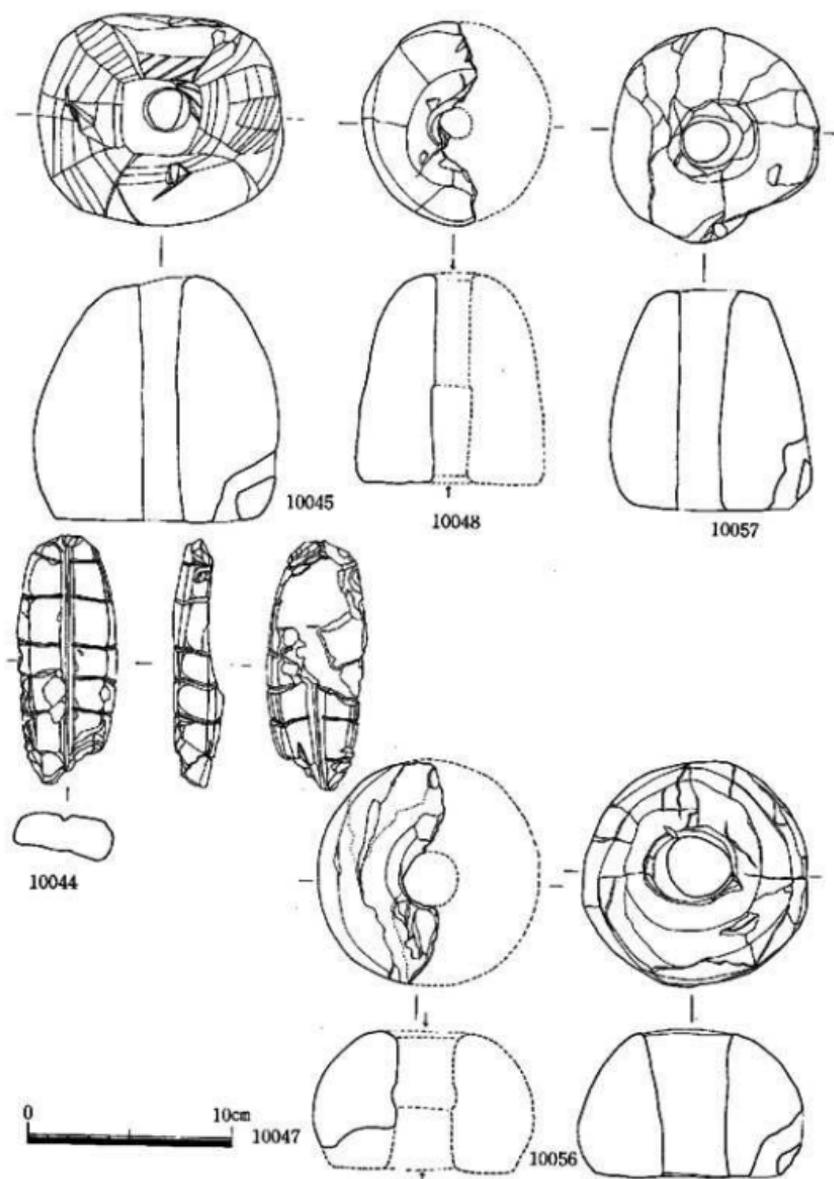
IIa 基部が緩やかに丸みをもつタイプ、19、20、25、27、33、35がこれにあたる。19、20、25は基部より1/3上方の位置に一個の孔を穿ち、先端と孔を一条の溝で結ぶ一孔上溝タイプである。19は先端が丸みをおびず、水平に切られている。形態はほぼ円錐状で横断面は正円に近い。20は先端が尖がらず丸みもち、横断面は基部に向かう程楕円形に近くなる。25の横断面は基部付近で円形に近くなる。共に滑石製でSD-100からの出土である。27は一個の孔を穿ち一条の溝を巡らす一孔一溝タイプに短軸溝を上、下部に付加したタイプで、孔は基部より1/3上方に位置する。長軸溝は全周せず、両端部は平坦で、横断面はほぼ正円を呈する。33は2個の孔を穿ち一条の溝が巡る二孔一溝タイプで、孔は中央より下部に2個並ぶ。横断面は楕円形を呈す。35は2ヶの孔を穿ち、上方の孔と先端を結ぶ二孔上溝タイプで、上方の孔は中央よりやや上部に、下方の孔は基部に近い部分に穿たれている。全面に加工痕を残し、溝は加工途中か痕跡を残す。横断面は正円に近い。

IIb 基部が球形を呈するタイプ、24、176がこれにあたる。24は一孔上溝タイプで、孔は中央よりやや上部にあり、溝は先端部と孔を結ぶ。孔の下部及び両側面に溝の製作途中と思われる刻み痕が観察出来る事から、長軸に二条の溝が巡る可能性がある。基部は球形を成し、横断面は楕円形を呈する。176は二孔無溝タイプで、中央よりやや下方に孔を穿ち、先端と中央よりやや上方に貫く孔を穿つ。体面に加工痕を残す。基部は球形を成し横断面は円形である。24、176は共に滑石製で、SD-100からの出土である。

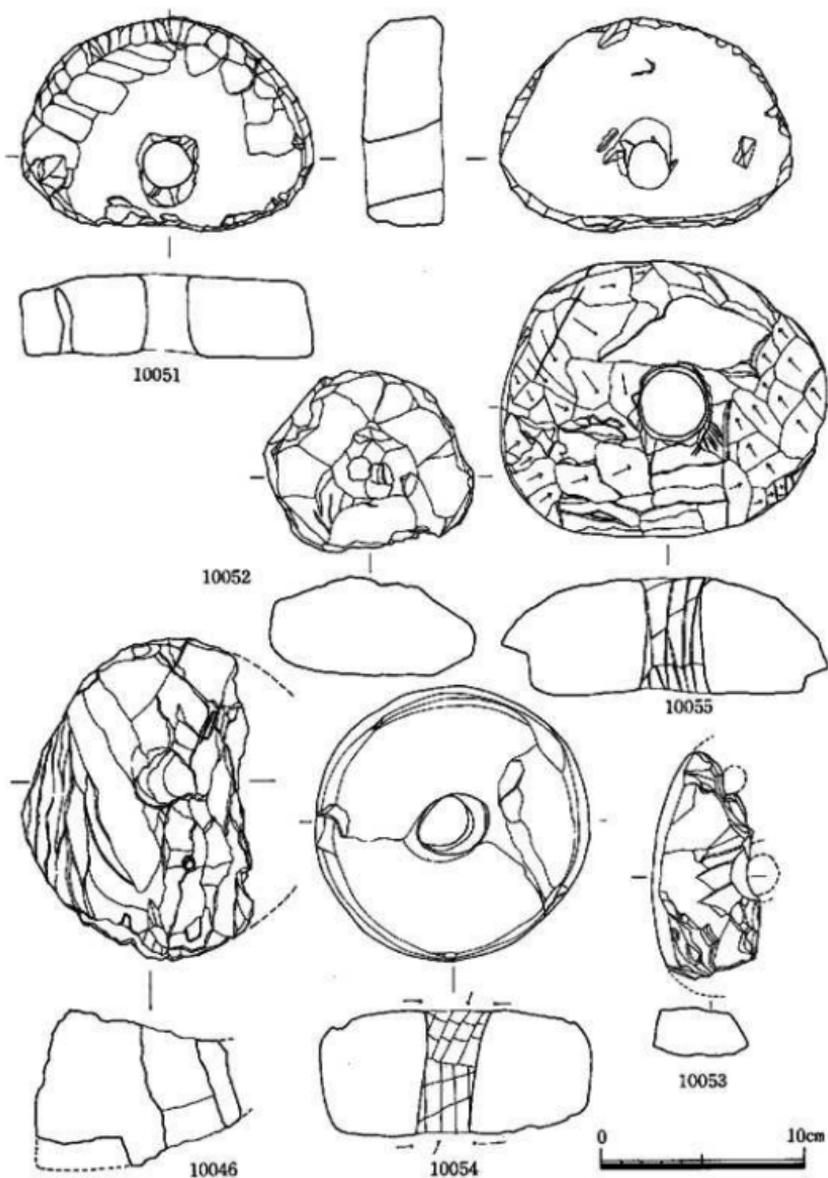
IIc 基部が平坦なタイプ、21-23、26、32、34、39がこれにあたる。21、22、34、39は一孔上溝タイプで、孔は中央より下方に位置する。39の先端は丸みをもつが、他3点は平坦である。横断面は、21、22が楕円形、34、39が正円に近い。34は全面に加工痕を残す。21、22、39が滑石製、34が粘板岩で、共にSD-100からの出土である。23、26は二孔上溝タイプである。23の孔は中央部と、それより1.5cm下方に穿たれ、上端部は平坦、横断面は楕円形を呈する。全体に丁寧な研磨が施されている。26の孔は、上方が先端より1/4、下方が基部より1/4の位置にあり、下方が上方の約2倍の大きさをもつ。側面は丁寧な研磨が施され、緩やかに内湾している。横断面は隅丸方形を呈す。32は1/2の欠損により、孔と先端を結ぶ溝は、確認出来るものの、孔より下部の溝は不明である。孔は基部より約1/4上方に位置し、孔を結ぶ短軸溝が巡る。先端は平坦である。

III類

IIIa 胴の張りが大きい紡錘形で29、30、31、36、37、38、40、43、58がこれにあたる。30、38、40は長軸に一条の溝が全周する無孔一溝タイプである。30は粘板岩製で、横断面は円形を呈する。38は滑石製で、横断面は正円に近い。40は中形で滑石製。横断面は隅丸三角形を呈する。共にSD-100からの出土である。37、43は中央に孔を穿ち、長軸に一条の溝が全周する一孔一溝タイプで、



第42圖 SD-100出土石器実測圖-4 (縮尺1/3)



第43圖 SD-100出土石器突測圖-5 (縮尺1/3)

横断面は正円に近い。共に滑石製。37がSD-100、43がPit-252からの出土である。29は長軸に一条、短軸に一条の溝を巡らす十字溝タイプで、短軸の溝は浅く、長軸と交差しない事から、製作の途中と思われる。滑石製で、横断面は楕円形を呈する。31は無孔一溝タイプに、短軸の上下に二条の溝を付加するタイプで、横断面は正円を呈する。滑石製でSD-100からの出土である。36、58は未製品である。共に滑石製で36がSD-100、58がPit-253からの出土である。

IIIb 細形の紡錘形で、28、41、42、183がこれにあたる。28は長軸と短軸に一条づつの溝を巡らす十字溝タイプで、横断面は正円を呈する。上下端部は平坦であり、丁寧に研磨されている。滑石製で、SD-100からの出土である。41は1/4の残存で、長軸に一条の溝が確認出来る。Pit-26の出土である。42は無孔一溝タイプで、製作途中である。滑石製でPit-93からの出土である。183は無孔一溝タイプで、全体に多量の酸化鉄が付着する。基部は平坦を成し、横断面は正円である。滑石製でPit-226からの出土である。

IV類 15、16がこれにあたり、円形で片側に挟入をもち、断面は扁平を呈する。共に滑石製でSD-100からの出土である。2点とも未製品である。

V類 44がこれにあたり一部を欠損する。長軸に幅広の溝を一条巡らし、短軸にはほぼ等間隔で、六条の浅い溝を巡らす。横断面は隅丸方形を呈す。滑石製でSD-01からの出土である。119、120は全体に面取り加工を行った未製品で、石材は滑石を使用する。120は火を受けた痕跡を残す。

紡錘車(第47図 PL.39)

17点出土の内、16点を図示した。完形品が9点で他は未製品である。

- 1 大型の紡錘車で、形態は正円に近く直径が7.1cmを計る。孔はほぼ中心にあり、孔の径は0.9cmを計る。穿孔は両面からなる。縁のやや内側に、コンパス状の工具で描いたと思われる圏線をもつ。研磨は全面に及び、その方向は不明。全面に酸化鉄付着。
- 2 直径は5cmを計り正円に近い形態をもつ紡錘車で、全面に研磨を施す。穿孔は一方向からで、孔の径は0.6cmを計る。
- 3 直径は4.3cmを計り、孔は中心に穿たれる。穿孔は一方向からで、孔の径は0.5cmを計る。全面に研磨を施す。方向は不明である。
- 4 直径は4.4cmを計り、孔は中心に穿たれる。穿孔は一方向からで、径は0.7cmを計る。全面に三方向からの研磨を施す。
- 5 直径は4.3cmを計り、孔は中心よりやや下にずれる。孔は一方向から穿たれ、その径は0.5cmを計る。研磨は全面に及び方向は不明。
- 6 直径は4.35cmを計る。穿孔は中心よりやや上方にずれ、中心部は、僅かなふくらみをもつ。穿孔は一方向からなる。研磨は全面に及び方向は三方向からなる。
- 7 直径4.45cmを計る。穿孔は中心よりやや上方にずれ、一方向から穿たれる。穿孔径は、0.

7cmを計り研磨は全面に及ぶ。片面の剥離が著しい。

8 一部を欠損する。直径は4.95cmを計り、穿孔は中心に有する。穿孔径は0.6cmを計り、穿孔方向は一方向。研磨は全面に及ぶ。

9 直径は4.55cmを計り、穿孔は中心に位置する。穿孔径は0.7cmを計り、一方向から穿たれる。全面に丁寧な研磨を施す。方向は二方向。完成品は全て滑石製で、SD-100からの出土である。形態は全て円形を呈する。

10、11、14は未製品で、研磨段階まで終えた、ほぼ完成に近い形である。

10 中心に孔を穿つ途中と思われる凹みを有する。

11 表面の剥落は、研磨後のものと思われる。

14 約1/3を欠損する。3点共滑石製で、SD-100の出土である。

12、17、18は両面に研磨を施す。側面は稜をもたず、研磨も行なわれない。3点共滑石製で、SD-100からの出土である。

13 玄武岩製の紡錘車未製品で、SD-100からの出土である。

石皿(第48図 PL.41)

石皿は6点出土した。

148は玄武岩製で楕円形を呈し、側面は研磨を施す。上面は凹みをもたず平坦を成す。

146は玄武岩製で三角形を呈する石皿である。断面は長方形を呈し、表面は平坦である。

147は玄武岩製の石皿で、中央部は凹みをもつ。SD-100から出土である。

144は玄武岩製で中央部は僅な凹みをもつ。

82は花崗岩製の石皿で、SX-03からの出土である。両面の大きな凹みから、使用頻度が高かった事が伺える。

145はSD-100からの出土で、凝灰岩製の石皿である。中央部は緩やかに凹んでいる。

磨石(第51、52図 PL.41)

多数出土した内、27点を図示した。

152~156、170は重さ10K以上で、片面に使用痕が観察出来る事から台石として使用されたものと思われる。

125、126、141は約1.5~5.2Kの重さで、断面は楕円形を呈する。

124、131、132、137、139、142は楕円形の磨石で、中央及び両端部に使用痕が認められる。

130、133、136は棒状を呈し、136の両端は潰れた状態にあり、叩き石の代用としても、使用頻度の高かった事が伺える。130の片面は凹凸を成す。

123、127、128、129、134は使用頻度の低い磨石で、凹凸面を有する。123は断面が薄く、形状は扁平な円形である。127は全体に凹凸面をもつものの、先端は滑らかでこの部分だけは頻繁に使用

されていたものと思われる。128は全面に敲打痕を残し、磨石として使用した痕跡は確認出来ない。一部に酸化鉄付着。129は先端の一部を欠損する磨石で、中央が凹む事から、石皿的役目も果たしていたものと考えられる。138、139は円形に近い形の磨石で、全体が滑らかである。135は両端に使用頻度の高い浅い痕を残し、側面に僅かな凹みをもつ。石錘に転用しようとした意図が伺える。151は玄武岩製の磨石で全体に緩やかな稜をもつ。断面は厚くその形態から、石斧製作中の失敗品の転用とも考えられる。

140は滑石の円環で全体に凹凸をもつ。石錘の未製品の可能性がある。

叩き石(打器)(第40図 PL.40)

96、97は全面に敲打面を残す完形の叩き石である。97の基部は球形を呈し、両端に打撃痕が観察出来る。103は基部を欠損する叩き石で全面に敲打時の凹みをもつ。先端部は使用痕が観察できる。3点共玄武岩製で、SD-100からの出土である。

石核(第52図 PL.41)

149は裏面に節理面で剥落した状態である。これは、側面調整のための剥離が、節理面に付合したために生じたものである。打面は平凸打面で周辺部を上からと側面からの加撃によって剥取している。玄武岩製でSE-01から出土した。

150は敲打段階まで進んだ製品を半割し、その後で、上からと側面から剥片を剥取している。SE-01で石材は玄武岩である。

砥石(第49、53図 PL.40、41)

砥石は27点を出した。様々な形態や石材の相違、又大きさによって幾つかに区分出来るが、ここでは、荒砥ぎ用と仕上げ砥ぎ用の2種類に区分を行った。荒砥ぎ用としての石材は、砂岩、玄武岩等が多い。仕上げ用としての石材は凝灰岩が主流をしめる。

荒砥ぎ用 69~71、74~80、84、88~92、94、174、178、179があげられる。

69は四辺形を呈し全面を使用。上面は鋭利な物を砥いだ痕跡を残す。70、71、74、77は4面を使用している。凹みが大きく、使用頻度の高かった事が伺える。75、76、78、79は大型で、断面は方形を呈する。75、76、78は両面を砥石面とする。79は片面砥石面で中央部に段をもつ。鑄型の再利用である。80は断面が隅丸方形で両面を砥石面とする。84は断面は薄く片面を砥石面とする。表面に火を受けた痕跡を残す。88、89は小型の砥石で、88は両面を砥石面とし、片面に稜をもつ。89は菱形の四辺形で、全面を砥石面とする。90は両面が砥石面で、大きな凹みから使用頻度の高い事が伺える。91は楕円形の形状で、片面を使用、92、94は玄武岩製で一面を使用。174は断面が方形を呈し、3面を砥石面とする。178、179は玄武岩製の砥石で、178は1面を、179は全面を砥石として使用する。

仕上げ砥ぎ用として72、73、81、85~87、93の7点があげられる。

72は凝灰岩製の砥石で半割されている。砥石面は3面で、滑らかで木目が細かく光沢をおびる事から使用頻度の高い事が伺える。側面の先端に、赤色顔料が付着している。

73は全面を砥石面とする凝灰岩製の砥石で、両端部を欠損する。側面及び欠損部に酸化鉄が付着する。

81は仕上げ砥ぎ用としては大型で、断面は鋭角をもつ方形で、細長い形状を呈する。凝灰岩製の砥石で、4面を砥石面とし、滑らかである。使用頻度はかなり高い。

85は小型で細長い形状を呈する粘板岩製の砥石で2面を砥石面とする。片面は横方向への使用痕が認められる。

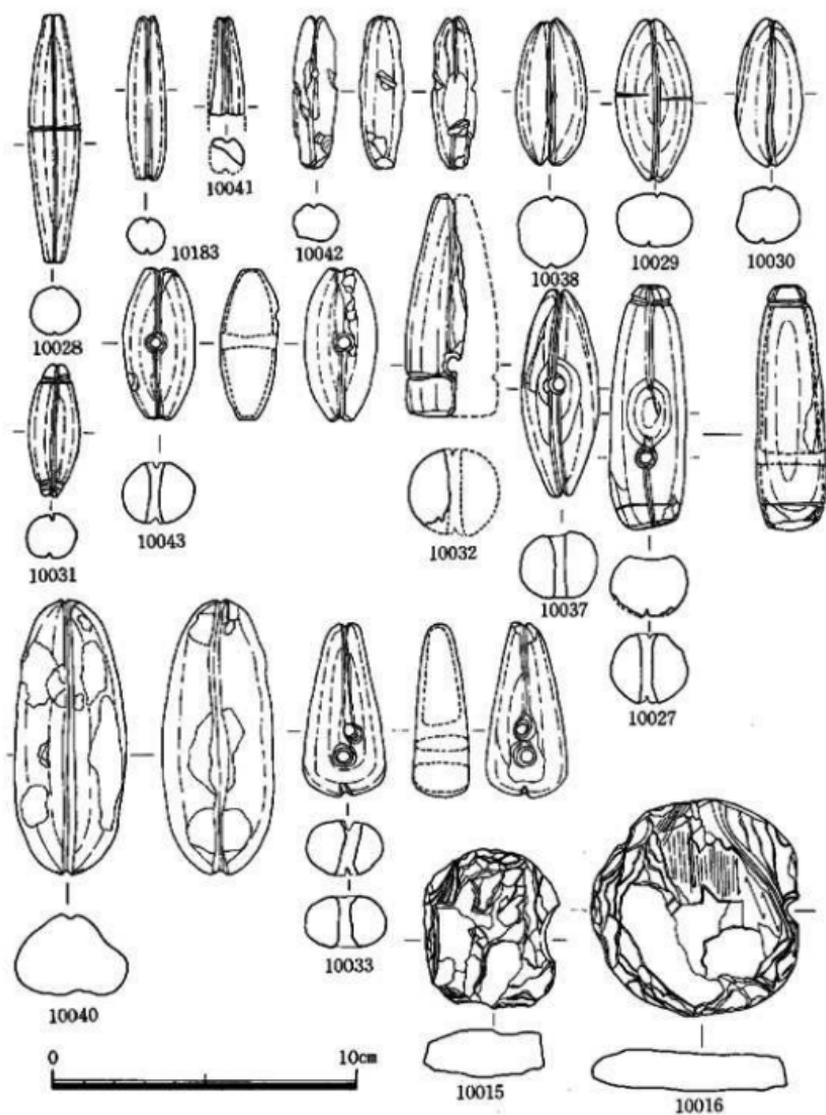
86は断面が、方形を呈する小型の凝灰岩製砥石である。4面を使用。

87は2面を砥石面とする。小型の粘板岩製砥石で、上面の左角に親指大の凹みをもつ。又下面右角にも僅かな凹みが観察出来る。凹み付近は、あばた状に凹凸を成す事から、意図的に敲打具により加工を加えたものと思われる。

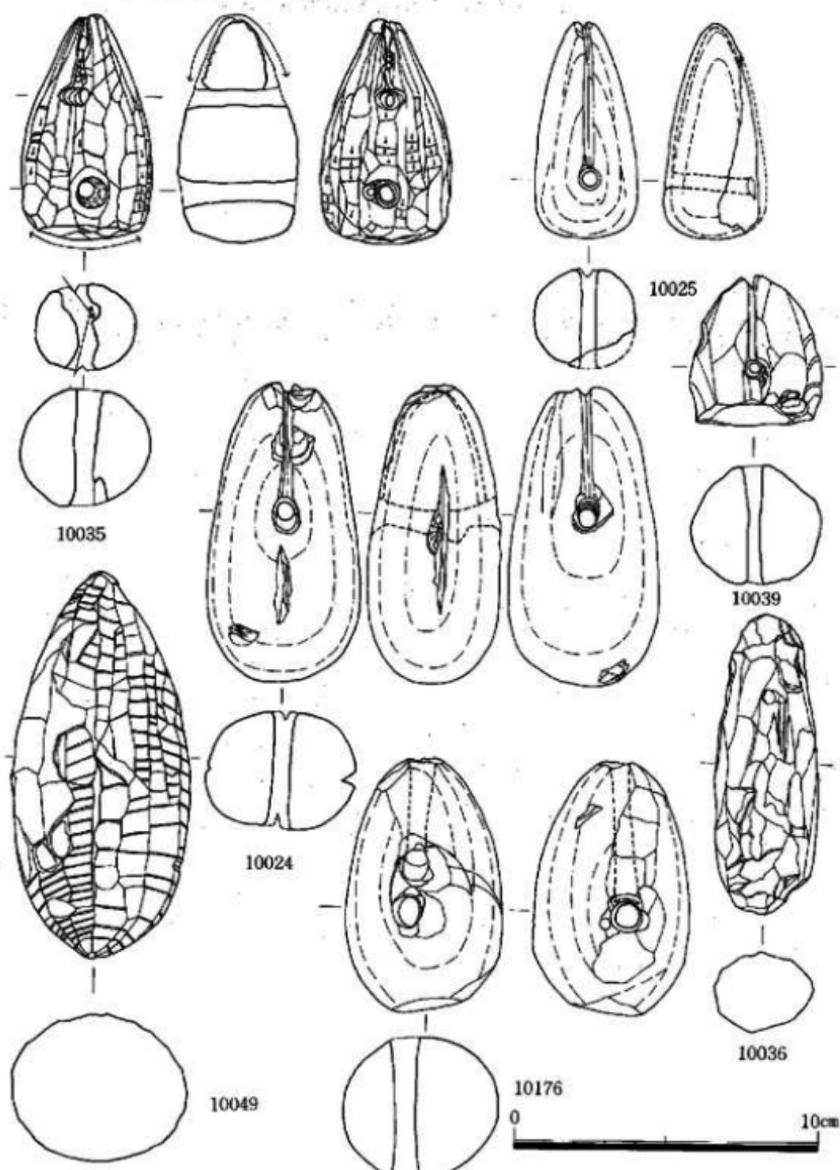
93は凝灰岩製の砥石で、72と同様に半割されている。断面は台形を呈し、砥石面は5面に及んでいたと思われるが、上面は剥取されている。側面に酸化鉄が付着する。86はPit396、他はSD-100からの出土である。

参考文献

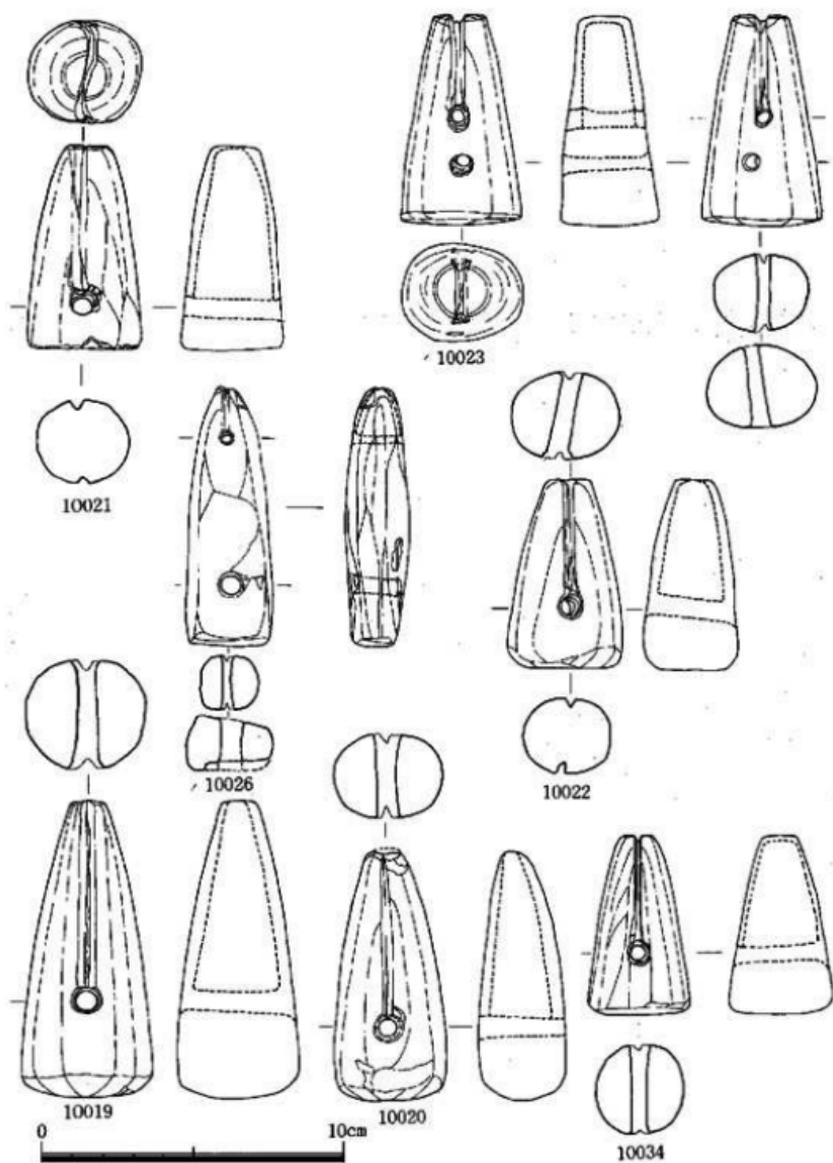
- 福岡市教育委員会 『今山遺跡(1)』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集 1968
福岡市歴史資料館 『福岡平野の歴史—緊急発掘された遺跡と遺物』 1977
福岡市教育委員会 『今山・今宿遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 1981
福岡市教育委員会 『青木遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第169集 1986
福岡市教育委員会 『今宿五郎江遺跡I』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集 1986
下條信行 『弥生・古墳時代の九州型石錘について』 九州文化史研究所記要第29集 1984



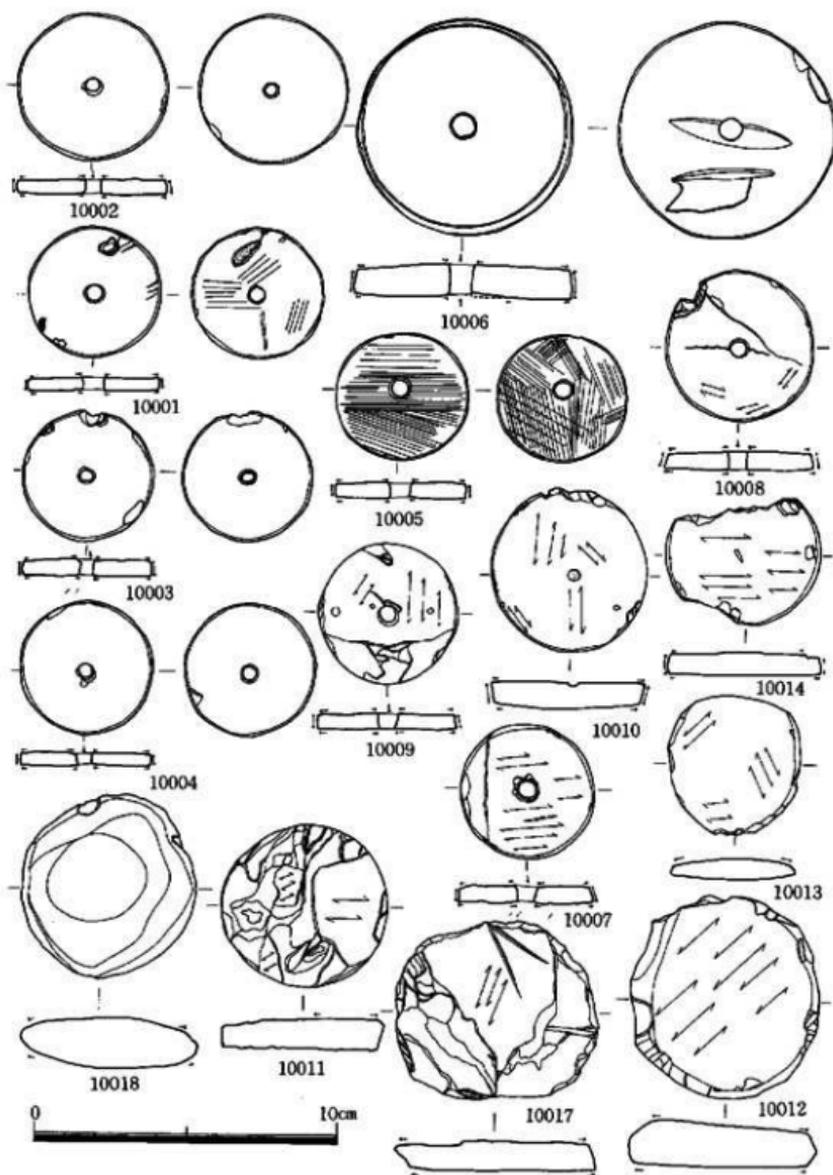
第44图 SD-100出土石器实例图-6 (缩尺1/2)



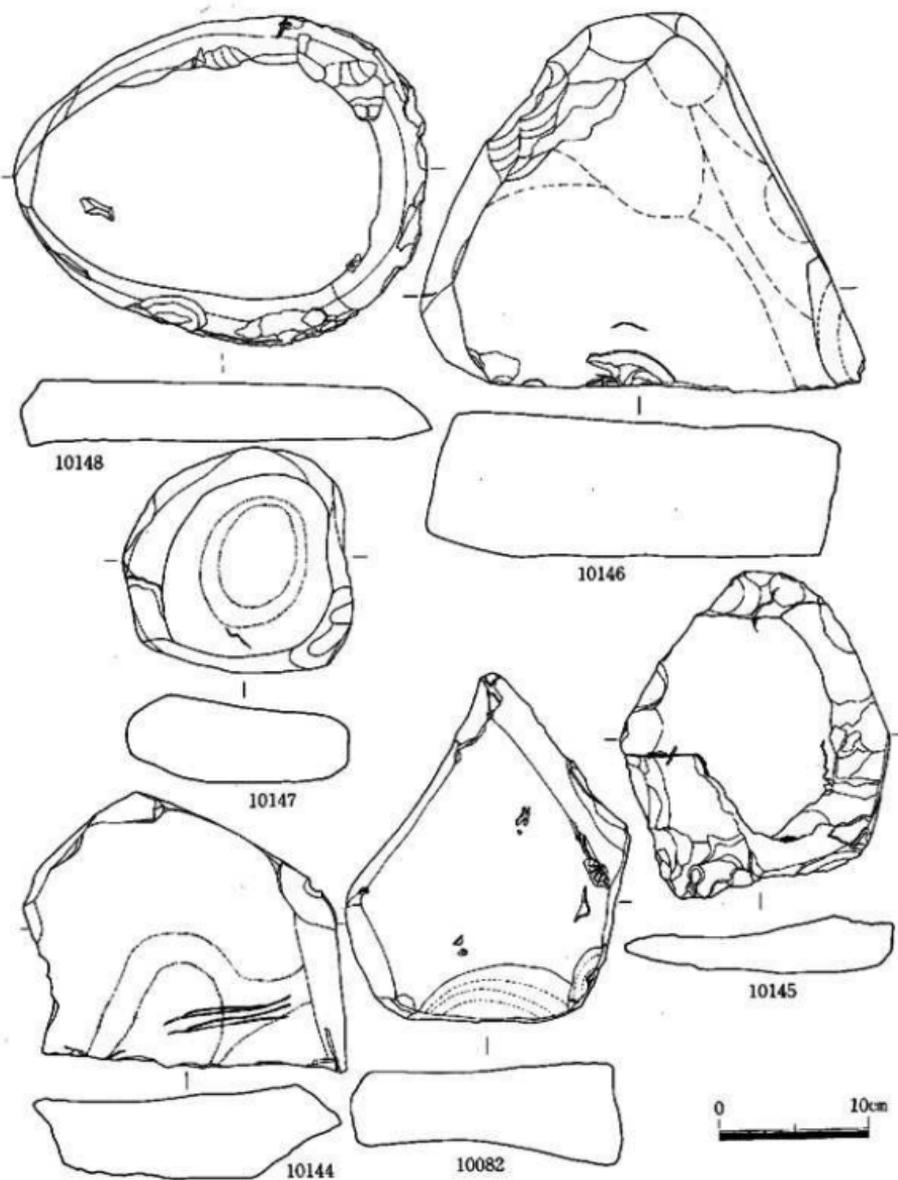
第45图 SD-100出土石器实测图-7 (缩小1/2)



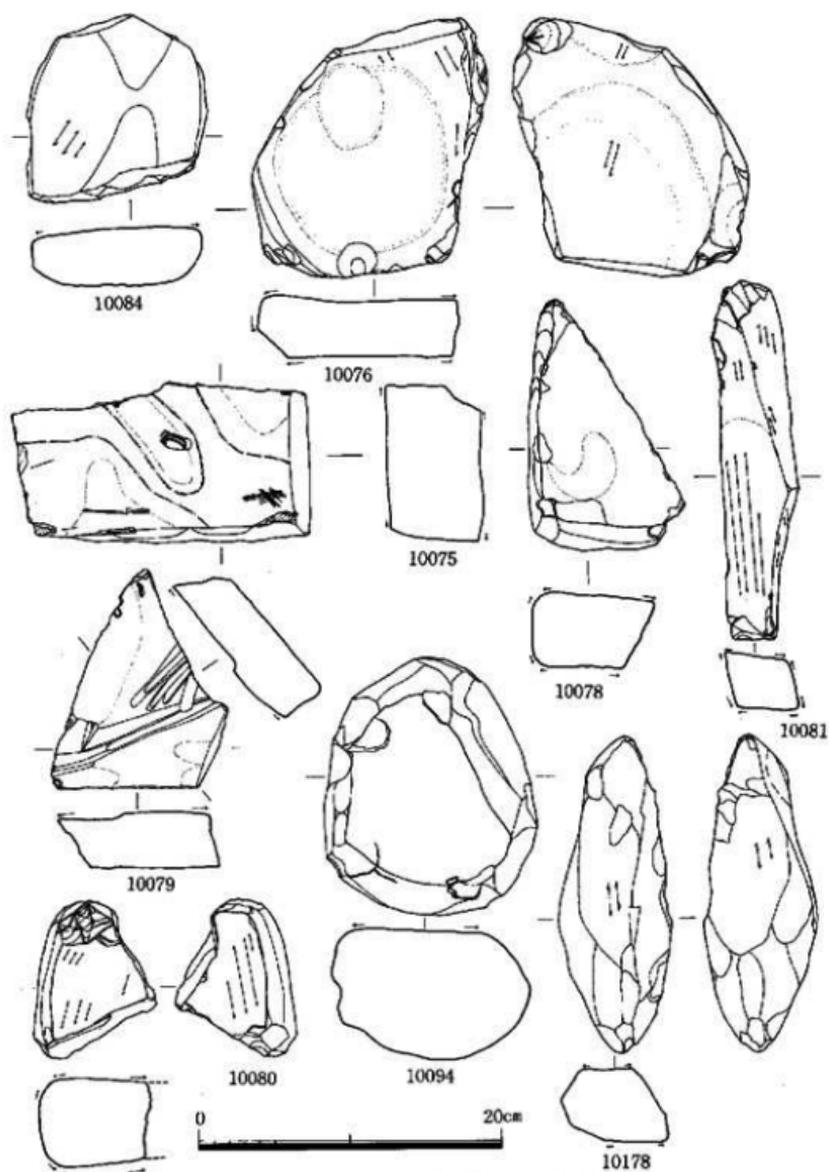
第46图 SD-100出土石器实例图-8 (缩尺1/2)



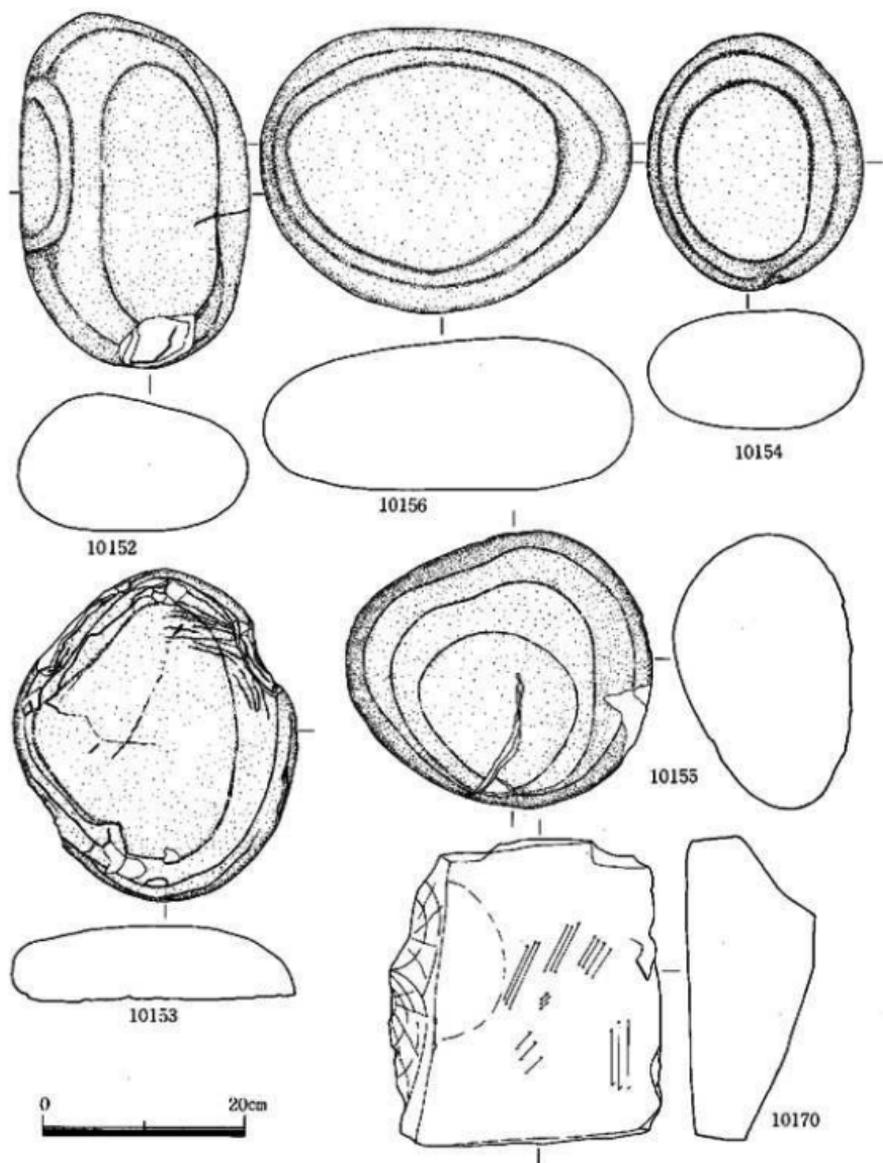
第47图 SD-100出土石器实测图-9 (缩尺1/2)



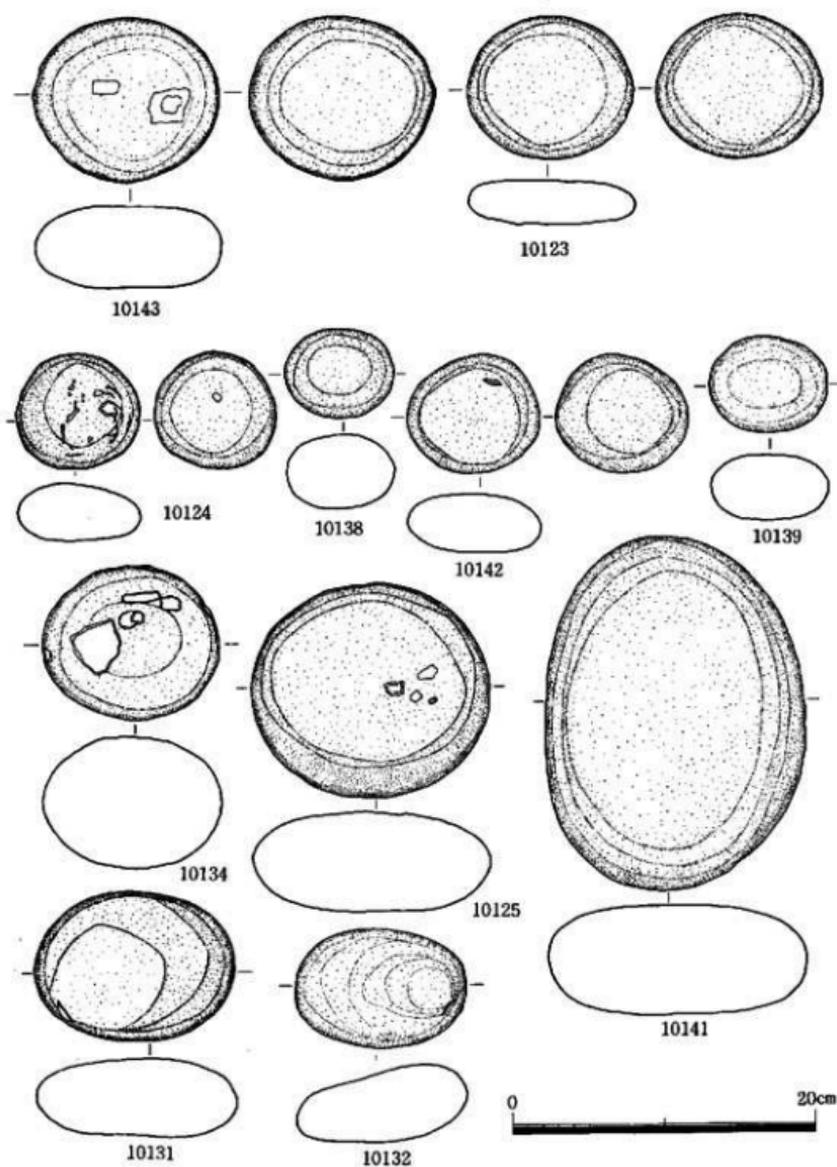
第48图 SD-100出土石器实测图-10 (缩尺1/4)



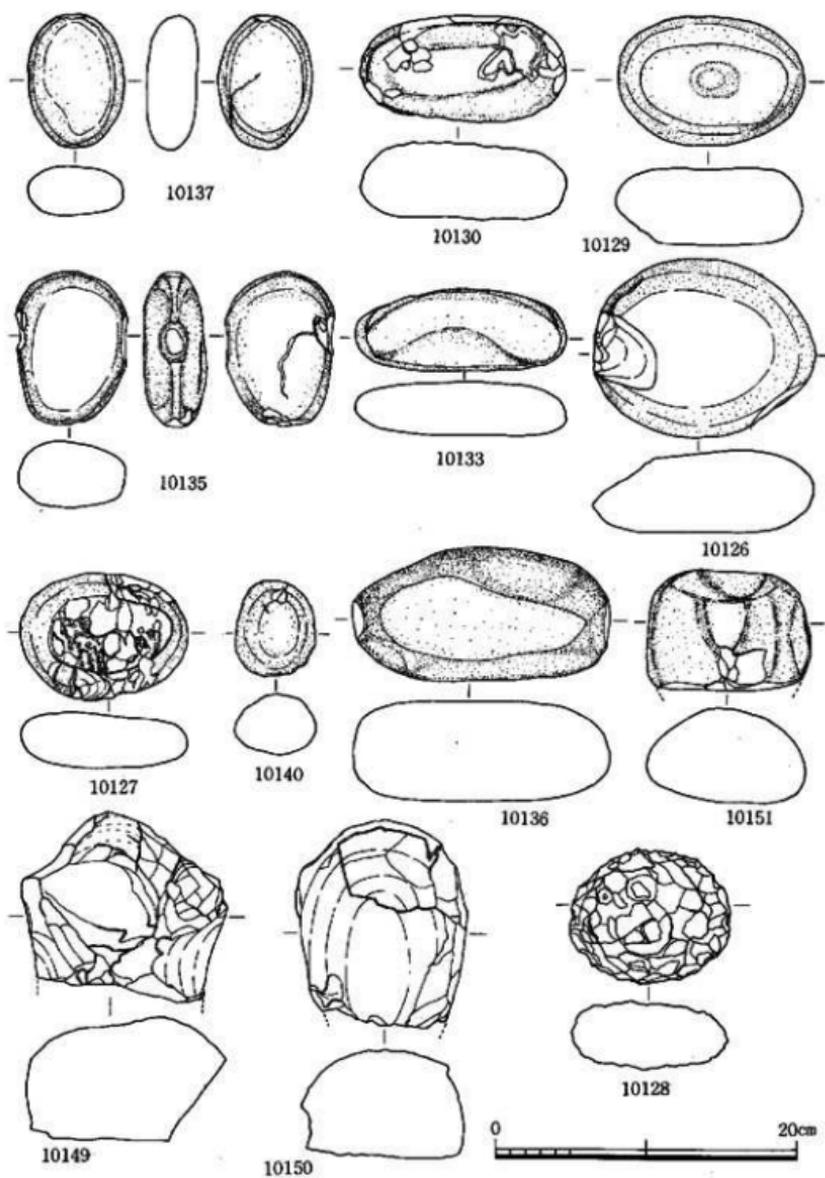
第49图 SD-100出土石器实测图-11 (缩尺1/4)



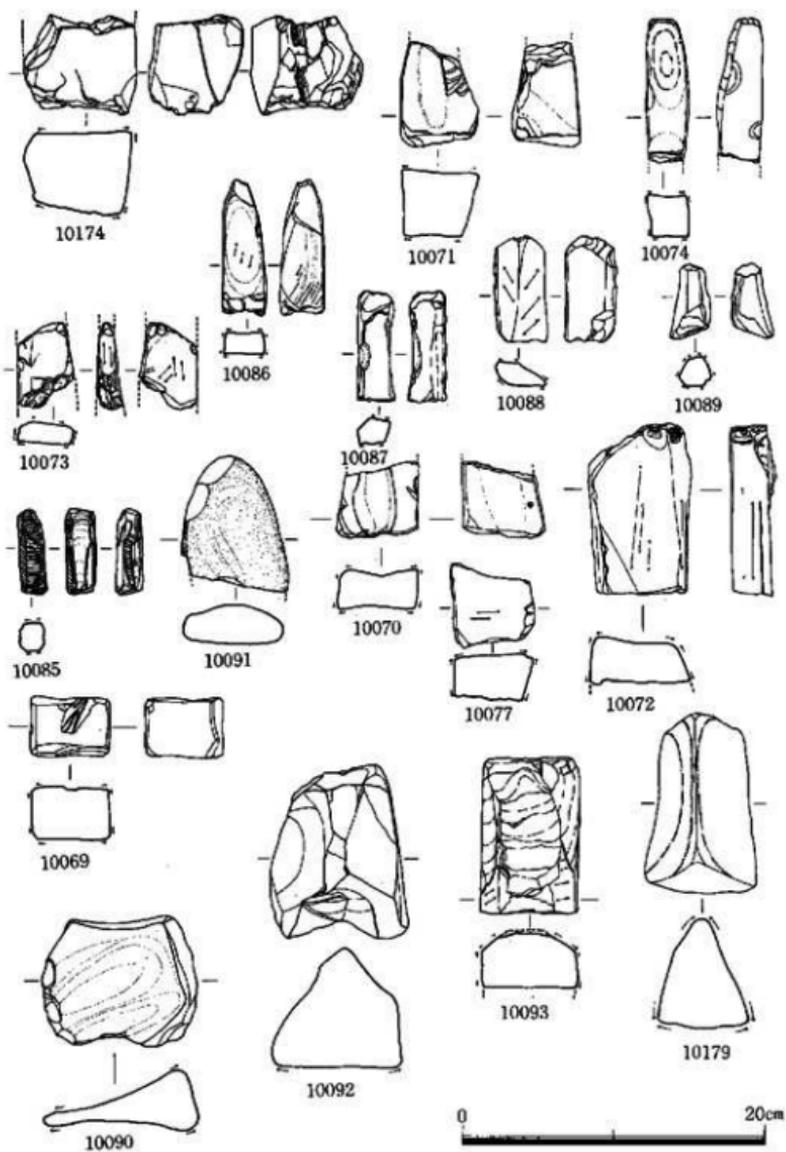
第50图 SD-100出土石器实例图-12 (缩尺1/6)



第51图 SD-20·SD-100出土石器实测图(缩尺1/4)



第52圖 SE-01, SD-100出土石器實測圖 (縮尺1/4)



第53图 SD-100·115出土石器夹线图(缩尺1/4)

遺跡番号	遺物	寸法(mm)			形式	長さ(m)	質量	材質	出土層	F層	T層	備考				
		長	幅	厚												
1007001	燧石	7.2		1.1		18	片石	0.7m	SD-100	47	50	燧石を何枚もその再加工で作り出されたもので、燧石の再加工は、燧石の再加工で作り出されたものである。				
10002	燧石	5.0		0.5		25	穿孔燧石 5m			47	50	燧石は、土質の燧石である。				
10003	燧石	4.5		0.6		20	燧石	0.5m		47	50	燧石は、土質の燧石である。				
10004	燧石	4.4		0.6		180	燧石	0.5m		47	50	燧石は、土質の燧石である。				
10005	燧石	4.3		0.65		15.5	燧石	0.7m		47	50	燧石は、土質の燧石である。				
10006	燧石	4.30		0.50		15.5	燧石	0.5m		SD-100	47	50	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。			
10007	燧石	4.45		0.4		24	燧石	0.5m		SD-100	5-7	47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10008	燧石	4.50		0.6		20.5	燧石			SD 100	5-8	47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10009	燧石	4.50		0.5		23.5	燧石			SD-100	5-8	47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10010	燧石	5.05		0.85		40	燧石			SD-100		47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10011	燧石	5.30		1.05		58	燧石			SD-100	5-10	47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10012	燧石	8.8	8.1	1.50		100.5	燧石			SD-100		47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10013	燧石	4.4	4.1	0.7		120	燧石			SD-100		47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10014	燧石	4.1	5.1	0.75		23.5	燧石			SD-100		47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10015	燧石	5.2	4.8	1.6		46	燧石					44	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10016	燧石	7.2	6.9	1.3		108.5	燧石					44	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10017	燧石	5.9	6.7	1.8		54	燧石					47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10018	燧石	6.1	5.7	1.7		61.5	燧石					47	50	燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。燧石の断面は、燧石の断面である。		
10019	燧石	9.8	4.3	2.7	Da	223	穿孔燧石 5m					46	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10020	燧石	8.4	2.8	2.3	Da	151	燧石	0.8m				46	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10021	燧石	8.8	3.9	3.4	Da	152	燧石	0.8m				46	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10022	燧石	8.3	3.9	2.1	Da	150	燧石	0.8m				46	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10023	燧石	7.8	4.1	3.3	Da	131	燧石	0.8m				46	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10024	燧石	10.0	5.1	4.4	Da	188	燧石	0.7m				45	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10025	燧石	7.2	3.4	3.2	Da	202	燧石	2.3m				45	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10026	燧石	8.7	3.8	2.6	Da	12	燧石	0.8m				45	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10027	燧石	8.2	2.5	1.8	Da	66	燧石	0.8m				44	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10028	燧石	8.3			Da	20	燧石	0.7m				44	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10029	燧石	5.4	2.6	1.8	Da	26	燧石					44	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10030	燧石	4.9	2.3	1.9	Da	25	燧石					44	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10031	燧石	4.4	1.7		Da	15	燧石					44	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10032	燧石	7.5	4.1	2.0	Da	82	穿孔燧石 5m					44	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10033	燧石	3.8	2.8	1.8	Da	35	燧石	0.5m				44	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10034	燧石	8.9	2.3		Da	77	燧石	0.5m				46	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10035	燧石	7.8	4.5	3.5	Da	171	燧石	0.8m				45	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10036	燧石	10.0	3.4	2.3	Da	124	燧石					45	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。		
10037	燧石	6.9	2.65	2.3	Da	55	燧石					5-12	44	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10038	燧石	4.9	2.3	2.4	Da	16	燧石					SD-100	41	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10039	燧石	5.8	4.2	4.6	Da	127	燧石					SD-100	5-10	44	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。
10040	燧石	9.10	3.7	2.7	Da	114	燧石						44		燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10041	燧石	3.25	1.85	0.9	Da	4.5	燧石					pH-25	44	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10042	燧石	5.1	2.5	1.2	Da	14	燧石					pH-25	44	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10043	燧石	3.05	2.3	2.8	Da	37	燧石					pH-25	44	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10044	燧石	12.5	4.8	2.35	Da	187	燧石					SD-85	42	57	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10045	燧石	10.5	17.3		Da	230	燧石					SD-100	42	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10046	燧石	16.2	11.5	7.8	Da	109	燧石						42	56	燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10047	燧石	11.9	3.9		Da	49	燧石						42		燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10048	燧石	10.1	10.5		Da	24	燧石						42		燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	
10049	燧石	12.8	5.9	4.5		60	燧石						45		燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。燧石は、土質の燧石である。	

Tab. 7 出土石器一覧表-1

遺物番号	器名	底径 (cm)			形式	重量 (g)	材質	調査年度	出土層	Fg	PL	備考
		高	幅	厚								
10009	古幣	5.7	5.3	3.3		340	玄奘造		SD-100	40	43	
10010	＊	1.4	5.50	2.0		305	＊		＊	＊	＊	
10011	＊	12.7	8.3	4.4		340	＊		＊	＊	38	
10012	＊	14.0	5.0	2.7		230	秘藏造		＊	＊	48	遺跡の一帯を加工
10013	古幣	5.5	6.3	4.9		400	玄奘造		＊	＊		
10014	古幣	13.1	6.4	6.4		1130	＊		＊	30	39	
10015	＊	15.3	6.0	4.8		640	＊		＊	40	＊	
10016	＊	4.15	7.5	4.3		355	＊		＊	30	46	
10017	＊	14.8	9.2	8.2		1140	＊		＊	40	39	
10018	＊	8.4	7.2	3.2		200	＊		＊	20	46	
10019	＊	8.8	6.45	3.0		321	＊		＊	＊	＊	
10020	＊	15.4	6.80	5.5		1130	＊		＊	＊	41	
10021	＊	12.1	5.9	1.4		137.3	秘藏造	唐字	＊	＊	40	
10022	＊	16.6	8.0	4.6		430	玄奘造		＊	30	39	秘藏造
10023	＊	19.86	7.60	3.0		461	＊		5-1	＊	40	
10024	＊	14.0	5.0	2.0		250	＊		＊	40	＊	
10025	＊	13.7	6.1	6.1		1300	＊		10-1211	39		
10026	＊	10.6	7.1	4.32		461	＊		SD-100	＊	40	
10027	古鏡	11.0	6.2	1.6		221	唐造	秘藏品		＊	＊	
10028	古鏡	7.5	4.5	1.6		31	秘藏造		10-10	38		
10029	古鏡	7.7	5.0	1.4		221	唐造	秘藏品	SD-100	40		
10030	＊	23.9	9.1	6.7		1605	＊		秘藏品	＊	39	41
10031	Yaka	34.85	7.4	10.5		200	玄奘造		＊			
10032		12.2	5.5	1.35		140	秘藏品	唐字		1層1号		
10033	唐刀	9.5	10.9	2.35		830	秘藏品		＊	31	41	
10034	＊	7.7	8.0	3.0		301	玄奘造		1層1号	＊	＊	
10035	＊	16.3	11.25	6.7		2435	秘藏品		＊	＊	＊	
10036	＊	11.0	14.7	3.3		1580	玄奘造		＊	32	48	
10037	＊	8.5	11.6	3.7		590	秘藏品		＊	＊	41	
10038	＊	9.0	16.1	4.5		661	秘藏品	秘藏品	＊	＊	＊	
10039	＊	8.6	12.30	5.2		900	秘藏品		＊	＊	41	
10040	＊	7.1	13.4	5.1		781	秘藏品		＊	＊	40	
10041	＊	9.10	15.1	5.2		1130	玄奘造		＊	51	＊	
10042	＊	8.0	11.5	5.2		661	玄奘造		＊	＊	＊	
10043	＊	1.4	15.9	3.6		461	玄奘造		＊	12	＊	
10044	＊	12.3	11.6	8.0		1431	秘藏品		＊	51	41	
10045	＊	11.3	7.95	4.3		710	玄奘造		10-100	50	40	
10046	＊	8.9	12.6	6.45		1710	秘藏品		52-40	＊	41	遺跡を加工して使用した秘藏品
10047	＊	8.9	6.2	3.0		210	秘藏品		SD-100	＊	40	上層・下層を有するとして使用
10048	＊	6.0	7.2	4.05		361	秘藏品		＊	31	＊	
10049	＊	6.5	7.7	4.4		340	玄奘造		＊	＊	＊	
10050	＊	6.5	5.5	4.0		170	唐造		＊	51	＊	
10051	＊	11.0	17.2	7.75		2700	秘藏品		SD-100 5層1号	51	41	
10052	＊	7.0	8.7	3.0		430	玄奘造		SD-75	＊	40	
10053	＊	10.0	12.3	3.6		1140	秘藏品		SD-100	＊	41	
10054	古鏡	11.4	11.35	6.45		4210	玄奘造		＊	40	＊	
10055	＊	21.8	10.6	3.0		1,280	秘藏品		＊	＊	＊	
10056	＊	20.45	10.7	10.2		1280	秘藏品		＊	＊	41	
10057	＊	15.2	15.2	6.0		2410	玄奘造		＊	＊	＊	

Tab. 9 出土石器一覧表 - 3

遺物番号	品名	長さ(cm)			形式	重量(g)	材質	発掘状況	出土層	Fig.	PL	備考
		全長	幅	厚								
14070148	石鏃	23.9	27.3	4.3		435	玄武岩		SD-100 S-27	48	43	
14049	矛	11.1	13.15	8.3		360	玄武岩		SE-61	52	*	
14050	*	11.8	14.4	7.25		1813	玄武岩		SE-61	*	*	
14051		8.1	10.9	6.2		160	玄武岩		SD-100 S-17 1.5	*		
14052		16.4	21.8	15.45		1050	花崗岩		* S-25		50	
14053		20.3	28.1	7.3		3230	青石		* S-9	*	*	
14054		26.1	31.5	11.35		1000	閃石岩		*	*		
14055		26.6	27.9	17.6		11230	花崗岩		*	*		
14056		24.3	27.4	23.3		2080	燧石		* S-13	*	*	
14057	石鏃	1.25	1.3	0.4		1.2	燧石		*	30	36	
14058	*	4.3	3.6	0.4		1.9	燧石		*	*	*	
14059	*	3.2	1.8	0.4		3.9	ツブシ		*	*	*	
14060	*	1.6	1.5	0.3		1.5	ツブシ		*	*	*	
14061	*	1.6	1.7	0.4		1.5	燧石		*	*	*	
14062	scraper	6.8	9.2	1.45		100	玄武岩		*	41	42	燧石製、燧石片
14063	*	8.8	8.3	1.1		80	ツブシ		*	*	38	
14064	*	8.4	11.4	1.5		110	玄武岩		*	*	*	
14065	*	7.8	2.4	6.95		38	ツブシ		SD-100 S-17.5		*	
14066	磨石	3.5	2.9	2.2		52	花崗岩		SH-110			
14067	*	4.5	2.9	2.3		38	燧石片	研削	*			
14068	石丁	5.3	9.46	1.2		89.5	燧石製石丁	燧石片	SD-100	41	38	燧石製石丁の一部分 燧石片製である
14069	*	4.25	4.7	0.8		24.5	燧石		*	*	*	燧石製石丁の一部分 燧石片製である
14070	石鏃	25.1	29.3	11.8		1980	玄武岩		* S-7		54	
14071	石鏃	7.1	12.8	1.9		304	*	玄武岩	1.5SD-100 1.5			
14072	石鏃	12.2	7.5	1.5		300			1.5SD-100			
14073	燧石	3.8	4.5	0.9		42	燧石	燧石	SD-100 1.5			
14074	燧石	5.6	7.5	5.3		270	燧石製燧石		1.5SD-100 1.5		53	
14075	燧石丁	4.8	7.3	0.6		21.5	燧石		1.5SD-100 2.5		42	
14076	燧石	8.5	5.2	4.7	SH	30	燧石	燧石	SD-100	48		燧石製
14077	燧石	21.9	6.3	5.4		150	玄武岩		SD-100	1.5		燧石製
14078	燧石	28.1	7.3	5.6		170	*		SD-100	49		
14079	*	12.0	7.4	7.3		100	*		SD-115	53		燧石製
14080	ツブシ	3.1	3.5	0.9		120	燧石	燧石	SD-100 SH-120			
14081	燧石	4.7	4.7	0.7		28.5	*	燧石	SH-10			
14082	ツブシ	3.8	1.4	1.8		25	ツブシ		SH-102	41		
14083	燧石	5.4	1.2	2.2	SH	12.5	燧石		SH-104	44		

Tab. 10 出土石器一覧表-4

2) 土器

土器は、SD-50、100、200、Pitから多量に出土した。特にSD-100からは、弥生時代中期中葉から弥生時代後期末までの土器が出土した。層序関係から中期中葉の土器は、第IX層から、中期末は、第VII層から、後期末、それ以降の土器は、第III層から出土した。SD-50、200、Pit出土の土器は、後記するとして、SD-100の変形土器を中心に形式分類を行ない、壺形土器、鉢形土器、高杯、器台等は、それに準じた。またSD-100からの出土遺物の器種は、変形土器、壺形土器、鉢形土器、高杯、器台、脚付壺、甕、手捏土器等の多種多様な遺物が出揃った感があり、各器種ごとにヴァリエーションがある。数多く図示することを主眼としたが、遺物量からはとうてい図示できないものもある。出土遺物の全体量から壺形土器、変形土器、の順で高杯、器台も数多く出土した。各遺物の説明は観察表を作成したので各遺物の説明は省略する。

(1)SD-100出土の土器

SD-100から出土した変形土器を中心に形式分類を行なった。特に中期中葉から後期初頭までを主に分類し、中期を5つに区分(須玖I式〔古、中、新〕、須玖II式〔古、新〕)に分け、前半を3つに区分(古、中、新)した。

SD-100からの変形土器は、須玖Iの〔古〕はなく、〔中〕にあたるものが、わずか2点出土しているが図示できなかった。須玖Iの〔新〕をI類とし、このI類をさらに、口縁部によりIa、Ibに細分した。須玖II式の〔古〕をII類とし、口縁、胴部の張り等から3つに細分した。III類は須玖II式の〔新〕とし、SD-100の中でも多量に出土したもので、中期末の時期をこれにあて、口縁部の相違から3つに細分した。

後期初頭もSD-100の中で最も多量に出土し一括資料としては良好な資料である。これをIV類として分類し、口縁、胴部から3つに細分できるが、III類と同様、IVaとする逆「L」字からT字状、口縁端部が下がるIIaからの流れは認められない。一応、これをIVa類とした。このIIIa類、IVa類がSD-100では確認できなかった。この点が福岡平野とも糸島平野とも、土器のセット形態が異なりを示すものなのか、もしくは、SD-100丹塗り土器が80%をこすことが原因なのかはさだかではないが、IIIa、IVa類が存在しないことは確実である。V類は後期前半に位置付けられる土器群である。このほか後期末の土器、古墳時代初頭の土器や、手捏土器等があるが、これは形式分類には含まなかった。

壺形土器(第55図～62図)

壺形土器は大別してV類、細別すると12に区分できる。

I類は2つに区分できる。須玖I式〔中〕逆「く」の字状口縁が「T」、「L」字状口縁へ変化するものと逆「く」の字口縁がそのまま残るタイプとに区別した。

Ia類は口縁部が逆「L」字状を呈するものや、内唇がわずかに張り出し「T」の字口縁に近づ

くタイプ(60、61、65、69、77、78、146、292、373、386)がある。

Ib類は「L」字状口縁に近いが内唇が内に入るもので、口縁部下に三角突帯を持つものと、もたないものがあり、胴部は張らず内湾しながら口縁部に連するタイプ(62、64、66、294、295、311、313、316、381、389、391、402)がある。

II類は須玖式II類の(古)式とし、3つに細分した。

Ia類は、口縁部が「T」字状と呈するが、外面口唇部が下がるタイプ(99、310)である。

IIb類は、口縁部逆「L」・「T」字口縁の流れの中での内唇が下がるタイプ(70、98、291、293、392、395、397)がある。

IIc類は、須玖II式の(新)まで含まれる可能性があるもので、「T」字口縁部の内唇が内に下り、わずかに張り出す形状を呈するタイプ(63、68、71、73、93、97、374、383、388、398、454)である。

III類は、2つに細分できる。須玖II式(新)に相当するもので、「T」字口縁の口唇部がかなり下がるタイプをIIIaとしたが、壺形土器ではなく壺形土器の中にある。

IIIb類は、口縁部が「く」の字形を呈し内唇がわずかに出る胴部の張りが大きく刷毛目調整も荒いタイプ(67、289、302、303、306、394)がある。

IIIc類は、IIc類の範疇に入るものも含まれているので区別ができない。

IV類は、後期初頭に位置づけできるもので、口縁部が「く」の字状を呈し、内面に一段の稜を持ち底部は、底面が平坦で胴部への立上りが外反気味に立上る。(72、82、213、305、308、371、372、377、385、399)がある。

壺形土器(第63図～70、73～76、98図)

壺形土器は、器形により4つに区分する。

1式、如意形口縁を持ち、最大径は胴部上位から中位にあり、球形を呈する。胴部と頸部の境に一条の沈線及び稜を持ち、口縁から頸部にかけて暗文を配し、丹塗りを行なっている。229、364、365、370は壺形式のIII類の範疇に入るもので、366はIV類の範疇に入る。

2式、口縁部が鋤先状を呈するものを2式とした。口縁形態で、3つに区分した。

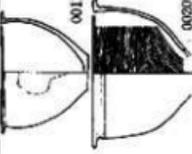
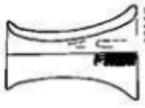
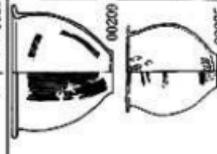
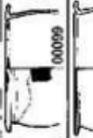
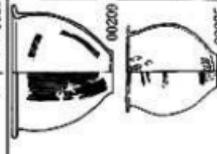
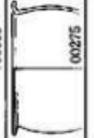
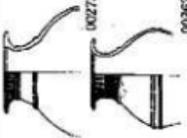
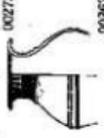
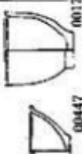
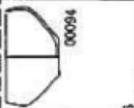
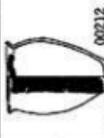
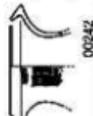
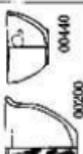
2式1類、口縁部が平坦であるもの(144、252、273、278、280、281、282、355、356、361)がある。

2式2類、口縁部の外唇が下がるタイプ(145、169、246、247、248、249、250、251、253、254、256、274、284、352、353、354、358、362、407)がある。

2式3類、口縁部の内唇部が下がるタイプ(245、255、277、279、290、307、357、359、376、380、382、404、457)がある。

3式、口縁部が逆「L」字状を呈するもの、朝顔状に開くものと直線的に立上るものを3式とし口縁形態で4つに区分した。

3式1類、口縁部が逆「L」字状を呈し、胴部が球形であるタイプ(167、287、360)がある。

形式分類	器土器	壺	袋狀口	緣壺	鉢形土器・埴形土器	高	器	台
I 類	Ia 類	 00375	 00246		 00110		 00112	
	Ib 類	 00389			 00207		 00205	
	IIa 類	 00099	 00258		 00200	 00134		
	IIb 類	 00275	 00273		 00075			
	IIc 類	 00454	 00362		 00211			
III 類	 00303	 00353	 00364	 00458	 00447	 00094	 00031	
	 00213	 00249	 00357	 00111	 00096	 00210	 00418	 00203
V 類	 00212	 00501	 00242	 00454	 00200	 00444	 00136	 00500

第54圖 今宿五郎江遺跡出土土器形式分類(縮尺不統一)

3式2類、口縁部が逆「L」字状を呈するが、口唇部外側が下がり、より鋤先状を呈するものであるが1式とは頸部、胴部が異なるため3式とした(74)。

3式3類、朝顔状に開くタイプ(257,259,261,262,286,290,367,368,369,379,405,501)がある。

3式4類、口縁部の立上りが直線的に上るタイプ(455)がある。丹塗りが行なわれているものに1式～2式1類、2式2類、3式1類、3式2類が全面及び外側に多く塗られる。

4式、袋状口縁の壺形土器を4式とし、6つに細分した。

4式1類、4式1類はまだ細分可能であるが、今回は頸部が長くしまりその間に2段から3段のM字状突帯を配し、その突帯間に暗文を配する。口縁部は、頸部からやや外反しながら弧を描き内傾しながらおさまる形状を呈するタイプ(215,458,459,460,461,462,463,465,473)である。外面全面と内面の一部に丹塗りをほどこす。

4式2類、4式2類は頸部のしまりがなくM突帯及び三角突帯が一条巡り、口縁部の径も大きくなる。(90,91,92,116,230,271,466)がこれにあたる。外面の全面及び一部に丹塗りを施す。

4式3類、4式3類は頸部が短くすぐ折り曲り、袋状を呈するタイプ(41,89,111,272,442,443,522,524,575)である。丹塗りは頸部付近までである。

4式4類、4式4類は逆「く」の字を呈するが、折り曲る部分がまだ弧を描くタイプ(103,115,119,412,464,467,474,475,476,477)である。丹塗りは頸部付近までしか行なわれていない。

4式5類、4式5類は4式4類とはほぼ同形態を示すが折り曲り部分が鋭角になり、口縁端部がやや外反するタイプ(113,114,115,117,120,242,244,411)がある。丹塗りはあるものと無いものとがある。

4式6類、4式5類の形態に類似するが、大きく異なる所は口縁部の折曲する部分が、斜め下につまみ出された形状を示す。胴部から垂直に立上がり、大きく外反しながら折曲がり、口縁部はやや内湾気味におさまるタイプで243の一点が、これにあたる。丹塗りは施されていない。

壺形土器を壺形土器の形式分類にあてはめると、1式は、Ⅲ類の範疇に入るもの229,364,365,370とⅣ類に入る336がある。

2式1類は、壺形形式分類の1類に246が入り、Ⅱ類に252,273,281,355,356が入る。Ⅲ類に144,278,280,282,361,363がある。

2式2類には、壺形土器分類のⅡ類に247,248,250,251,355,362が入りⅢ類には145,169,253,254,256,274,284,352,353,354,358,362,407がある。

2式3類にはⅣ類の範疇と考えられるものに276,277,307,376,380,382がある。

3式1類では、Ⅱ類に167,287が入り、Ⅲ類には360がある。

3式2類では、Ⅲ類に74がある。

3式3類では、Ⅲ類の範疇に262,369,405が入る。Ⅳ類には、257,259,261,286,290,367,368,

369がある。V類に501が入る。

3式4類では、455がIV類の範疇と考えられるが、この土器はV類の可能性もある。

4式1類は、I、II類がなく、III類から458、459、460、461、462、463、465、がこの範疇に入る。IV類には215が入る。

4式2類には、IV類に91、230、271、466が入ると考えられる。V類には92、116、230が範疇に入るものであろう。

4式3類には、IV類に111、575が入り、V類に41、89、272、443、522、524がある。

4式4類には、V類だけで115、119、412、464、475、476、477がある。

4式5類にも、113、114、117、120、242、244、411がある。

4式6類は、V類で243がこの範疇に入るものと考えられる。

鉢形土器(第77図～81図)

鉢形土器には、形状の点からみればたくさんのヴァリエーションがあり、甕形土器や壺形土器に類似するもの等がある。今回鉢形土器としたのは、それらのものを一括して、口径が大きく、器高が低いものを鉢形土器とした。

鉢形土器を口縁形態から甕形土器・壺形土器の形態分類に準じて説明する。

甕形土器Ia類に属する鉢110、95、173の3点で、口縁部が逆「L」字状を呈し、平坦面で水平である。110は、内外面とも丹塗りを施す。口径26.4cmを測る。95は、内外面ともに丹塗りを施し、口径19cmを測る。173も同様。

甕形土器Ib類に属する鉢(第77図)207のI点である。口縁部の内唇端がわずかにつまみ出され、口縁下には、一条の三角突帯を巡らす。内面にはへら磨きを施した後に丹塗りを行なっている。外面の調整は、表面が剝落されているため明らかではないが、全面に丹塗りが行なわれていた痕跡を持つ。口径32.4cmを測る。

甕形土器II類に属する鉢(第77図)II類には、75、209、400がある。口縁部が逆「L」字状を呈するもので、209、400が口縁部内唇が内側に入る形態を呈する。75は口縁部が平坦で口唇部端がやや下がりぎみのもので、3点とも丹塗り土器である。口径は、75が18.6cm、209が28.8cm、400が20.7cmを測る。

甕形土器III類に属する鉢(第79図、81図)III類には、甕状を呈するもの、79、81、127、168、179、180、182、521を鉢型を呈する34、36、176、184、444、447がある。壺形土器状を呈する403もある。甕形土器状を呈するものは、127のように口縁部が「く」字状を呈し、底部は平底で、端部が立ち上がり、一度外反しながら胴部中位まで達し、最大径の部分から内湾しながら口縁部に達する。81は、胴の張りがなく、底部からやや外反しながら胴部中位まで達し、そこからやや内湾ぎみに口縁部に達する。

壺状の形態に近いものとして403がある。底部は平底で、底部から大きく外反しながら胴部最大径まで達し、そこから大きく弧を描くように口縁部まで達する。口縁部は、内湾してきたところで端部を丸くおさめている。

本来鉢形土器と呼ばれているもので、底部がやや上底のものと平底のものがある。底部端部の稜は面取りされている。底部から大きく外反しながら直線的に口縁部まで達する。口縁部は大きく外反し、端部は丸くおさめている。外反する部分に稜を有する444、447がある。

変形土器IV類に属する鉢(第78図、79図、81図)IV類に属する鉢形土器もⅢ類と同様に、変形土器状を呈するものは、80、85、87、122、124、143、208、342、470、519、529がある。形態は変形土器の形状と類似する。底部は、平底で、厚さは薄い。平坦面を持つものと波を打つものがある。底部端部は、やや丸みを持つようになる。底部から延びる胴部は、外反しながら胴部最大径まで達し、そこから内湾ぎみに頸部に至る。頸部で一度縮り、大きく外反する「く」字口縁を呈し、端部は、丸くおさめる。

壺形土器の形状を呈するものに、83、84、102、523、530がある。(第79図)変形土器よりも胴部が張り、器高も低い形状を呈する。底部は平底で、端部にやや丸みのものもある。底部から大きく外反しながら胴部最大径まで延び、そこから急激に内傾し、頸部に至る。頸部から大きく外反して口縁部に達する「く」字口縁を呈し、端部は丸くおさめる。

鉢形土器(第81図)には、39、100、105、106、184、264、266、314、345、438、439、445の12点を図示した。形態により2つに区分できる。105を代表とするもので、Ⅲ類と同様の形態を持つタイプと100、314に代表されるタイプ(底部が平坦で、底部から立上がりやや外反しながら立上がり口縁部まで達し、端部を丸くおさめる)に分かれる。変形土器の胴部中位ぐらいから横に半割した形状を呈する。

変形土器V類に属する鉢(第78図～80図)壺形土器に属するものに168がある。168の口縁部が欠損しているところから底部による判断でV類とした。底部は端部が丸みを持つ平底で底部と胴部の境が明確につかない。鉢形土器、本来はⅢ類～Ⅳ類に属する時期かもしれない。底部は平底で端部に稜を持ち、やや外反しながら頸部まで達し、そこでもう一度外反し、端部を丸くおさめるタイプ、38、174、200がある。38、200には底部に穿孔が施してある。内外とも丹塗りの痕跡を持つものと、Ⅳ類の100に代表された口縁部がほぼ垂直に近いものの流れをもつ263、343、437、440がある。

埴形土器(第80図)

埴形土器と鉢形土器の区別が困難で、鉢形土器の中にも埴形土器と考えられるものも含まれていたが、明確に区別できる資料を持ち合わせなかったので今回は、下記のことを埴形土器として記載していく。また時期も大まかであるが、変形土器の形式分類にしたがっていく。

変形土器Ⅲ類に属する埴形土器30、94、211がⅡ類からⅢ類に属するものである。壺形土器を横に半割した形状を早し、内外面ともへら磨きで丁寧に仕上げた後、丹を塗り、仕上げている。

変形土器Ⅳ類に属する埴形土器 210、266、446、448の4点を図示した。Ⅲ類との相違は、底部から外反しながら立上がり、口縁部はそのままおさまる形状を呈する。

変形土器Ⅴ類に属する埴形土器 35、104、126、151、152、263、265、343、437、440、444の11点を図示した。鉢形土器の範疇に入るとも考えられるものとして104、263、343、437、440がある。埴とした形態は、底部が丸底は近くなるもので、265のように丸底もある。

高坏、脚台付壺・甕・鉢(第82図～84図)

高坏は、4類に大別できる。

I類は、口縁部が鋸先状口縁を有し、平坦面を持つタイプ133、134、194がある。

II類は、I類の形態に類似するが、口縁端部が下がるタイプで、132、135、410がある。

III類は、「く」の字状口縁か、もしくは、鋸先状口縁の口唇部がわずかに出るタイプで、116、136、159、170、172、181、201、408がある。

IV類は、坏部中位に段を有するタイプで131、137～142、160、164、165、171、175、196、198、199、503がある。

変形土器形式分類に照らし合せてみると、I類が甕のII類、II類が甕のIII類、III類がIV類に対比でき、IV類が甕のV類およびそれ以降に対比できるものであるが、V類、およびそれ以降に関する分類は、再検討する必要がある。

脚台付壺・甕・鉢(第84図)

109、197が脚台付壺で変形土器形式分類のV類、およびそれ以降に属するもの、脚台付甕は177、202、409で409が甕のIV類、202、177がV類に属する。

蓋付壺・蓋・器台(第85図～88図)

蓋付壺は、壺の分類と同じで、変形土器形式分類のII類に属するタイプが86、471で、III類に215、469、472、517、520、526、528である。IV類は、108、468である。蓋は、形態的に分類して2つに大別できる。

1. 山形を早し、小型壺の51、52、487、488、489、490、491、492、493、494がある。

2. 大形の編笠を彷彿させる蓋で214、478、480～486がこれにあたる。

器台は、甕の分類に照らし合せると、I類が112、II類が205、III類が31、45、48、49、203がこれ

にあたり、IV類が08、33である。V類及びそれ以降に属するものは、01～05、07、32、187、191、312、499、500がある。

底部(第92図～94図)

底部は、全体の形態からの判断ではなく形態的に区別するだけである。

甕の分類に照らし合せると、II類に319、322、340、453が考えられ、III類には192、315、317、321、327、329、330、335、339がこれにあたる。IV類には320、326、328、332、334、338、346がある。

V類及びそれ以降に323、324、325、331、335、336とそれ以降には、347、348、349がある。

手捏土器(第89図～91図)

手捏土器には、鉢、埴、蓋、把手付杓、注口土器が多量に出土した。

(2)SD-50出土の土器

SD-50からは、甕、壺、鉢、埴、高環、器台等が出土した。図示できる資料はあまりない

甕形土器(第96図)

423、424、426があるが、甕形土器形式分類で423がIIa類、424がIIIb類、426がIIc類に分類できる。甕形土器だけは中期末の時期におさまる感がある。

壺形土器(第96、97図)

壺形土器は53、237、417、418がある。417、418は底部のみであるため明確にはできないが、53は4式2類に分類したもので甕形土器との組合せではIV類の範疇に入るものであろう。237は4式3類に分類したもので、V類の範疇に入る。

鉢形土器(第96、97図)

甕、壺の形状に近いものもある。これらを甕形土器分類とに照らし合わせて分類するとII類に42、III類に54、56、76、421、427、574IV類に241、534となる。底部では、II類に、414、III類に418、419、IV類に55、413、415、417、420となる。

埴形土器も同様に分類するとIV類に241、344V類に428、429、430、452とほぼ共伴関係にあるものと考えられる。高環は脚部のみであるが、ほぼV類に入り、器台も同様である。

これらのことからSD-50の時期は、一番新しい時期を考えるとV類となり、弥生時代後期前半から中葉と考えられる。

(3)井戸・土埴・Pitの出土遺物

SE-01からは、壺形土器の完形品を含め甕・鉢・埴・器台等が出土した。土器形式分類からみると甕形土器のIIa類からV類まで含まれている。ただV類、およびそれ以降の土器は、上面からの出土である。SE-01の一括資料は、235、238、239、297を除く遺物である。

壺形土器(第98図 232、233、350、351)

232は、口縁部を欠損するが頸部端に「M」字状突帯を一条巡らし、その上部に暗文を配する

タイプで、丹塗り土器である。233は胴部が長胴となり最大径が下位にある。その部分に2条のMの突帯を巡らし、胴部中位にも一条の突帯を巡らす。その間に暗文を配する。口縁部・底部は欠損するが、器形的にずれ変形土器IVcに位置づけられるものであろう。350、351は完形品で出土した。両方とも同じ形状を呈する。しいて相違を上げれば、351の方が口縁部がやや長く胴部のしまりがある。変形土器のIIIaタイプに属するものである。

変形土器(第99図118、231、236)

118は口縁部が内傾するくの字口縁で胴部が張るIIIcタイプである。231はTの字口縁を呈し胴部の張りがないIIのタイプ、236は口縁部がTの字口縁で口唇端が内傾するIIIcで全面に丁寧な刷毛目調整後、丹を塗っている。297はくの字口縁であり胴の張らないVIタイプで、口縁端部の作りも丁寧な仕上げである。341は鉢形土器・全面に丹を塗る。口縁部が内に入るタイプのもので仕上げは丁寧である。234は器台である。端部が外に開くタイプ234、239と内側におさまるタイプ238、235がある。

SD-200出土の土器(第95図、102図)

SD-200からは、土師器(552、553)甕の把手(561)と青白磁(555、556、562-564)と瓦(567-572)が出土した。

瓦は567、568、570は格子目文の平瓦で、表面は布目を残す。571、572は、方形と斜格子を組合せた平瓦である。569は丸瓦で格子目文を施す。

青白磁は、556が玉緑の口縁部の白磁、557が白磁の皿である。他の554、555、562-564は青磁片である。562の内面に「金玉満堂」の銘がある。ほとんど瀧泉系青磁である。

土師器は、552が内面を研磨した内黒土器で、553は黒色土器である。

投弾、土鏝、土玉、ガラス玉、これらはSD-100Pit2017からの出土である。投弾はこの1点だけしか出土しなかった。土鏝の内20005はSD-100、573はPit2017から出土している。両方とも赤色含量が附着している。20005は小形で上端部が欠損する。573は完形品。

土玉566は、ほぼ球形を呈し、表面に赤色顔料がわずかに附着している程度で何の造作もない。ガラス玉2点(20006、20007)は第1包含層(後期初類、第V層を示す)より出土したものでライトブルーを呈する。

鉄鏝(第95図)・鉄製環状耳飾

20003は北台地のSD-45より出土。20004はPit2052より出土した。鉄製環状耳飾(用途不明のため一応この名称を使用)は北台地のPit2053より出土したもので、耳飾のように一方だけが開き、断面は薄い。表裏面ともに唐草の文様を彫り刻み半浮き彫りに仕上げている。

Pit内出土遺物

Pit内より土器・石器等が掘り方内、柱痕内から出土した。南台地(第100図)と北台地(第101図)

の代表的なものを図示した。他にも多量に出土したが、図化に耐える遺物は少ない。それぞれ掘立柱建物に関係するものを図示した。

南台地のPit内出土遺物(第100図)

218はPit325より出土した鉢形土器で甕形土器分類のⅢ類の範疇に入る。535はPit298から出土した甕形土器の底部であるが、これもⅢ類に入る。533はPit1126から出土した底部でⅣ類であろう。220はPit256より出土した甕形土器である。539はPit1126から出土した甕形土器で533と同一個体を考えられるか接点はない。分類でもⅣ類に属する形態である。228はPit457から出土した甕形土器でⅤ類か、それ以降の時期と考えられる。Pit161から出土した遺物は540である。脚台付の鉢形土器でⅤ類に属する。

このように南台地からは弥生時代の遺物が主で、その時期も弥生時代中期から後期にかけてのものであった。

北台地のPit内出土遺物(第101図)

北台地からのPit内出土遺物は、Pit1156、2008、2052の内547、2017を除くと殆どが、11世紀から13世紀にかけての遺物である。

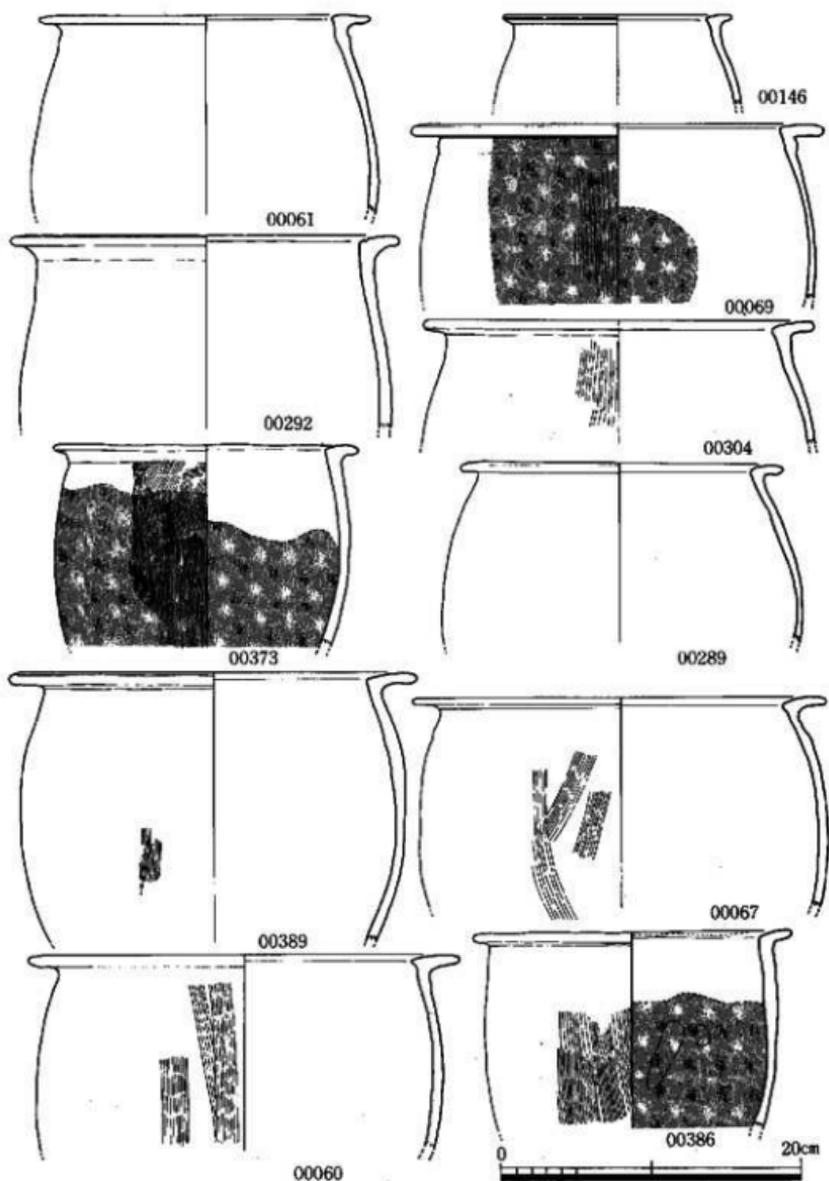
Pit2016の543は底部に板目瓦痕が残る土師器である。底径9.0cmを測る。Pit1184の542は、口径11.0cm、底径8.0cmで内面にススが附着している。Pit2005出土の221は、口径7.9cm、底径6.5cmの糸切り皿。Pit2008の223は、口径8.2cm、底径6.5cmの糸切り皿、Pit2009の222も221と同様の口径、底径を測る糸切り皿である。Pit2052からは、225、544、545の3点が出土した。225は口径12.5cm、底径8cmの大型である。545も同じく大型の糸切り皿で、底径が9.6cmを測る。544は、口径8.3cm、底径6cmの糸切り皿。このほかにPit2058出土の226は、脚台付皿で口径が9.5cmで丹塗りを施している。

青磁(546)、須恵器(547)も出土している。青磁は、Pit2039からの出土で瀬泉系の碗である。須恵器は、Pit2652からの出土で、つまみ付きの蓋である。瓦質土器も出土した。Pit2002より219の深鉢形の瓦質土器で、丸味を持つ「コ」の字状突帯を2条配し、その内側に「X」字状連続文を配する。口径36.0cmを測る。Pit2008からは、59の摺鉢状土器が出土した。口径31.8cmで丹塗りを施す。

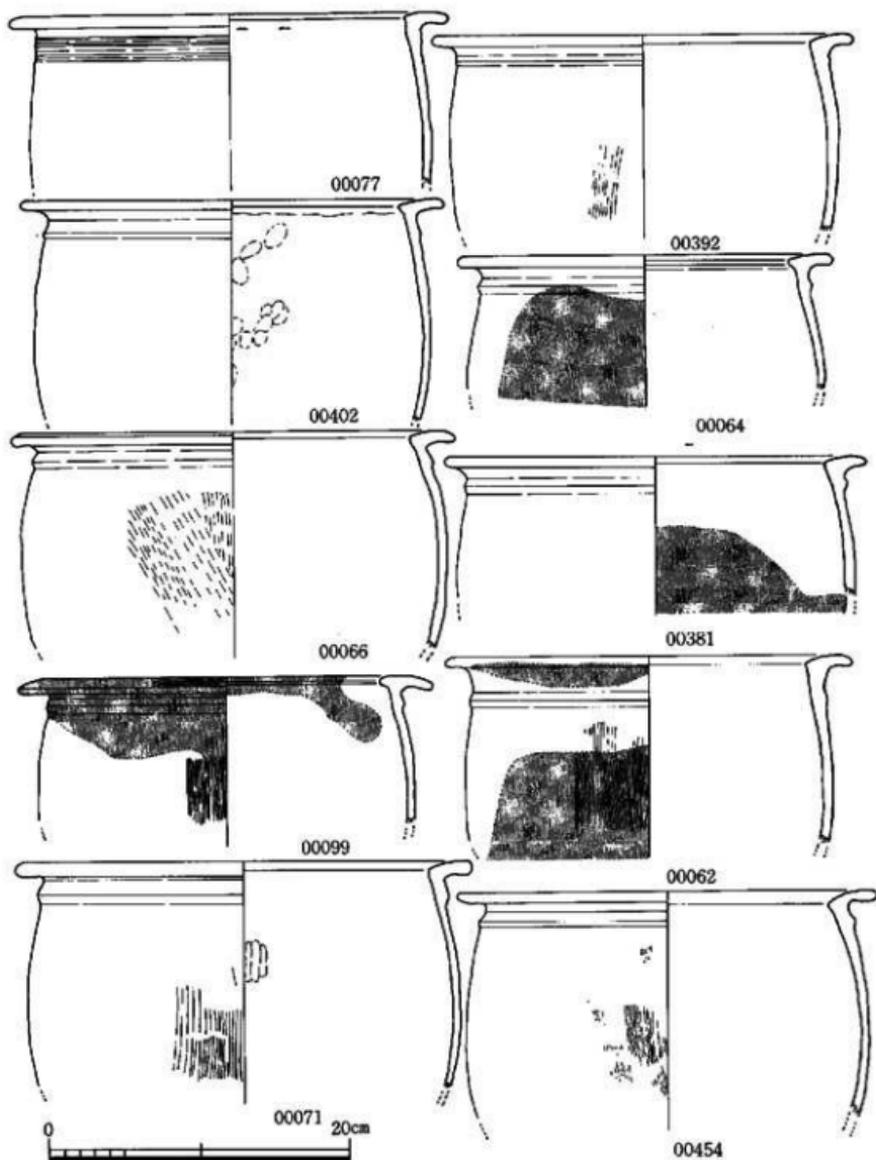
その他の遺構出土遺物(第95図、101図)

SK-01から糸切り皿の土師器(548、549)が出土している。548は底径8.8cmの大形で糸切りは、停止で行なわれている。549は底径7.4cmで回転糸切りである。このほかに558の青磁皿が出土した。558は内面は猫描きのある小皿で口径、12cm、底径5.6cm、器高2.1cmを測る。

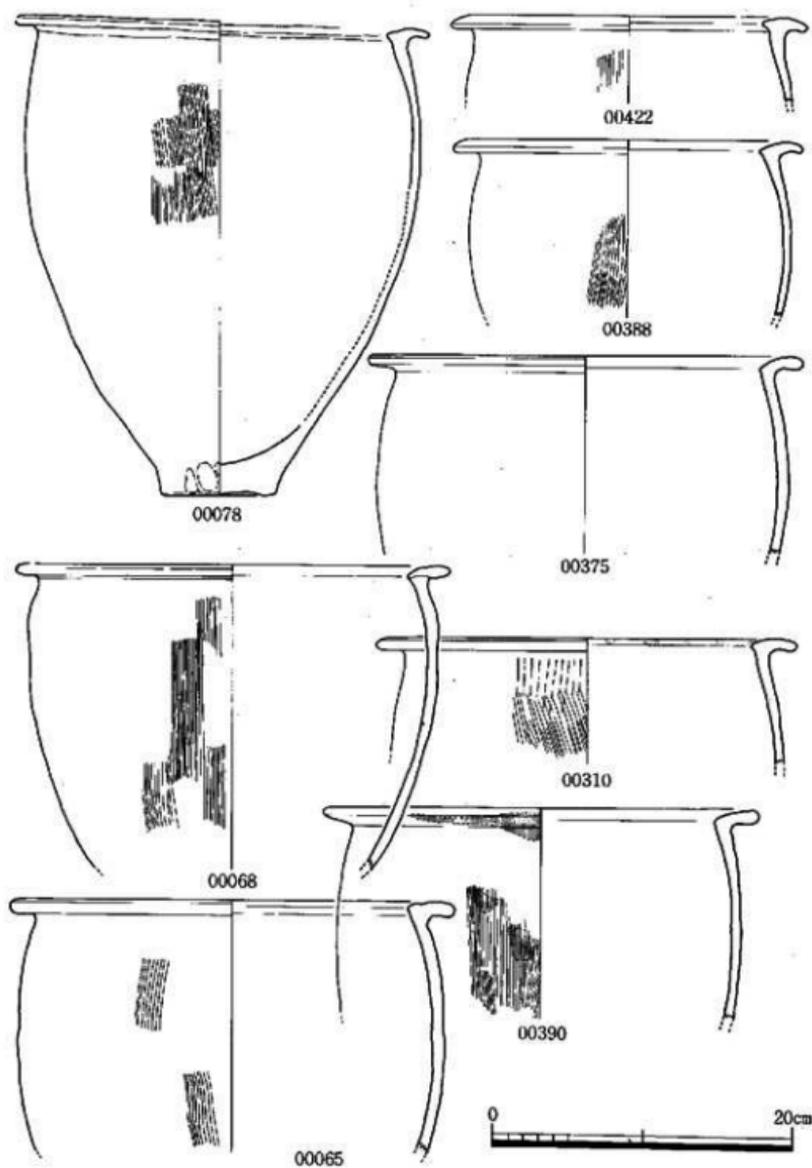
SD-01から433の碗が出土している。またSD-03から298の高杯の破片が出土し、SD-118から559の白磁碗が、SD-119から560の青磁底部破片と鉄鉢が出土した。



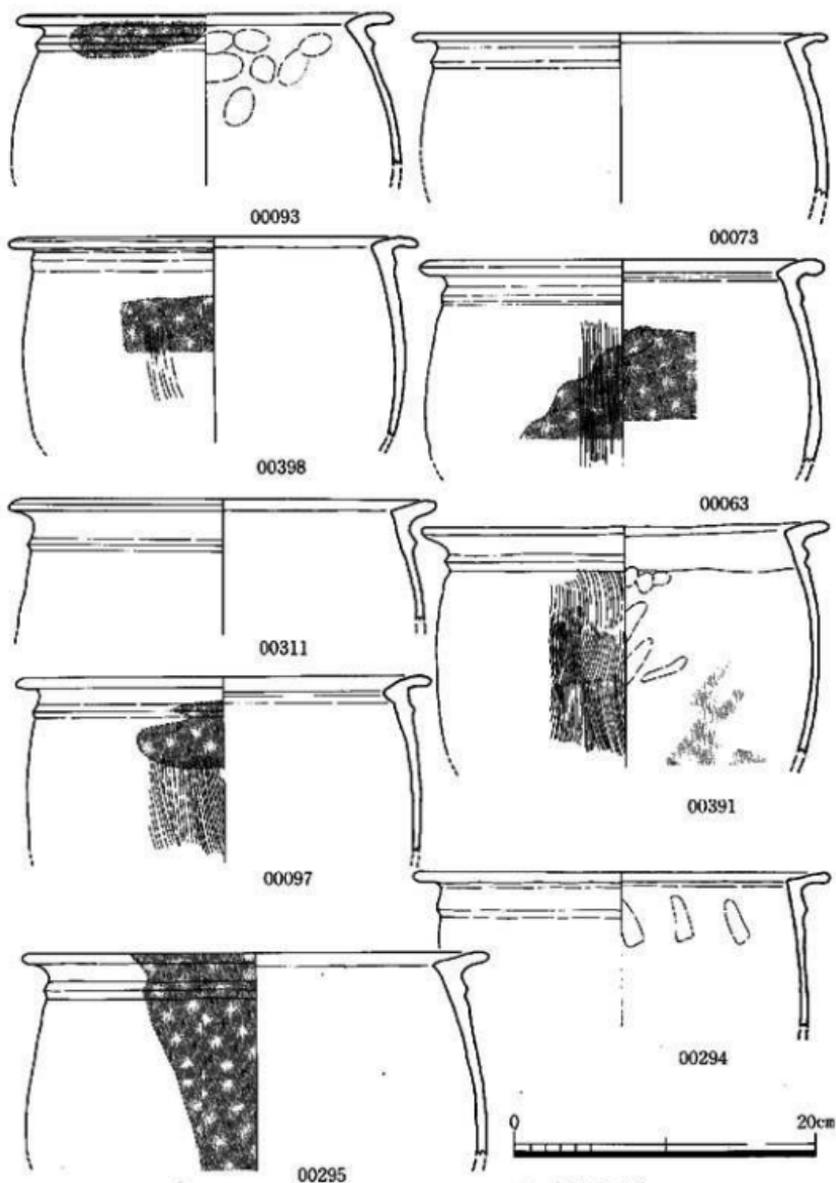
第55圖 SD-100出土土器実測圖-1 (縮尺1/4)



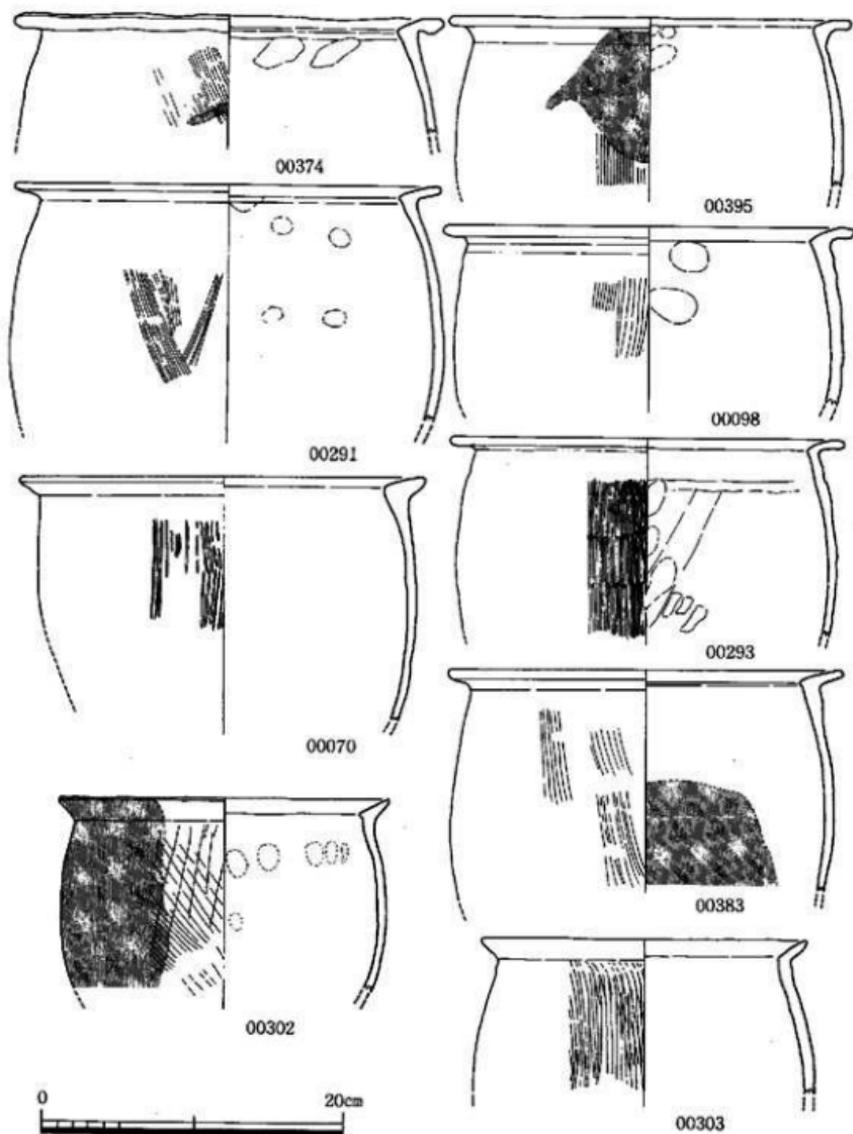
第56图 SD-100出土土器实测图-2(缩尺1/4)



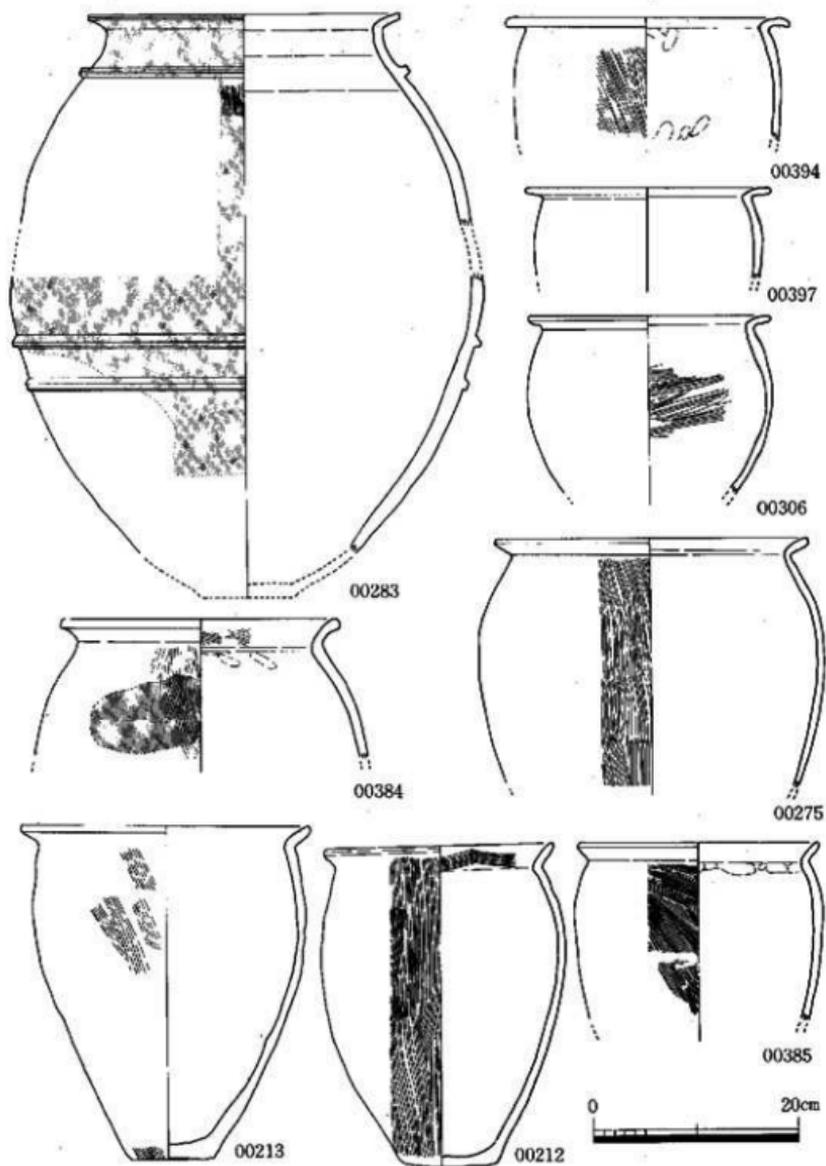
第57图 SD-100出土土器实测图-3 (縮尺1/4)



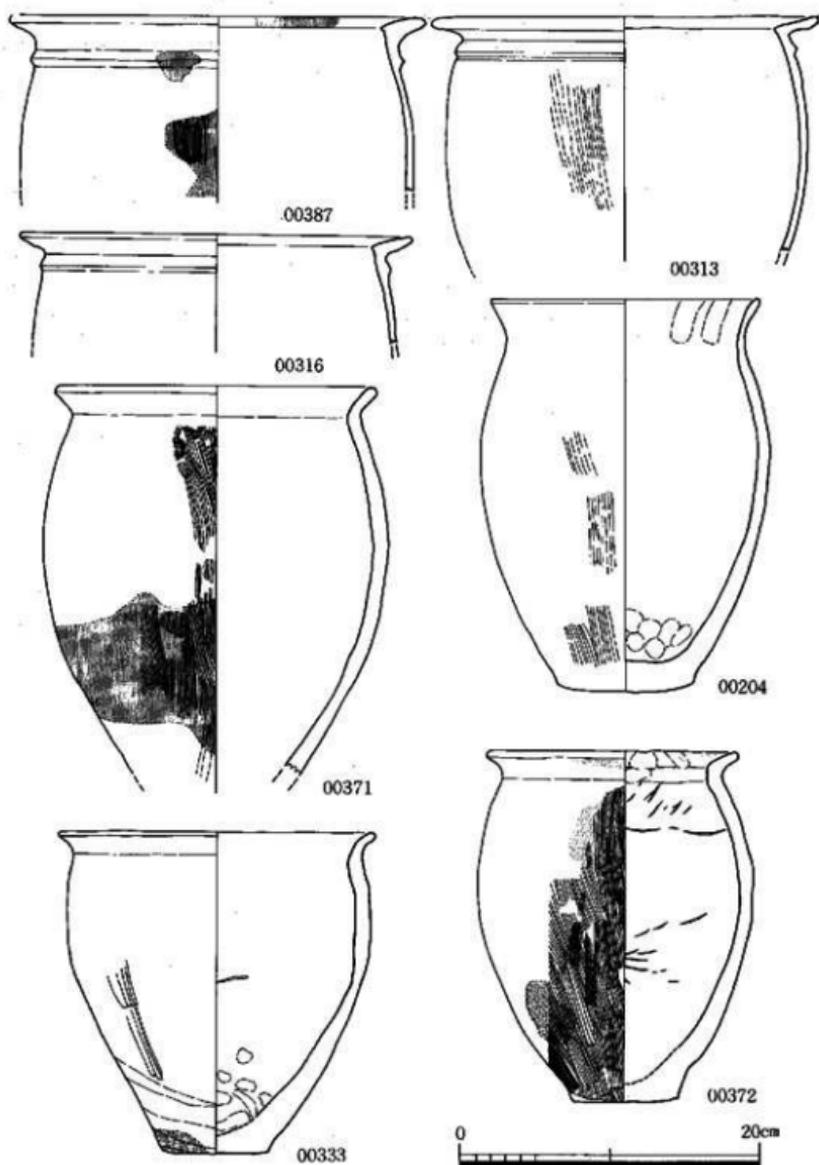
第58图 SD-100出土土器实测图-4(缩尺1/4)



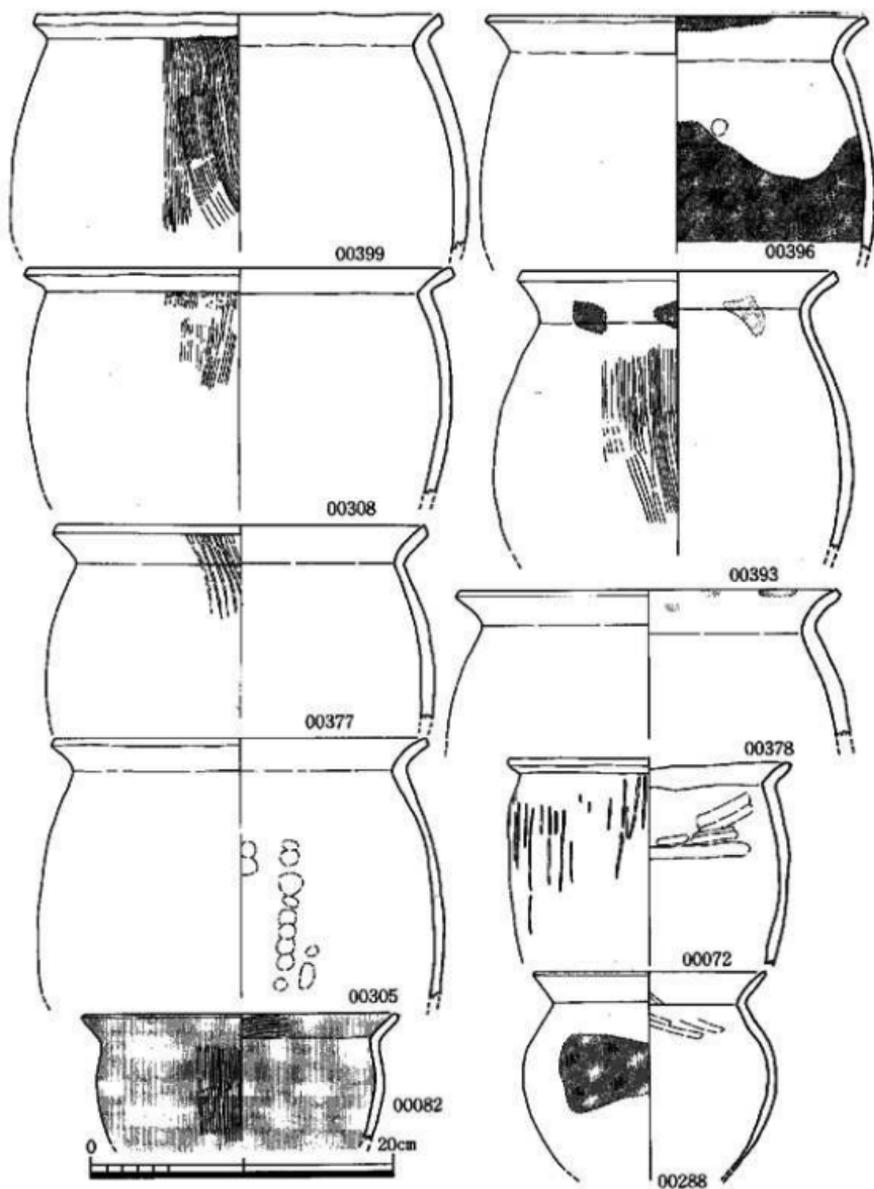
第59图 SD-100出土土器实测图-5 (缩尺1/4)



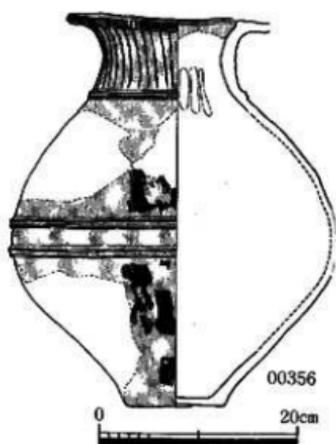
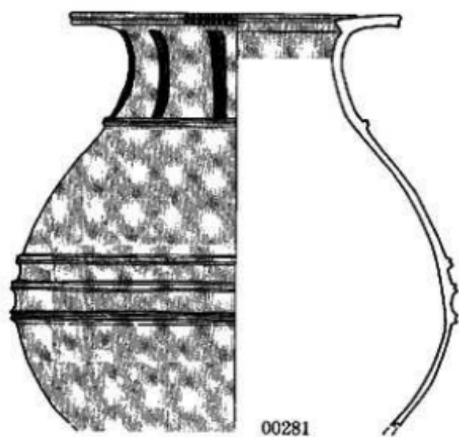
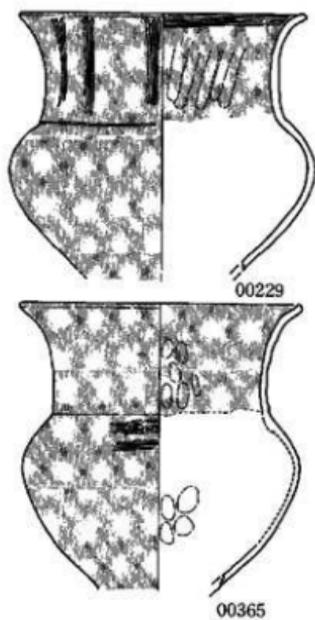
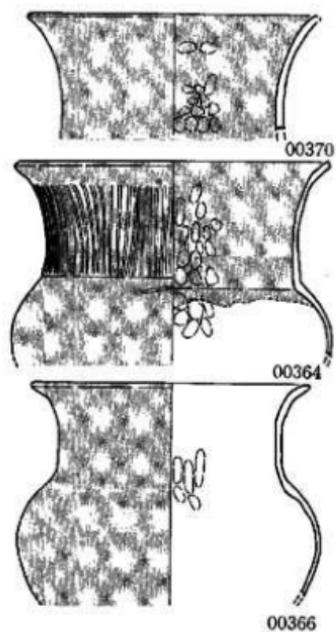
第60圖 SD-100出土土器実測圖-6 (縮尺1/6)



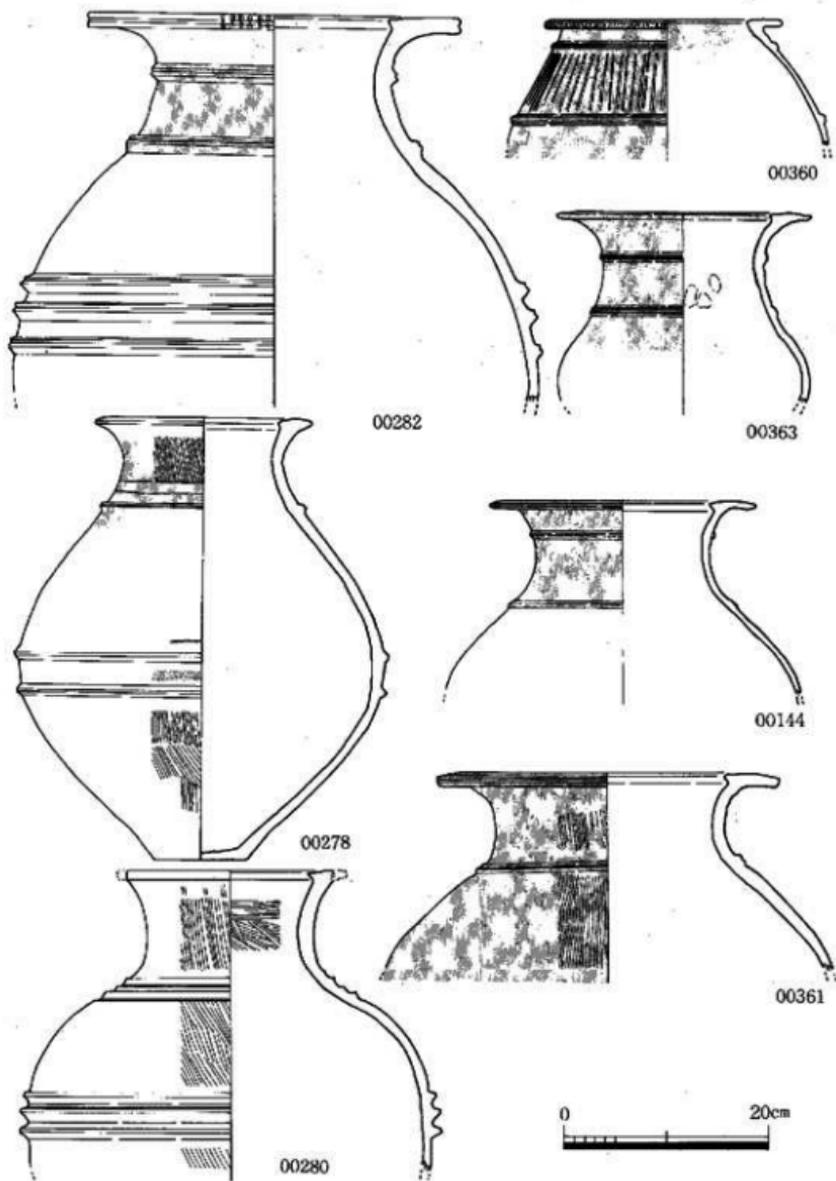
第61图 SD-100出土土器实测图-7(缩尺1/4)



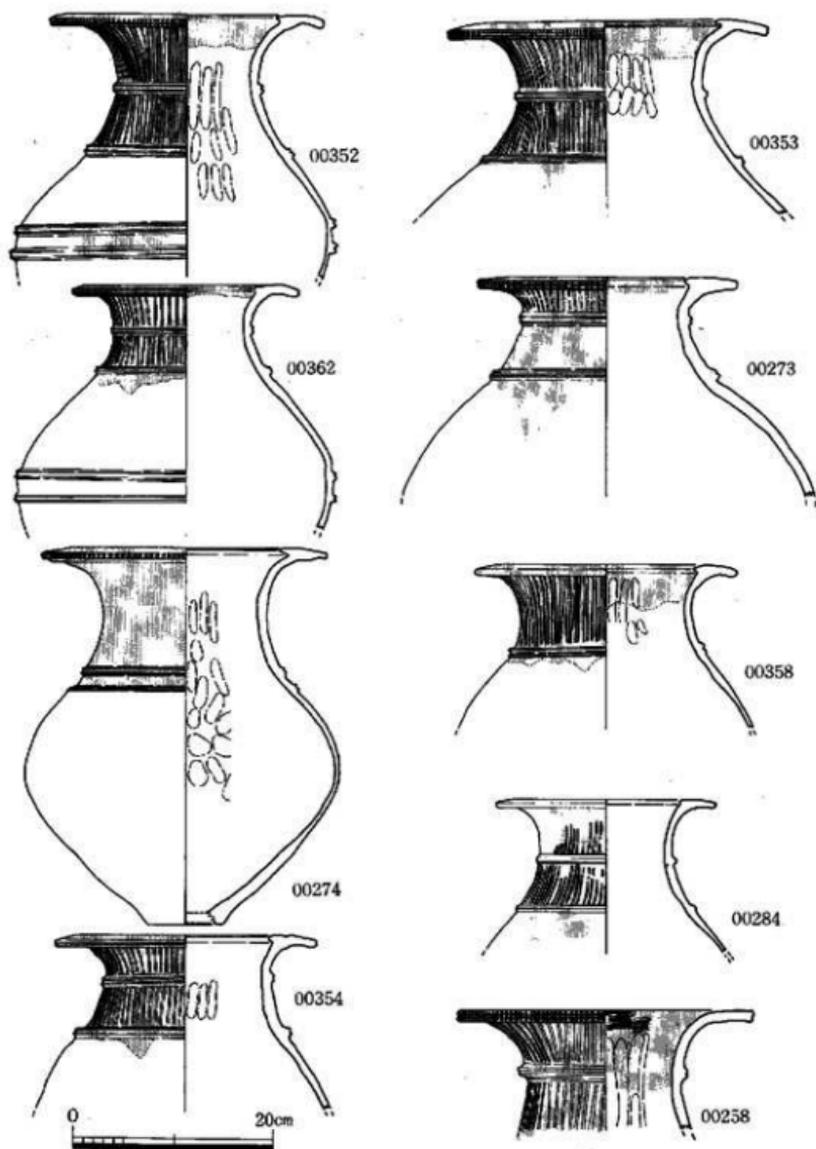
第62图 SD-100出土土器実測图-8 (縮尺1/4)



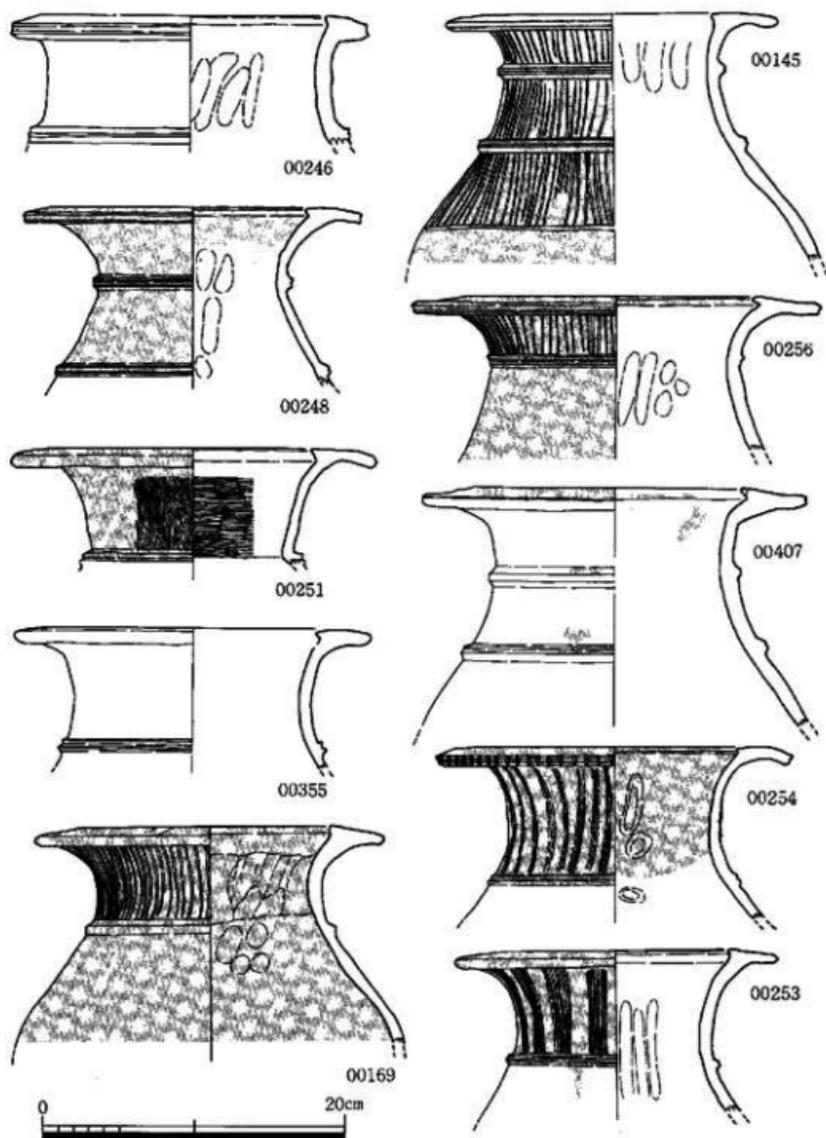
第63图 SD-100出土土器尖測圖-9 (縮尺1/6)



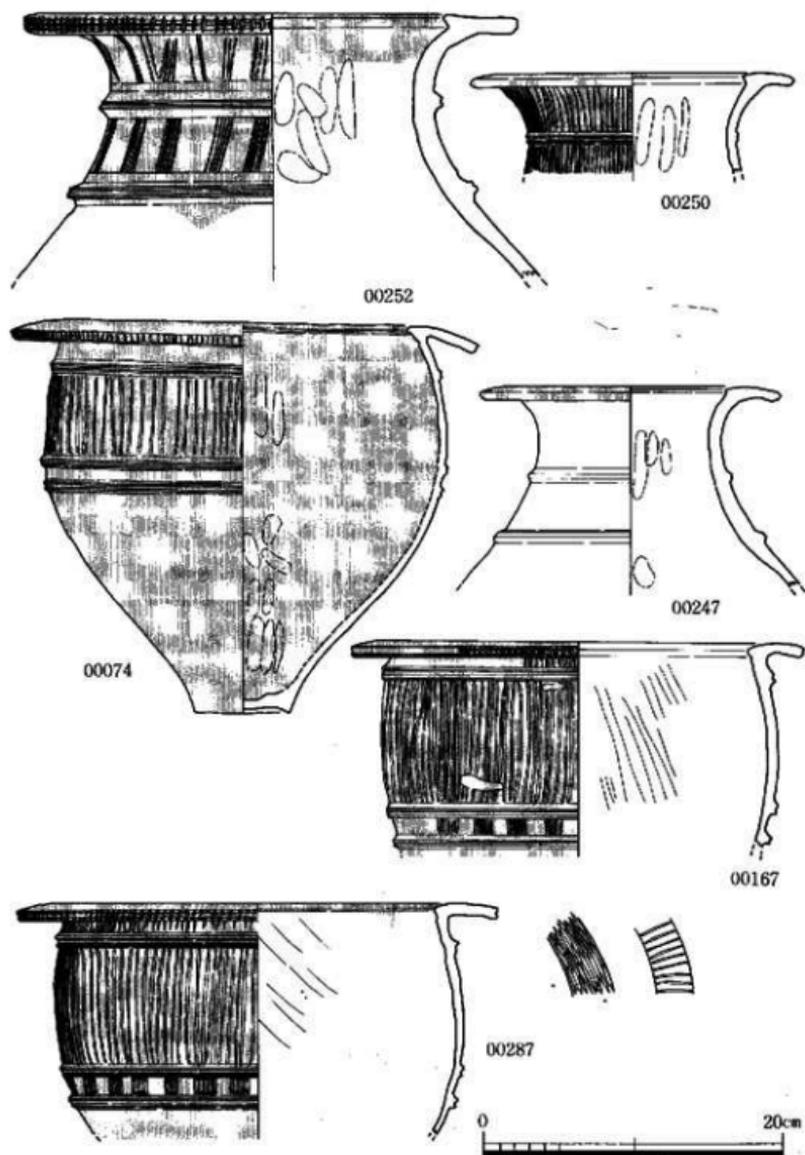
第64圖 SD-100出土土器実測圖-10(縮尺1/6)



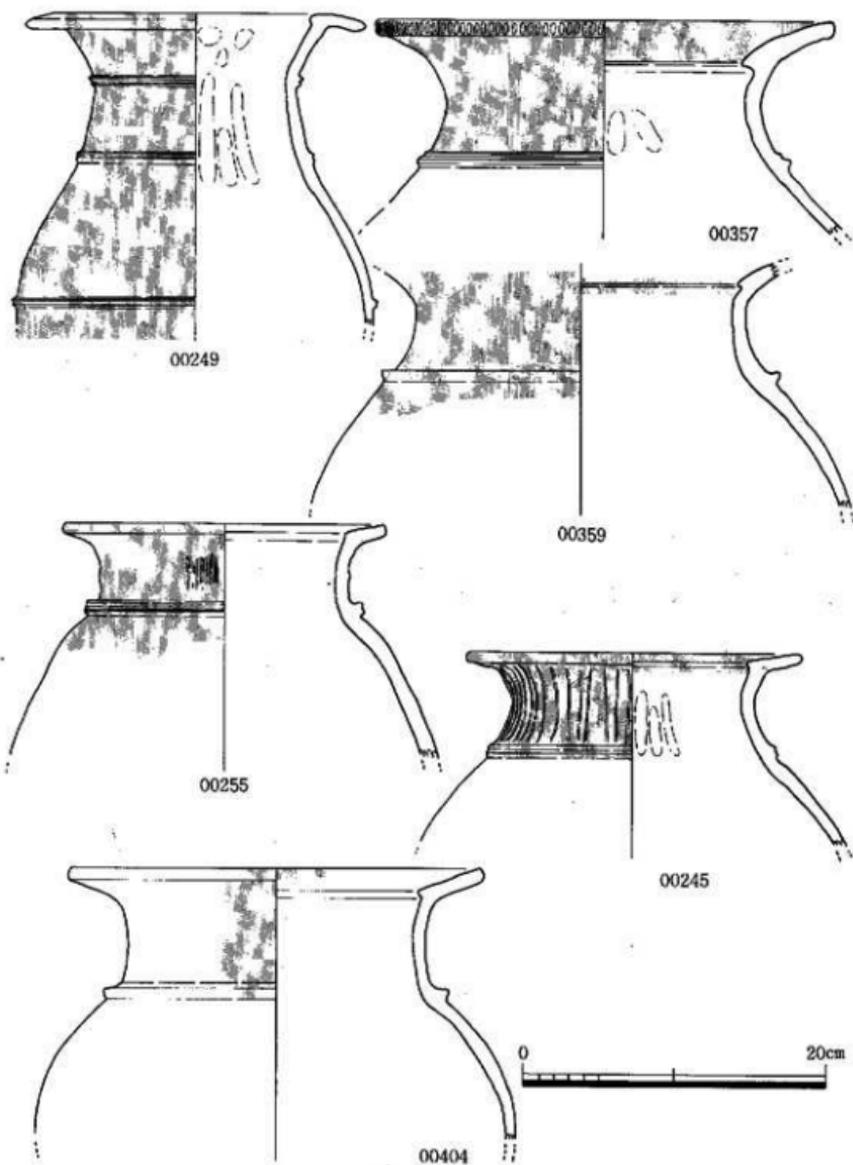
第65图 SD-100出土土器实测图-11 (编尺1/6)



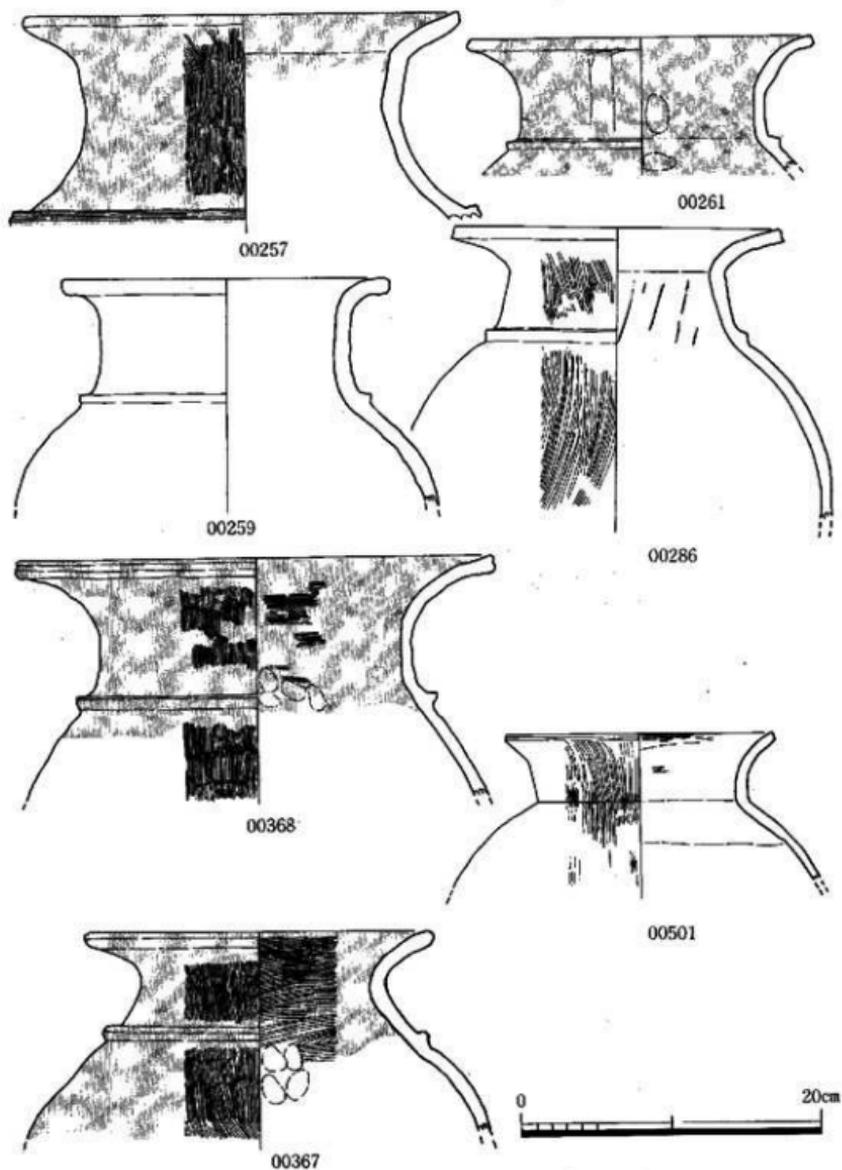
第66图 SD-100出土土器实测图-12 (縮尺1/4)



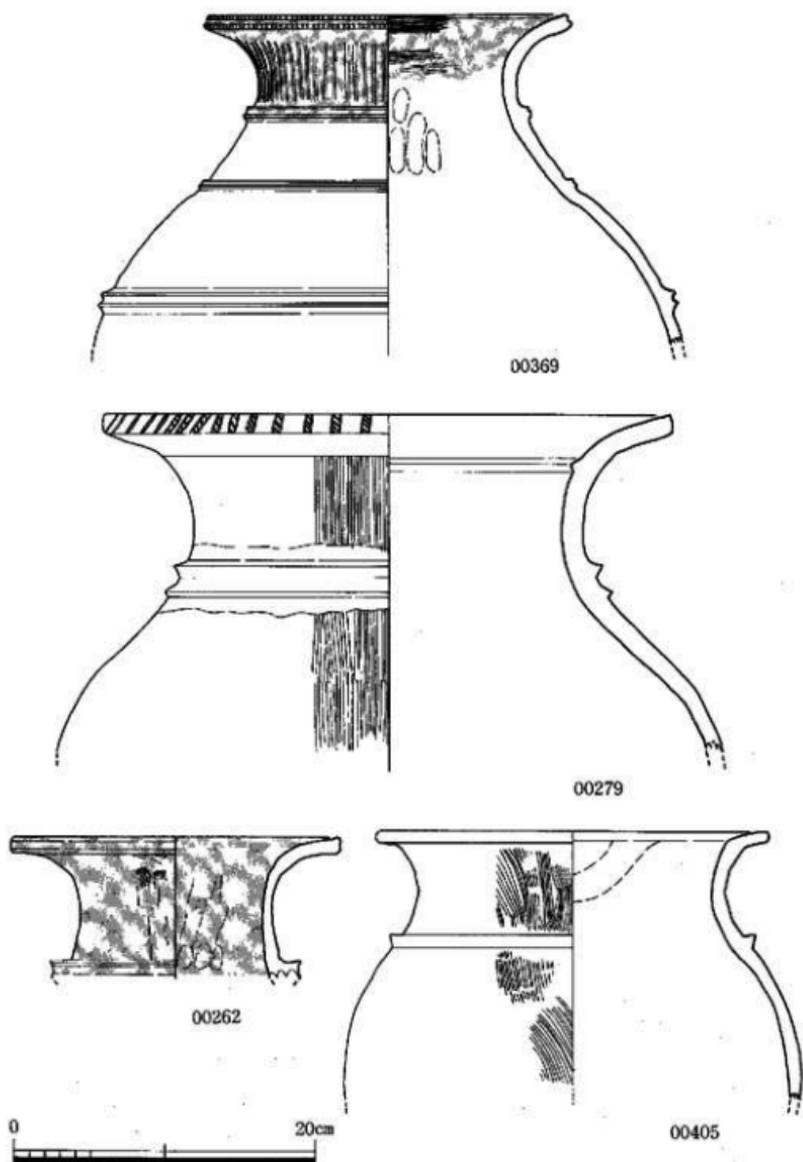
第67图 SD-100出土土器実測图-13 (縮尺1/4)



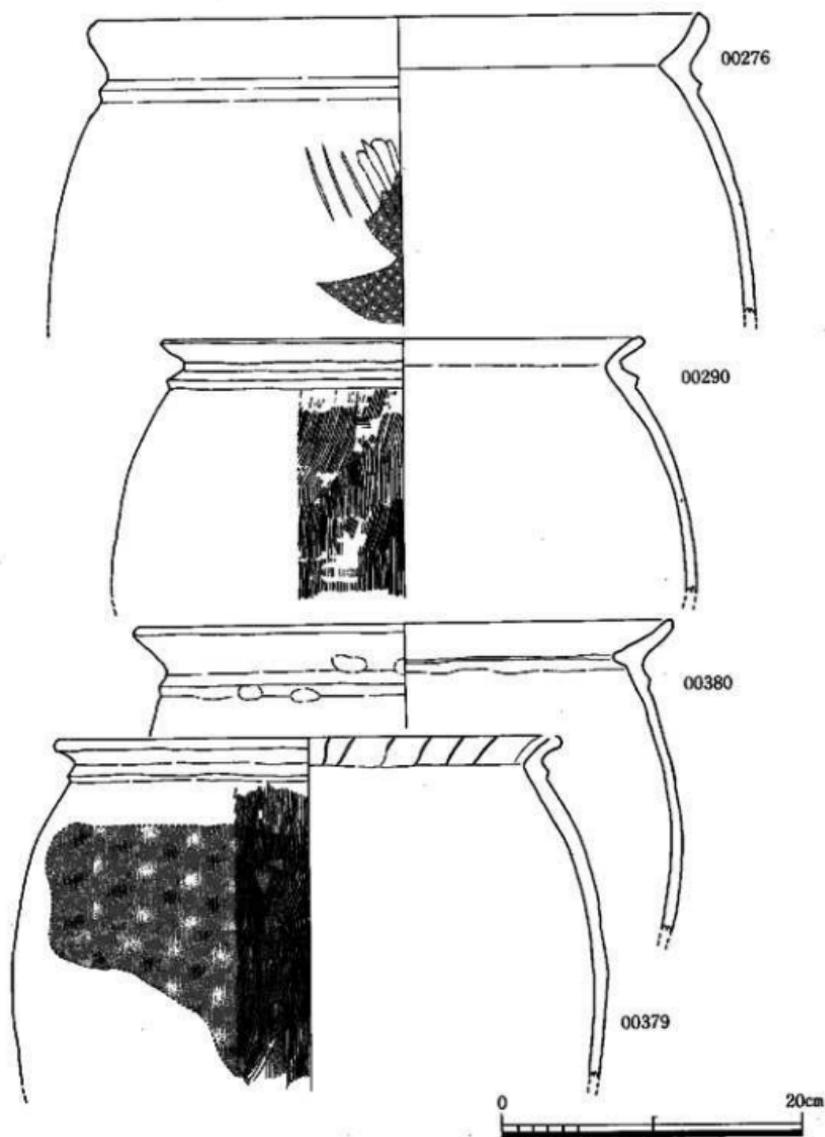
第68图 SD-100出土土器尖测图-14(缩尺1/4)



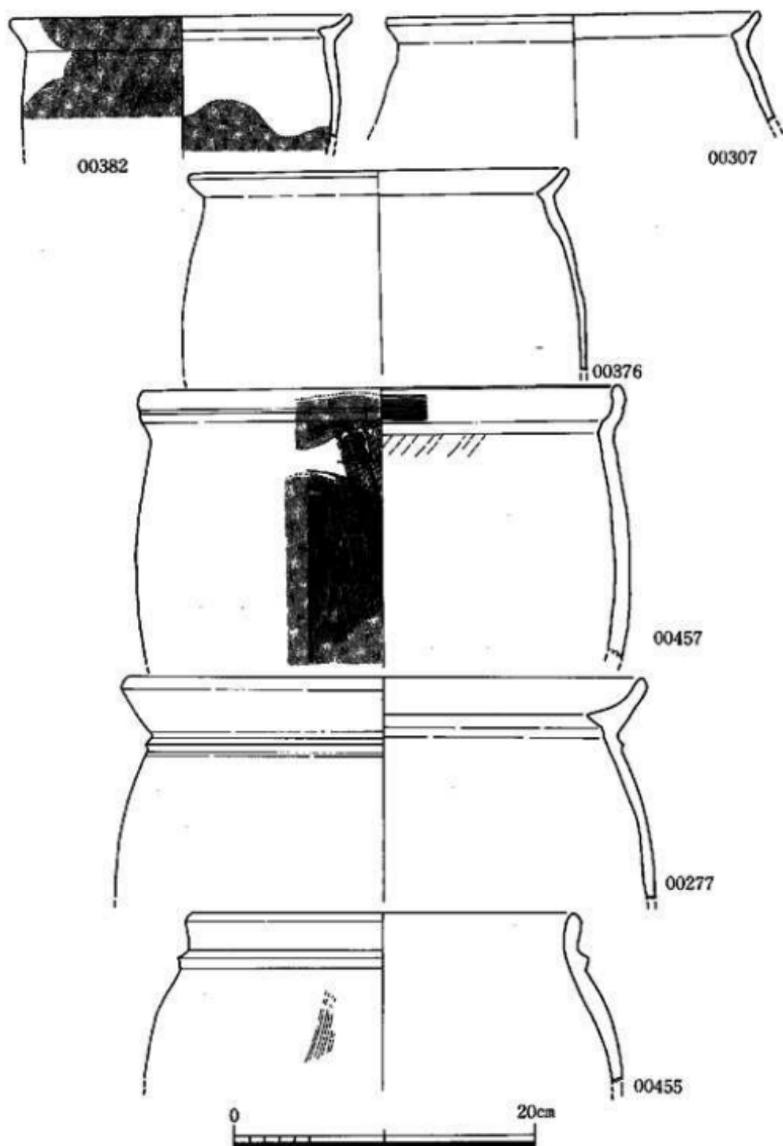
第69圖 SD-100出土土器実測圖-15(縮尺1/4)



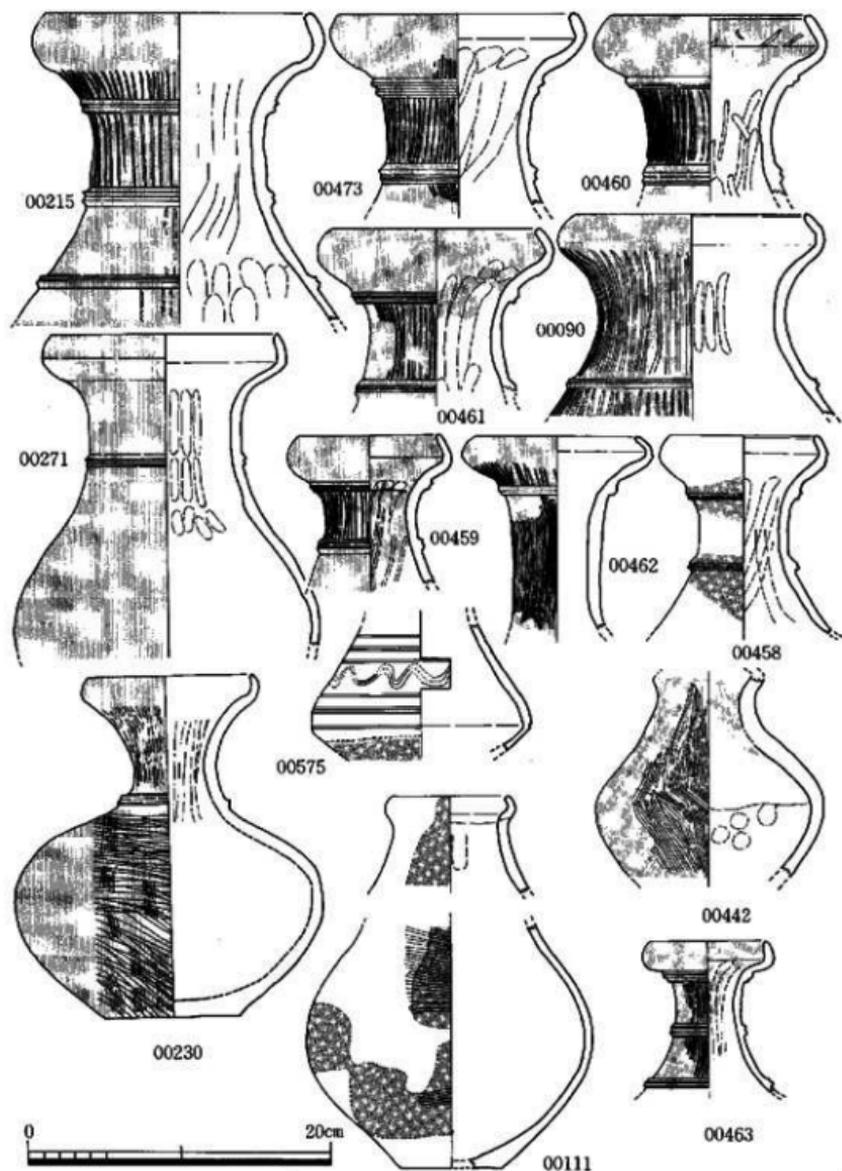
第70图 SD-100出土土器夹湖网-16 (缩尺1/4)



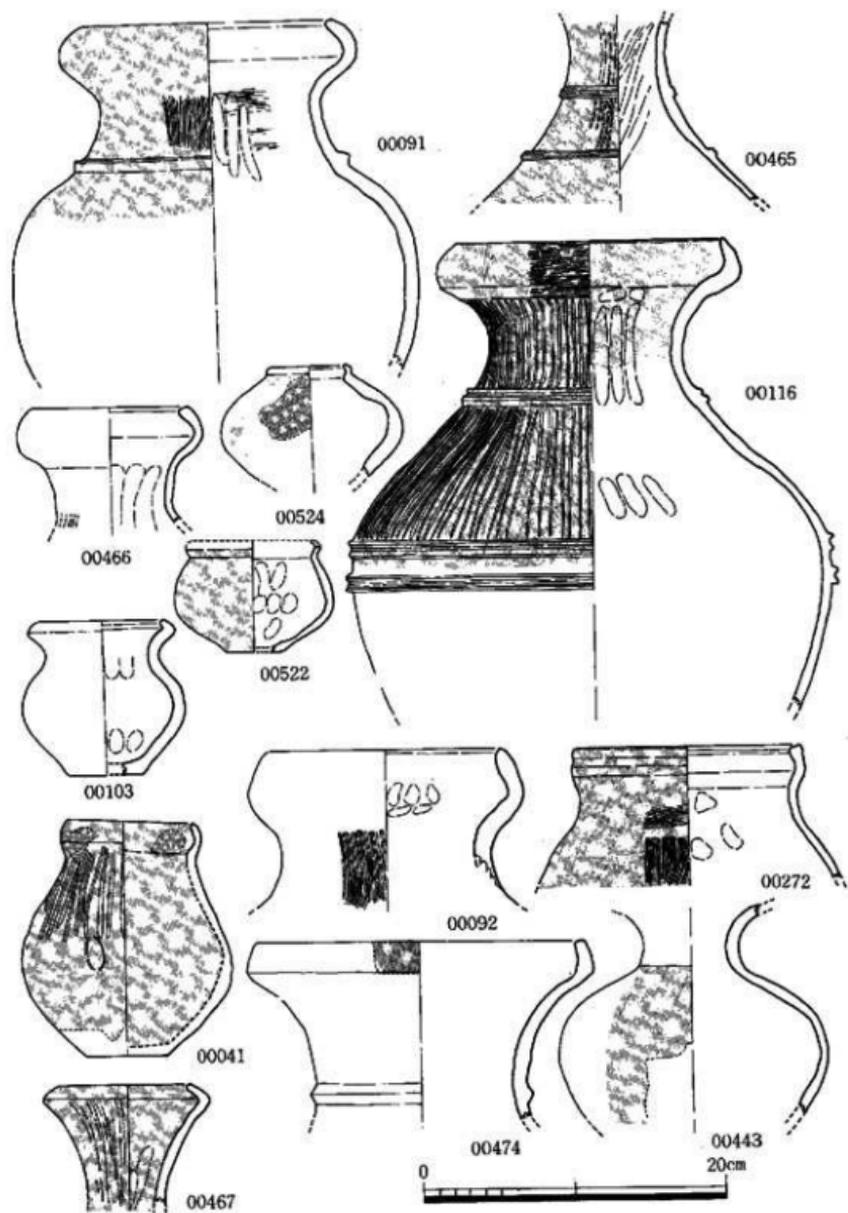
第71图 SD-100出土土器实测图-17 (縮尺1/4, 1/6)



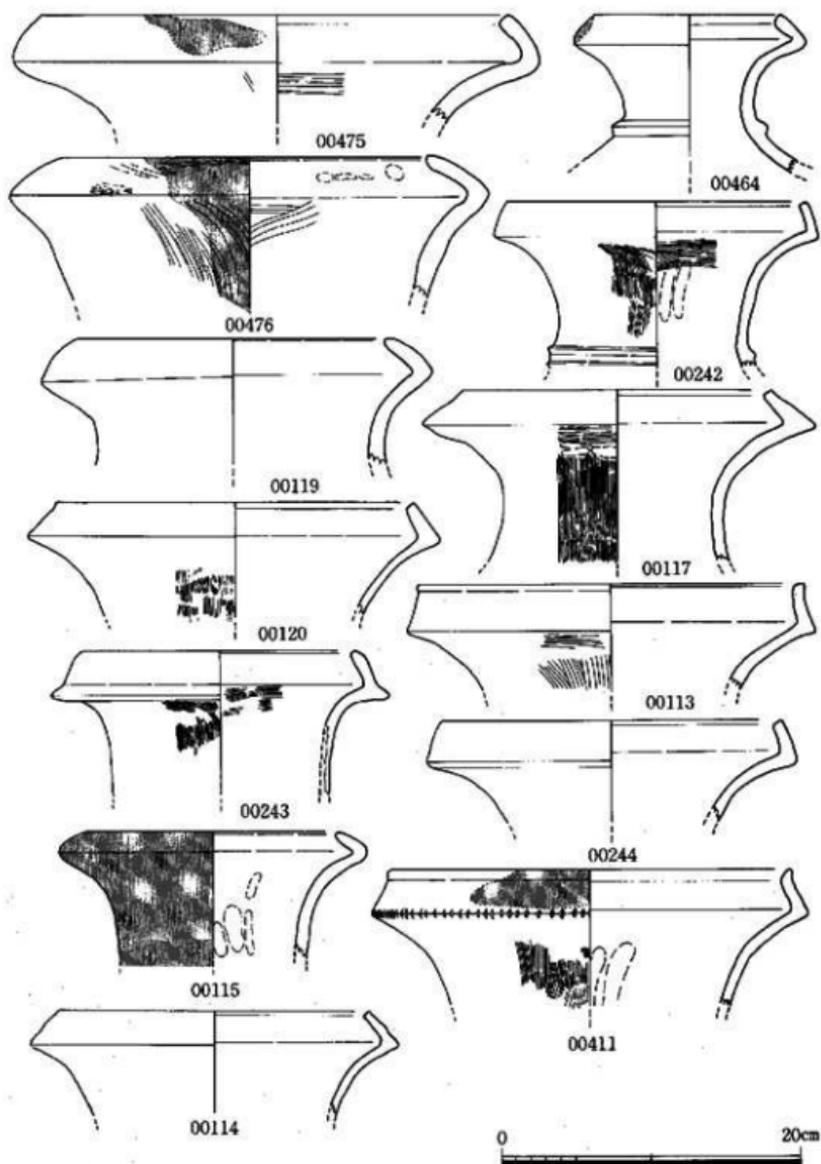
第72図 SD-100出土土器実測図-18 (縮尺1/4)



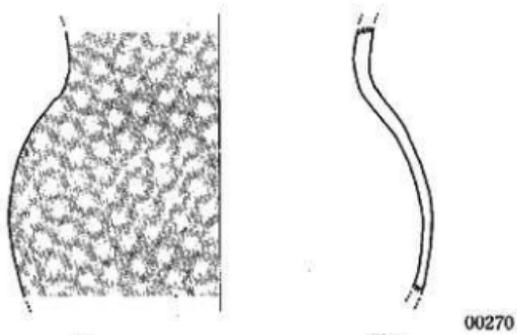
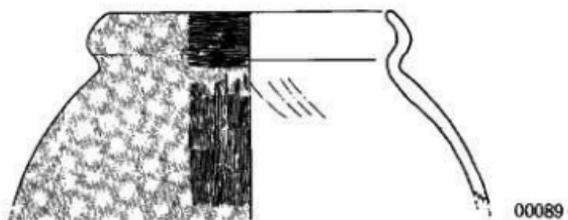
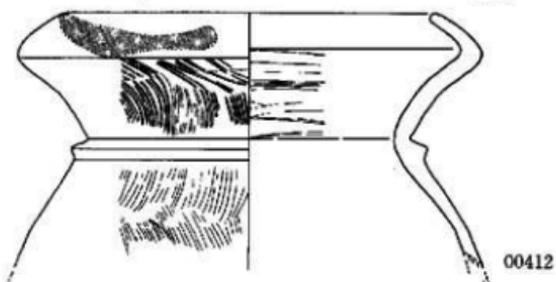
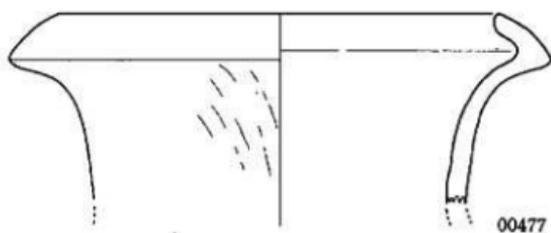
第73图 SD-100出土土器尖测图-19 (縮尺1/4)



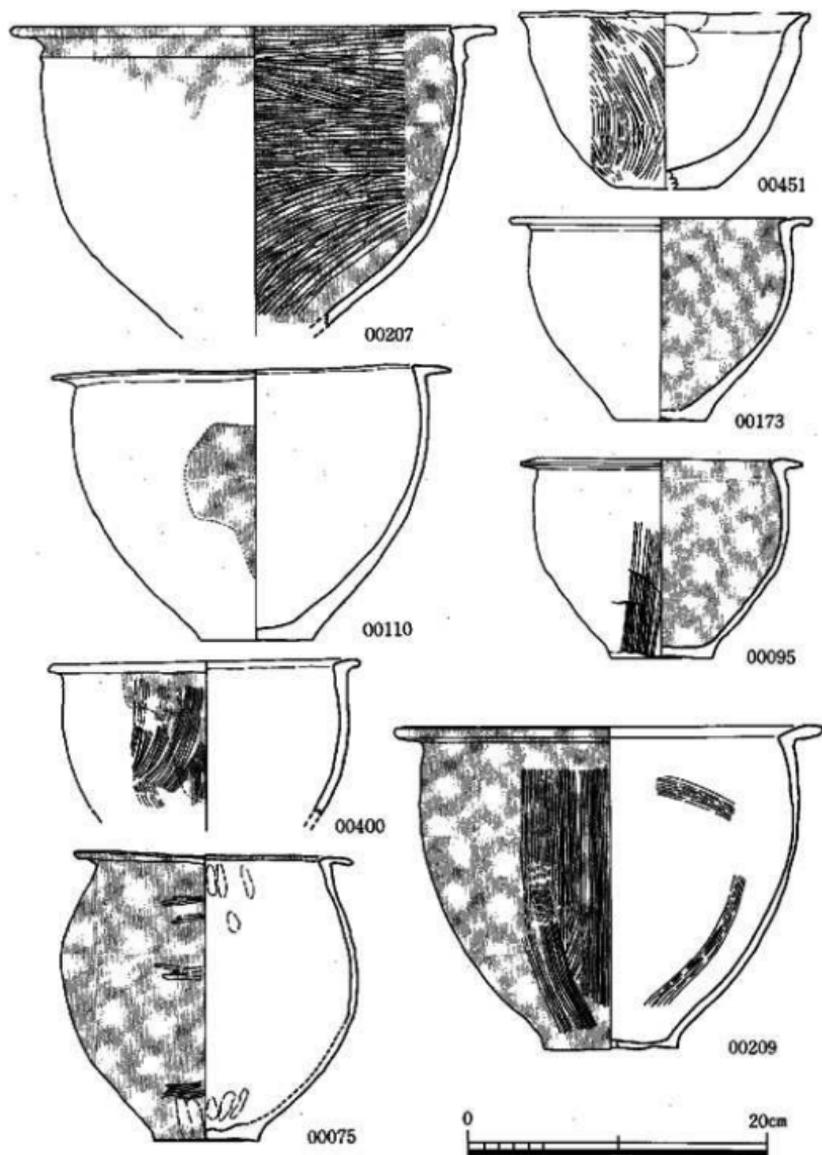
第74图 SD-100出土土器实测图-20 (縮尺1/4)



第75图 SD-100出土土器实测图-21 (縮尺1/4)



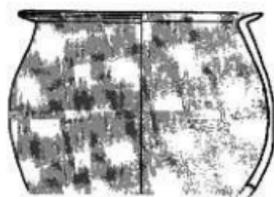
第76图 SD-100出土土器尖洲园-22 (縮尺1/4)



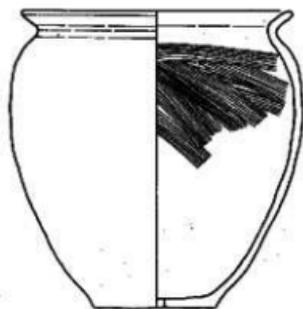
第77圖 SD-100出土土器実測図-23 (縮尺1/4)



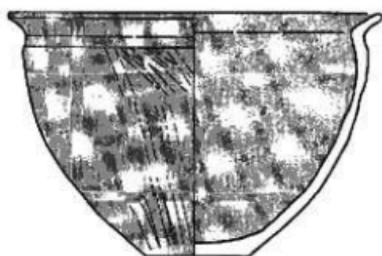
00122



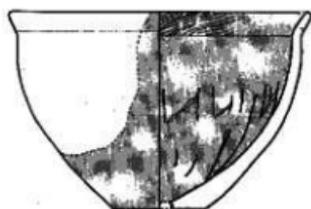
00143



00124



00096



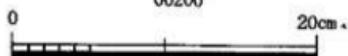
00038



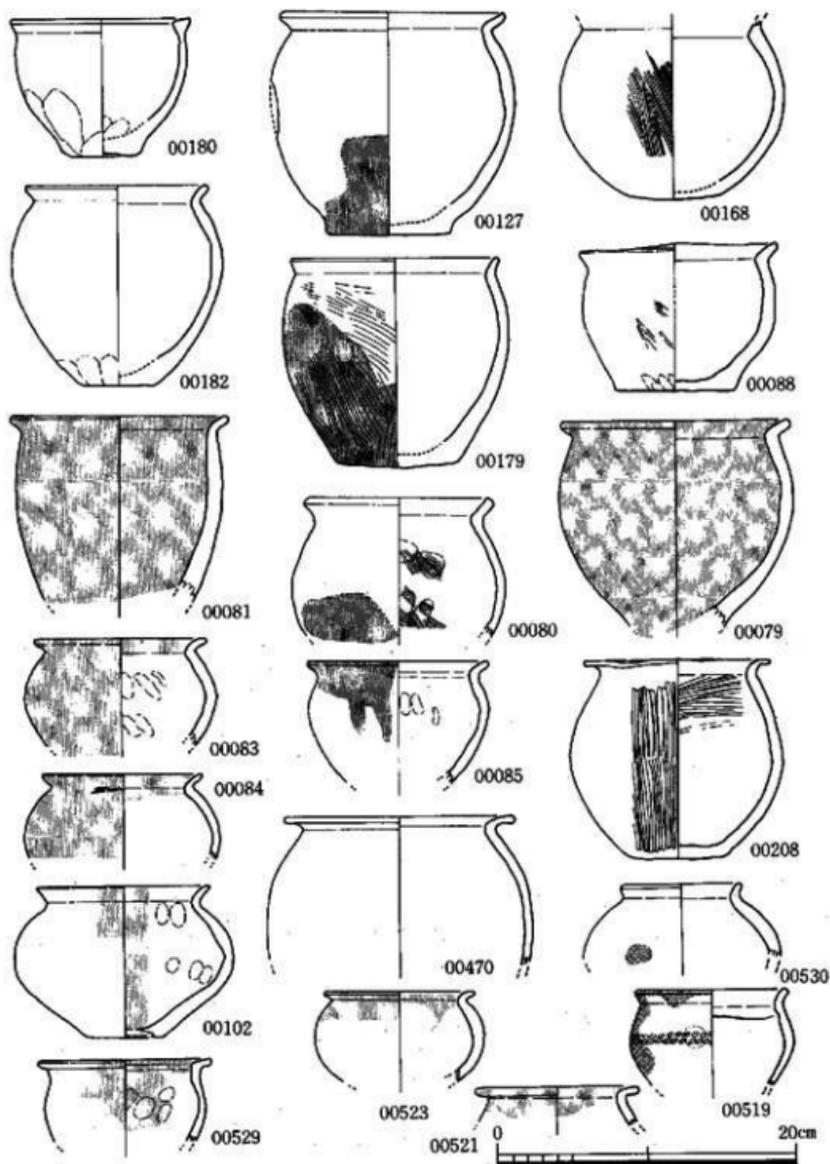
00174



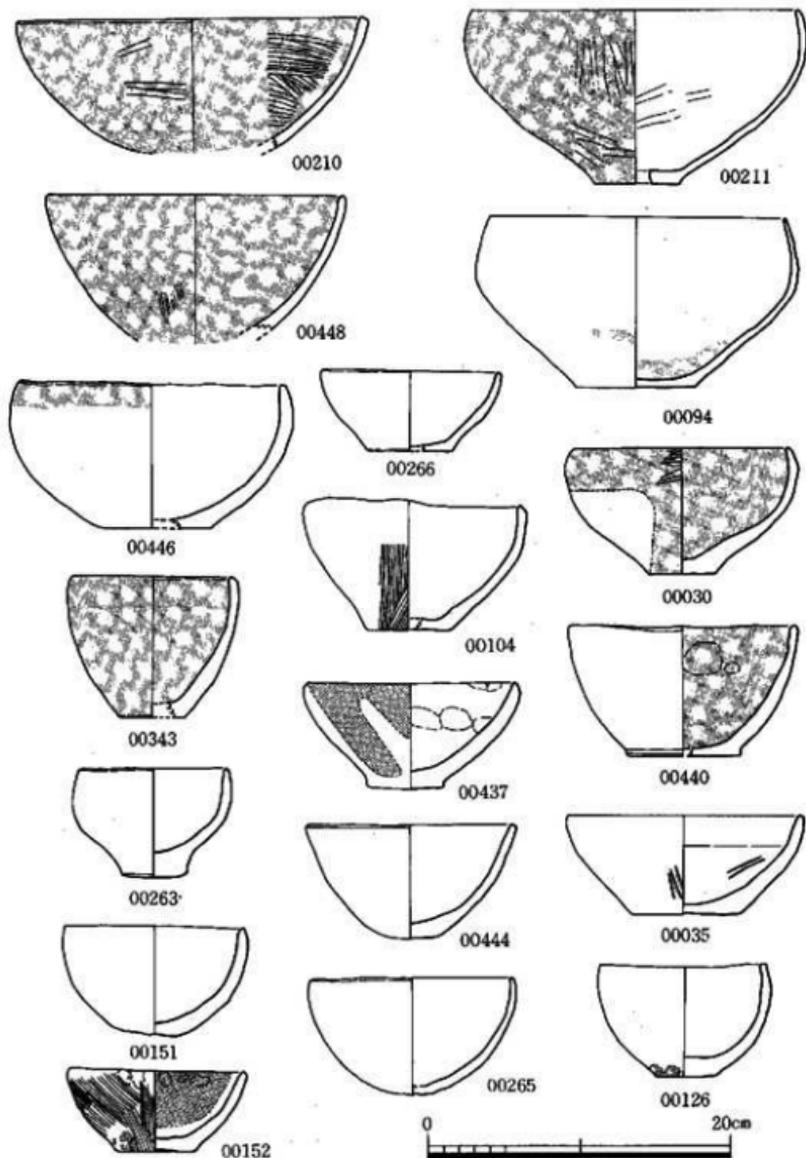
00200



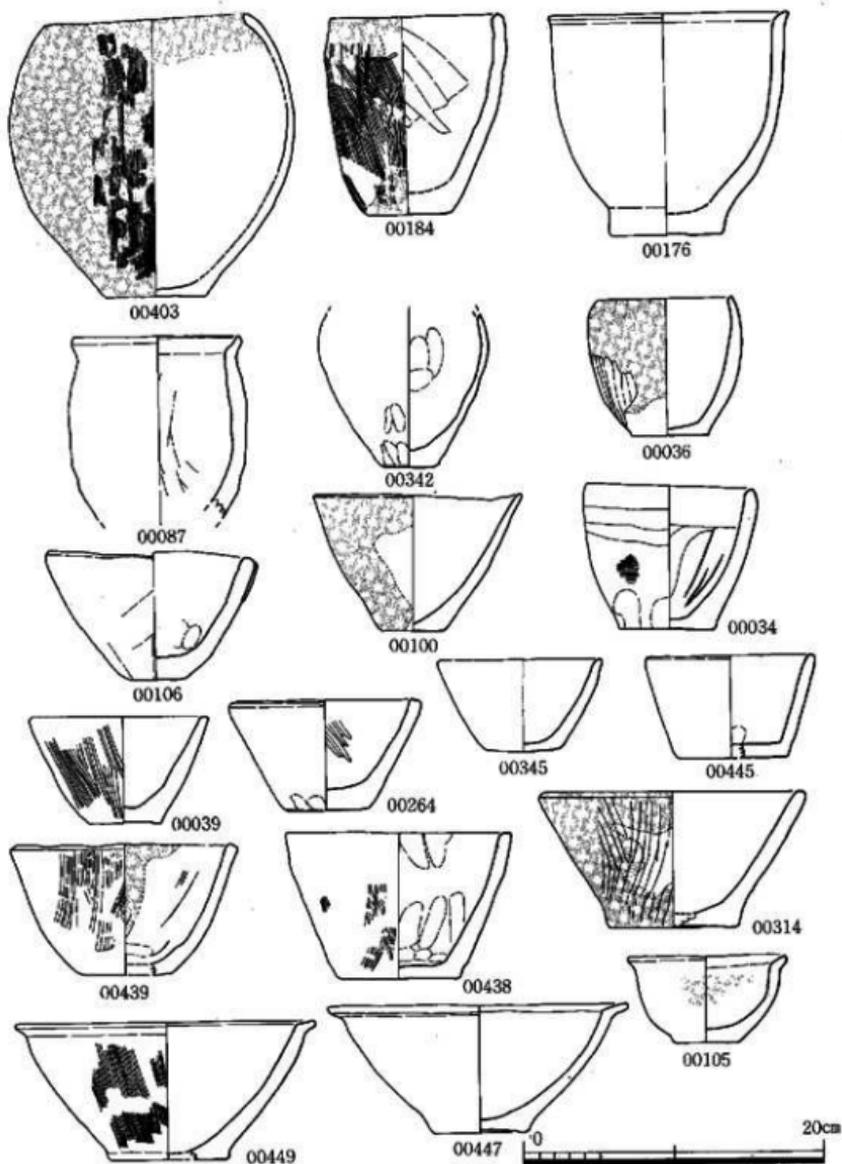
第78圖 SD-100出土土器実測図-24 (縮尺1/4)



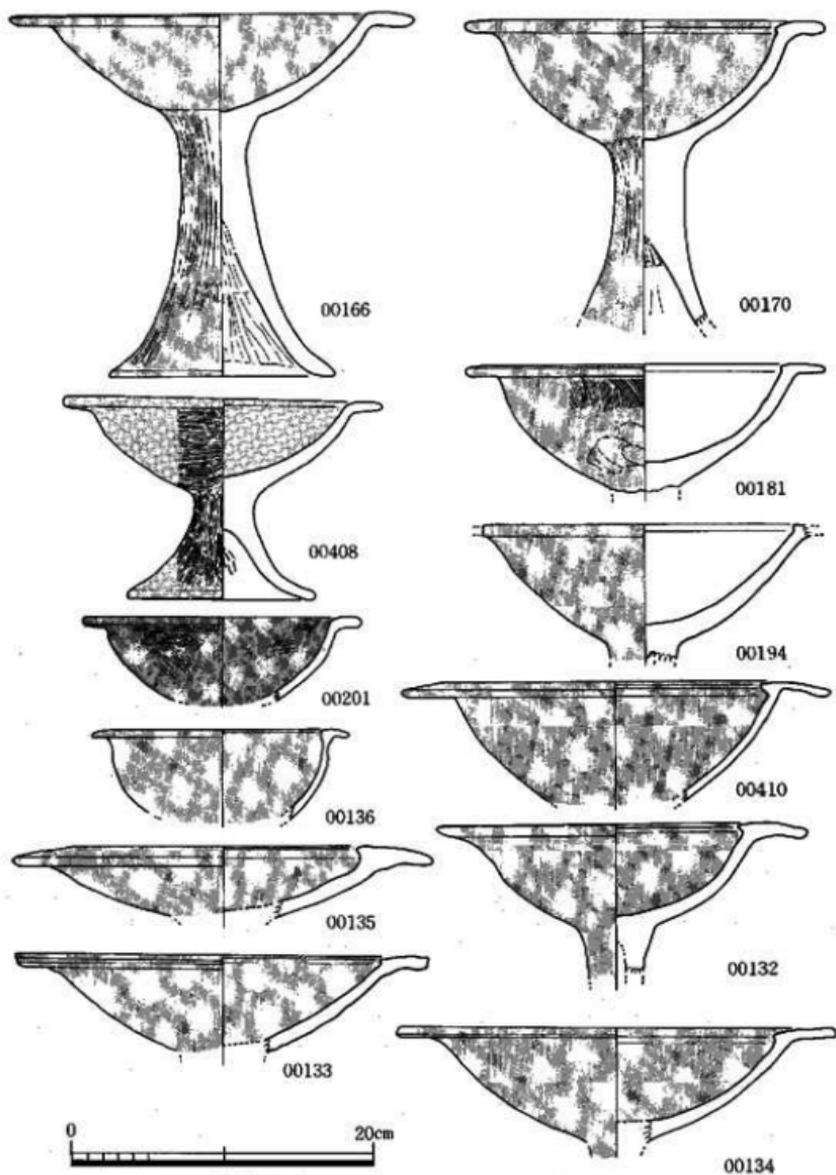
第79圖 SD-100出土土器實測圖-25 (縮尺1/4)



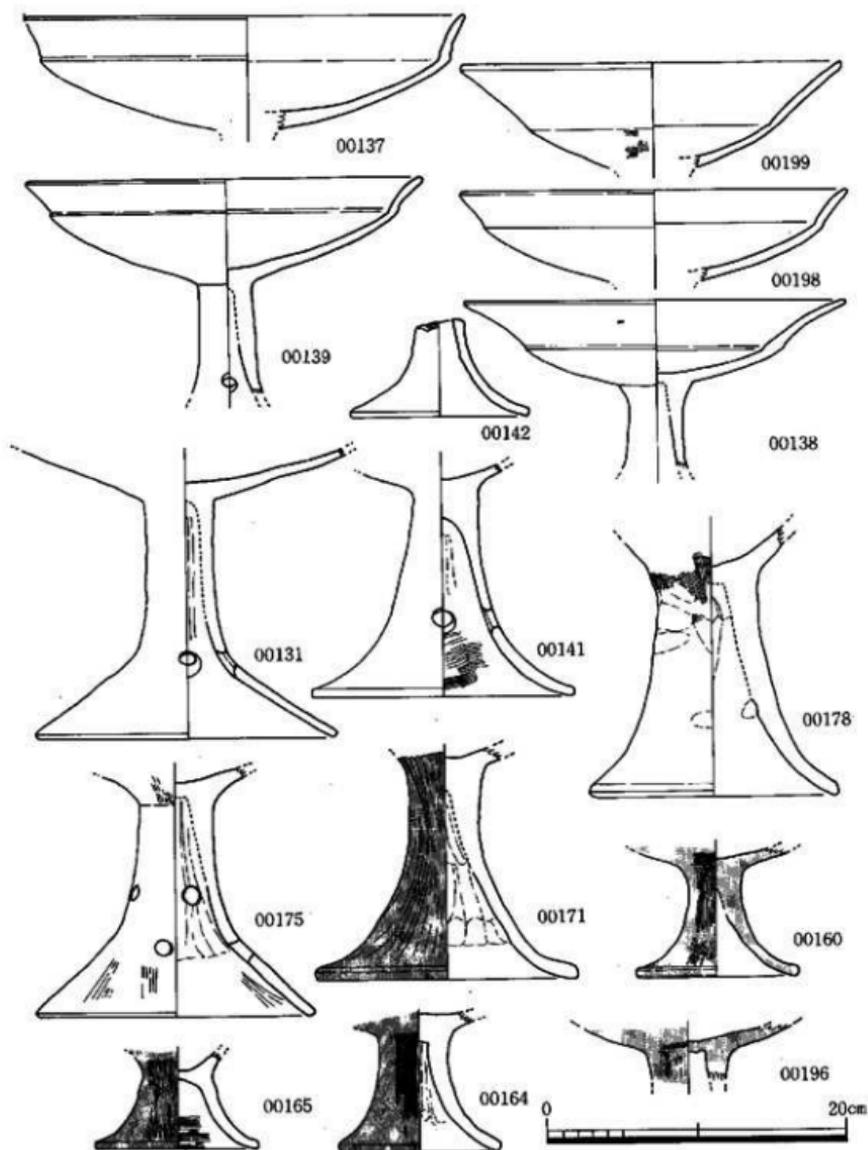
第30图 SD-100出土土器实测图-26 (縮尺1/4)



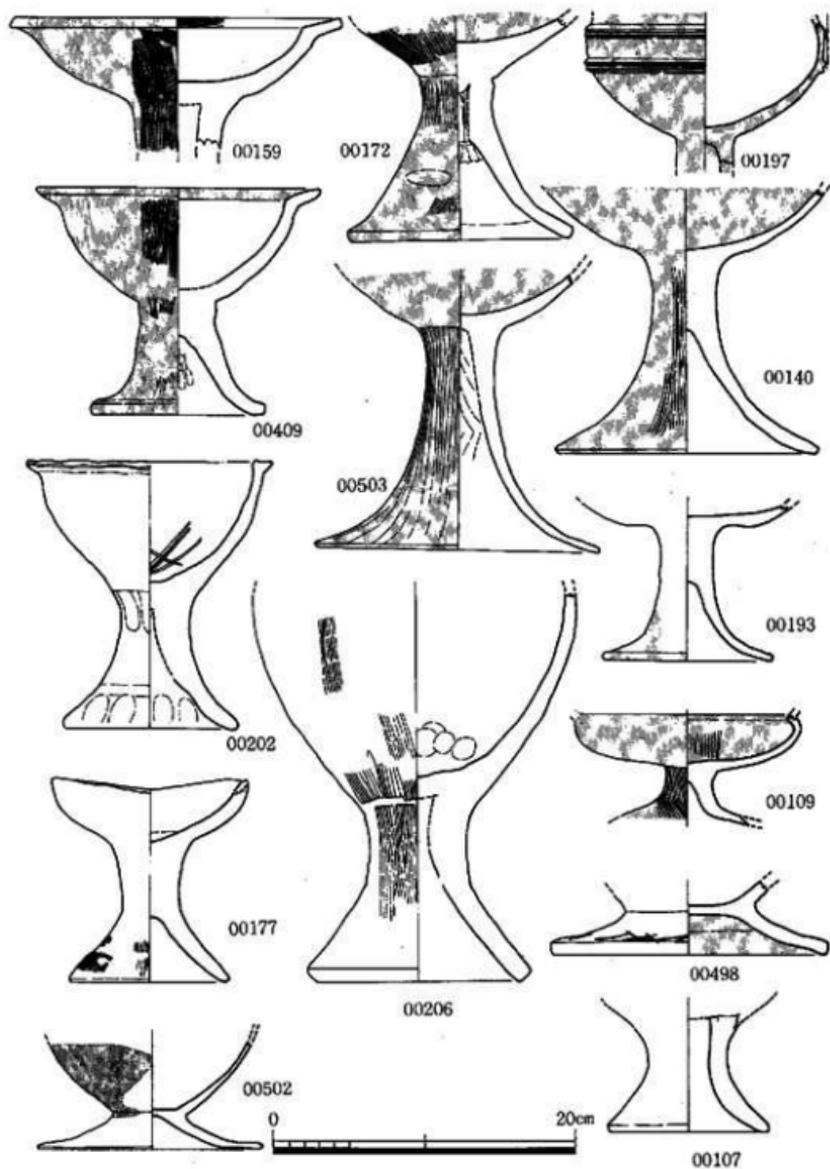
第81圖 SD-100出土土器実測図-27 (縮尺1/4)



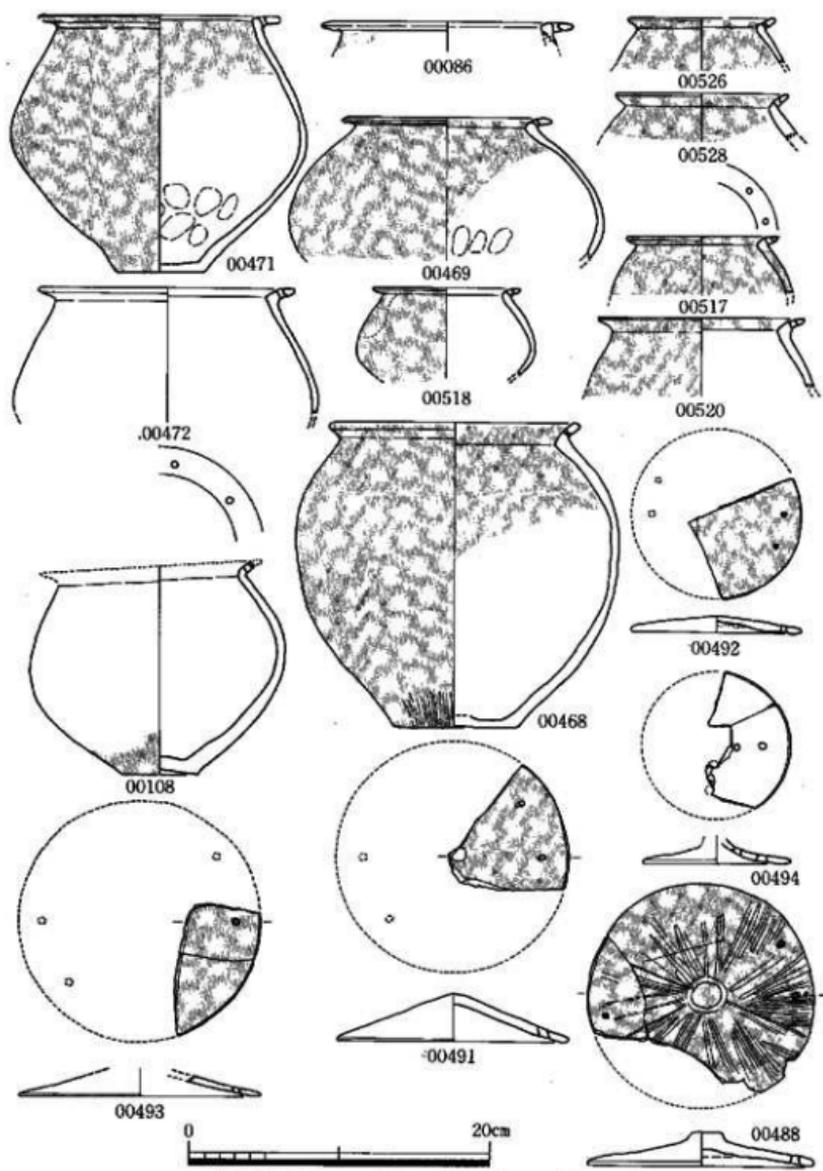
第82图 SD-100出土土器实测图-28 (缩尺1/4)



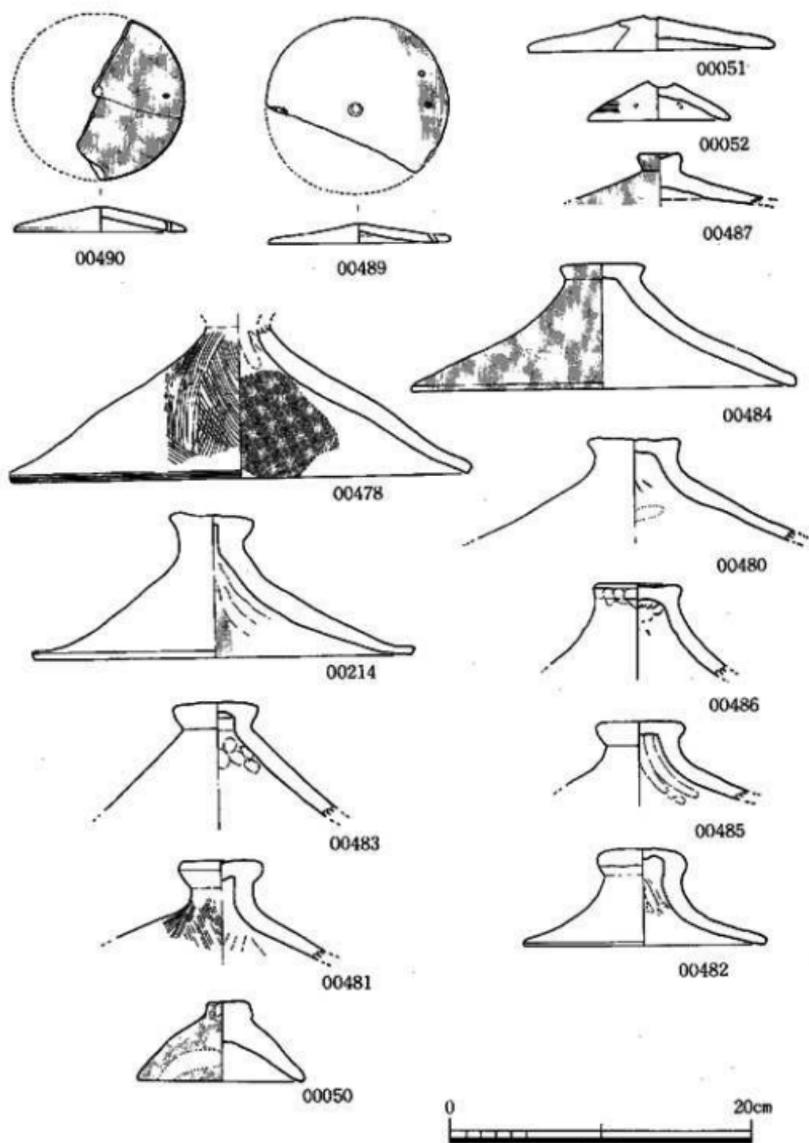
第83图 SD 100出土土器实测图-29 (縮尺1/4)



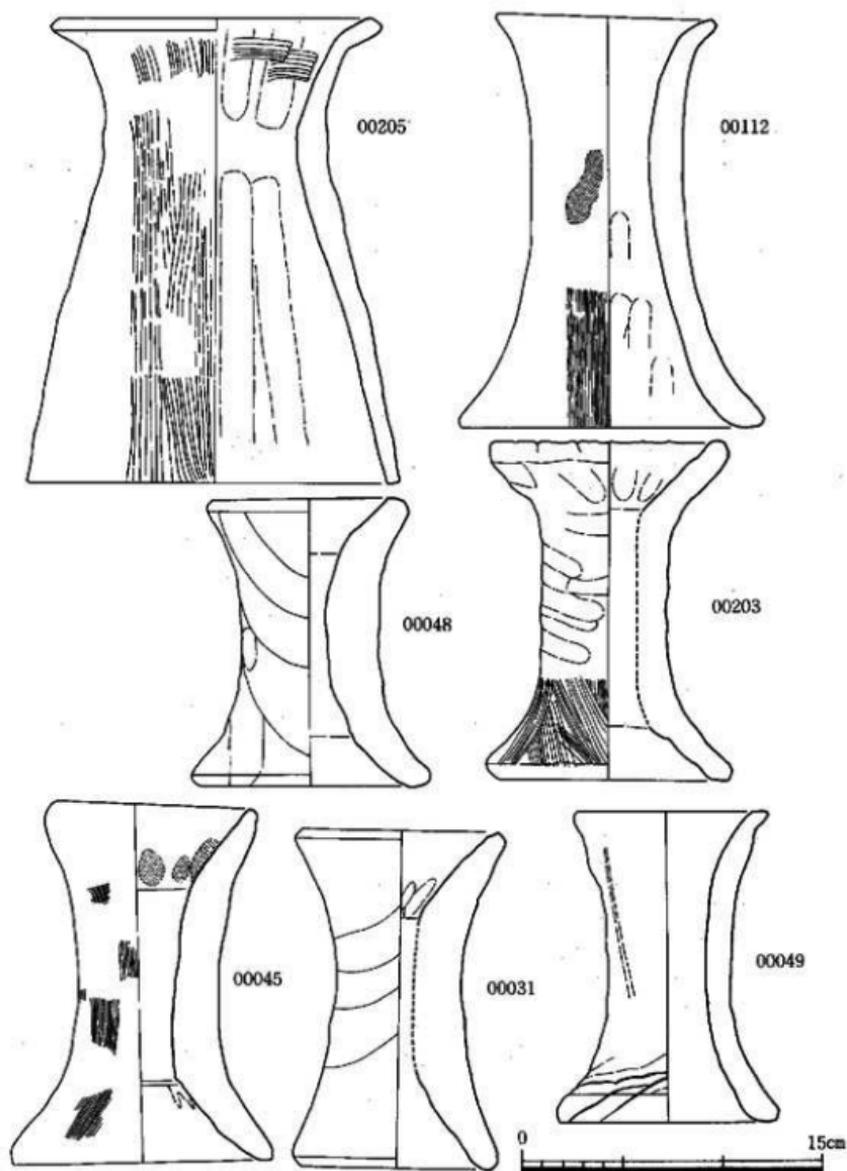
第84图 SD-100出土土器尖测图-30 (缩尺1/4)



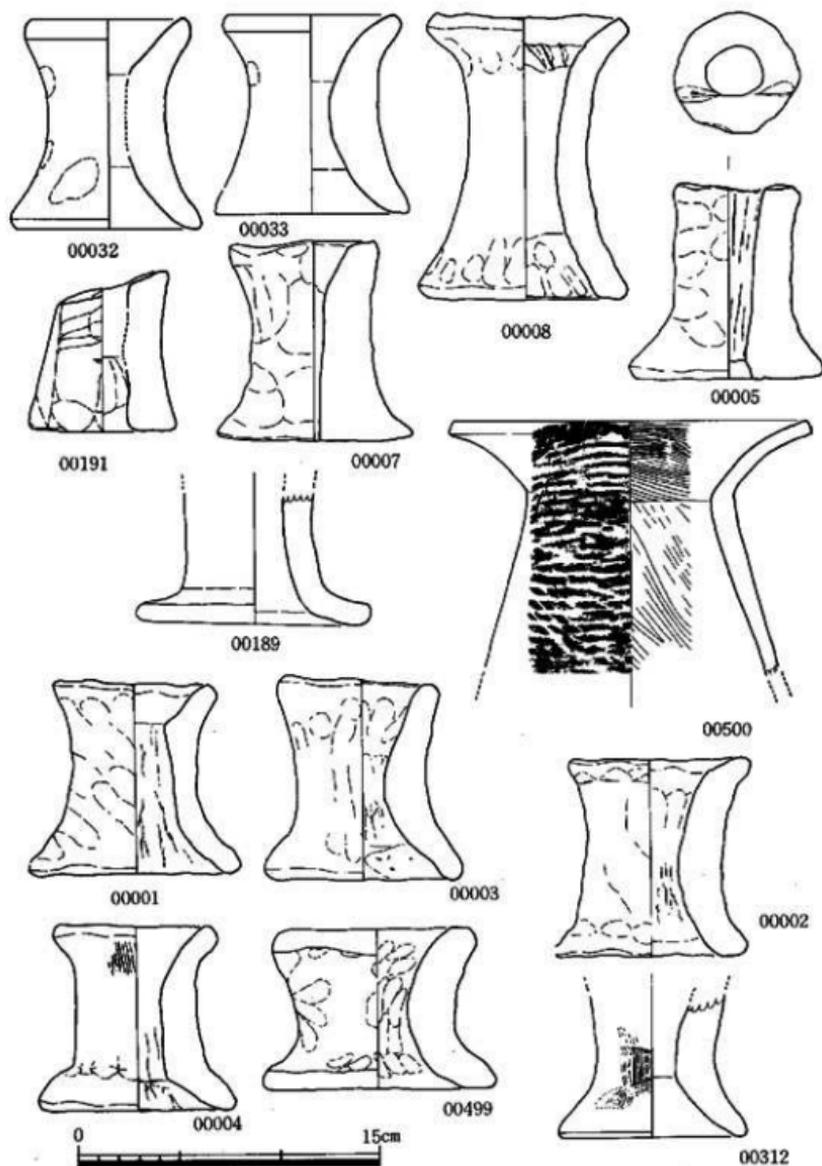
第85图 SD-100出土土器实测图-31 (缩尺1/4)



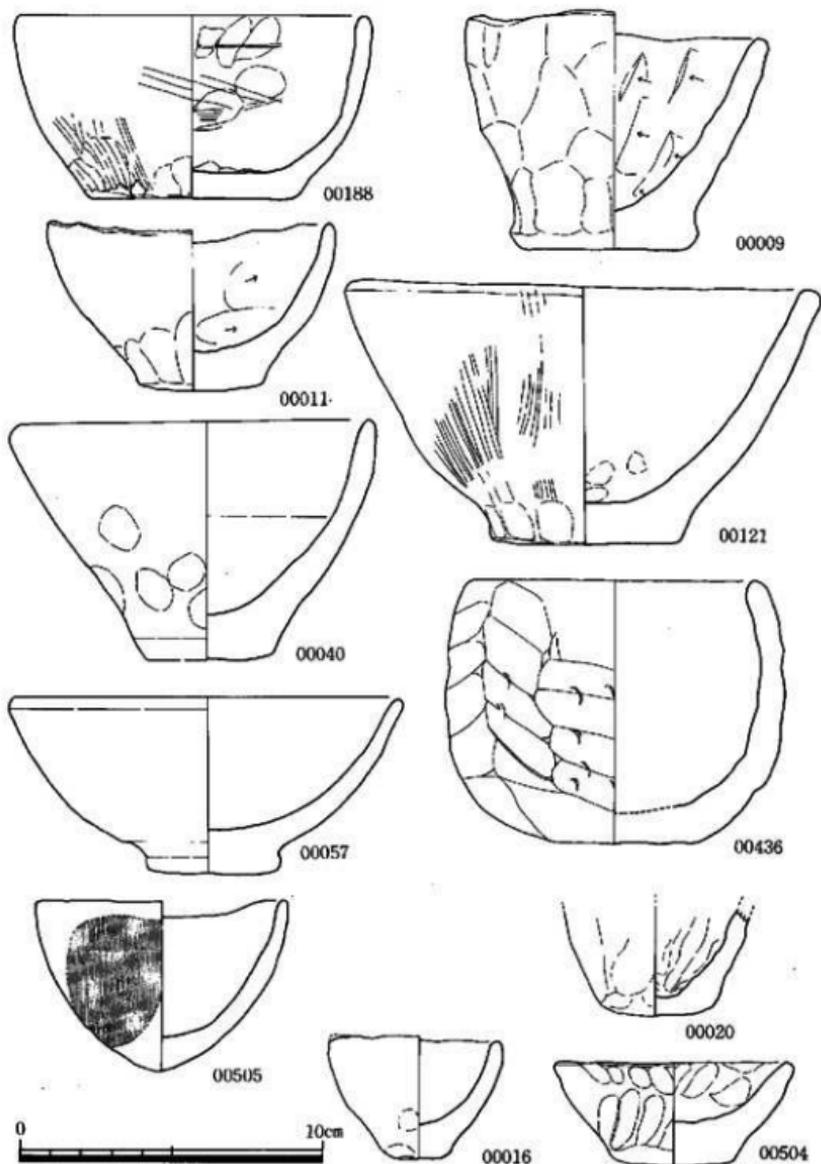
第86图 SD-100出土土器实测图-32 (縮尺1/4)



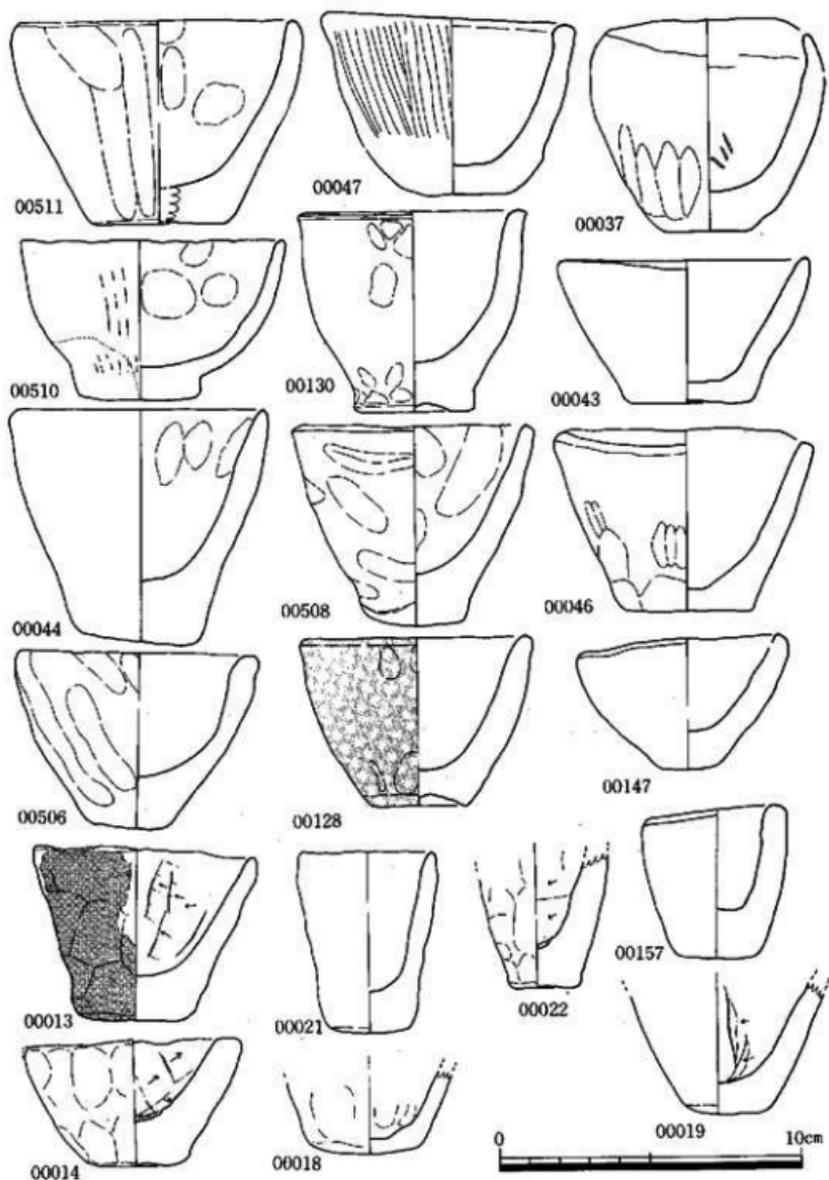
第87图 SD-100出土土器实测图-33 (缩尺1/3)



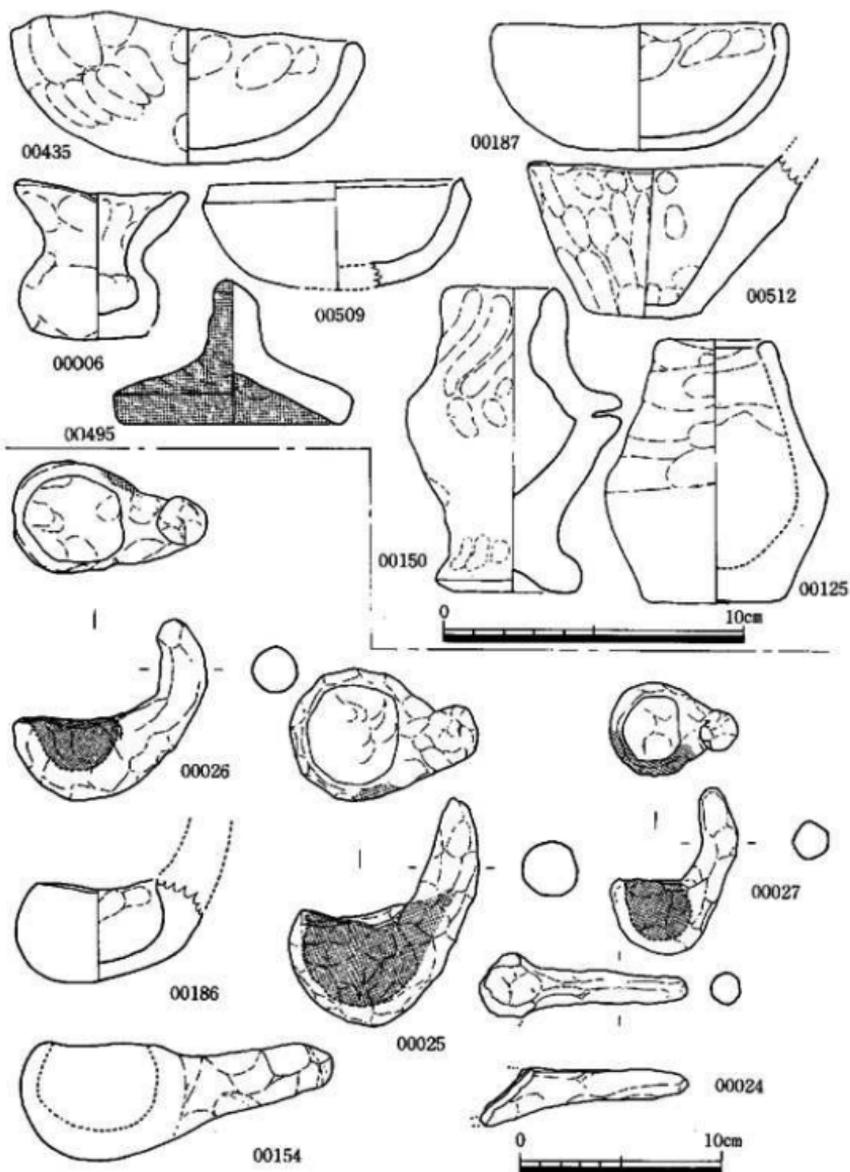
第88图 SD-100出土土器实测图-34 (缩尺1/3)



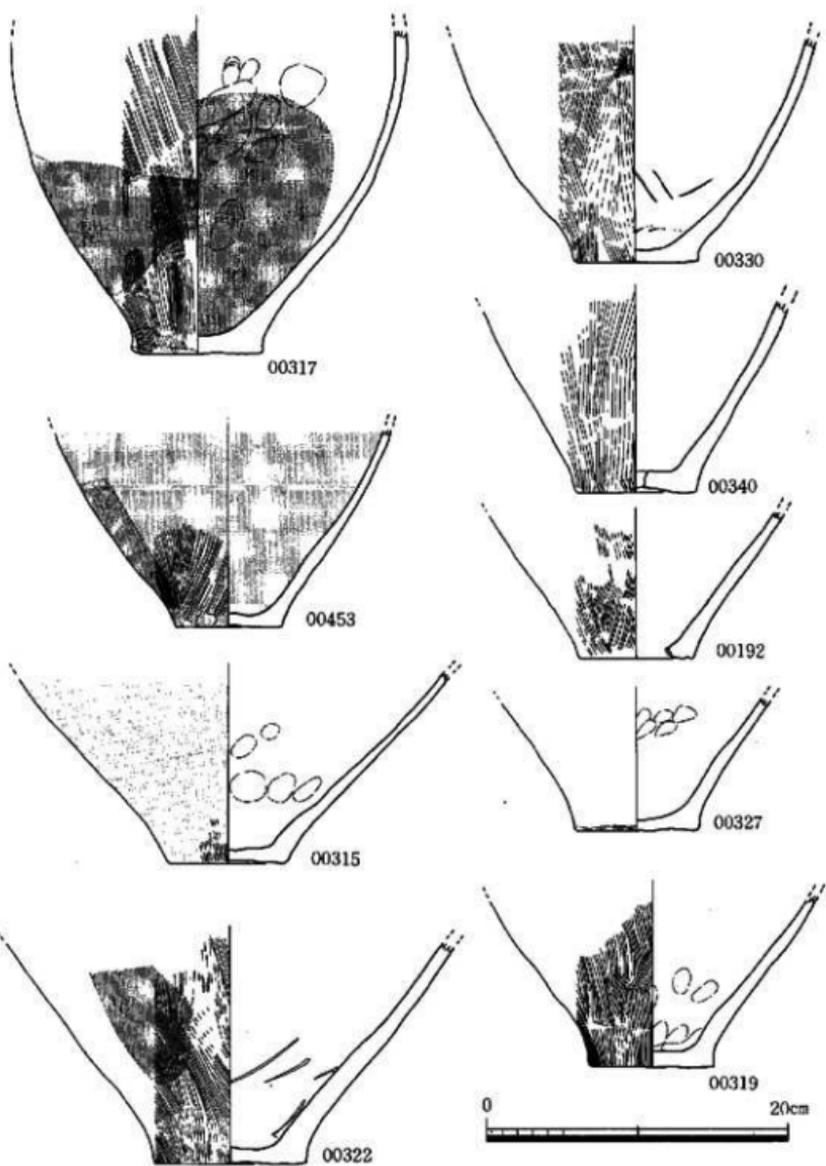
第89图 SD-100出土土器尖测图-35 (縮尺1/2)



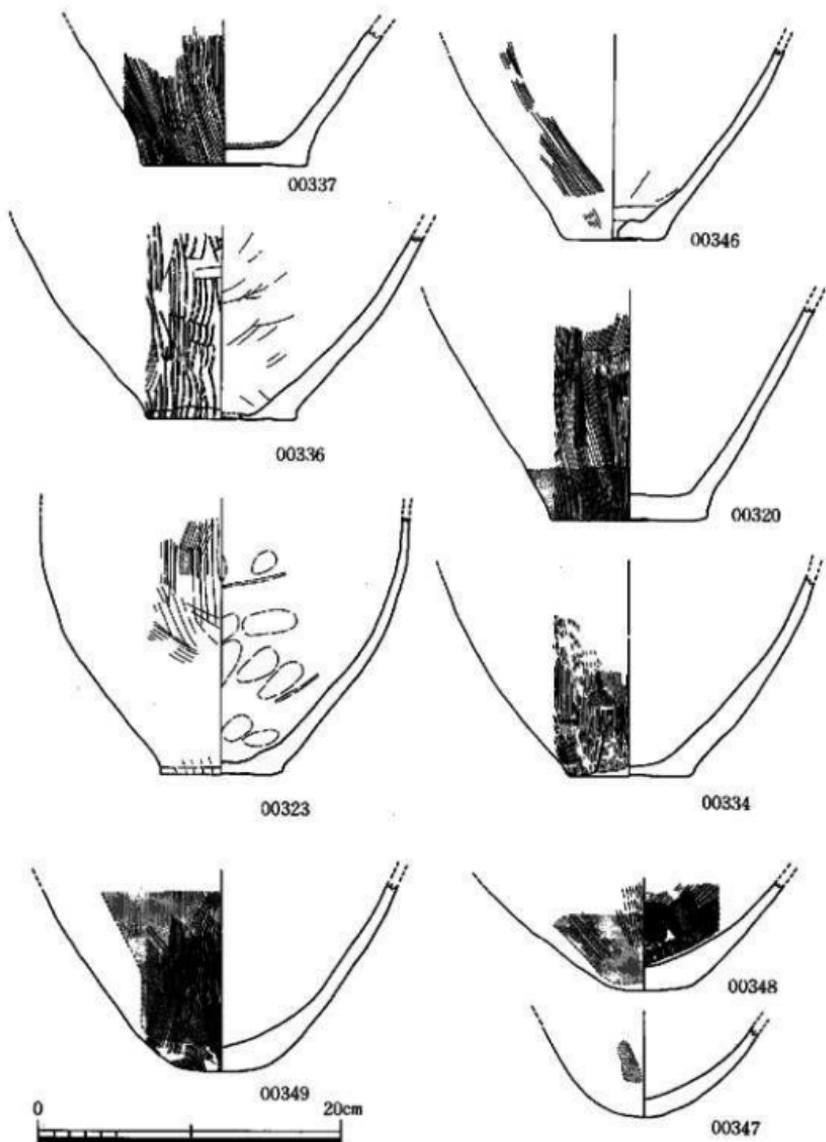
第90图 SD-100出土土器实测图-36 (縮尺1/2)



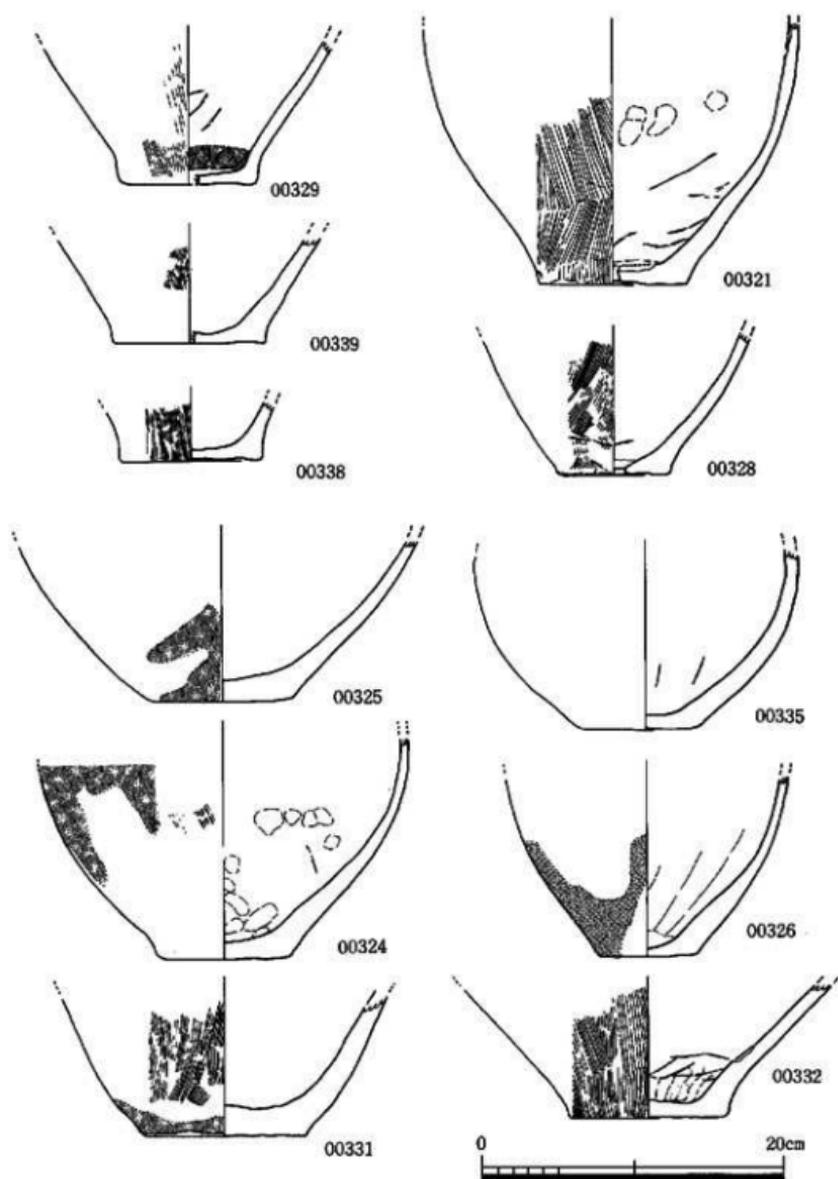
第91图 SD-100出土土器实测图-37(缩尺1/2、1/3)



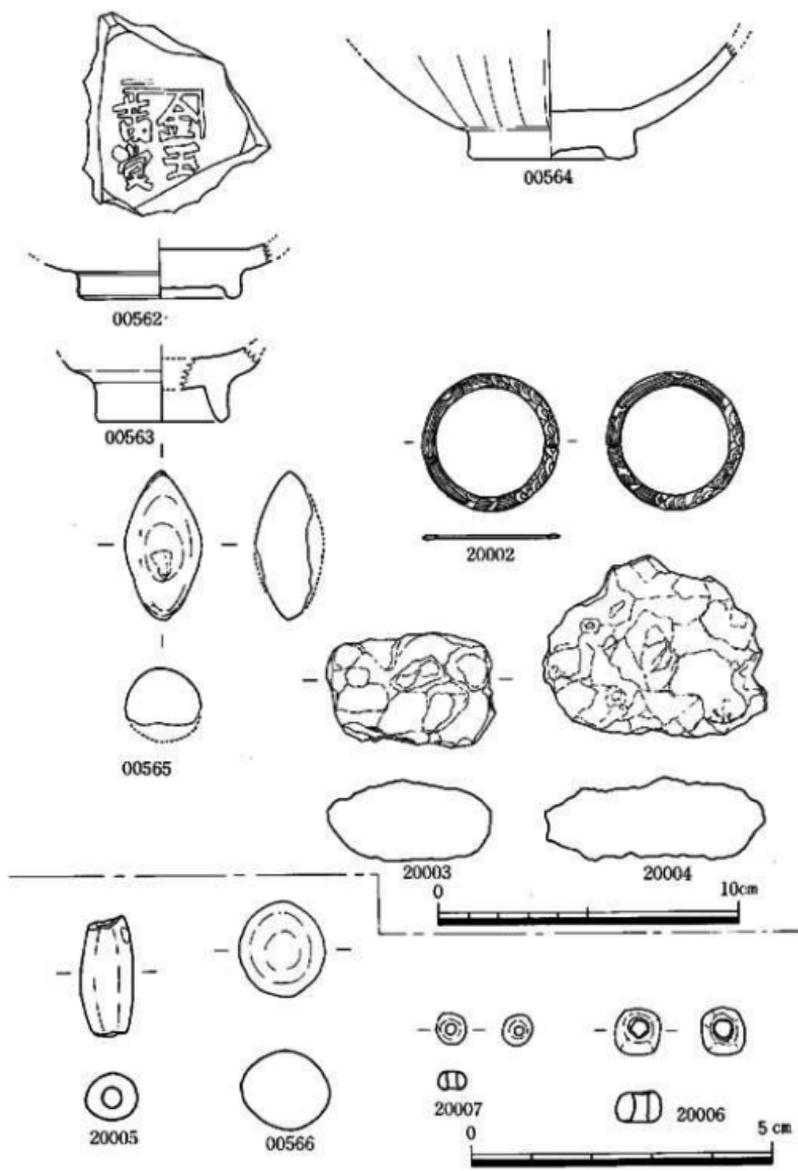
第92图 SD-100出土土器实测图-38 (缩尺1/4)



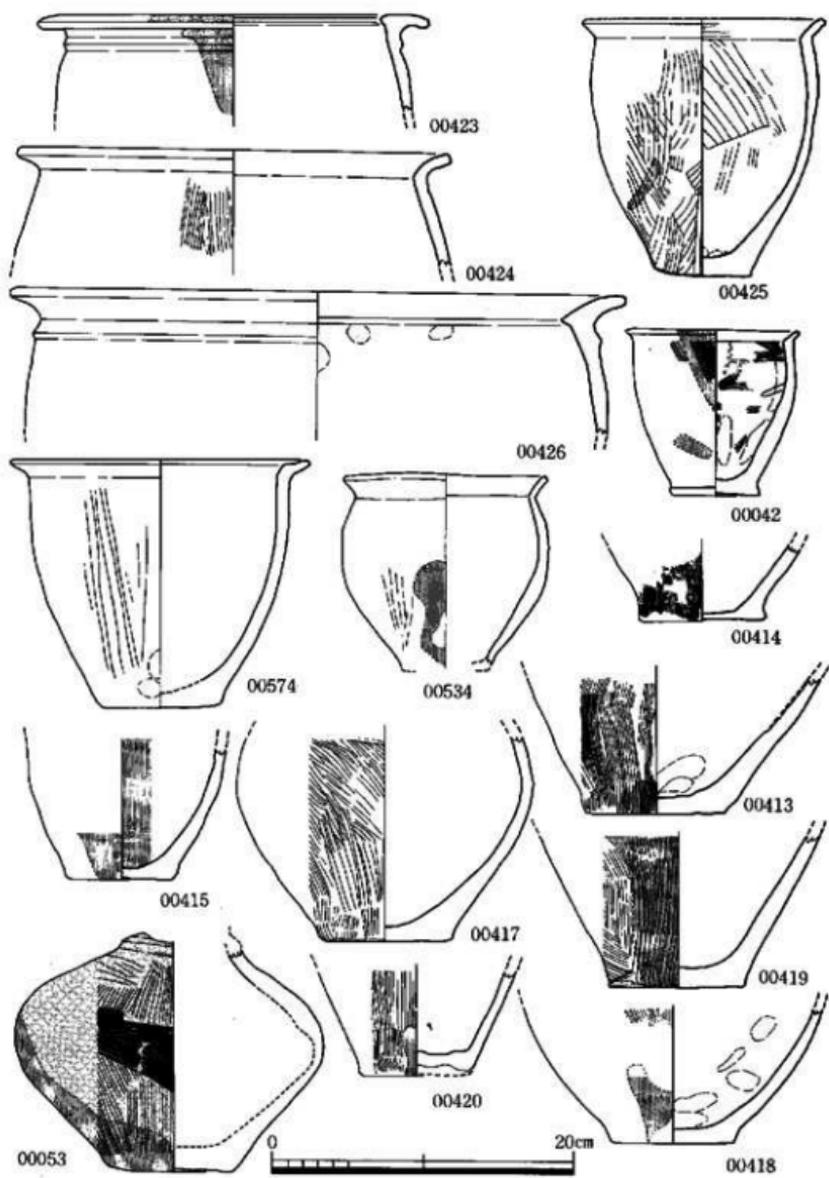
第93图 SD-100出土土器实测图-39 (缩尺1/4)



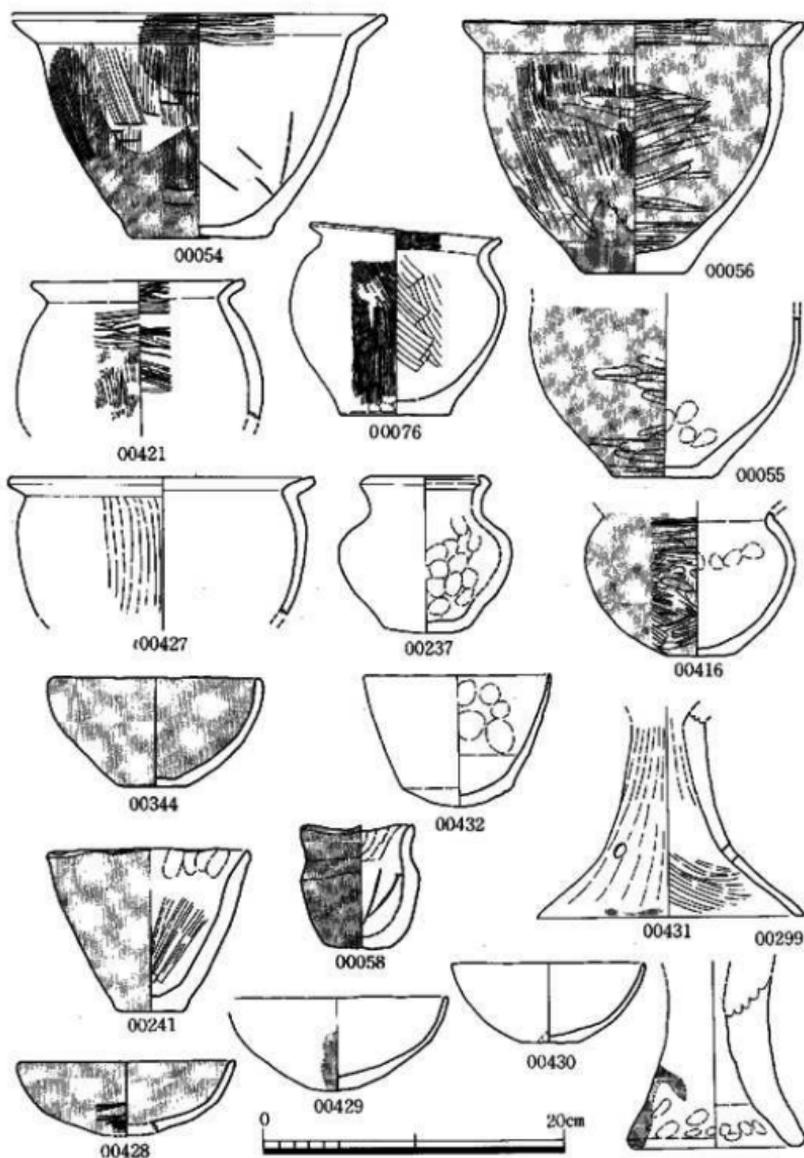
第94圖 SD-100出土土器実測圖-40 (縮尺1/4)



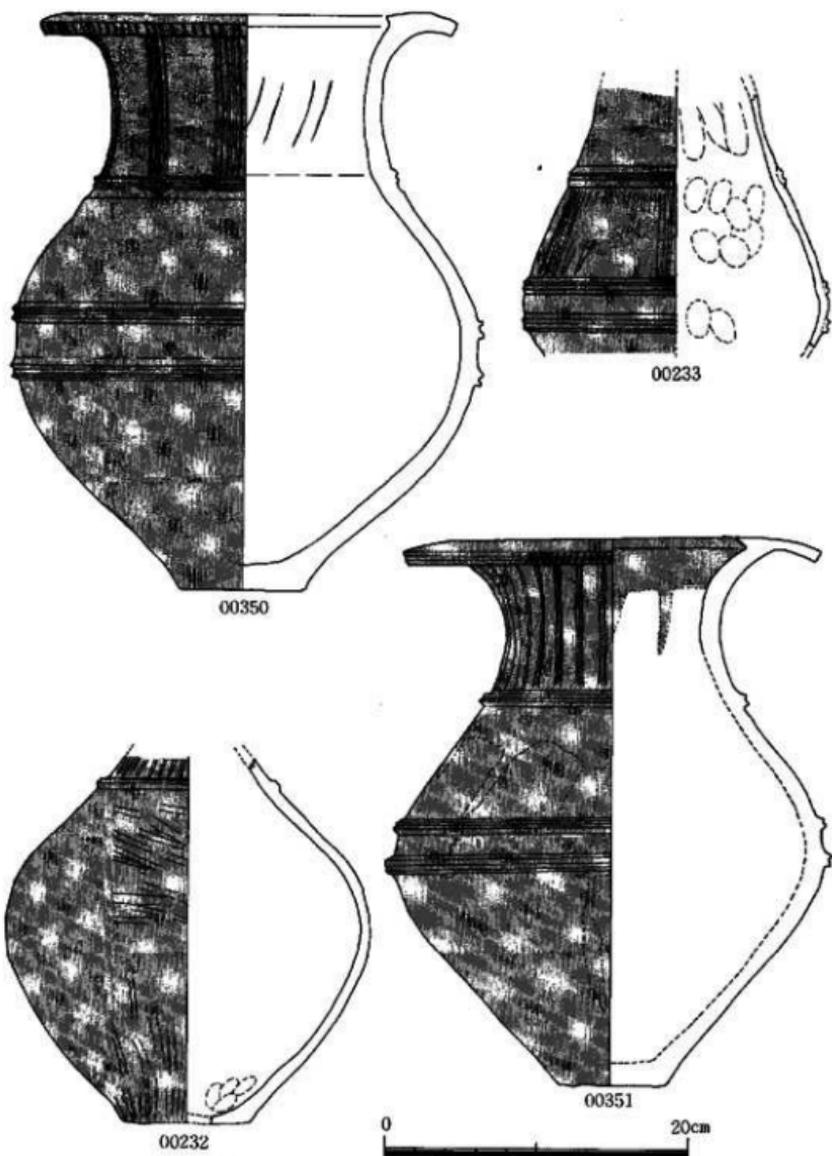
第95圖 SD-100、200Pit出土土器・鉄鐲・玉実測図(縮尺1/1、1/2)



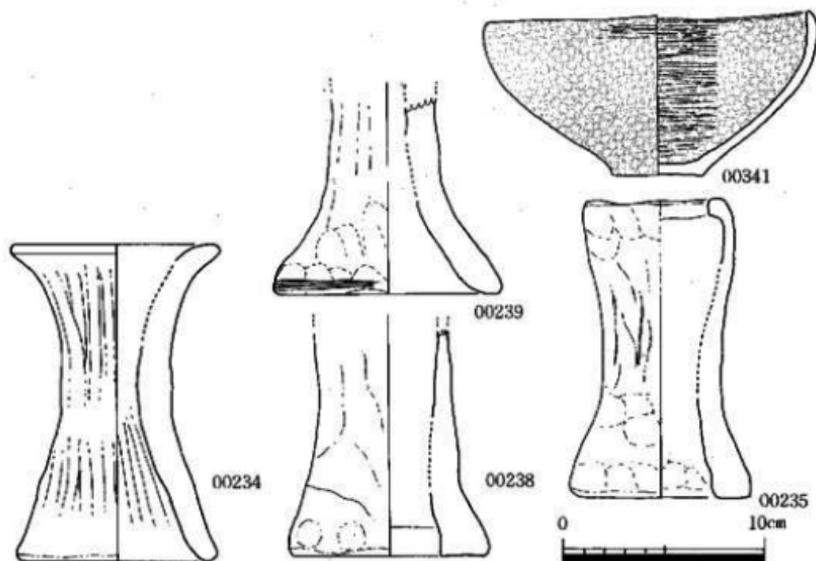
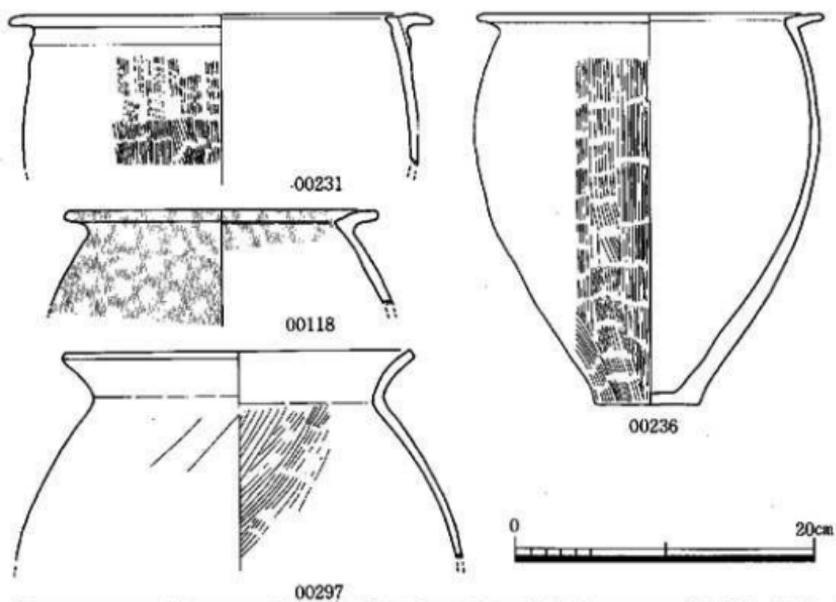
第96图 SD-50出土土器实例图-1 (缩尺1/4)



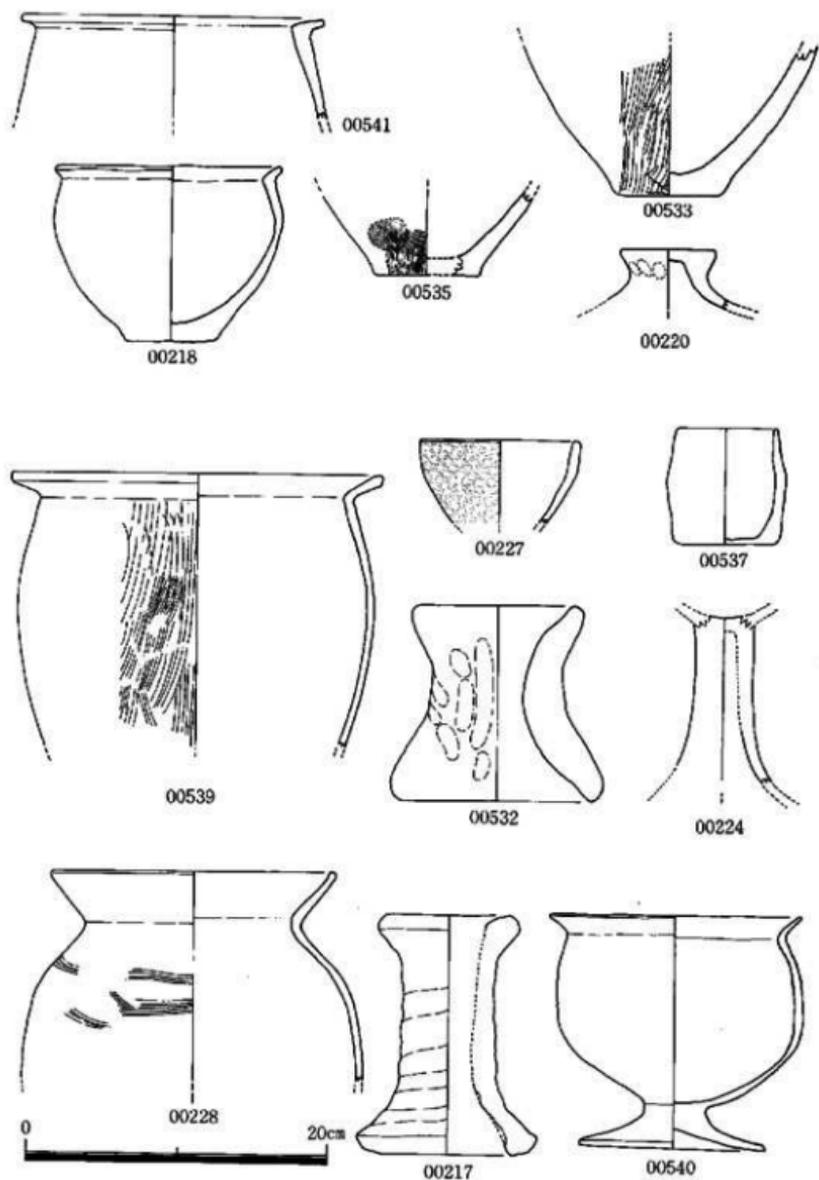
第97图 SD-50出土器实测图-2 (缩尺1/4)



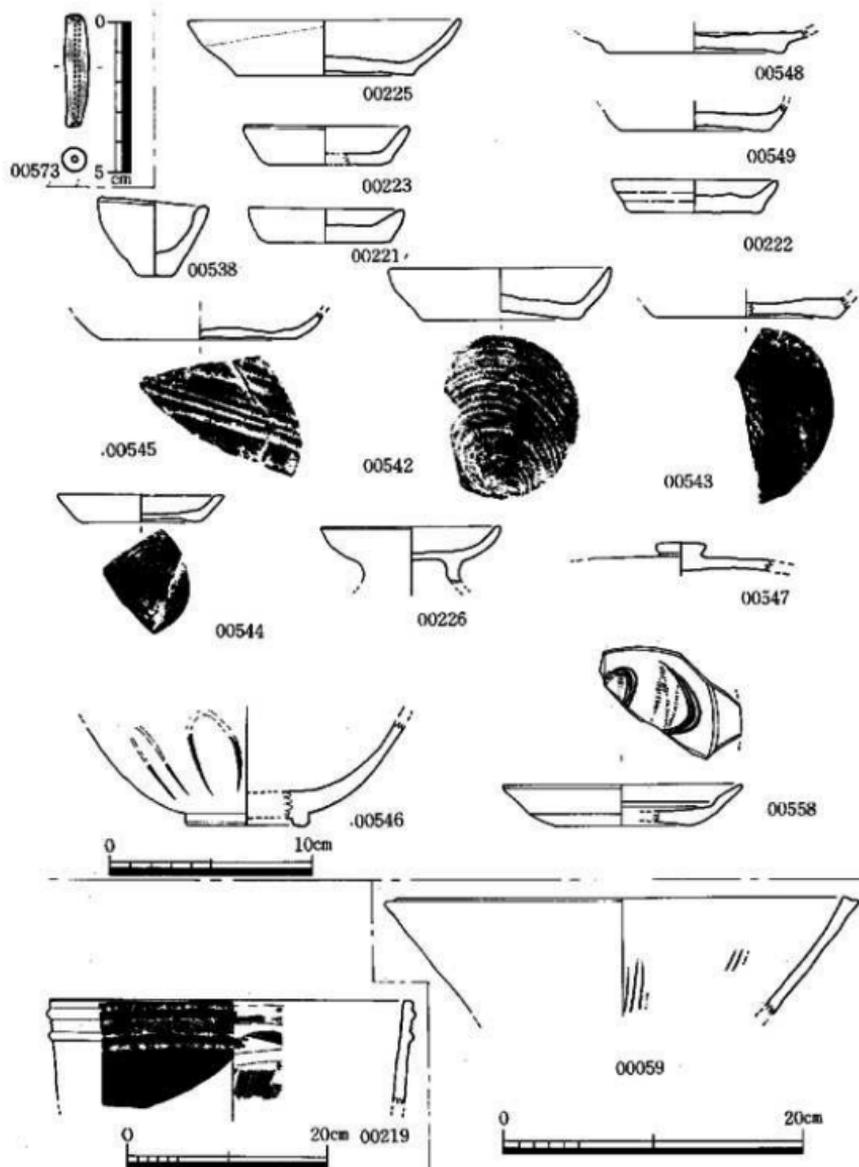
第98图 SE-01出土土器实测图-1 (缩尺1/4)



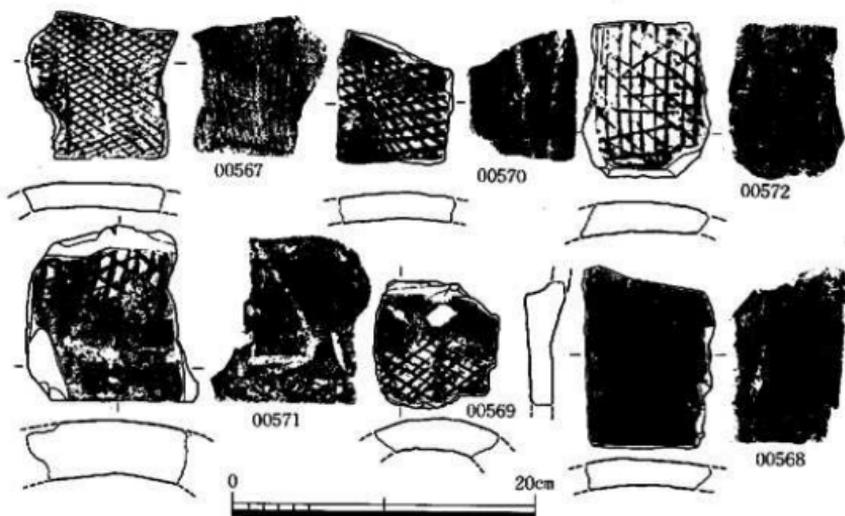
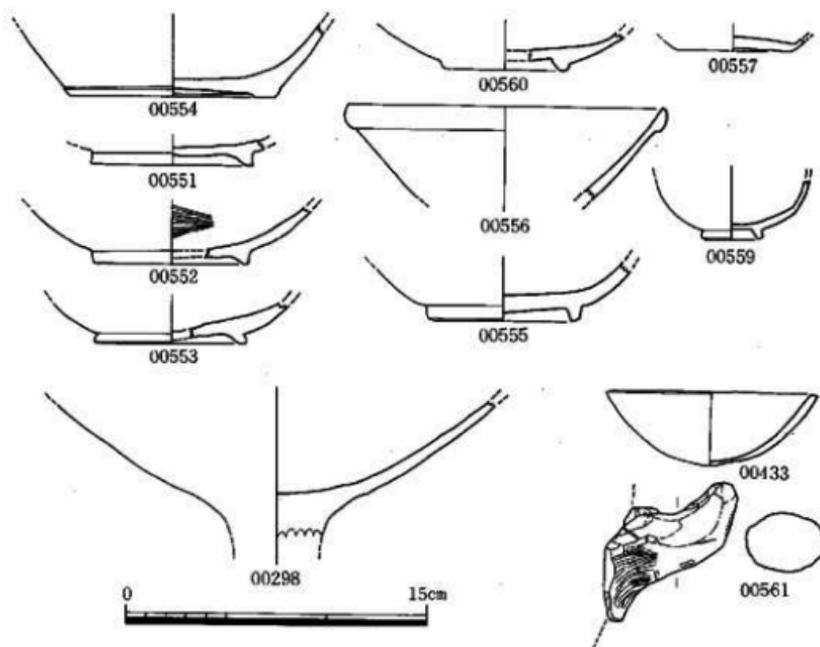
第99图 SE-01出土土器实例图-2 (缩尺1/3, 1/4)



第100圖 Pit內出土土器実測図-1 (縮尺1/4)



第101图 Pit内出土土器实测图-2 (縮尺1/2, 1/3, 1/4, 1/6)



第102圖 各SD出土上器実測圖 (縮尺1/3, 1/4)

器具番号	名称	容 積 (ml)			形式	内 容	出 入	備 考	備 考	器具種類	7号	PL	備 考	
		口 径	高 度	容 積										
20	検水筒		10.0	5.0										
21	×		10.0	2.0		1.5m以内用 1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	50-100	検水筒			内装あり	
22	×		6.0	2.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	×	45		内装あり	
23	器		9.0	3.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	50-100	検水筒			内装あり	
24	器	20.0	15.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	50-100	検水筒			内装あり	
25	×		6.0	4.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	×			内装あり	
26	×		12.7	17		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	×			内装あり	
27	手づり山土器	12.0	6.0			1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	400				
28	器	7.0	6.0			1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	50-100	1700	47			
29	器	21.0	10.0			1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	50-100	1800				
30	器	19.0	10.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	50-100	1800				
31	×		21.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	×				
32	×		27.0	15.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	500				
33	×		26.0	15.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300				
34	×	20.0	20.0	20.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	500	42			
35	×	検水筒	10.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	100	42			
36	×			1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300	42			
37	×			1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300	42			
38	×			1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300	42			
39	×	17.0	10.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300				
40	×	27.0	10.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300				
41	×	20.0	10.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300	46			
42	×	20.0	10.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300				
43	×	27.0	10.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300				
44	器	21.0	6.0	20.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	470	45			
45	器	10.0	6.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	170	×			
46	×	22.0	2.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	570				
47	器	10.0	2.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	50-100 50-110-1 5号用	500	42		内装あり	
48	×	27.0	2.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	570	×			
49	器	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	50-100	700			内装あり	
50	器	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	×	48			
51	器	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	×	×		内装あり	
52	器	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	600			内装あり	
53	器	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	700			内装あり	
54	×	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	×	×		内装あり	
55	器	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	×	×		内装あり	
56	器	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	600			内装あり	
57	器	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	500	46			
58	器	12.0	0.0	0.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	700	×		内装あり	
59	×	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	300	45		内装あり	
60	×	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	50-100	2号	730		内装あり
61	×	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	50-100	140		内装あり	
62	×	10.0	1.0	10.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	500	46			
63	器	20.0	1.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	600			内装あり	
64	×			1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	700	47			
65	器	17.0	10.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	500				
66	×	27.0	10.0	1.0		1.5m以内用	1.5m以内用	検水筒、検水筒	×	500				

Tab. 12 出土土器一覽表 - 2

録音機番	原簿	原簿(冊)			形式	名称	巻数	巻表	演奏	出注	Pq	尺	備考
		収録	収録	収録									
1470007	原簿												
206	+	193.4	194.1	Y	193.4-194.1	194.1	Y	193.4-194.1	194.1	194.1	194.1	194.1	194.1
207	+	195.1	195.8	Y	195.1-195.8	195.8	Y	195.1-195.8	195.8	195.8	195.8	195.8	195.8
208	+	196.5	197.2	Y	196.5-197.2	197.2	Y	196.5-197.2	197.2	197.2	197.2	197.2	197.2
209	+	198.1	198.8	Y	198.1-198.8	198.8	Y	198.1-198.8	198.8	198.8	198.8	198.8	198.8
210	+	199.5	200.2	Y	199.5-200.2	200.2	Y	199.5-200.2	200.2	200.2	200.2	200.2	200.2
211	+	201.1	201.8	Y	201.1-201.8	201.8	Y	201.1-201.8	201.8	201.8	201.8	201.8	201.8
212	+	203.1	203.8	Y	203.1-203.8	203.8	Y	203.1-203.8	203.8	203.8	203.8	203.8	203.8
213	+	205.1	205.8	Y	205.1-205.8	205.8	Y	205.1-205.8	205.8	205.8	205.8	205.8	205.8
214	+	207.1	207.8	Y	207.1-207.8	207.8	Y	207.1-207.8	207.8	207.8	207.8	207.8	207.8
215	+	209.1	209.8	Y	209.1-209.8	209.8	Y	209.1-209.8	209.8	209.8	209.8	209.8	209.8
216	+	211.1	211.8	Y	211.1-211.8	211.8	Y	211.1-211.8	211.8	211.8	211.8	211.8	211.8
217	+	213.1	213.8	Y	213.1-213.8	213.8	Y	213.1-213.8	213.8	213.8	213.8	213.8	213.8
218	+	215.1	215.8	Y	215.1-215.8	215.8	Y	215.1-215.8	215.8	215.8	215.8	215.8	215.8
219	+	217.1	217.8	Y	217.1-217.8	217.8	Y	217.1-217.8	217.8	217.8	217.8	217.8	217.8
220	+	219.1	219.8	Y	219.1-219.8	219.8	Y	219.1-219.8	219.8	219.8	219.8	219.8	219.8
221	+	221.1	221.8	Y	221.1-221.8	221.8	Y	221.1-221.8	221.8	221.8	221.8	221.8	221.8
222	+	223.1	223.8	Y	223.1-223.8	223.8	Y	223.1-223.8	223.8	223.8	223.8	223.8	223.8
223	+	225.1	225.8	Y	225.1-225.8	225.8	Y	225.1-225.8	225.8	225.8	225.8	225.8	225.8
224	+	227.1	227.8	Y	227.1-227.8	227.8	Y	227.1-227.8	227.8	227.8	227.8	227.8	227.8
225	+	229.1	229.8	Y	229.1-229.8	229.8	Y	229.1-229.8	229.8	229.8	229.8	229.8	229.8
226	+	231.1	231.8	Y	231.1-231.8	231.8	Y	231.1-231.8	231.8	231.8	231.8	231.8	231.8
227	+	233.1	233.8	Y	233.1-233.8	233.8	Y	233.1-233.8	233.8	233.8	233.8	233.8	233.8
228	+	235.1	235.8	Y	235.1-235.8	235.8	Y	235.1-235.8	235.8	235.8	235.8	235.8	235.8
229	+	237.1	237.8	Y	237.1-237.8	237.8	Y	237.1-237.8	237.8	237.8	237.8	237.8	237.8
230	+	239.1	239.8	Y	239.1-239.8	239.8	Y	239.1-239.8	239.8	239.8	239.8	239.8	239.8
231	+	241.1	241.8	Y	241.1-241.8	241.8	Y	241.1-241.8	241.8	241.8	241.8	241.8	241.8
232	+	243.1	243.8	Y	243.1-243.8	243.8	Y	243.1-243.8	243.8	243.8	243.8	243.8	243.8
233	+	245.1	245.8	Y	245.1-245.8	245.8	Y	245.1-245.8	245.8	245.8	245.8	245.8	245.8
234	+	247.1	247.8	Y	247.1-247.8	247.8	Y	247.1-247.8	247.8	247.8	247.8	247.8	247.8
235	+	249.1	249.8	Y	249.1-249.8	249.8	Y	249.1-249.8	249.8	249.8	249.8	249.8	249.8
236	+	251.1	251.8	Y	251.1-251.8	251.8	Y	251.1-251.8	251.8	251.8	251.8	251.8	251.8
237	+	253.1	253.8	Y	253.1-253.8	253.8	Y	253.1-253.8	253.8	253.8	253.8	253.8	253.8
238	+	255.1	255.8	Y	255.1-255.8	255.8	Y	255.1-255.8	255.8	255.8	255.8	255.8	255.8
239	+	257.1	257.8	Y	257.1-257.8	257.8	Y	257.1-257.8	257.8	257.8	257.8	257.8	257.8
240	+	259.1	259.8	Y	259.1-259.8	259.8	Y	259.1-259.8	259.8	259.8	259.8	259.8	259.8
241	+	261.1	261.8	Y	261.1-261.8	261.8	Y	261.1-261.8	261.8	261.8	261.8	261.8	261.8
242	+	263.1	263.8	Y	263.1-263.8	263.8	Y	263.1-263.8	263.8	263.8	263.8	263.8	263.8
243	+	265.1	265.8	Y	265.1-265.8	265.8	Y	265.1-265.8	265.8	265.8	265.8	265.8	265.8
244	+	267.1	267.8	Y	267.1-267.8	267.8	Y	267.1-267.8	267.8	267.8	267.8	267.8	267.8
245	+	269.1	269.8	Y	269.1-269.8	269.8	Y	269.1-269.8	269.8	269.8	269.8	269.8	269.8

Tab. 15 出土土器一覧表 - 5

発掘番号	層	径 (cm)			形式	土質	出土	数量	調査	出土時期	凡	備考
		口	底	厚								
202	Ⅱ	102.0	102.0	2	50-100	...		
207	Ⅱ	102.0	102.0		
208	Ⅱ	102.0	102.0		
209	Ⅱ	102.0	102.0		
210	Ⅱ	11.0	101.0		
211	Ⅱ	11.0	101.0		
212	Ⅱ	11.0	101.0		
213	Ⅱ	11.0	101.0		
214	Ⅱ	14.0	101.0		
215	Ⅱ	101.0	101.0		
216	Ⅱ	101.0	101.0		
217	Ⅱ	101.0	101.0		
218	Ⅱ	20.0	101.0		
219	Ⅱ	101.0	101.0		
220	Ⅱ	101.0	101.0		
221	Ⅱ	22.0	101.0		
222	Ⅱ	101.0	101.0		
223	Ⅱ	101.0	101.0		
224	Ⅱ	101.0	101.0		
225	Ⅱ	101.0	101.0		
226	Ⅱ	101.0	101.0		
227	Ⅱ	101.0	101.0		
228	Ⅱ	101.0	101.0		
229	Ⅱ	101.0	101.0		
230	Ⅱ	101.0	101.0		
231	Ⅱ	101.0	101.0		
232	Ⅱ	101.0	101.0		
233	Ⅱ	101.0	101.0		
234	Ⅱ	101.0	101.0		
235	Ⅱ	101.0	101.0		
236	Ⅱ	101.0	101.0		
237	Ⅱ	101.0	101.0		
238	Ⅱ	101.0	101.0		
239	Ⅱ	101.0	101.0		
240	Ⅱ	101.0	101.0		
241	Ⅱ	101.0	101.0		
242	Ⅱ	101.0	101.0		
243	Ⅱ	101.0	101.0		
244	Ⅱ	101.0	101.0		
245	Ⅱ	101.0	101.0		
246	Ⅱ	101.0	101.0		
247	Ⅱ	101.0	101.0		
248	Ⅱ	101.0	101.0		
249	Ⅱ	101.0	101.0		
250	Ⅱ	101.0	101.0		

Tab. 16 出土土器一覧表 - 6

製品番号	型番	容積 (cm ³)			形式	名称	製造	品名	備考	最大深さ	F ₀	FL	備考
		口径	高さ	容量									
300	型	1000.0		1000.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
301	型	1000.0	10.0	10.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
302	型		0.7	0.7		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
303	型		12.0	12.0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
304	型					1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
305	型	1000.0		1000.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
306	型	1000.0		1000.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
307	型	1000.0		1000.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
308	型	1000.0		1000.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
309	型	1000.0		1000.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
310	型	1000.0		1000.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
311	型	1000.0		1000.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
312	型	1000.0	0.2	0.2	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
313	型	20.0		20.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
314	型	1000.0	0.1	0.1	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
315	型	1000.0	7.0	7.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
316	型	1000.0		1000.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
317	型	1000.0	0.0	0.0	10	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
318	型					1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
319	型	0.2	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
320	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
321	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
322	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
323	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
324	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
325	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
326	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
327	型	0.2	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
328	型	7.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
329	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
330	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
331	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
332	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
333	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
334	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
335	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
336	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
337	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
338	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
339	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
340	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
341	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
342	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
343	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	
344	型	0.0	1000.0	0		1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	1000.0	

Tab. 17 出土土器一覧表-7

製品番号	品名	寸法(mm)		形式	色別	品名	用途	備考	品上価格	Fig.	PL	備 考
		口径	長さ									
200	鋼丸鋼	φ19.4	15.7			1) 鋼丸鋼 2) 鋼丸鋼	鋼丸鋼					
201	鋼	φ19.4	15.7			1) 鋼丸鋼 2) 鋼丸鋼	鋼丸鋼					
202	土鋼丸	φ17.8	15.4			1) 鋼丸鋼 2) 鋼丸鋼	鋼丸鋼					
203	?	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
204	?	φ19.4	1.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
205	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
206	鋼丸	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
207	鋼丸鋼	φ19.4	1.1			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
208	?	7.8	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
209	?	φ19.4	9.9	2.4		鋼丸鋼	鋼丸鋼					
210	内径寸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
211	?	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
212	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
213	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
214	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
215	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
216	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
217	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
218	鋼丸鋼	φ19.4	2.1			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
219	鋼丸鋼	3.1	φ19.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
220	鋼丸鋼	6.8	φ19.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
221	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
222	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
223	?	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
224	鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
225	土鋼丸鋼	φ19.4	15.4			鋼丸鋼	鋼丸鋼					
226	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
227	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
228	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
229	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
230	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
231	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
232	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
233	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
234	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
235	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
236	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
237	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
238	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
239	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
240	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
241	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
242	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
243	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
244	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
245	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
246	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
247	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
248	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
249	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
250	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
251	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
252	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
253	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
254	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
255	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
256	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
257	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
258	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
259	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
260	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
261	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
262	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
263	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
264	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
265	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
266	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					
267	?					鋼丸鋼	鋼丸鋼					

Tab. 22 出土土器一覽表-12

3)木器

久保寿一郎

木器はSD50およびSD100から多量に出土しており、総数は約2000点にのぼる。その内容も、農具、工具、漁撈具、生活用具などから運搬具、建築材にいたるまで大小多岐にわたっている。実測は小形の製品を中心として237点のものについて行った。本項ではそれらを全て図示し、器種ごとに報告を行う。基本的法量については一括表示している(Tab.23~27)。

農具(第103~108,110図)

農具は作業内容により起耕具、整地具、収穫、脱穀具、補助具などに分けられる。これらを基準として、出土農具を分類した。

起耕具には銀25点、鏟9点、銀鍬若柄具2点、ナスビ形農具着柄具1点がある。鍬類には平鍬と又鍬があり、又鍬には二又、三又、四又のものが確認される。平鍬は、平面形によりいくつかの種類に分けられるが、いずれも方形柄孔を有し身部の表面に段差を作り出すことで共通している。1は頭部から刃部にかけてゆるく外湾しており、4.5cm×3.7cmの柄孔を有する。柄孔周囲はやや厚手に作られている。1以外のものはいずれも頭部から刃部にかけて内湾している。5は推定長28cm×幅18cmで、4.8cm×4.0cmの柄孔を有する。変形のためか、刃部がやや外反している。3は頭部から刃部にかけての湾曲度が特に強いものである。4.3cm×3.6cmの柄孔を有する。12は破損が著しく頭部を欠損している。推定柄孔幅4.2cm。7は周囲の稜線が明確に残る最も厚手の平鍬で5.2cm×4.1cmの柄孔を有する。推定器長30cm程か。4は頭部を欠損する。柄孔幅3.5cm。これらは全て刃部端から全長の1/3前後の部分に段差を有している。側面的には、頭部から刃部に向けて徐々に薄く加工しながら、この部分で山形を呈し、再び刃部端に向けて薄く加工するものである。このような段差の存在は、金属刃の装着を想起させるものである。また2は両肩の部分が三角形に薄く加工されており、先述のものとは別の方法による金属刃の装着が考えられる。5.6cm×3.6cmの柄孔を有する。推定最大幅17.6cm。23は平鍬の刃部片である。端部から約7cmの部分に段差を有する。16~18は刃部を欠損するが、いずれも平鍬の頭部と思われる。16は3や7に類似する形態である。推定最大幅約16cm、で推定3.7cm×3.0cmの柄孔を有する。17は柄孔周囲を楕円形状に厚手に作る特異な形状をなしている。推定4.6cm×3.5cmの柄孔を有する。

又鍬は、いずれも方形柄孔を有し、V字状の切り込みによって刃部を作り出すものである。二又鍬は、いずれも幅狭で長胴である。14は刃部長31.5cm、刃部幅2.8cmで、4.0cm×3.6cmの柄孔を有する。9は推定最大幅約13cmで、5.7cm×3.5cmの柄孔を有する。15、22は破損が著しいが、いずれも二又鍬と思われる。22は頭部端をやや尖頭気味に加工する。柄孔は推定6.0cm×3.5cm。15は収縮変形が著しい。13は残存形態より三又鍬と思われる。推定最大幅17.0cm、刃部は

長さ32.5cm、幅2.1cmを計る。細身、薄手の作りで、全体的に湾曲している。8は側面全体に加工痕が残る厚手の作りのものである。11は取縮変形が著しい。10は四又鍬である。中央の刃部間はコの字状に加工している。推定最大幅、約18cm、刃部は長さ16.9cm、幅2.5cmで、5.9cm×4.0cmの柄孔を有する。90、102は又鍬の刃部片、また19～21、92は鍬類の頭部片である。19、20はいずれも頭部を尖頭気味に作り、19は5.2cm×3.6cmの柄孔を有する。20は推定幅4.0cmの柄孔を有する。

鍬は長柄鍬と着柄鍬に分けられる。6、25、28、30はいずれも平鍬である。25は刃部を含む一部を欠損し、取縮、変形している。柄は径3.7cm×2.4cmを計る。28は径2.8cm×2.4cmの柄部が50cm程残存する。身は内湾し、肩部をコの字状に作り出している。24はU字の握部を有する鍬の柄である。径3.1cmの柄部を50cm程残し、特に握部の加工痕は明瞭である。93は肩部を作り出す二又鍬である。刃部は深く切り込み、幅7.7cm断面をV字状に加工している。残存状況より着柄鍬として使用されたものか。表面および側面に加工痕が残る。81・209ともに小片であるが93と同形態のものの一部であろう。ともに加工痕が明瞭に残る。26は肩部をコの字状に作り出し、身の周囲を一定幅で厚手に作るものである。柄部が伸びてゆくものと思われる。推定最大幅約15cm。

整地具としては杵と杷が各1点出土している。32は杵で4.0cm×3.7cmの方形柄孔を有し隅丸長方形の身部を刃部に向って薄く加工している。加工痕が良く残る。31は杷で幅広、薄手に作られており、やや変形している。4.0cm×3.5cmの方形柄孔を有し、長さ3cm程の刃部を10基内外作り出していたものと思われる。

着柄具と思われるものは欠損品であるが2点(95、96)出土している。また73は枝分かれ部を利用したナスビ形農具の柄と思われる。枝部を柄とし、全面に丁寧な加工がなされている。また85は用途不明品であるが、形態的に泥除け具としての機能も想定され、農具として分類している。表面および側面に細かな加工痕が残る。

取穂・脱穀具に含まれるものとしては、堅件が8点出土している。全て片側のみ残存で、搗部と握部の境が明確な線をなしているもの(35～37、41)と、そうでないもの(38～40)とに分けられる。端部を有するものはいずれも著しい使用痕が残り、特に35、36は凸レンズ状をなしている。39～41は部分的な欠損、摩滅が著しく、不整形をなしている。また195は1/2以上が欠損するもので、握部が特異な形態を残している。推定搗部径約9cm。

工具(第109、110、112図)

工具には槌、斧柄類、編み具などがある。

槌は大小11本が出土しており、いくつかに分類することができる。大形のものは6点ある。いずれも槌部と握部の境が明確で、加工痕が良く残っている。特に42、44、46、などは加工痕

の稜が握部と握部の境を形成している。また44、46は握部が短い。45は断面が楕円形を呈し、破損が著しく、一部に焼痕が見られる。48も破損が著しいが、残存部は使用により内湾している。また、いずれも握部端は欠損している。194は不整形で加工痕も明瞭に残っており、加工途中のものとも思われるが、形状や木取りにより縄類として分類した。49～52は小形で細身の縄である。いずれも硬質の材を用い、表面は丁寧な加工が施されている。49、50、52は軸部と握部の境界が比較的明確である。51は軸部から握部へとゆるやかにつながり、握部中央を最も細く加工しており、また端部に半円状の凸部を作り出している。また49の端部にも、少し摩滅しているが、これと同様のものが確認される。

斧柄類は9点出土している。いずれも木の枝分かれ部を利用し、枝部を柄として加工している。完形品は少ない。66は長方形の凸部を作り出し、鉄斧を装着したものと思われる。径3cmの柄が20cm程残存する。91は台部の先端が欠失するが、背部と上部を面取りしている。柄部は樹皮を多く残し、径2.8cm、長さ40cm余で完存している。67は一部に樹皮を残すが、台部背面は特に丁寧に加工されている。また、柄は台部に対してやや斜めに伸びている。68は全面に加工痕が残る。

編み具としては編み板の断片と思われるものが出土している(236)。破損、摩滅が著しく明確にはしえないが、同一固体と思われる2片の板材があり、1点は約6cm間隔で2ヶ所の刻み目らしきものが確認される。

漁撈具(第111図)

漁撈具では、手網の柄ならびに杓が数点出土している。ここでは舟形木製品も加えて報告する。58は柄の端部と杓の一部を欠損するが、推定径30cm程の杓を有すると思われる。把手部は全面にわたって細かく丁寧な加工がなされている。59は把手である。頭部と握部は明確な段差により区別されており、端部は断面V字状に、また表面は平坦に加工されている。60～63は杓の断片である。61～63はいずれも径1cm強の材を用いて断面円形のまま使用している。60のみやや太く、内側は平坦に加工している。また一端には加工痕が残る。

舟形木製品は2点出土している。いずれも一端のみの残存である。74は軸部を、75は軸部をそれぞれ残すもので、ともに断面はゆるいU字状をなし、内外面ともに稜線は認められない。また船底はそれぞれの端部に向ってゆるやかに反り上っている。74は舷側部が残存しており0.5～0.8cmの平坦面を有している。75は軸部に平坦面を有している。また両舷側が欠損しているが、推定最大幅14cm程と思われる。両者ともに全体の1/2～2/3程を残すものと考えられ、軸部を区別した形態であったと思われる。

生活用具(第112、113図)

生活用具としては、槽、容器、杓子、その他を分類している。

槽は把手付のものが2点出土している。65は破損が著しいが、細身でかなり長胴のものと思われる。横断面は、内面には稜を有するが、外面は弧状を描く。把手は現状で10cm程を計るがかなり磨滅しており、穿孔は両側からの加工が認められる底部厚は平均3cmを計る。64は、中央やや把手部寄りに仕切りを有するものである。内部は浅く、側壁は仕切りを境として把手側はゆるく、反対側は稜をなして立ち上がる。内外面とも磨滅が著しい。把手は長さ6cmを計り、3.5cm×2.0cmの楕円孔を有する。内外面とも磨滅が著しい。底部厚約3cm。

容器は5点出土している。76は底部を欠損しており形状は不明であるが、推定器高9cm程のものと思われる。口縁は約1cm幅の平坦面を有している。口縁直下に一ヶ所凸部を有するが、把手状のものになるかは不明である。80は平面観が楕円形で丸底を呈するものである。口縁は0.5cm程の平坦面を有する。内外面とも加工痕が良く残っている。77-79は、いずれも断片であり、推定径15cm内外のものと思われる。77は内外面とも加工痕が残る。推定器高8cm程で丸底を呈すると思われる。

杓子は把手片を含め、4点出土している。86は楕円形の身部を有し、側面観は把手から身にかけて、ゆるやかに内湾している。98-100は把手片である。

その他、方形の杓子状を呈する29、幅狭の鋸状を呈する27がある。29は台形状の身部に扁平な把手を作り出したもので薄手の作りである。把手は片側に向けて現状で26cm程伸びている。側面にも丁寧な加工痕が残る。27は細長の身に幅4.1cmの柄を作り出したもので、別木の柄と組み合わされた可能性もある。刃部にあたる部分は、端部に向けて薄く鋭角に作られている。

小形加工木(第113~115図)

小形で用途不明の加工木を一括してまとめている。これらの中には他の部材と組み合わせる用いられるものもあり、多くは欠損品である。特徴的なものについて説明を加える。

53-57は浮子状の木器である。53は平面観は円形、側面観は台形を呈し、頂部に小孔を穿つ。54は先端を大きく3面に加工するもので全面に加工痕が残る。57は半欠品であるが、一部に樹皮が残っており、丸木の両端を加工したものと思われる。55は不整形であるが完存品で、多くの加工により多面体を形成している。56は両端に加工痕を残し、断面は不整楕円形を呈する。87、88は別個体であるが、類似の加工木である。87は円盤状の本体(?)から湾曲する把手(?)が伸びるもので、先端は欠損している。また本体に接する部分が長さ4.5cmにわたって最も太くなっている。88は87より小形の本体から同様の把手が伸びており、端部を加工する完形品である。把手の外側に面した部分には、凹みがつけられている。105は何かの端部片であるが、このような加工木と同一個体の可能性がある。これらは組み合わせ部材の一部であろう。84は断面が楕円形を呈するもので、何かの把手と思われる。182は不整形で、一端面に加工を施し、他方を断面三角形に成形している。147は両端に加工痕が残る。47は横断面が半円状をなし、下方に

平坦面を有する。上方は棒状に伸びるものと思われる。106は不整形であるが、全ての面に加工痕を残すものである。139、144、148、151、162、175、181などは一端部あるいは側面に加工痕を残し、小形の加工木の断片と思われる。

小形棒材(第116、117図)

農具の柄、あるいは建材の一部を含むと考えられる棒状加工木のうち、特徴的な小形の棒材を一括して、小形棒材として分類した。欠損品が多く、10数cm～80cm余りのものがある。法量、加工状況、断面形態などから、いくつかに分類することができる。82、214、215、217～219などは比較的長大で、断面は円形を呈し、全体的に弧状をなしている。また82、118、126、127などは、端部付近を平らに加工している。123は断面を正方形とし、やはり先端を平らに加工している。細身のものには断面が円形、方形、多角形をなすものがあり、いずれも細かい加工がなされている。やはり端部は平らに加工するものが多い。152～154、158、159、172、208などは、端部を面取りした丸棒材で、柄の一部であろう。

その他の木器(第117～124図)

その他の木器としたものには、形態的には梯子や舟材と思われるものも含まれているが、多くは、板材、角材、柱材、杭材として大別されるものである。これらは各種の構造物として用いられたのであろうが、各用途を明確にし得ないため、形態を中心として大別し、代表的なものについて、特徴を記してゆくこととする。

板材の中に、柄穴を有するものがある(第117、118図)。189は、板材の端部近くに4.0cm×2.5cmの柄を穿ち、それに合致するよう側面からも柄穴を加えている。231は断片であるが、特殊加工を施した狭板材に15cm間隔で2cm×1cm程の柄を穿っている。長胴のものが想定される。178は、柄穴近くの端部を斜めに切断し、加工したものである。

228は梯子で、木材の外縁を利用した半円形の足掛部が残存するものである。

33、34、200は、全面に加工痕が残る板材である。何かの未製品とも思われ、特に34は、一端を欠損するが、長辺の一辺に向って薄く加工されており、農具(杵?)の未製品の可能性もある。174は外縁を弧状に加工するものである。

角材として特徴的なものが2種類出土している(第118、121、122図)。184～187は、いずれも幅7cm、厚さ3cm程の角材で、断面は片側をやや狭く加工している。184～186は、その狭い方の側面に、いずれも長さ15cmにわたるゆるやかな弧状の削りを入れている。184、185は一端部が残存しているが、端部から削りまでの長さもほぼ一定している。163、164は、ともに長大な角材である。163は12コ体全てが接合し270cmを超えるものである。一端は残存しておりやや外側に広がる形で加工している。164は163と同様の作りを示すが、断面形が正方形に近く、別個体であろう。203も同類と思われる。

杭材と柱材は一括してまとめている(第120、121図)。杭は161が断面三角形を呈する他は全て丸杭である。また先端は157が断面V字状の2面加工、156、157、165、213などは1面加工、他は多面加工である。

202は、全面に樹皮を残す木材を切断し、両端面に加工を施している。193、197、198、201は断面が楕円形をなす木材の一端を、浅い傾斜によって面取りしている。199は板材の一端をV字状に2面加工し、欠損部分かと思われる他端にも加工を施している。

207は、枝分かれ部を含む二又の木材である。枝部分は両方とも先端が欠損しているが、基部には、断面V字の丁寧な2面加工が残っている。

223は厚手の板材で、断面は実測面を半円状に、裏面を平坦に加工している。224は大形の板材で、並列した状態で出土しており、同一の板材であったと思われる。

226、235は、船材かと思われる湾曲板材である。226は一面面を丁寧に加工しており、舷側部分であろうか。断面は稜を伴わず、ゆるやかに湾曲する。独木舟材の一部であるとするなら、最大幅60~70cmのものが想定されよう。234は断面がL字形をなす板材である。3コ原形は断面コの字形の樋状のものが想定される。

竹籠(第125図)

SD100から出土した大形板材224の上部に乗る状態で、籠が1点出土している。口縁を欠損するものの、底部と体部の一部を残している。底部は現状で21cm×13.6cmを計り、方形または長方形を呈するものと思われる。また体部は比較的急に立ち上っており、高さ4.2cmほどが残存している。編み方は底部と体部で異なる。底部は経条、緯条ともに0.4cm程の材を用い、2本を1単位としており、4本超え、4本潜り、2本送りに編み込んでいる。そしてそれらの条が稜をなして立ち上がり、体部の経条となっている。体部の緯条は幅0.2cm程のやや細い材を用いており、1本を1単位とし、2本超え、2本潜り、1本送りに編み込んでいる。

朱塗り棒状木器(第117図210、巻頭)

1点だけであるが朱塗りの木製品が出土した。先端部が欠損しているため用途が明らかに出来ないが一応、棒状木器とした。端部は面取りが行なわれ角をとる形状を呈する。側面に2条の切痕が認められる程度で皮をはぎ、水銀朱を塗る。おそらく全面に塗られていたものと思われるが、現存する部分は、裏面及び端部にはなく表面と両側面に認められる。断面は2.1cm×2.6cmの楕円形を呈するが、本来は丸で土圧により楕円形を呈するものかもしれない。現存長23.9cmを測る。

銅鑄型銅製品(第126図、PL.51)および棒状木製品(第117図210、巻頭図版)に認められる赤色物について顕微鏡観察とX線分析(棒状木製品)を行い、赤色が何によるものかを調査した。

銅鑄型銅製品

出土後数年経過して観察を行ったのだが、赤色物はすでに図示された状態のように残っていなかった。やや赤い部分がようやく認められたが、きわめて僅かであったので通常のX線分析のための試料採取が不可能であった。針先に着く程度の採取を行いプレパラートを作成した。光学顕微鏡により透過光・反射光40~400倍で検鏡を行ったが、顕著な赤色顔料粒子は見いだされなかった。いわゆる赤土によく似た状態であり、広義のベンガラ系赤色顔料というべきであろうか。

一般にベンガラというのは主成分元素が鉄であり、主成分鉱物は赤鉄鉱である赤色顔料を指す。出土赤色顔料の「ベンガラ」は主成分鉱物として赤鉄鉱の他褐鉄鉱(針鉄鉱、鱗鉄鉱等)非品質の褐鉄鉱があり、これらの混合物であることも多い。そのためX線回折により赤鉄鉱が同定されない場合も少なくない。これは試料の量が主な原因であるが、赤鉄鉱と非品質の褐鉄鉱が混合している場合、後者の量が多いと赤色が強くなるのではないともいわれている。(註1)一方、主成分の定性分析で鉄が確認され、他に水銀、鉛が検出されなければ、ベンガラであるという判断もごく一般的になされている。さらに主成分の定量分析を行い、鉄の含有量の多少からベンガラの種類(品位・生産地)を分けることもある(註3)。また、出土ベンガラの粒子に種々の形状があることもわかってきており、パイプ状を呈する特異な粒子は産地を示す指標ではないかという指摘もある(註3)。何れにしても、出土ベンガラの多様性に対処した分析法、試料の採取・調整等の問題も含めて検討していかなければならない。

本例のような広義のベンガラ系赤色顔料の存在については、赤色顔料に対する観念、及び入手・製造、使用という行為を考える上で意味を持つ(註4)ものだけに十分な注意をしていく必要があらう。

棒状木製品

棒状木製品の側面に付着・残存しているもので、何らかの固着剤により塗布されたものと思われる。赤色顔料はかなり厚く残っている。赤色顔料の付着した細片を試料とした。光学顕微鏡観察 赤色顔料の種類とその粒度を見るために、針先に着く程度の量を採取しプレパラートを作成し、透過光・反射光により40~400倍で検鏡した。赤色顔料として朱粒子のみを確認した。粒径は0.5~12.5ミクロンであった。粒子数が少ないので粒子径分布の測定は行っ

ていないが、2～4ミクロン前後の粒子が多い。

蛍光X線分析 赤色顔料の主成分元素の検出を目的として、宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40KV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(2θ)；10～65°、走査速度；2θ8°/分、時定数；2.5秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては、鉄(微)と水銀が検出された。

X線回折 赤色由来となる鉱物成分の検出を目的として、宮内庁正倉院事務所設置の理学電機製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；27.5KV、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光開スリット；0.34°、照射野制限マスク(通路幅)；4mm、ゴニオメーター走査範囲(2θ)；30～66°走査速度2θ4°/分、時定数；2秒の条件で測定を行った。赤色の由来となる鉱物としては辰砂と赤鉄鉱が考えられるが、それらのどちらも顕著なピークは認められなかった。

X線回折により赤色の由来となる鉱物成分の同定はできなかったが、蛍光X線分析と検鏡結果から、塗布されている赤色顔料は朱(硫化水銀)であると考えられる。

本例の朱は出土朱としては粒度も細かくかなり均一に見受けられるが、これは塗料として使うために粒度を揃えてあるのだろうか。弥生時代の木製品で赤色塗彩されたものについて、その赤色顔料の種類・粒度あるいは塗膜層の調査は非常に少ない。今は資料を蓄積する段階ではあるが、本例の朱(硫化水銀HgS)は北部九州地方の弥生時代中期後半の埴輪墓出土の朱の粒度とほぼ同じような範囲におさまることに注意しておきたい。

X線分析の測定をお引き受け下さった宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏に感謝致します。

- 註1 中村忠晴(1981) 「群馬県東下出および清里庚申塚遺跡出土の赤色顔料について」 『清里・庚申塚遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査集団
- 註2 安田博幸(1983) 『古代日本の知恵と技術』朝日カルチャーブックス28
- 註3 永島正春(1985) 『縄文時代の漆工技術』国立歴史民俗博物館研究報告6
- 註4 平野芳英(1990) 『島根の考古学と自然科学』I、P.24『島根県立八雲立つ風土記の丘研究紀要』II
- 註5 例えば四箇遺跡出土木刀状漆器(縄文時代後期後半)の朱は粒度を変えて2層塗り、下層は約1～2、上層は約3～10ミクロンの朱粒子からなる。

※脱稿語、塗膜の層構成についての調査を京都市埋蔵文化財研究所岡田文男氏に依頼した所、「漆による素地固めを施しただけでその上に直接朱漆を塗っているようである」との報告を受けた。詳細は福岡市埋蔵文化財調査報告書第261集「四箇遺跡25次」1991を参照されたい。

報告書 掲載番号	遺物番号	図版	器種	出土遺構	法 量			
					器 長	最大幅(徑)	最大厚	
埴田 103-1	001	54	平 鍬	SD-100	32.7	19.1	1.7	
	5	005	平 鍬	"	27.1	10.6	1.5	
	3	003	平 鍬	SD- 50	31.7	20.8	1.7	
	12	012	平 鍬	SD-100	20.1	17.1	1.4	
埴田 104-2	7	007	平 鍬	SD- 50	29.0	19.1	2.2	
	4	004	平 鍬	SD-100	23.0	18.7	1.5	
	16	016	平 鍬	SD- 50	36.8	11.4	1.5	
	17	017	平 鍬	SD-100	17.7	11.7	1.7	
	23	023	平 鍬	"	15.3	6.1	1.7	
	18	018	平 鍬	"	10.0	7.6	1.2	
	14	014	平 鍬	"	19.8	7.4	1.6	
	9	009	二又鍬	"	57.1	10.5	1.5	
	埴田 105-22	9	009	二又鍬	SD- 50	31.7	10.3	2.0
		15	015	二又鍬	SD-100	30.5	6.2	1.8
13		013	二又鍬	SD- 50	37.6	5.3	1.3	
11		011	三又鍬	SD-100	52.9	4.9	1.5	
8		008	三又鍬	"	34.5	8.2	1.5	
10		010	三又鍬	"	29.2	14.3	2.1	
埴田 106-92	10	010	四又鍬	SD- 50	38.7	13.8	1.9	
	20	020	鍬	SD-100	28.9	8.2	1.7	
	19	019	鍬	"	13.3	6.3	1.0	
	21	021	鍬	"	11.8	4.8	1.1	
	90	090	鍬	"	14.8	8.1	0.8	
	102	102	又 鍬	"	19.6	3.9	1.3	
	30	030	又 鍬	"	18.9	3.4	1.1	
	6	006	平鍬(長柄)	"	22.5	16.8	1.9	
	25	025	平 鍬	"	13.5	14.9	1.5	
	28	028	平鍬(長柄)	"	31.0	18.3	2.4	
埴田 107-24	28	028	平鍬(長柄)	SD- 50	69.6	11.7	2.3	
	6	006	鍬(長柄)	SD-100	61.0	10.7	3.2	
	93	093	二又鍬(着柄)?	"	29.5	10.3	1.8	
	81	081	二又鍬(着柄)?	SD- 50	16.3	9.0	2.5	
	209	209	二又鍬(着柄)?	"	8.0	7.9	2.6	
	26	026	平鍬(長柄)	SD-100	26.6	12.5	2.3	
	32	032	杵	SD- 50	29.8	13.1	1.9	
	31	031	杷	SD-100	37.8	13.2	1.3	
	85	085	農具?	SD- 50	25.6	10.8	1.2	
	96	096	着柄具	SD-100	6.2	3.5	3.4	
埴田 108-36	95	095	着柄具	"	10.9	3.9	4.1	
	36	036	整 杵	SD- 50	54.8	7.6	握部径3.5	
	37	037	整 杵	"	50.0	8.7	握部径3.5	
	40	040	整 杵	SD-100	53.3	8.8	—	
	41	041	整 杵	"	44.3	7.2	—	
	39	039	整 杵	"	37.8	8.8	—	
	38	038	整 杵	"	47.7	7.2×5.1	握部径3.8	
	195	195	杵	"	44.7	7.7	—	
	195	195	杵	"	57.5	8.8	3.9	
	埴田 109-45	045	57	碓	SD- 50	30.8	6.8×4.6	握部径3.8

Tab. 23 出土木器一覽表 - 1

報告書 掲載番号	遺物番号	国 版	器 種	出土遺構	法 量			
					器 長	最大幅(径)	最大厚	
神岡 109-46	046	56	槌	SD-100	14.0	8.3	—	
	43	043	槌	"	33.5	7.0	3.1	
	42	042	槌	"	29.7	7.5	握部径3.6	
	44	044	槌	"	30.3	7.3	握部径3.9	
	48	048	槌	"	41.8	6.8	握部径3.1	
	194	194	槌状木製品	"	33.3	8.3	5.9	
	49	049	槌	SD-50	39.7	3.8	握部径2.1	
	50	050	槌	SD-100	39.9	3.5	握部径2.0	
	51	051	槌	"	36.6	4.7	握部径2.1	
	52	052	槌	"	30.0	4.5	握部径2.4	
	神岡 110-91	091	55	斧柄	"	48.2	台幅3.7	—
		67	067	斧柄	"	台長9.6	台幅4.7	内高3.7
		66	066	斧柄	"	台長13.1	台幅3.7	内高4.7
		104	104	斧柄	"	台長6.9	台幅4.7	台高5.3
71		071	斧柄	"	台長6.7	台幅2.7	台高4.3	
72		072	斧柄	"	台長5.6	台幅3.8	台高2.3	
70		070	斧柄	"	台長8.7	台幅4.0	台高2.1	
69		069	斧柄	"	台長9.6	台幅3.9	台高2.0	
68		068	斧柄	SD-50	台長10.7	台幅3.9	台高2.1	
73		073	ナスビ形農具柄	SD-100	台長20.8	台幅3.5	台高2.2	
神岡 111-58		058	56	手綱	"	45.8	握部径1.8	口径1.1
		59	059	手綱(把手)	"	21.1	握部径3.0	—
		60	060	手綱(棒)	SD-50	59.8	1.5	—
		61	061	手綱(棒)	"	56.2	1.1	—
	62	062	手綱(棒)	"	53.6	1.3	—	
	63	063	手綱(棒)	SD-100	49.5+31.7	1.3	—	
	74	074	角形木製品	"	48.8	13.1	1.6	
	75	075	角形木製品	"	41.5	11.5	2.0	
神岡 112-65	065	52	把手付櫛	SD-50	61.4	17.9	高さ9.5	
	64	064	把手付櫛	"	49.7	18.3	高さ7.5	
	29	029	杓子状木製品	"	44.4	13.7	1.2	
	27	027	槌状木製品	"	41.8	8.4	1.8	
	236	236	織み板	SD-100	13.8・8.8	3.6	0.9	
神岡 113-76	076	56	槌	SD-50	口径15.5	器高7.1	1.7	
	80	080	槌	"	口径15.1	器高6.2	1.7	
	77	077	槌	"	13.3	6.3	1.2	
	78	078	槌	"	10.6	4.3	1.3	
	79	079	槌	"	13.1	4.2	1.3	
	99	099	55	杓子	SD-100	17.7	3.7	1.6
	86	086	55	杓子	"	33.3	11.9	1.4
	100	100	杓子	SD-50	15.4	3.7	1.5	
	98	098	55	杓子	SD-100	17.1	5.0	1.6
	54	054	56	浮子状木製品	SD-50	7.0	8.0	—
	57	057	56	浮子状木製品	SD-100	12.0	7.0	2.4
55	055	56	浮子状木製品	"	10.2	6.7	4.2	
56	056	56	浮子状木製品	SD-50	14.5	7.8	6.2	
53	053	56	浮子状木製品	SD-100	4.9	7.0	—	
神岡 114-87	087	56	小形加工木	"	17.1	6.3	2.3	

Tab. 24 出土木器一覧表-2

報告書 掲載番号	遺物番号	図版	器種	出土遺構	法 量			
					器 尺	最大幅(徑)	最大厚	
埴岡 114-88	088	56	小形加工木	SD-100	26.1	3.8	2.1	
	105	105	小形加工木	"	4.5	2.7	1.9	
	84	084	小形加工木	SD- 50	18.8	5.2	2.4	
	142	142	小形加工木	"	18.7	3.4	2.1	
	162	162	小形加工木	SD-100	17.9	4.6	2.9	
	232	232	小形加工木	"	17.1	3.7	2.3	
	188	188	小形加工木	"	17.6	4.9	2.8	
	143	143	小形加工木	"	14.9	4.8	3.5	
	139	139	小形加工木	SD- 50	15.1	3.8	2.8	
	205	205	小形加工木	SD-100	24.1	6.9	4.4	
	182	182	小形加工木	"	12.4	8.4	3.1	
	176	176	小形加工木	"	18.9	3.9	3.1	
	147	147	小形加工木	"	18.5	8.1	5.0	
	141	141	小形加工木	SD- 50	18.4	8.8	2.9	
	175	175	小形加工木	SD-100	9.7	4.9	2.4	
	144	144	小形加工木	"	12.7	4.6	3.0	
	149	149	小形加工木	"	14.2	4.0	2.0	
	埴岡 115-47	047	56	小形加工木	"	14.8	6.2	4.1
		103	103	小形加工木	"	22.6	6.7	1.1
89		089	小形加工木	"	30.3	4.5	0.8	
151		151	小形加工木	"	7.1	3.9	0.8	
94		094	小形加工木	"	37.2	3.8	1.6	
148		148	小形加工木	"	15.3	6.4	2.2	
146		146	小形加工木	SD- 50	23.3	5.3	1.4	
150		150	小形加工木	SD-100	13.2	6.0	1.3	
109		109	小形加工木	"	11.7	6.5	1.2	
97		097	小形加工木	"	9.1	3.7	0.9	
181		181	小形加工木	"	15.9	6.4	5.2	
106		106	小形加工木	"	25.2	6.8	5.2	
190		190	小形加工木	SD- 50	26.0	8.7	3.6	
145		145	小形加工木	SD-100	12.7	4.6	4.5	
108		108	小形加工木	"	9.1	8.6	1.1	
埴岡 116-214		214	57	小形棒材	"	87.5	2.8	—
		215	57	小形棒材	"	87.7	2.7	2.3
	82	082	小形棒材	SD- 50	69.5	2.8	2.5	
	219	219	小形棒材	SD-100	76.4	2.6	2.0	
	217	217	小形棒材	"	72.8	2.1	—	
	218	218	小形棒材	"	74.9	3.5	—	
	116	116	小形棒材	SD- 50	56.6	2.8	—	
	123	123	小形棒材	"	54.7	2.3	1.9	
	118	118	小形棒材	"	46.4	2.3	1.8	
	122	122	小形棒材	"	45.8	2.2	2.2	
	125	125	小形棒材	SD-100	43.8	2.0	2.0	
	124	124	小形棒材	"	38.5	3.2	2.1	
	136	136	小形棒材	"	21.3	1.9	0.9	
	137	137	小形棒材	"	18.8	2.0	1.1	
	119	119	小形棒材	SD- 50	20.6	1.5	1.1	
	129	129	小形棒材	SD-100	23.6	1.1	—	

Tab. 25 出土木器一覽表-3

報告書 掲載番号	遺物番号	図版	器種	出土遺標	法 量			
					器 長	最大幅(徑)	最 大 厚	
神園 116-133	133	53	小形棒材	SD-100	26.9	1.9	1.5	
	128		小形棒材	"	23.6	1.7	1.2	
126	小形棒材		"	"	30.6	2.4	—	
220	織物部材		"	"	73.4	2.8	2.3	
神園 117-112	112		小形棒材	"	"	47.4	2.2	2.0
	120		小形棒材	SD- 50	44.0	2.5	1.9	
113	小形棒材		"	"	39.1	1.9	1.6	
114	小形棒材		"	"	36.7	3.1	2.5	
111	小形棒材		"	"	39.0	1.4	1.2	
117	小形棒材		"	"	35.5	2.1	1.4	
204	小形棒材		SD-100	"	32.9	2.3	1.3	
237	小形棒材		"	"	24.8	2.1	1.9	
134	小形棒材		"	"	12.4	2.3	1.1	
121	小形棒材		SD- 50	"	27.5	1.4	—	
130	小形棒材		SD-100	"	29.3	1.2	—	
135	小形棒材		"	"	3.08	2.0	1.1	
132	小形棒材		"	"	30.4	2.4	2.1	
115	小形棒材		SD- 50	"	31.7	2.6	1.9	
127	小形棒材		SD-100	"	35.8	2.5	—	
131	小形棒材		"	"	15.7	1.6	1.5	
138	小形棒材		"	"	16.5	2.0	1.0	
172	柄		"	"	17.2	3.2	—	
208	柄		"	"	3.6	2.9	—	
154	柄		"	"	9.2	4.1	—	
153	柄		"	"	11.4	4.2	—	
159	柄		"	"	42.8	3.3	—	
158	柄		"	"	39.1	3.7	—	
152	柄		"	"	14.9	3.3	—	
189	板 材	SD- 50	"	34.3	6.2	2.4		
177	板 材	SD-100	"	19.4	8.6	2.9		
230	板 材	"	"	20.8	6.3	1.4		
192	板 材	"	"	21.7	9.8	2.6		
206	板 材	"	"	45.3	11.8	2.9		
210	宋造り棒状木器	"	"	23.9	2.6	2.0		
神園 118-184	184	角 材	SD- 50	59.5	7.2	3.1		
	186	角 材	SD-100	36.3	6.5	3.0		
187	角 材	"	"	26.5	7.3	2.8		
185	角 材	"	"	65.6	6.9	3.1		
179	板 材	"	"	43.0+22.9	12.1	1.9		
231	板 材	"	"	42.9+16.9	6.1	2.4		
196	板 材	"	"	44.2	10.5	3.5		
160	板 材	"	"	43.1	12.5	1.2		
101	角 材	SD- 50	"	40.8	3.1	1.0		
228	襷 子	SD-100	"	21.7	14.8	10.2		
178	板 材	"	"	66.3	12.5	4.8		
神園 119- 34	034	55	板 材	SD- 50	32.8	20.7	2.7	
	200	板 材	SD-100	35.8	15.0	2.1		
174	板 材	"	"	29.3	20.2	3.2		

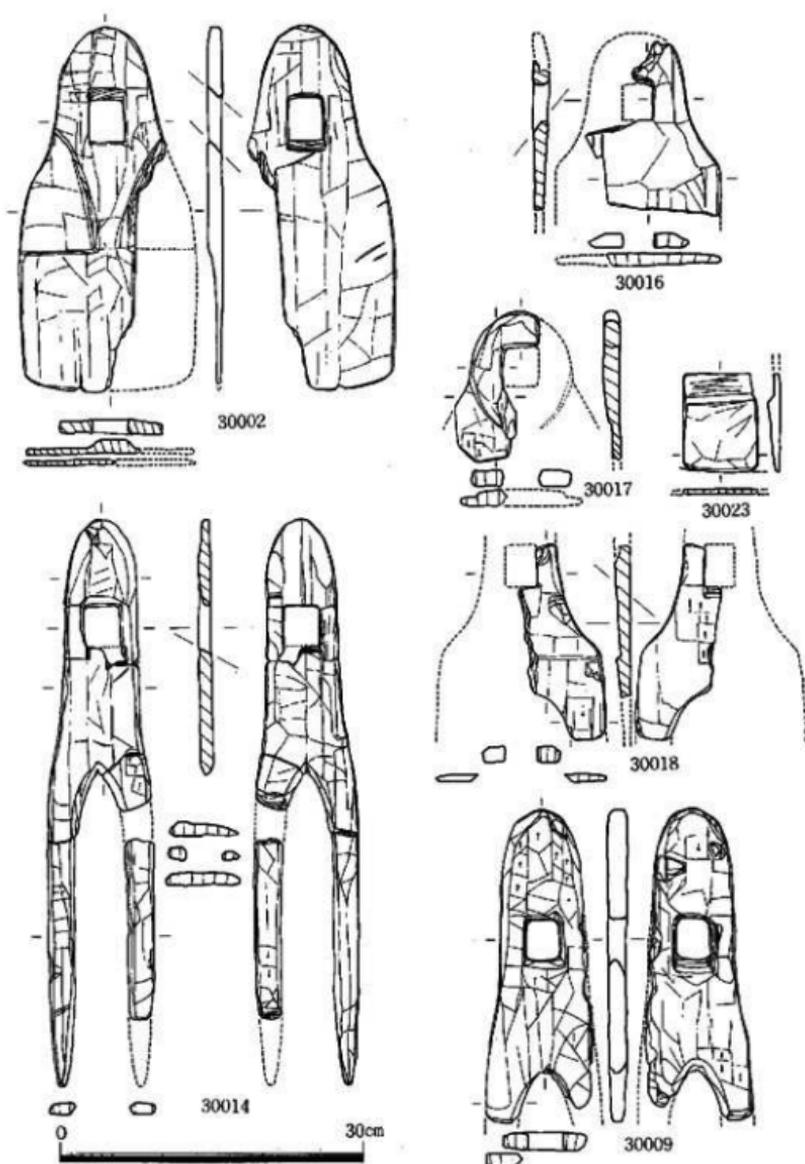
Tab. 26 出土木器一覽表 - 4

報告書 掲載番号	遺物番号	図版	器種	出土遺構	法 数				
					器 長	最大幅(徑)	最大厚		
神国 119-33	033	55	板 材	SD- 50	39.1	19.7	2.8		
	107		板 材	SD-100	12.2	9.0	0.9		
	229		板 材	"	19.8	19.6	2.1		
	110		板 材	"	19.9	11.7	0.8		
神国 120-212	212	57	枕	"	69.9	5.8	—		
	180		枕	"	56.4	5.7	—		
	211	57	枕	"	61.7	4.8	—		
	213		枕	"	58.6	5.3	—		
	156	57	枕	"	53.6	3.6	—		
	173		枕	"	12.3	3.0	—		
	161		枕	SD- 50	30.2+20.7	3.8	3.1		
	140		枕	"	20.8	4.0	2.4		
	157		枕	SD-100	43.2	3.6	—		
	171		枕	"	21.4	3.8	—		
	165		枕	"	47.9	5.4	—		
	170		枕	"	27.8	3.8	—		
	166		枕	"	47.9	5.5	—		
	169		枕	"	33.8	3.4	—		
	167		枕	"	36.3	6.2	—		
	168		枕	"	35.9	5.5	—		
	191		枕	"	27.7	5.7	—		
	神国 121-202		202	57	柱 材	"	55.1	8.3	—
			198		柱 材	"	40.4	8.7	6.3
201			柱 材		"	24.3	9.8	7.4	
193			柱 材		"	31.5	9.4	7.2	
197			柱 材		SD- 50	31.2	10.8	8.7	
203			角 材		SD-100	33.6	4.9	4.6	
155		角 材	"		44.0	3.0	1.6		
199		板 材	"		24.6	16.6	5.7		
233		角 材	"		32.0	3.8	3.7		
183		角 材	SD- 50		30.9	7.5	2.7		
216		梯 材	SD-100		82.0	2.5	—		
83		板 材	SD- 50		66.5	3.9	1.2		
221		角 材	SD-100		63.5	6.1	4.5		
227		板 材	"		65.3	10.3	1.7		
神国 122-163		163	53		角 材	"	274.1	5.3	3.9
		164			角 材	"	191.9	4.3	4.1
		222			板 材	"	143.9	22.9	9.5
	225	梯 材		"	220.3	3.7	—		
	207	梯 材		SD- 50	30.4	1.8	—		
	神国 123-223	223		53	板 材	SD-100	186.7+49.7	28.7	10.4
224	53	板 材	"	196.4	36.7+35.7	3.4			
神国 124-226	226	53	舟材?	SD- 50	147.4	34.7	4.1		
	235		舟材?	"	74.9+72.1	26.8	3.2		
	234		槌状木製品	"	101.6	16.1+13.2	高9.5		

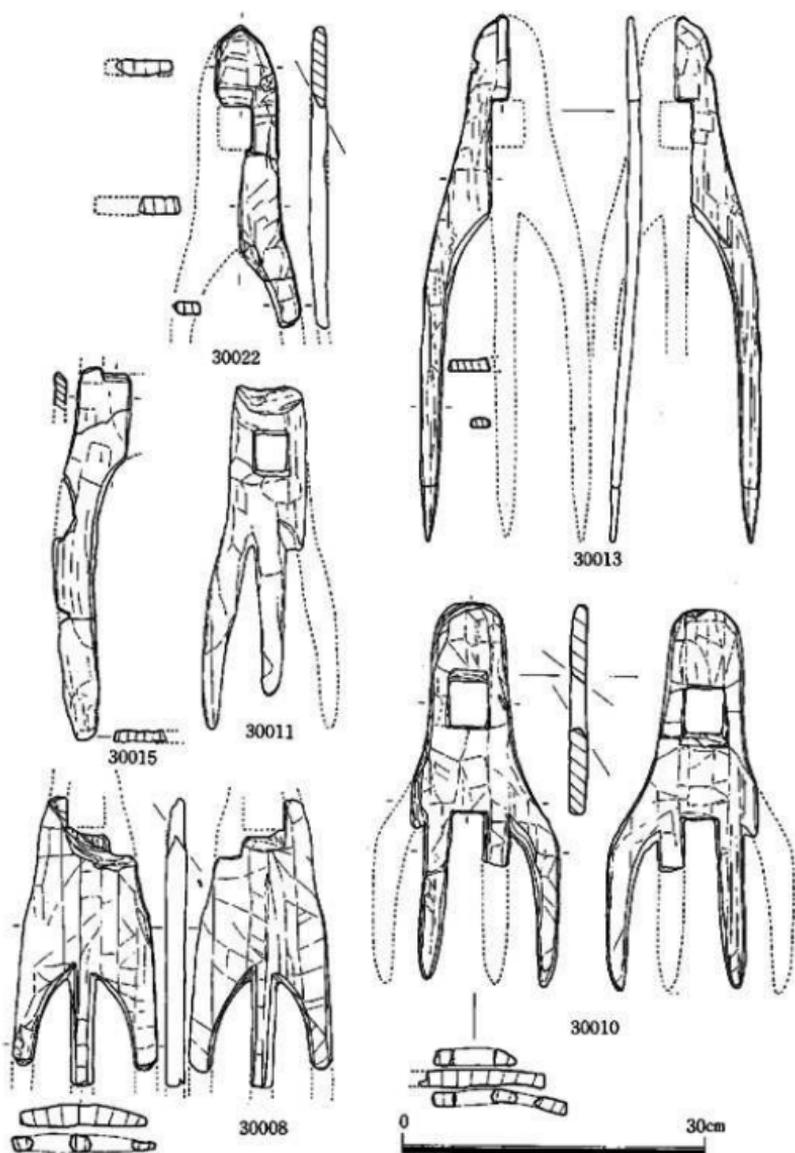
Tab. 27 出土木器一覽表- 5



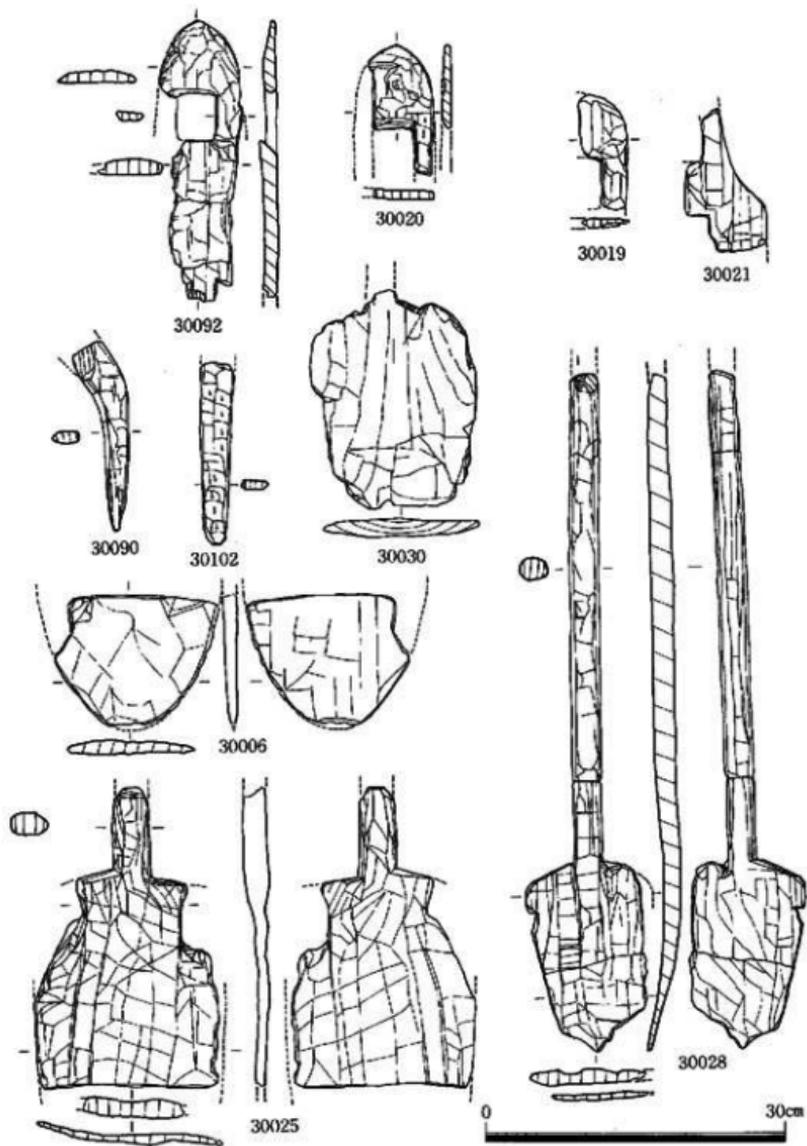
第103圖 出土石器実測圖一 (縮尺1/6)



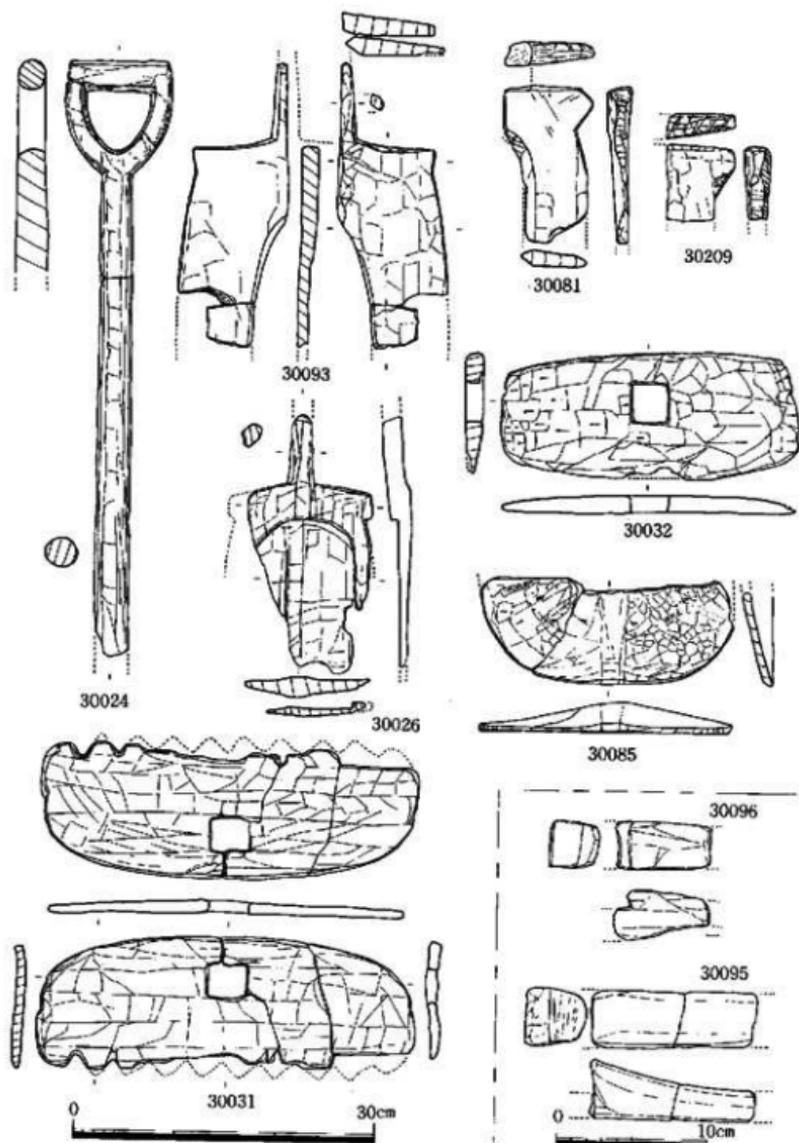
第104圖 出土木器実測圖-2 (縮尺1/6)



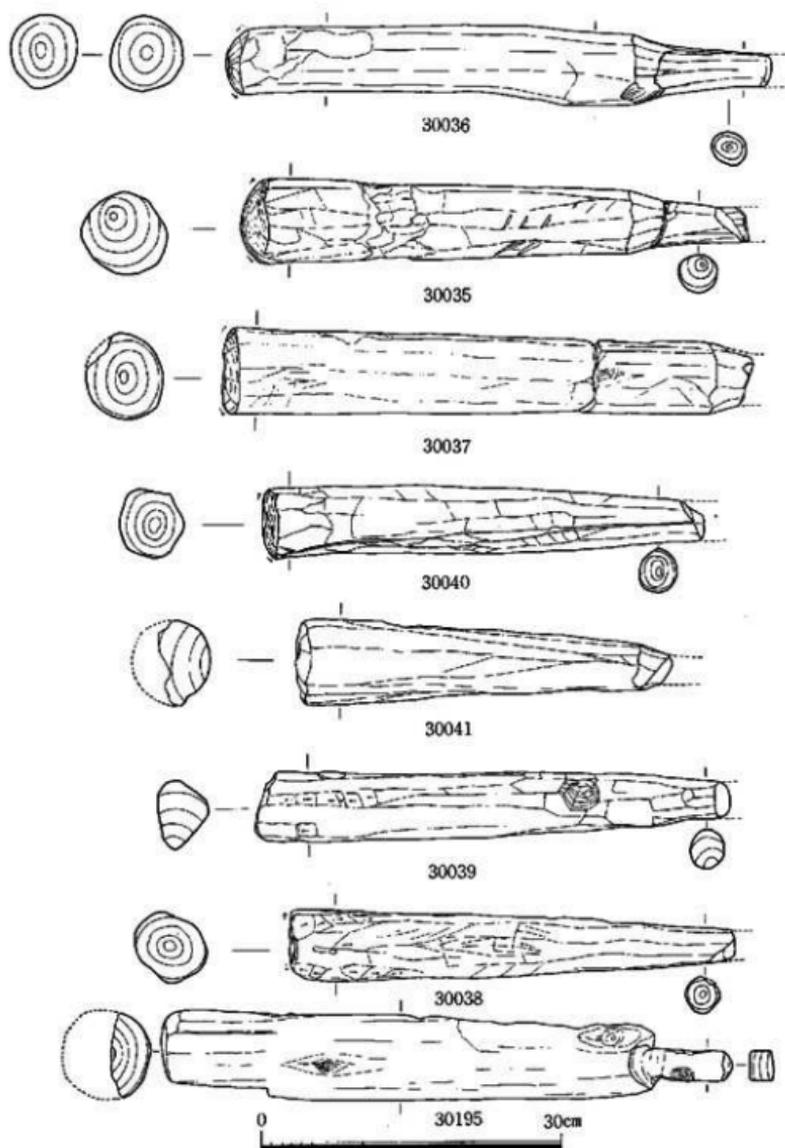
第105图 出土木器夹测图-3 (缩尺1/6)



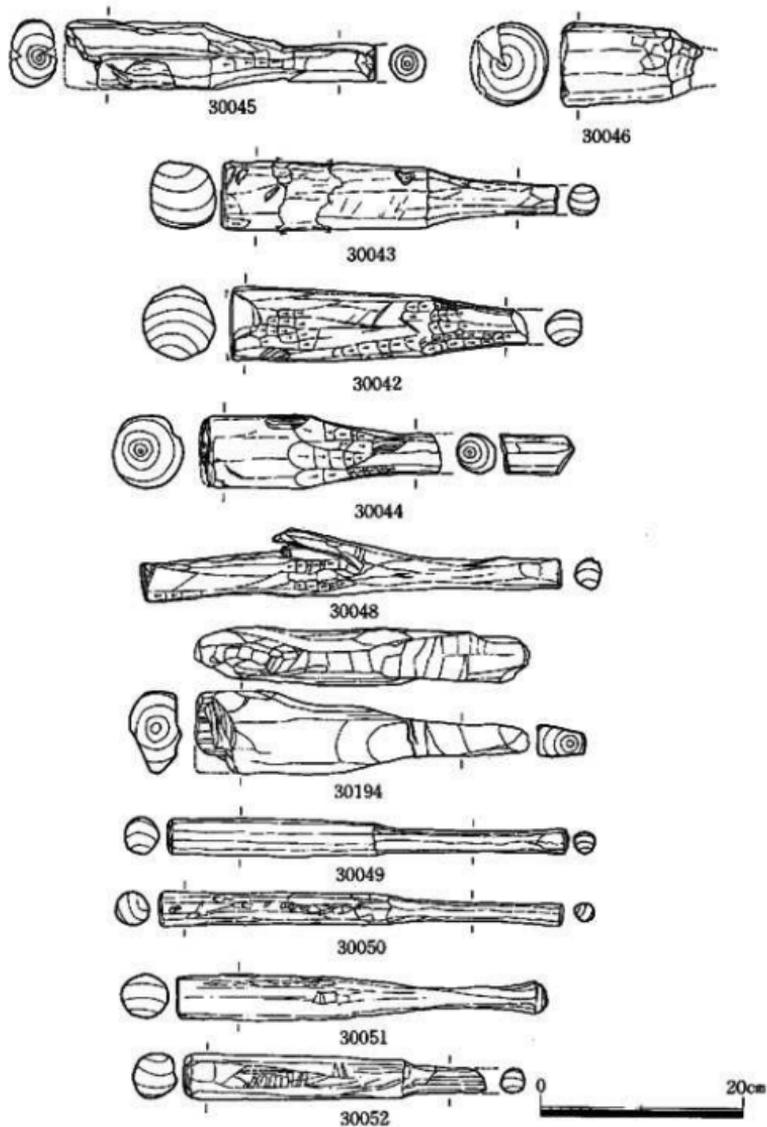
第106图 出土木器实例图-4 (缩尺1/6)



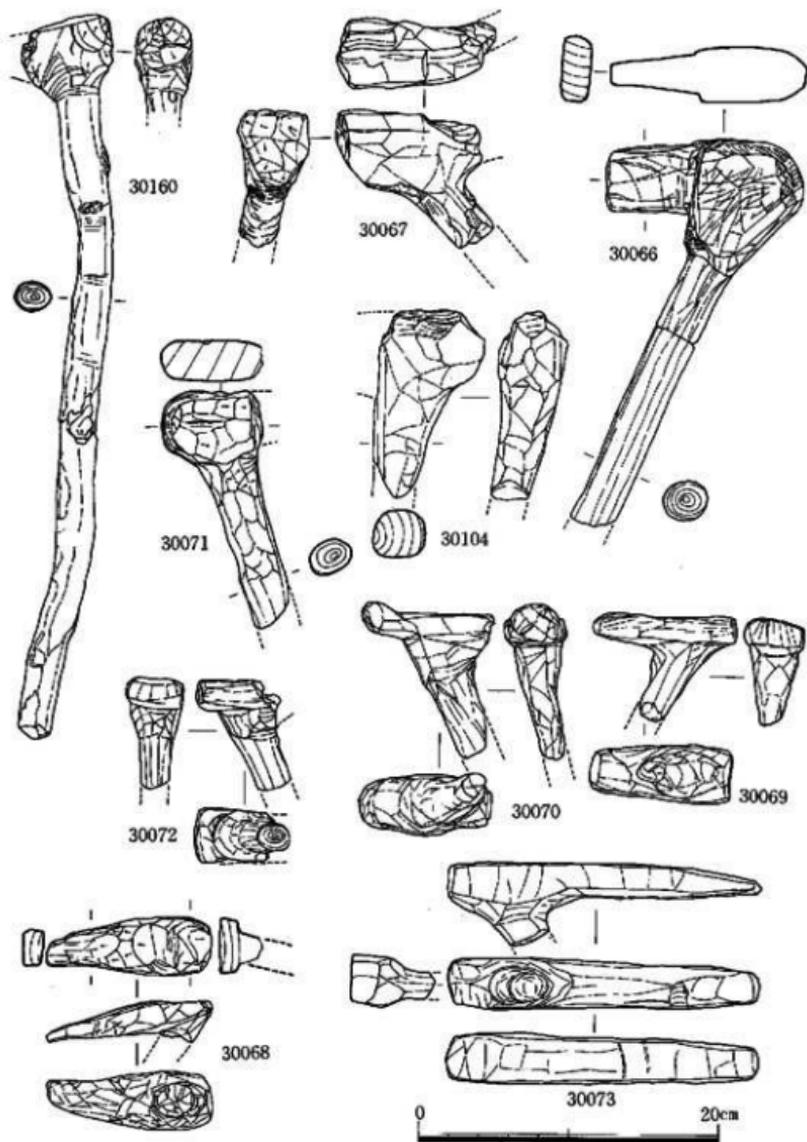
第107图 出土木器实测图—5 (缩尺1/4, 1/6)



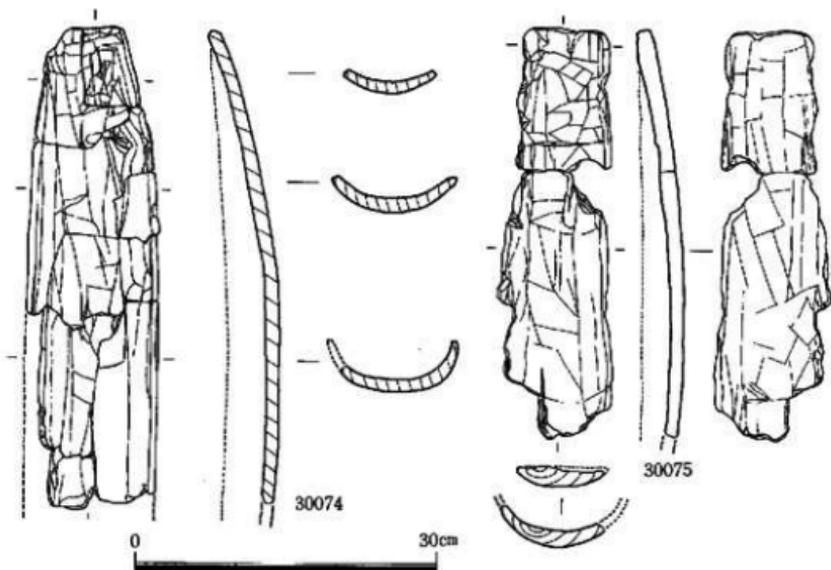
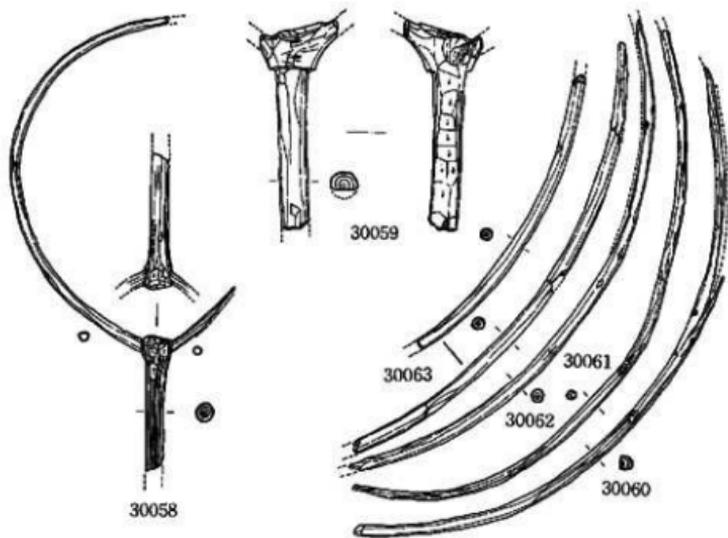
第108图 出土木器类测图-6 (缩尺1/6)



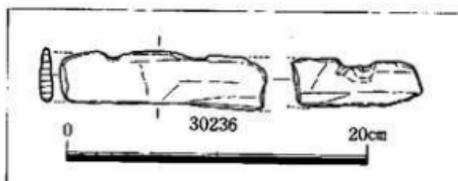
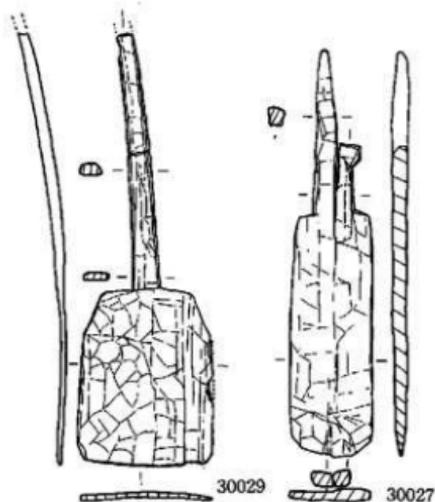
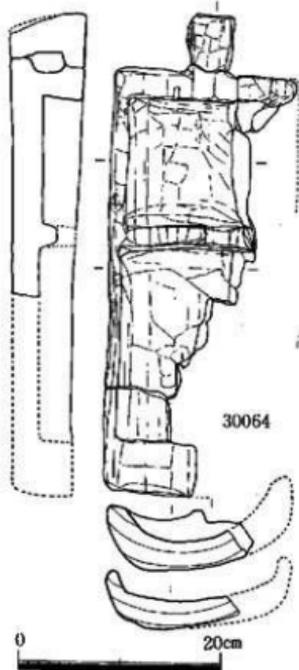
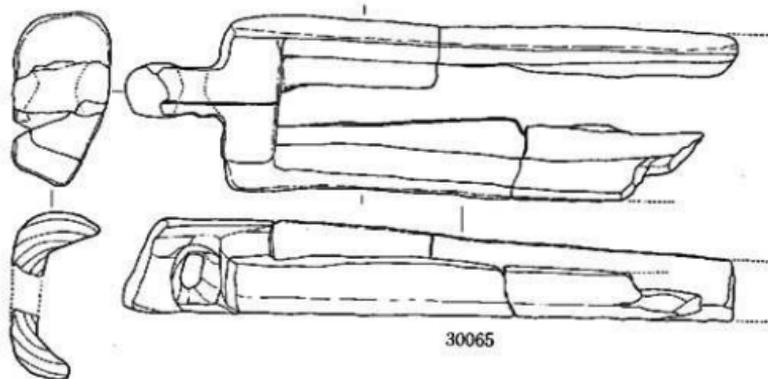
第109图 出土木器夹刻图-7 (缩尺1/6)



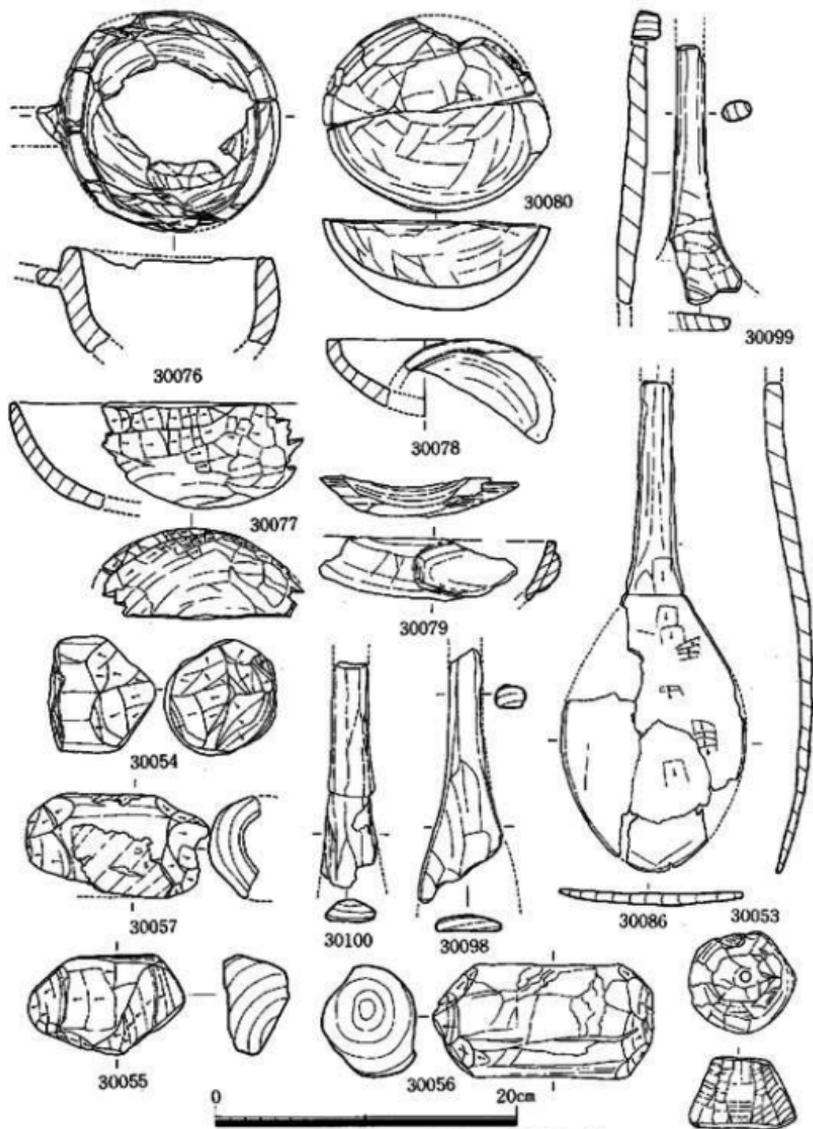
第110圖 出土木器実測図-8 (縮尺1/4)



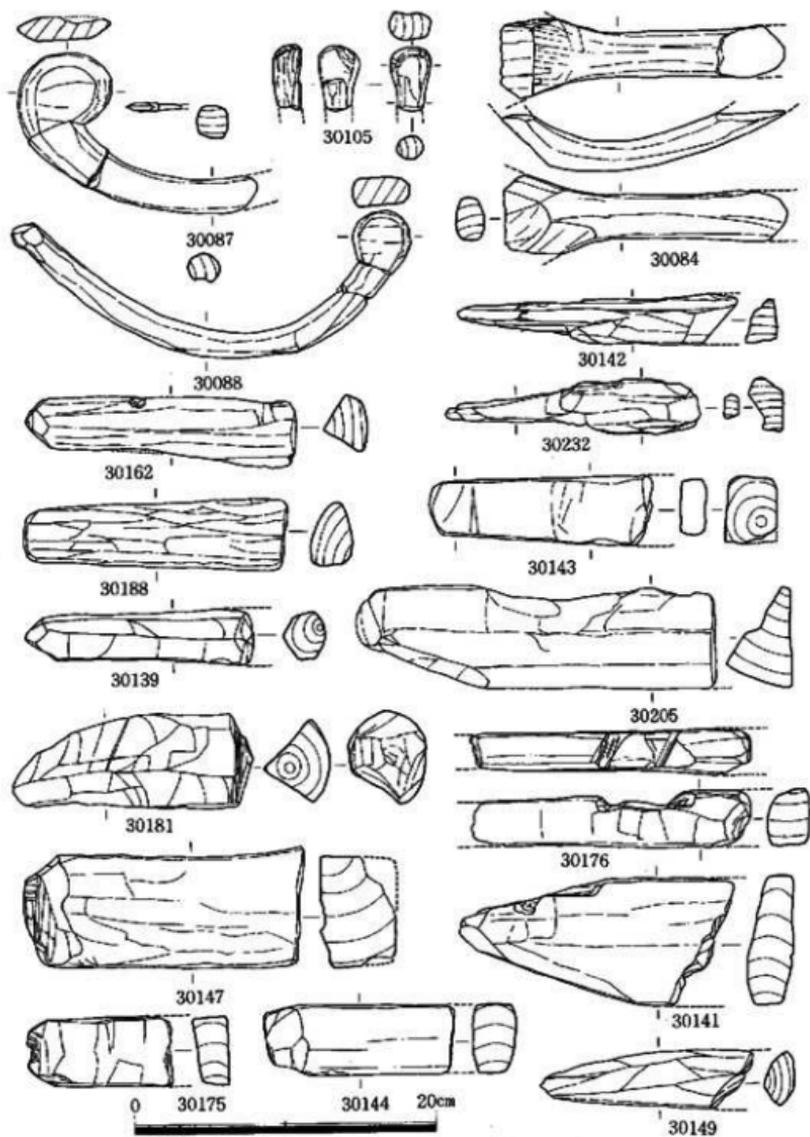
第111圖 出土木器實測圖—9 (縮尺1/6)



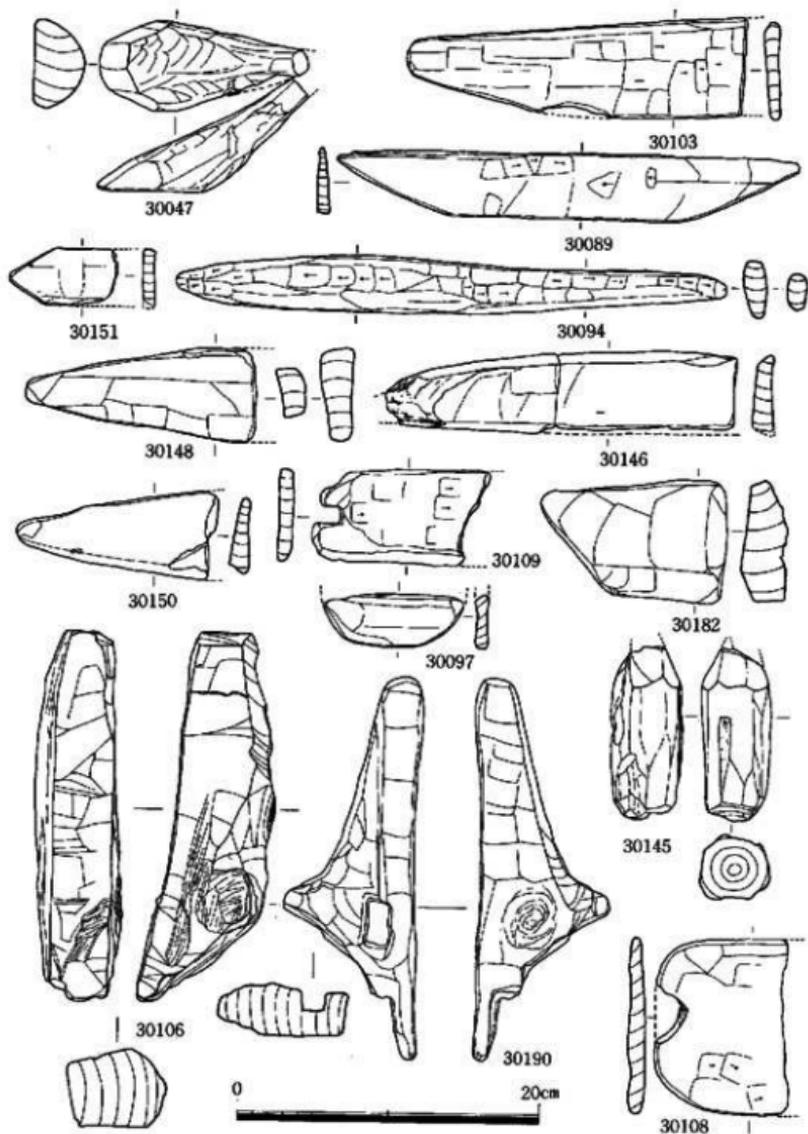
第112图 出土木器实例图-10 (缩尺1/4, 1/6)



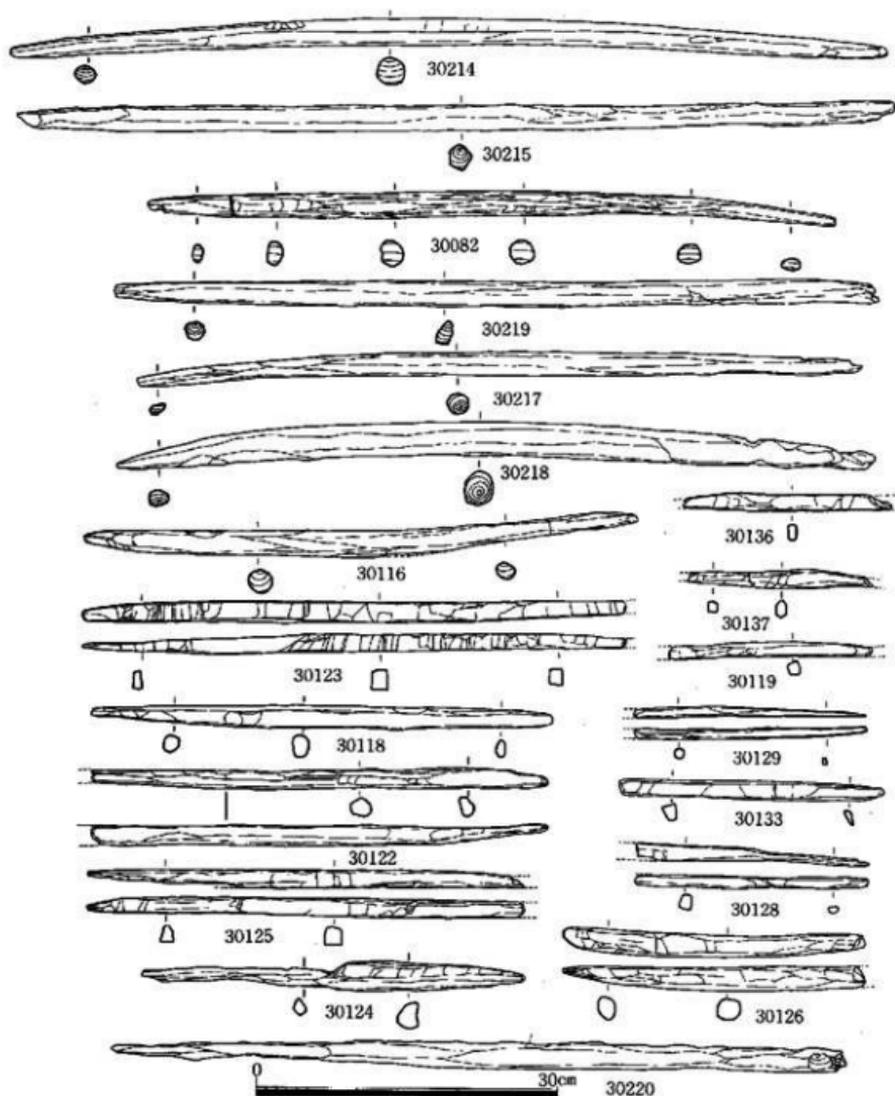
第113图 出土石器实测图-11 (缩尺1/4)



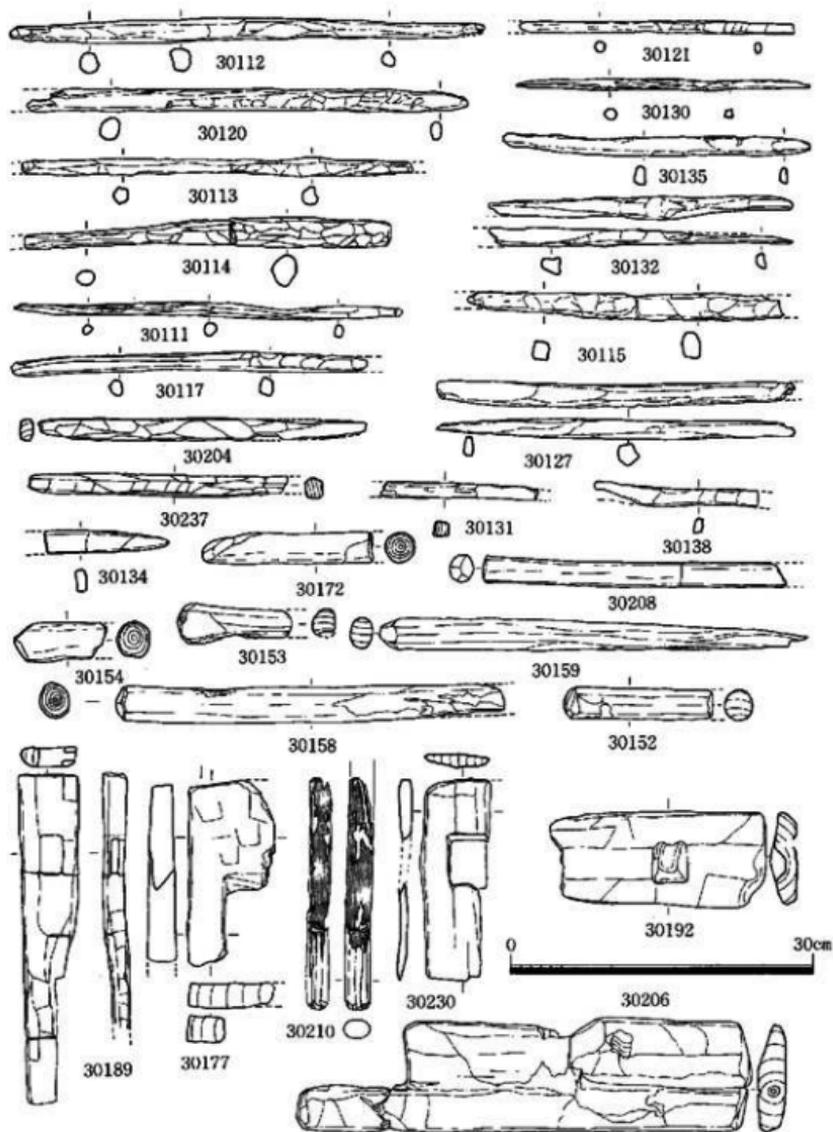
第114图 出土木器实测图-12 (缩尺1/4)



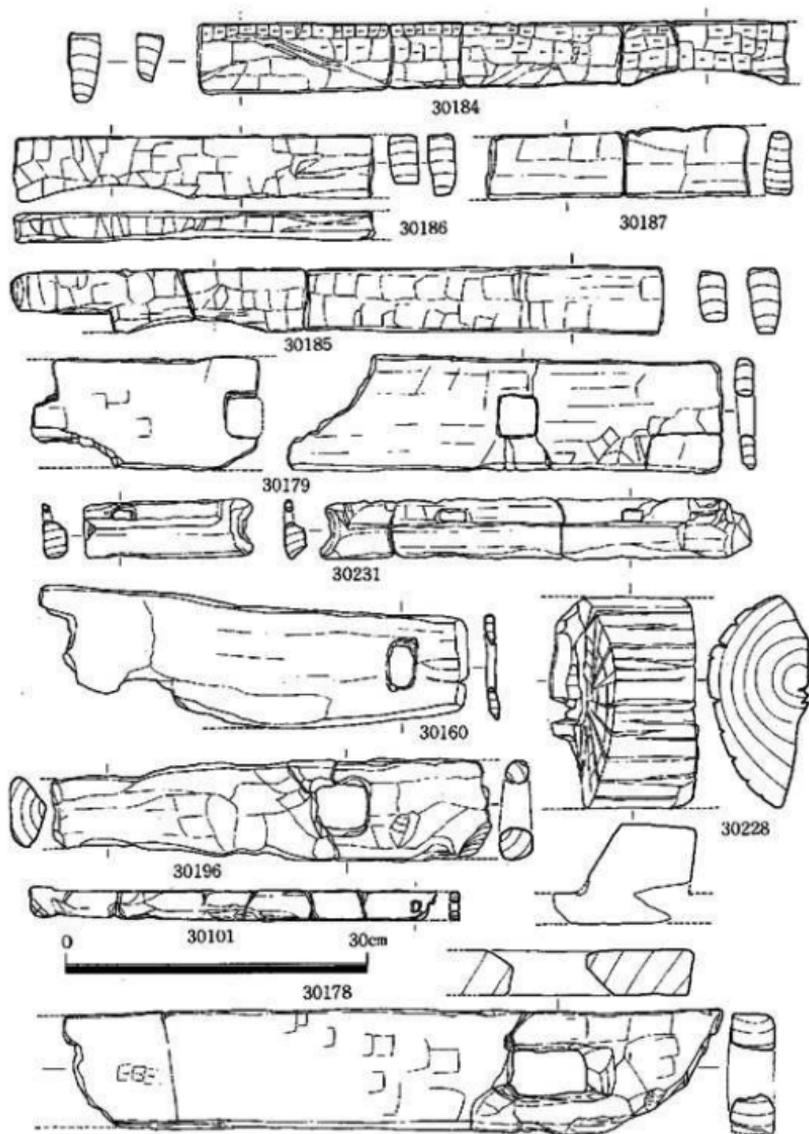
第115图 出土木器实测图-13 (缩尺1/4)



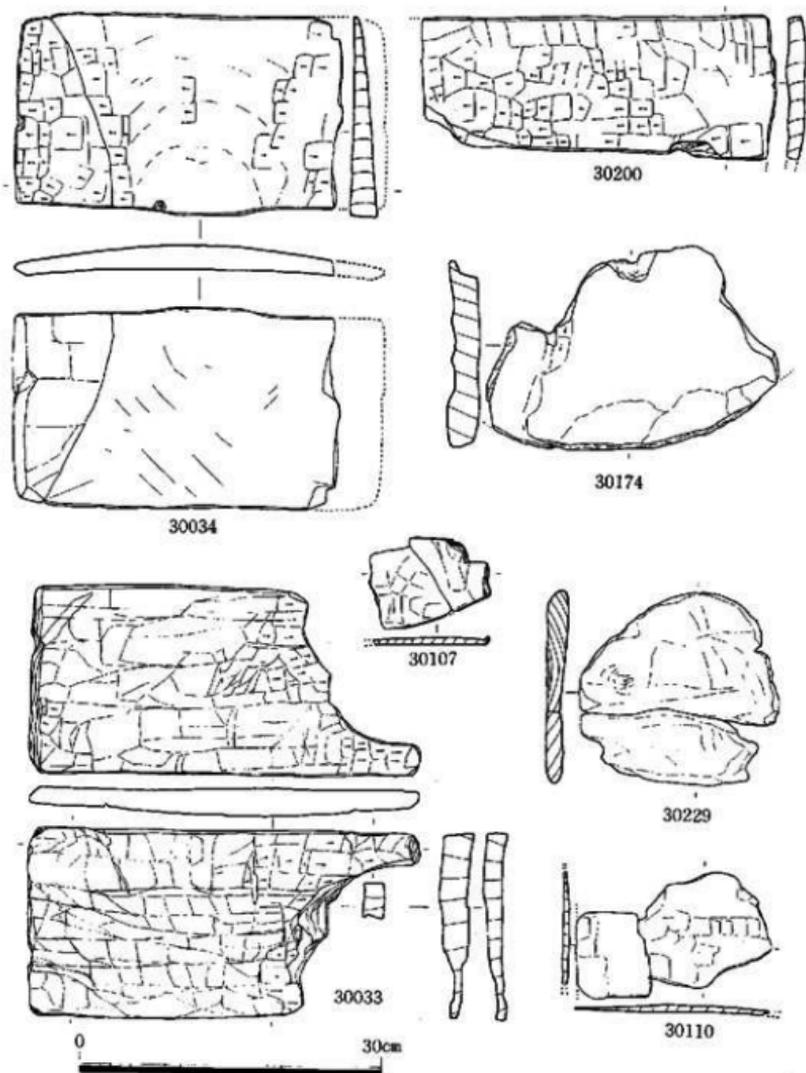
第116图 出土木器尖测图-14 (缩尺1/6)



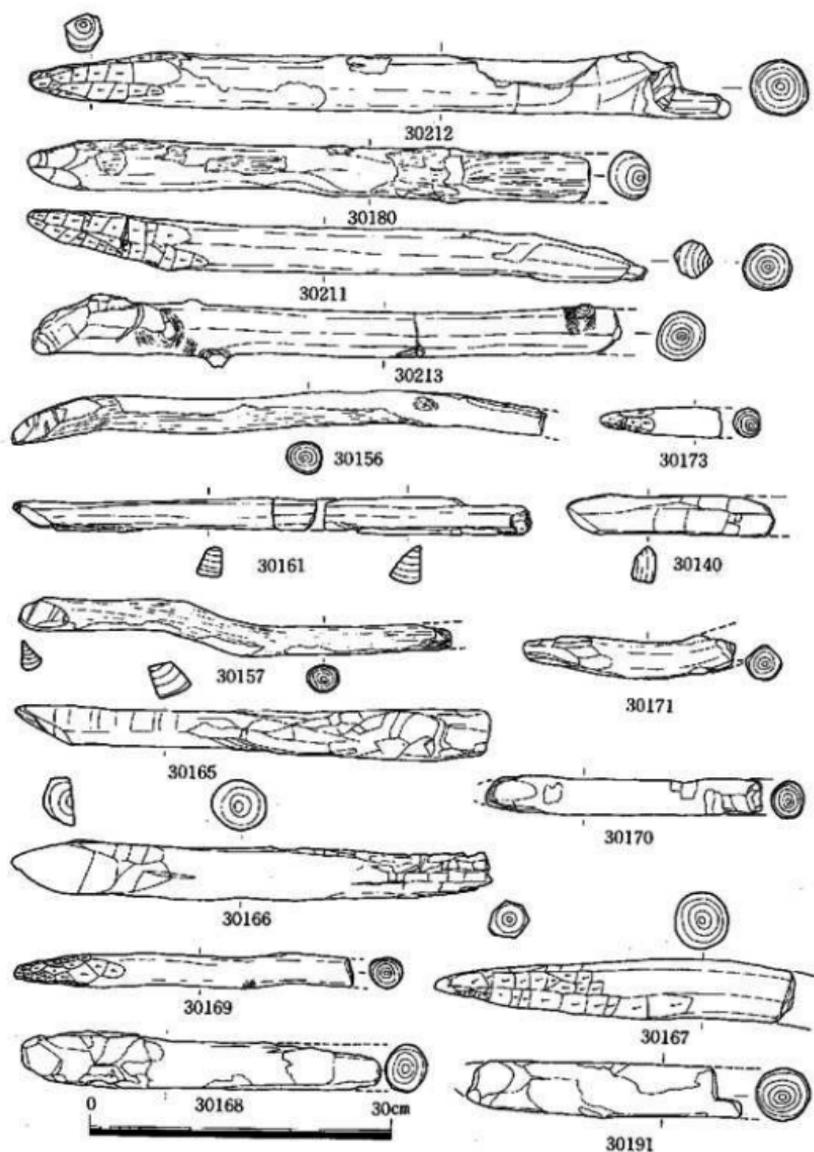
第117图 出土木器实例图-15 (缩尺1/6)



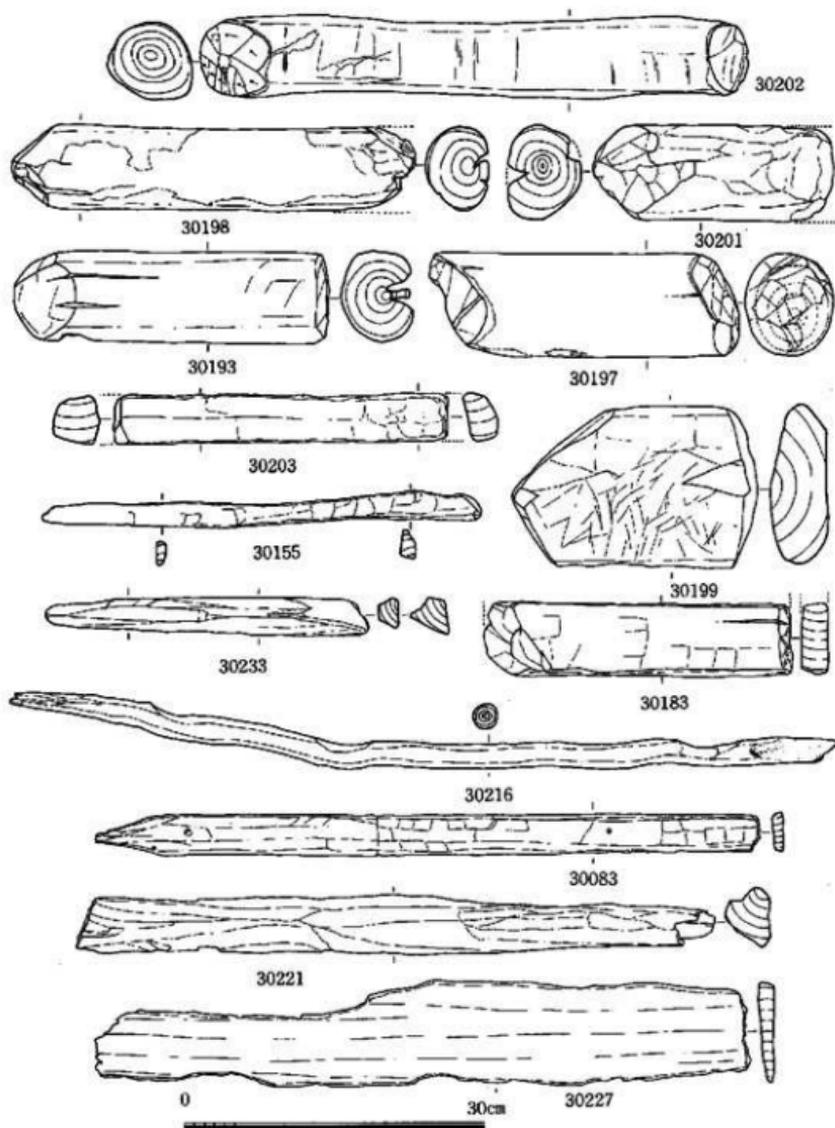
第118圖 出上木器実測圖-16 (縮尺1/6)



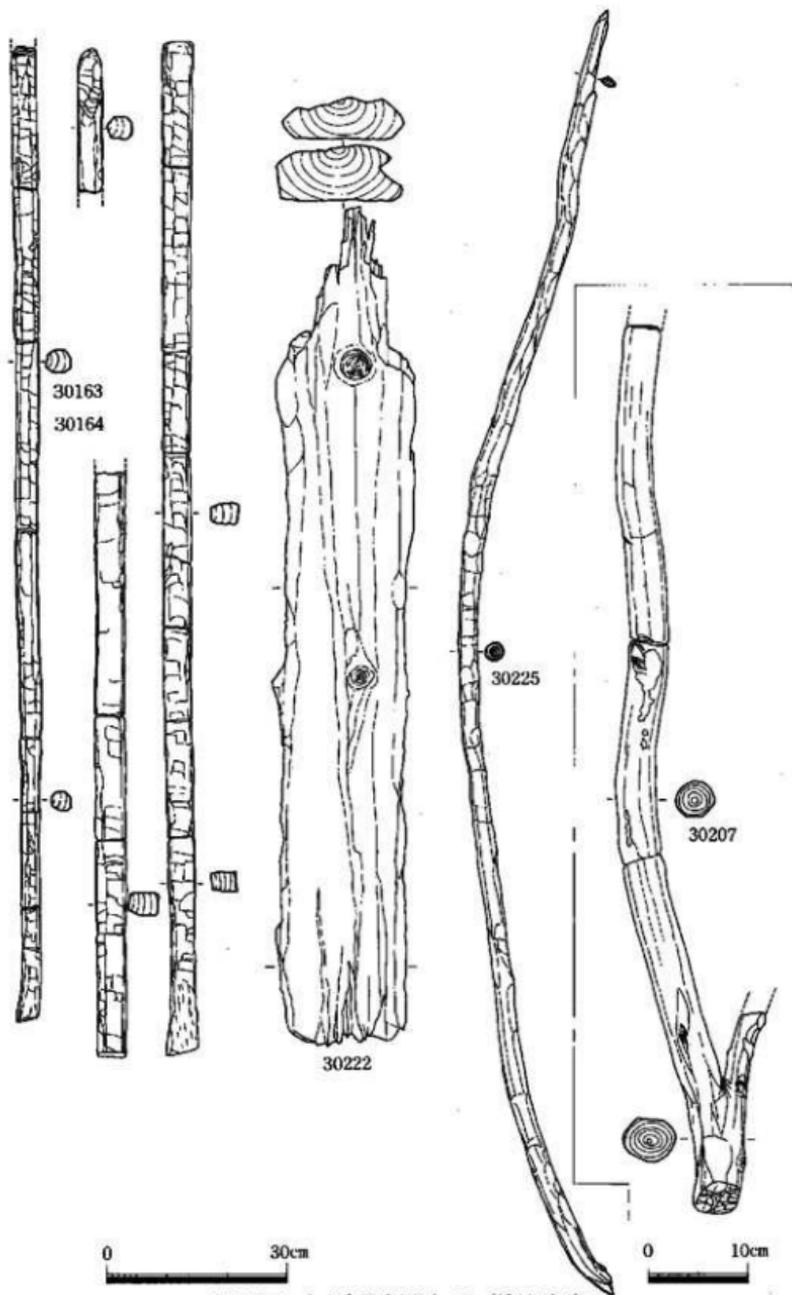
第119圖 出土石器実測圖-17 (縮尺1/6)



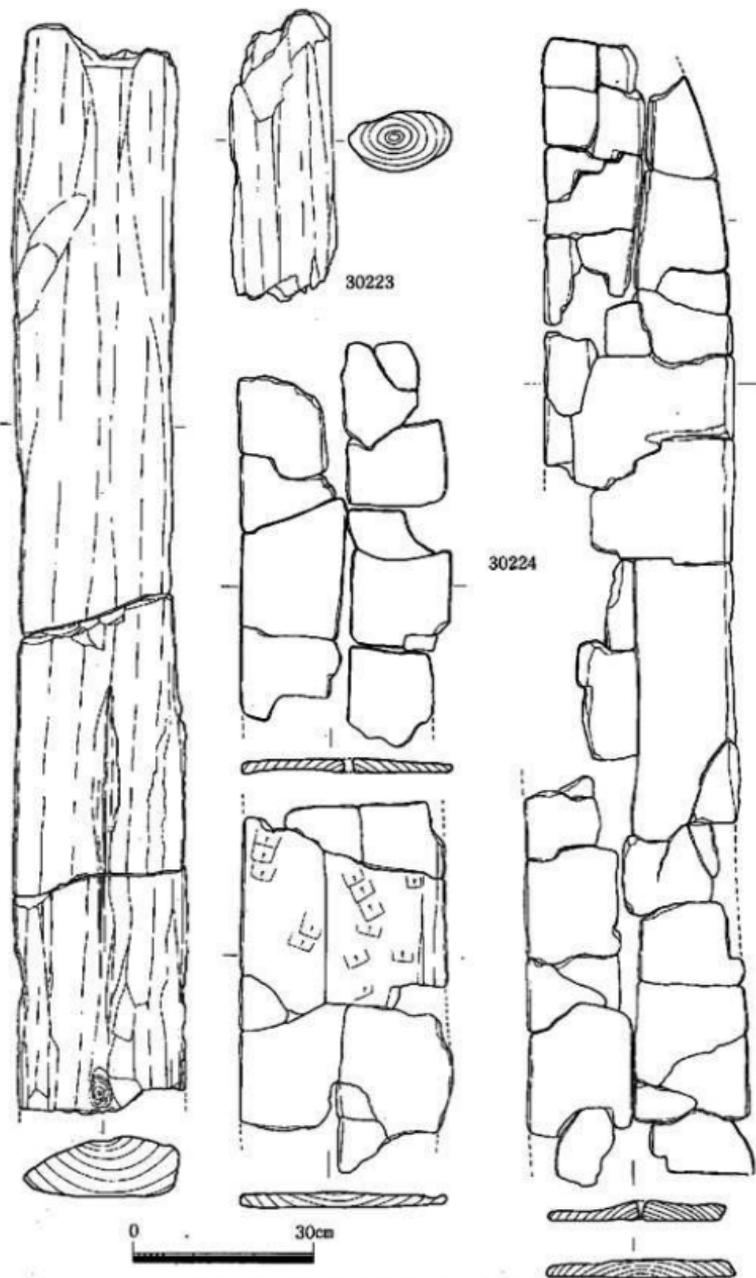
第120圖 出上木器尖測圖-18 (縮尺1/6)



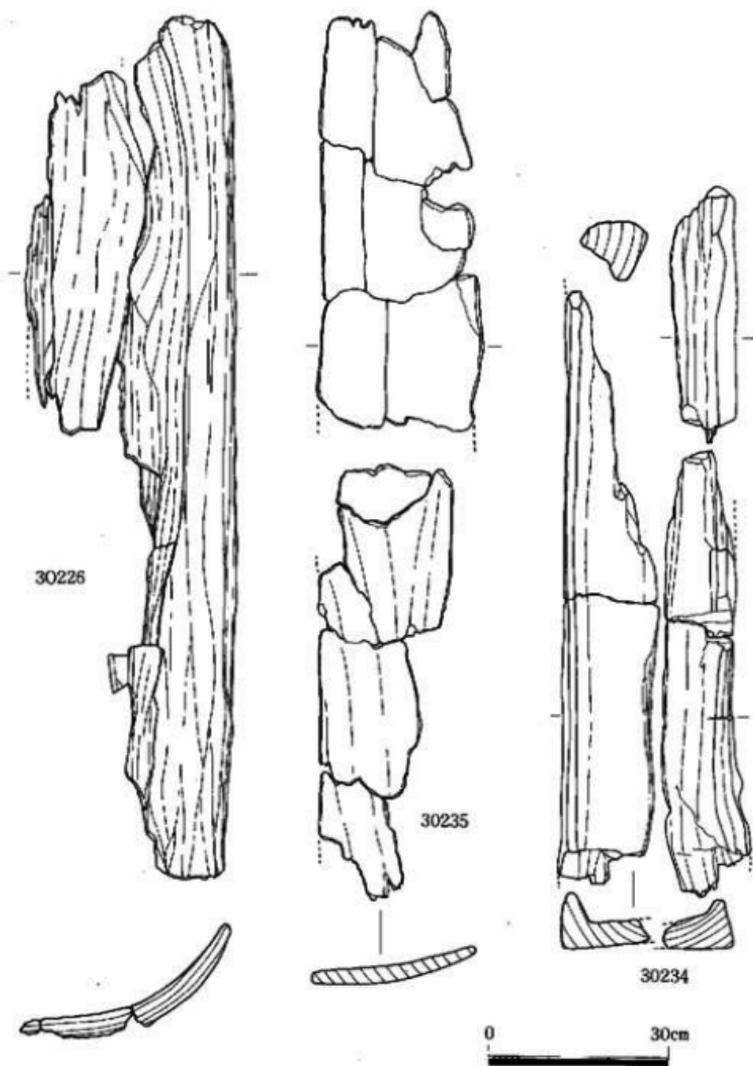
第121图 出土木器实测图-19 (缩尺1/6)



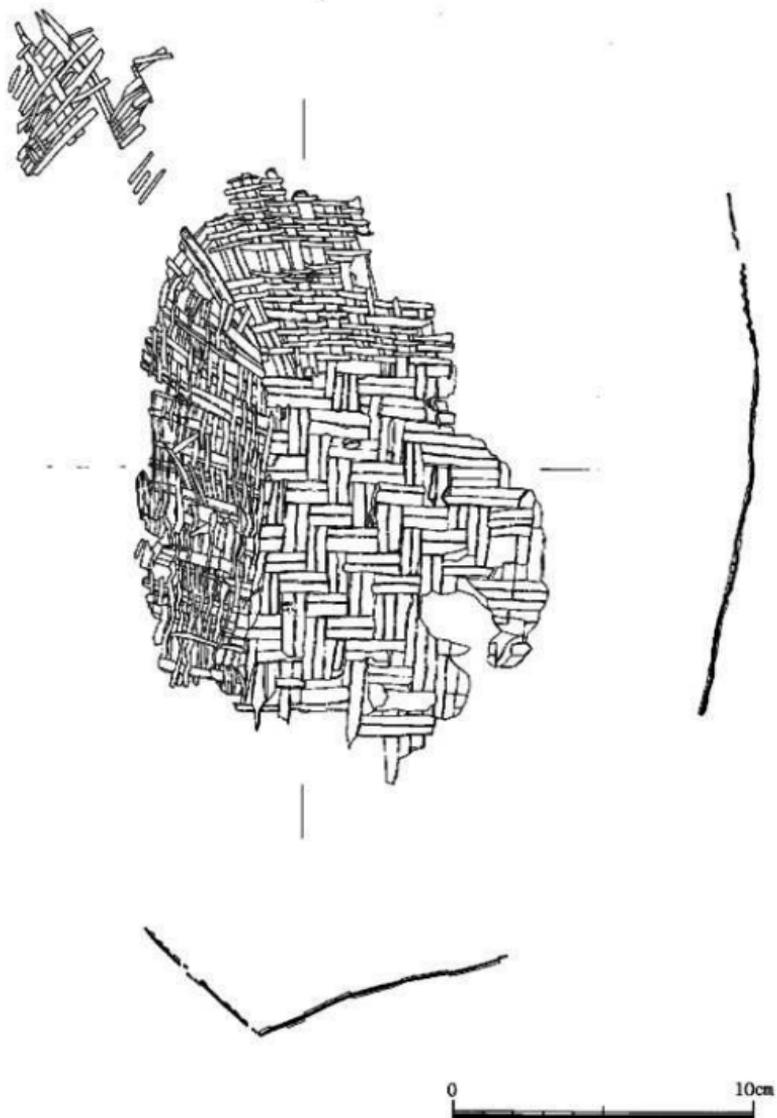
第122图 出土木器类测图-20 (缩尺1/10)



第123图 出土木器实测图-21 (缩尺1/10)



第124图 出土木器实测图-22 (縮尺1/10)



第125回 出土竹籠尖測図 (縮尺1/2)

第四章 SD-100出土の銅鐸型銅製品について

銅鐸型銅製品はSD-100からの出土で、弥生時代中期の包含層(第VII層)と後期の包含層(第V層)との境に出土した。舞の中に詰まっていた土は、第VII層の褐色砂層である。第126図に見られるごとく全長13.5cm(鈕高2.4cm、舞身11.10cm)の小型品である舞は径4.6cmの円形を呈し、裾部も径7.5cmの円形で、接合部の残存部を加えると7.75cmで裾広がりの截頭円錐形を呈する。身は無文で、鐸は無い。鈕は半環状で、舞の端部から0.5cm内に入る部分から始まる。断面形はやや丸みを持った環状を呈し、鈕の上端部3カ所に突起を持つ。この突起は外縁を削り出しによって造り出された物ではなく、鑄造工程によって作り出されたものと考察される。型持孔は身の墨面約1/4上部に2カ所ずつ4カ所ある。身の中央部から下端にかけて3カ所の三角形を呈する孔を持つ。しかし、これは鑄造時のものではなく、その後の削り出しによって造りだされたものである。舞と身の外面の一部と内面に赤色顔料が付着している。これは鐸自体に赤色顔料が塗られてあったものか、もしくは丹塗りの土器等の彩色が鐸に付着したものかは判断できない。内面下端には柁目状の痕跡が残る。この柁目状の痕跡がはたして何から付着したものかはさだかではないが、鐸型の痕跡とも考えられる。舞孔は2孔で方形を呈する。舌は出土しなかった。

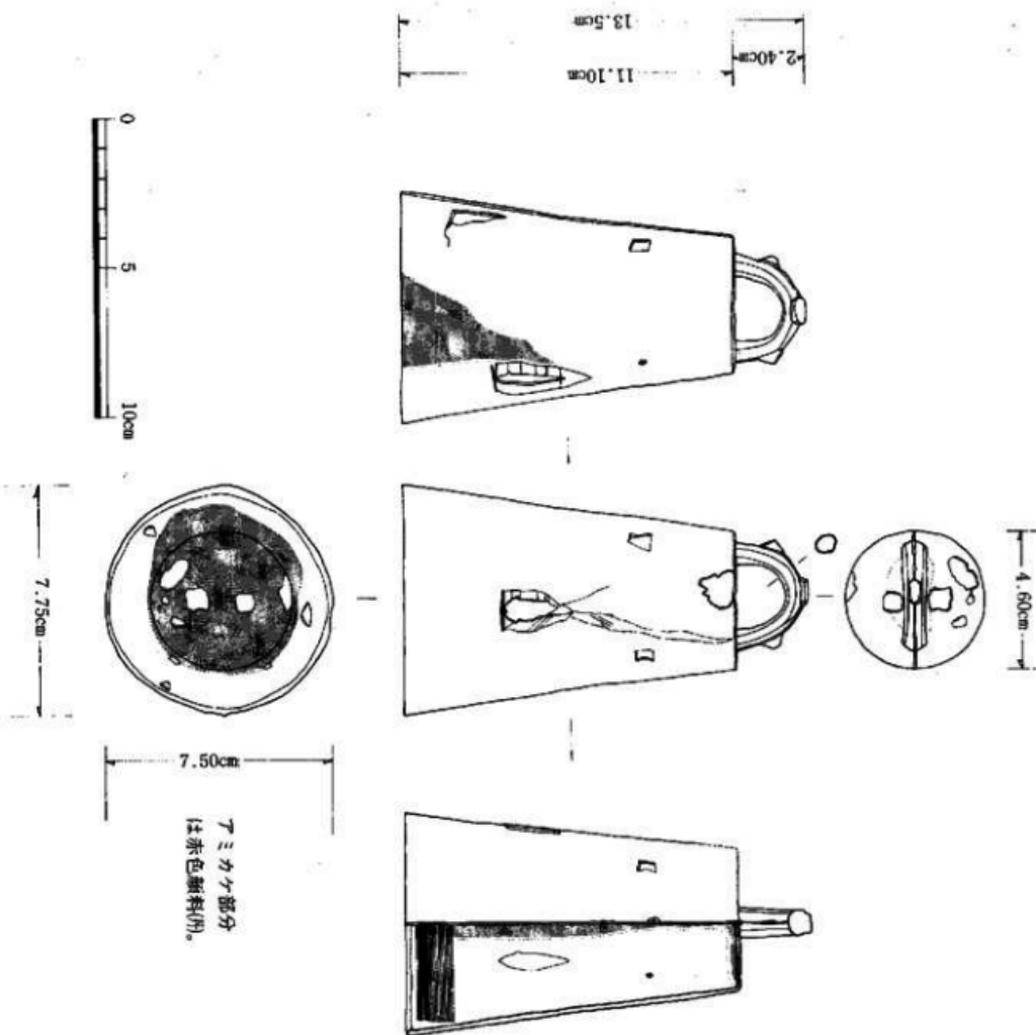
これを整理すると

1. 鈕は半環状を呈し、舞の両端部の0.5cm内側から始まる。
2. 身は裾広がりの截頭円錐形を呈する。
3. 型持孔は両面2カ所ずつ4カ所に配されている。
4. 総高13.5cm(鈕高2.40cm・舞身11.10cm)鐸を持たず、無文である。

九州地方における小銅鐸(佐原真氏の分類²¹)、小銅鐸・銅鐸型銅製品・銅鐸試作品・銅鐸模造品も含まれる)及び鐸型の出土例は、大分県別府遺跡の朝鮮式小銅鐸を始めとして18例(多武尾遺跡、春日大南遺跡、浦志遺跡、今宿五郎江遺跡、板付遺跡(鐸)、宇木汲田遺跡(銅舌)、大谷遺跡、岡本四丁目遺跡、赤穂ヶ浦遺跡、安永田遺跡(鐸型)、詫田西分遺跡、本分遺跡、川寄若宮遺跡、川寄吉原遺跡、利田柳遺跡、的五本黒木遺跡、琴の宮遺跡、吉野ヶ里遺跡(土製品)である²²。

次に国内から出土した小銅鐸・銅鐸型銅製品類は鳥取県の長瀬高浜遺跡、東郷遺跡、静岡県の有東遺跡、開峯遺跡、陳ヶ沢遺跡等12例ある。

この中で今宿鐸に形態が類似しているものは、九州では川寄若宮遺跡、利田柳遺跡、本分遺跡出土の土製品、九州以外では東郷遺跡、有東遺跡の鐸がある。しかし、詳細な部分ではかなりの相違が認められる。



第126図 銅鐺型銅製品実測図 (縮尺1/2)

今宿五郎江遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比について

東京国立文化財研究所 馬 淵 久 夫
同 上 平 尾 良 光

1. はじめに

青銅器の原料産地を推定するための手法として、近年クローズアップされている手法に鉛同位体比法がある¹⁻³⁾。鉛は質量の異なる4種の同位体^{204Pb}、^{206Pb}、^{207Pb}、^{208Pb}の混合物であり、その混合比(同位体比)は鉛鉱床の性格と生成年代によって異なるので、産地の指標になり得る。筆者らは、弥生時代から歴史時代初頭に至るまでの日本出土の青銅器にこの手法を応用し、各時代の青銅原料に関する知見を得ている¹⁻³⁾。

今回、今宿五郎江遺跡出土小銅鐸の測定を行なったので、その結果を報告する。

2. 測定法および結果

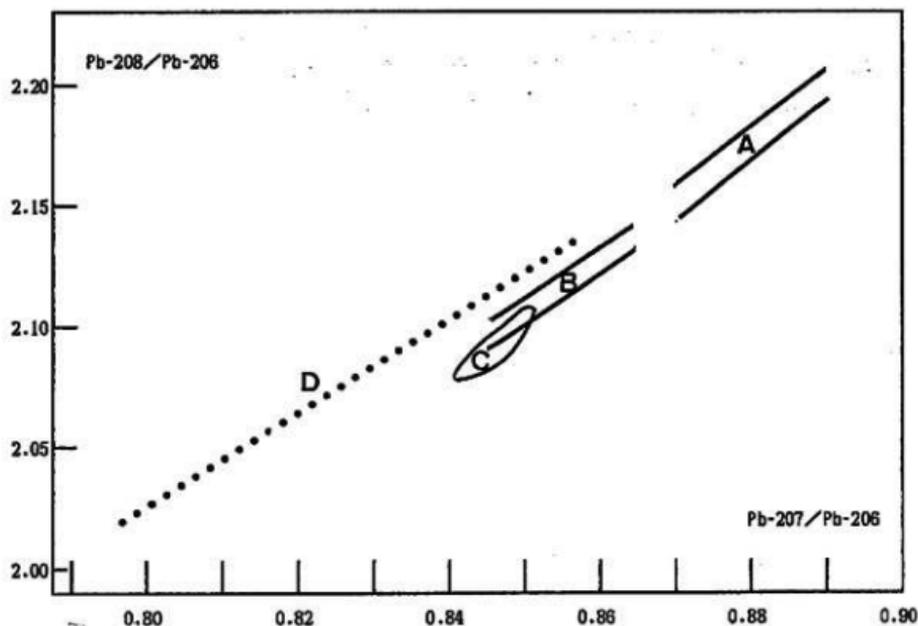
現在、同位体比を測定する機器である質量分析計は極めて高感度になっているので、本法はほとんど非破壊法と言って差し支えない。出土青銅器に必ず生じている錳の微量を採取すればよい。同位体比は化学反応の過程でほとんど変わることがないので、錳の中の鉛を使って測定すればよい。そこで、錳を約1ミリグラム使って同位体分析を行なった。化学分離は電着法を用いた。分離精製された鉛のうち、約0.2マイクログラムを使って、東京国立文化財研究所に設置されている英国VG Isotope社製表面電離型質量分析計 VG Sectorで鉛同位体比を測定した。

測定結果は表1のようになった。

3. 考察

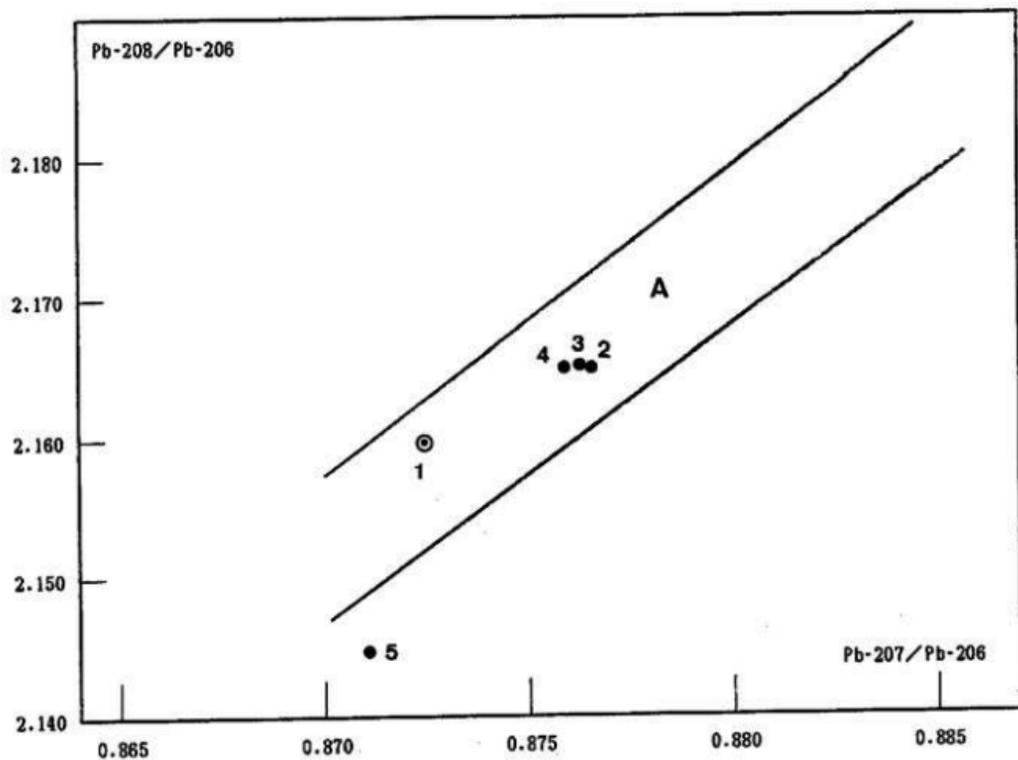
鉛同位体比の測定値から鉛の産地を推定するためには、産地の分かった鉛鉱石と時代別の考古遺物の測定値を基準にしなければならない。筆者が確立したタイプ別の鉛同位体比の分布範囲を図1に示す。この図は^{208Pb}/^{206Pb}を縦軸に、^{207Pb}/^{206Pb}を横軸にプロットするものであるが、その概略は次のようになる。

まず、Aの範囲は、弥生時代に将来された前漢鏡が占める位置で、華北の鉛である。弥生時代の国産青銅器の大部分はこの範囲に入る。Bは後漢・三国時代の舶載鏡の占める範囲で、華中または華南の鉛。古墳出土の青銅鏡の大部分は仿製鏡も含めてここに入る。Cは日本産の鉛鉱石。Dは多鈕細文鏡・細形銅利器のような弥生時代に将来された朝鮮系遺物が位置するラインである。このように、弥生時代から古墳時代中期までの出土遺物はA、B、Dの何れかに属し、



第127回 鉛同位体比分布の概念図

No	資料名	出土地	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
1	小銅鐸	福岡県今宿五郎江遺跡	17.789	0.8724	2.1599
参考資料					
2	小銅鐸 ⁽¹⁾	静岡県浮島開率	17.719	0.8766	2.1639
3	小銅鐸 ⁽¹⁾	栃木県小山	17.719	0.8764	2.1642
4	小銅鐸 ⁽²⁾	神奈川県海老名木郷遺跡	17.760	0.8757	2.1644
5	朝鮮式小銅鐸 ⁽³⁾	大分県宇佐市別府	17.892	0.8711	2.1438
測定誤差			±0.006	±0.0002	±0.0004



第128図 銅鋳型鋼製品の鉛同位体比

Cに入るものはないことが今までの測定で分かっている。

さて、今回の測定値を図1にプロットすると領域Aに入ることは明らかである。このことから、材料は銅鐸・銅剣など弥生時代のもので出所が同じで華北と考えられる。筆者らはすでに関東地方などで出土した小銅鐸および大分県出土の朝鮮式小銅鐸の鉛同位体比を測定して発表したが、それらのデータを参考資料として表1に再録する。図2は図1の領域A付近を拡大し、表1のすべてのデータをプロットしたものであるが、いくつかの重要な事実を物語っている。

まず、朝鮮式小銅鐸(NO.5)は、すでに報告したように他の弥生時代の青銅器とは違った産地の鉛を含み、特殊である¹⁰⁾。つぎに、浮島開峯、小山、海老名本郷遺跡出土の小銅鐸(NO.2、3、4)は非常に近接した値を示し、しかも近畿式・三遠式銅鐸の鉛同位体比と一致する。つまり、銅鐸製作の末期に盛んに使われていた画一的な材料と考えられる。

ところが、今宿五郎江遺跡出土小銅鐸(NO.1)は領域Aに入っているものの、近畿式・三遠式銅鐸とは違う値をとっている。このような値は佐原真氏の分類で外縁付鈕Ⅱ式、扁平鈕式、突縁鈕Ⅰ式には存在しているので、関東で出土した小銅鐸よりも若干早い時期に使われた原料を用いて製作されたのではないかと推測される。

参 考 文 献

- 1) 馬淵久夫、富永健編：「考古学のための化学10章」東京大学出版会 1981
- 2) 馬淵久夫、富永健編：「続考古学のための化学10章」東京大学出版会 1986
- 3) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比による漢式鏡の研究 MUSEUM 370号 1982
- 4) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比からみた銅鐸の原料 考古学雑誌 第68巻1号 1982
- 5) 馬淵久夫、平尾良光ほか：古代東アジア銅貨の鉛同位体比、考古学と自然科学 15号 1982
- 6) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比による漢式鏡の研究(2) MUSEUM 382号 1983
- 7) 馬淵久夫、江本義理ほか：鉛同位体比による太安萬侶墓誌銅板および武蔵国分寺付近出土銅造仏の原料産地推定、古文化財の科学 28号 1983
- 8) 馬淵久夫、平尾良光：東アジア鉛鉱石の鉛同位体比、考古学雑誌 第73巻2号 1987
- 9) 馬淵久夫、平尾良光：本郷遺跡出土小銅鐸の鉛同位体比「海老名本郷」富士ゼロックス株式会社・本郷遺跡調査団 1985
- 10) 馬淵久夫、平尾良光：宇佐市別府出土朝鮮式小銅鐸の鉛同位体比、古文化談義 第12集 1983

第V章 ま と め

1. 遺構について

今宿五郎江遺跡の遺構は大きく分けて、弥生時代中期から後期にかけての時期と鎌倉時代から室町時代にかけての時期に分けられる。

弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は南台地に集中している。溝、掘立柱建物、井戸、土壇、Pitを検出したが、遺構全体が0.5m～0.7m程度削平を受けているため、住居址等の検出はできなかった。

溝 SD-01から47までの遺構は水田址等の溝(暗渠)と考察できる。住居址の排水溝とも考えたがまとまりのない配列で、排水溝とは考えられない。削平が著しいため底面まで削平されているものがある。溝自体は連続していたと考えられる。

SD-50は台地中央部に位置し、35m×50m程度の環壕集落と考えられるが、全容が把握できない。遺物は土器をはじめとして多量の木器が出土しており、今後の調査が期待される。

SD-100はヤツデ状に広がる台地の凹地につくられた溝(旧河道)と考えられる。この溝は今津湾の内湾に続くもので、南側台地には入江状の窪みが認められる。このSD-100は大きく分けて上下二層に分けられ、上層からは後期初頭の土器群が層をなして出土している。下層には木器、石器等が土器とともに出土している。銅鐸型銅製品はこの層と上層の境から出土している。

掘立柱建物

弥生時代の掘立柱建物は、1間×1間が36棟、1間×2間が26棟、1間×3間が5棟、2間×2間が4棟、2間×3間が2棟、1間×4間が1棟検出した。遺構は台地全体が0.5m～0.7m程削平を受けているため、竪穴式住居址等の壁面等が削平され、辛うじて柱穴が残る程度である。1間×1間の建物は竪穴式住居址の柱穴とも考えられる。近年、2本柱の竪穴住居址の検出も目立ち始めている。しかし、柱穴だけしか残らない状態では住居址の実態をつかむことは出来ないため一応ここでは掘立柱建物として取り扱う。他の掘立柱建物は高床倉庫であろう。方向性から約4期に区別できる。この他井戸が1基検出された。この井戸からは多量の遺物が出土した。湧水点も高く常に水が湧き出していたことが判明した。

鎌倉時代から室町時代にかけての掘立柱建物について

SD-200から瓦が数点ではあるが出土している。このことは周辺に瓦を葺いた建物が存在していた資料である。調査した掘立柱建物は1間×1間が12棟、1間×2間が16棟、2間×2間が9棟、2間×3間が5棟、1間×3間が2棟である。ほぼ2間×2間、2間×1間が主体をなすものと考えられる。今回の調査では、幅20mと狭い範囲であるため周辺の調査が進むことによ

り、その実態が明らかになるものと思われる。

2. 銅鐸型銅製品について²³⁾

本遺跡の銅鐸型銅製品はSD-100からの出土で、弥生時代中期の包含層(第七層)と後期の包含層(第五層)との境に出土した。鐸の中に詰まっていた土は、第七層の褐色砂層である。

全長13.5cm(鈕高2.4cm、鐸身11.10cm)の小型品である鐸は径4.6cmの円形を呈し、裾部も径7.5cmの円形で、接合部の残存部を加えると7.75cmで裾広がりの截頭円錐形を呈する。

鐸と身の外面の一部と内面に赤色顔料が付着している。これは鐸自体に赤色顔料が塗られてあったものか、もしくは丹塗りの土器等の彩色が鐸に付着したものは判断できない。

内面下端には柁目状の痕跡が残る。この柁目状の痕跡がはたして何から付着したものは定かではないが、鋳型の痕跡とも考えられる。

鐸孔は2孔で方形を呈する。舌は出土しなかった。

これを整理すると

1. 鈕は半環状を呈し、鐸の両端部の0.5cm内側から始まる。
2. 身は裾広がりの截頭円錐形を呈する。
3. 型持孔は両面2ヶ所ずつ4ヶ所に配されている。
4. 総高13.5cm(鈕高2.40cm・鐸身11.10cm)、鏝を持たず、無文である。

今宿鐸に形態が類似しているものは、九州では川寄若宮遺跡、利田柳遺跡、本分遺跡出土の土製品、九州以外では東郷遺跡、有東遺跡の鐸²⁴⁾がある。しかし、詳細な部分ではかなりの相違が認められる。

今宿鐸については1986年に佐賀県立博物館で開催された「古代史発掘—新出土品にみる九州の古代文化—」²⁵⁾の図録の中で、藤口健二氏は「身の形状は佐賀県川寄若宮遺跡出土の鐸形土製品と類似している。鈕の形状も特異であるが、頂部と左右に銅鐸の鈕に付く飾耳様の突起を持つ点で、扁平鈕式銅鐸の影響も認められる資料である。」²⁶⁾としている。しかし、鈕に付く突起は飾耳様とは考え難いものである点、それをして扁平鈕式銅鐸の影響が認められとするのは容易と考えられる。鈕は半環状を呈しており、飾耳様の突起部分の断面でも菱環ではない。佐原真氏の分類²⁷⁾では「小銅鐸には鏝を欠くものも多く、鈕の形態は普通の銅鐸の形式分類の適用外にある。」小銅鐸は普通の銅鐸の適用外であるとしている。このことから扁平鈕式の影響を受けたとする説には賛成し難い。

九州地方において朝鮮式小銅鐸である別府鐸を除いて国産品として考えてよいものに浦志鐸、大南鐸、多武鐸、板付鐸があり、今宿鐸で5例目であるが、それぞれの鐸が形態を異にする。

鋳型も4例発見されているが、これらも形態・紋様が異なる。ただ共通していることは、そ

の殆どが生活活動範囲内から発見されていることであり、これは銅鐸の発見場所とは多くなる異なりを示す。なお、このことについては佐原真氏が充分な説明を加えて提言されている⁸⁴。これらのことから今宿鐸を分析すると、形状が特異で、舞型土製品との類似点があること、型持孔が両面2孔ずつ計4孔あること、小型であること、無文・鏤が無いこと等は国産の小銅鐸の範疇に入る。また、集落の中(溝内)から多量の祭祀土器とともに出土し、出土地点の土層から弥生時代中期～後期にかけての時期に破棄されたと考えられる。

身の下端に3ヶ所の三角形の新しい削り出しによる孔を持つことから製作年代と使用年代、破棄年代とはかけ離れていたと考えられる。破棄年代は溝の土層・出土遺物から弥生時代中期末から後期初頭(銅鐸内に入った土から考えると弥生時代中期末)である。使用年代はそれ以前であったことは確実で、この段階で新しい3ヶ所の三角形孔が削り出されたものであろう。製作年代はそれ以前であることは間違いないものと考えが、その時期については明確にする資料がないため現段階で早急に結論を引き出すことは避け、今後多くの資料が蓄積されるまで結論は待ちたい。

3. 遺物から見た生活様式について

弥生時代中期から後期にかけての遺構の広がり、出土遺物のあり方、特にSD-100における遺物について考察を加えて見たい。

SD-100から出土した土器、石器、木器は、その時代の生活様式を考察できる資料を提供してくれた。

土器は弥生時代中期中葉の遺物が出土している。SD-100が埋まる寸前に弥生時代後期末の遺物が出土しているところから、SD-100の時期は出土遺物が示す時期と考えて良い。これらの土器を調査・整理していく段階で、非常に丹塗り土器が多量に認められ、出土土器の約80%が丹塗り土器であった。器種は多種多様であるが、その中でも中期末における壺形土器、甕形土器の出土点数は、他の遺物を圧倒的な量で上回り、出土遺物全体の約50%が壺形土器、30%が甕形土器で、その8割が丹塗り土器であった。一般に丹塗り土器は祭祀に関係するものと考えて良いが、これに銅鐸型銅製品が加われば祭祀が行われたことは十分に考察出来る。

石器に関しては石錘の量の多さ、多種多様な形態が上げられる。すべてが滑石製で、大型の石錘は約3kg程あり、網の錘として使用したもので、この滑石は今津湾、今山の対岸にある毘沙門山にその原産地がある。また、紡錘車、太型蛤刃石斧、砥石、磨石の量が多い。石錘は未製品を含めて47点出土した。大まかに分類して5形式に分類できる。この石錘の分類の内、分銅形タイプについて下條信行氏が形式分類⁸⁵を行っている。下條氏の分類によれば、博多湾と糸島型に分類⁸⁶でき、糸島型は前原周辺から西に分布し、博多湾型は博多湾から北に分布する

様相を持つ。今津湾はその分布が重なる所で両方の要素を持つ。今宿五郎江遺跡では、両方の要素を持つ石錘が出土しているところから下條氏の形式分類の範疇にある。

木器には、生活様式を明らかにする遺物が多量に出土した。特に漁撈に関する資料が豊富で、船、タモ網、竹籠、突き棒状木器、模型の船等がある。農耕具は起耕具、整地具、収穫・脱穀具・補助具がある。狩猟具として石斧柄がある。生活用具として槽、容器、釜、編み具、杓子等がある。容器の中には柄が5点出土し、杓子は大小合わせて4点出土した。

これらの出土遺物から今宿五郎江遺跡の古代社会生活様式は、狩猟、農耕、漁撈を行い、特に漁撈にかけてはSD-100を利用し、今津湾や内湾のラグーン地帯を利用し今津湾に出海していたと考えられ、また、対岸の毘沙門山に滑石を、今山に石斧の材料である玄武岩を採取に出かけたものと考察される。

農耕も盛んに行われていたと考えられる資料がある。しかし平野部が少ない地帯であるだけに水田耕作には特に力をいれたものと考えられる。

以上の考察から今宿五郎江遺跡の弥生時代中期から後期にかけての生活様式を考えると今津湾や内湾を中心とした漁撈と農耕を中心とし、主にSD-100を最大限利用した半農半漁の生活を営んでいたものと考えられる。

鎌倉時代から室町時代にかけての遺構は2間×2間、2間×3間を中心とした独立柱建物群が建ち並び瓦を葺いた建物を有する遺構が考えられる。内湾は自然の埋立てが進んでいたと考えられるが、北側には、まだラグーン地帯が残っていたと思われ、船の出入りは充分考えられる。

- 註1 佐原 真 「展望アジアの考古学」(樋口隆康教授退官記念論集) 1983年
註2 二宮 忠司 「考古学雑誌」第75巻第2号「今宿五郎江遺跡出土の銅鐻型銅製品」 1989年
註3 常松 幹雄 「浦志遺跡A地点」前原町文化財調査報告書第15集 1984年
註4 藤口 健二 「古代史発掘」佐賀県立博物館刊 1986年
註5 藤口 健二 註4同上 P68
註6 佐原 真 「古代史発掘5 大陳文化と青銅器・弥生時代」講談社 1974年 P151
註7 佐原 真 註1、註6同上
註8 下條 信行 「九州文化史研究所紀要第29号」
「弥生・古墳時代の九州型石錘について」1985年

1990年の調査で佐賀県吉野ヶ里遺跡から銅鐻型土製品が出土、福岡県板付遺跡からは弥生時代後期住居址上面の土壌から埋納状態で舌を持つ小銅鐻が出土している。

銅鐻型銅製品については「考古学雑誌」第75巻第2号に記載したものである。

圖 版



1 遺跡全景（北から）



2 遺跡全景（南から）



1 南台地全景（南から）



2 SD-100南台地全景（北から）



1 SD-50, 100全景 (南から)



2 SD-100,
南台地遠景 (北から)



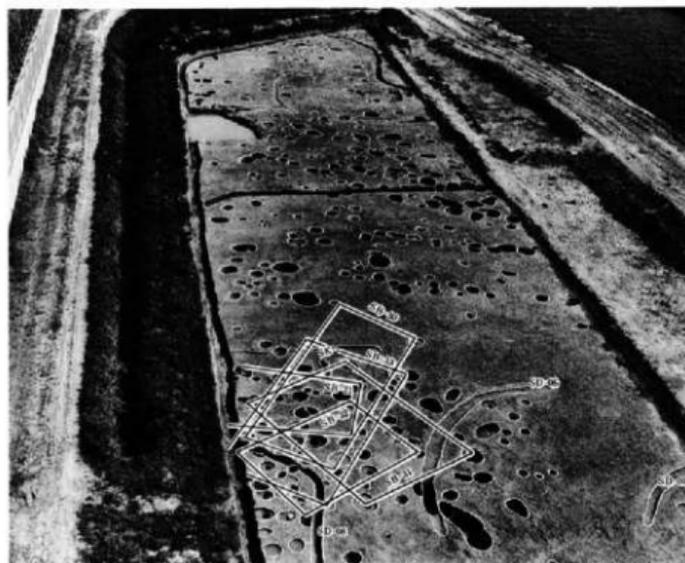
2 中央台地遺構検出状態（北から）



1 SD-200全景（西から）



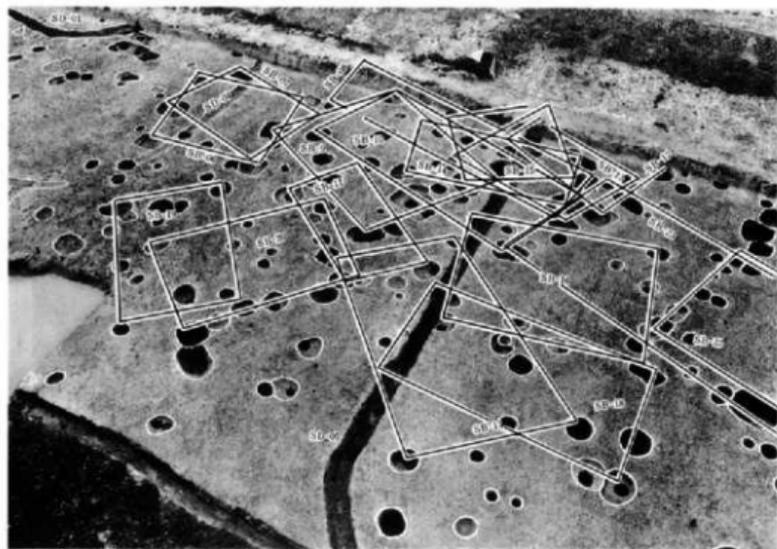
1 南台地SB・SD検出状態(南から)



2 SB・SD・SK検出状態(北から)



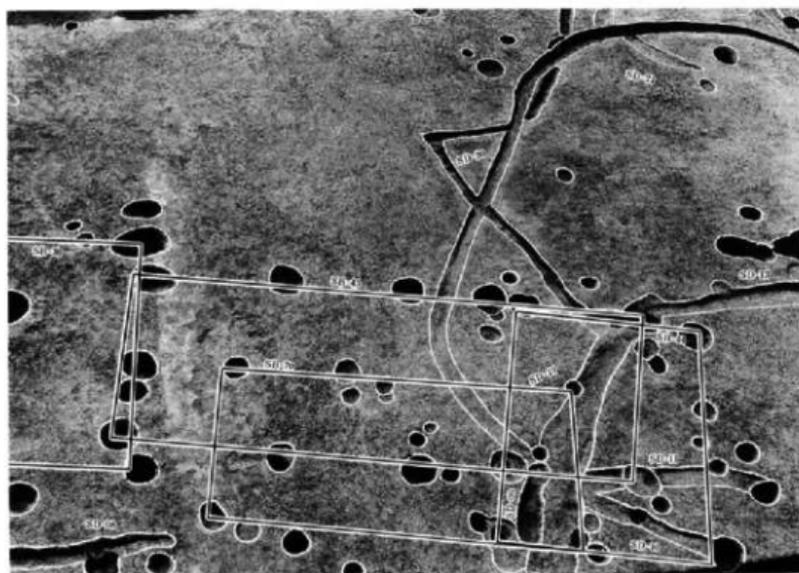
1 SB・SD・SK検出状態（南から）



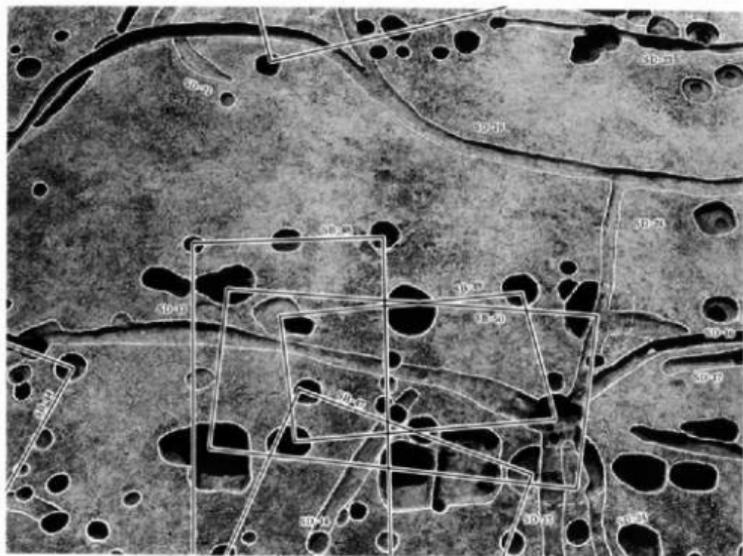
2 SB検出状態（東から）



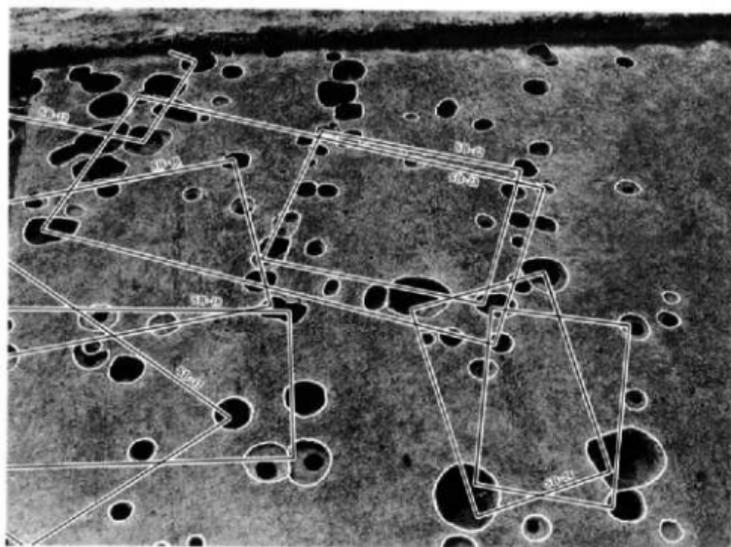
1 SB・SD検出状態（東から）



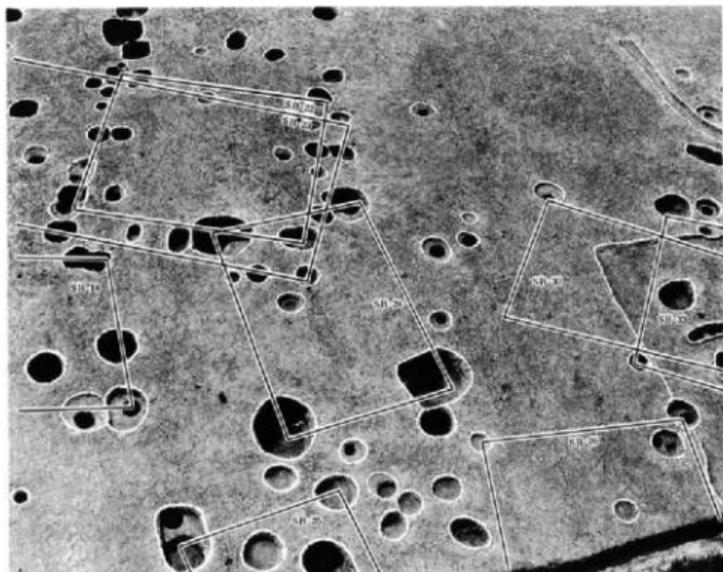
2 SB・SD検出状態（東から）



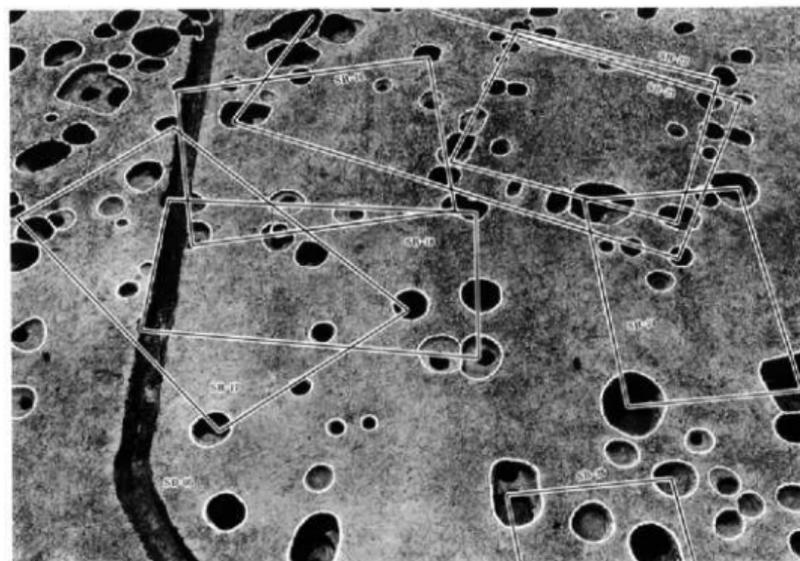
1 SB・SD検出状態（東から）



2 SB検出状態（東から）



1 SB検出状態 (東から)



2 SB検出状態 (東から)



1 SE-01・SD-100検出状態



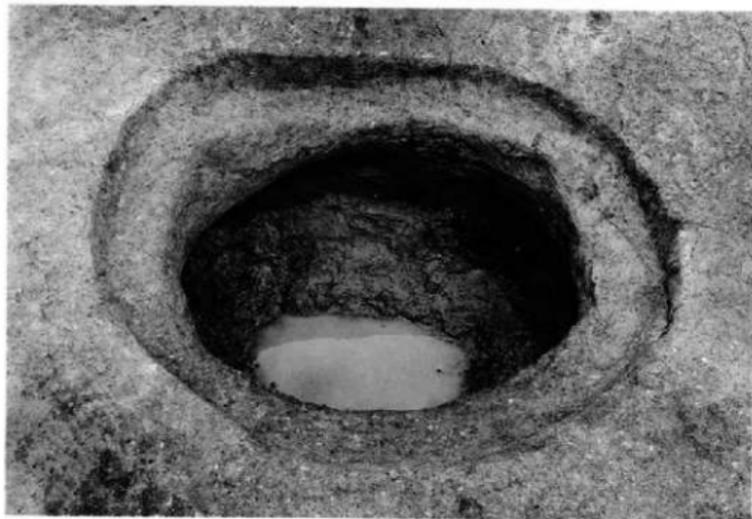
2 SE-01検出状態から(南から)



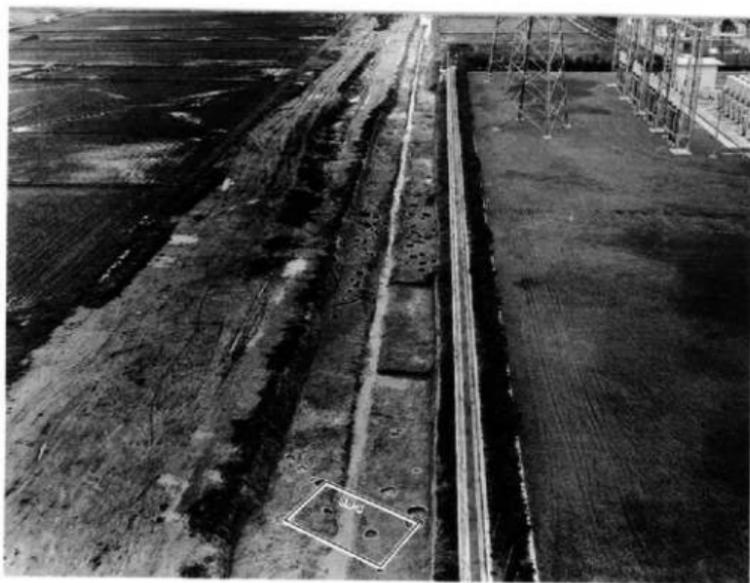
1 SE-01遺物出土状態近景



2 SE-01遺物出土状態近景



1 SE-01完掘状態 (南から)



2 南台地2区遺構検出状態 (南から)



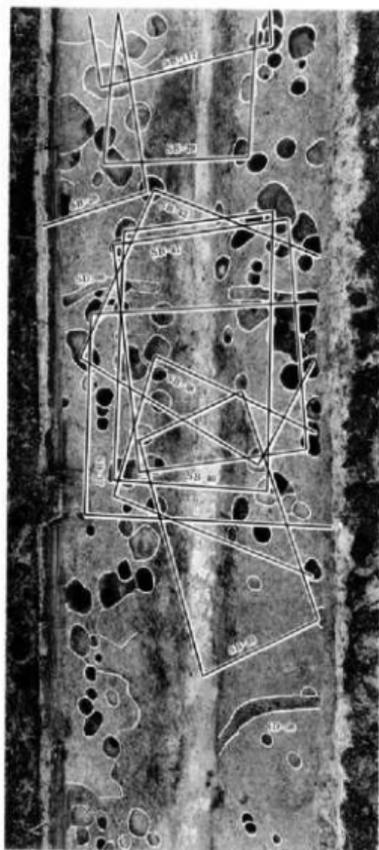
1 2区SD-100検出状態(北から)



2 2区遺構検出状態(北から)



1 2区SB・SD検出状態(北から)



2 2区SB・SD検出状態(北から)



1 SD-50, 100検出状態(北から)



2 SD-50, 100近景(南から)



1 SD-100銅鐸出土状態遠景(南から)



2 銅鐸出土状態近景(南から)



1 銅鐸出土状態近景



2 SD-100遺物出土状態(南から)



1 SD-100遺物出土状態(東から)



2 SD-100竹籠出土状態



1 SD-100遺物出土状態



2 SD-100遺物出土状態



1 SD-100遺物出土状態



2 SD-100遺物出土状態



1 SD-100遺物出土狀態



2 SD-100遺物出土狀態



1 SD-100遺物出土状態



2 SD-100遺物出土状態



1 SD-100遺物出土狀態



2 SD-100遺物出土狀態



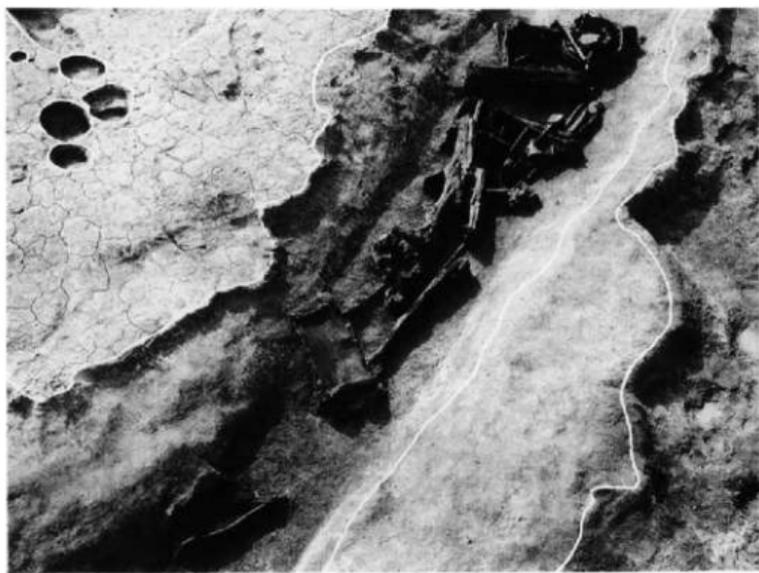
1 SD-50全景（東から）



2 SD-50遺物出土状態



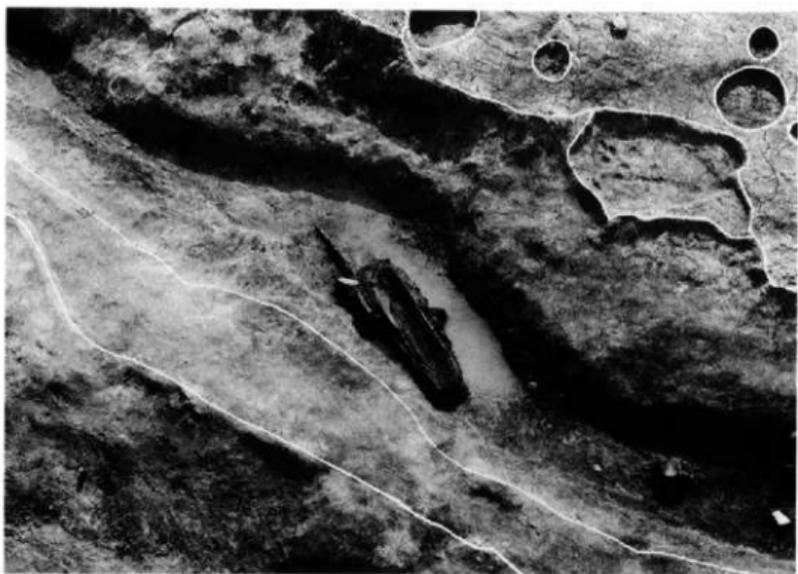
1 SD-50遺物出土狀態近景



2 SD-50遺物出土狀態近景



1 SD-50遺物出土状態近景



2 SD-50遺物出土状態近景



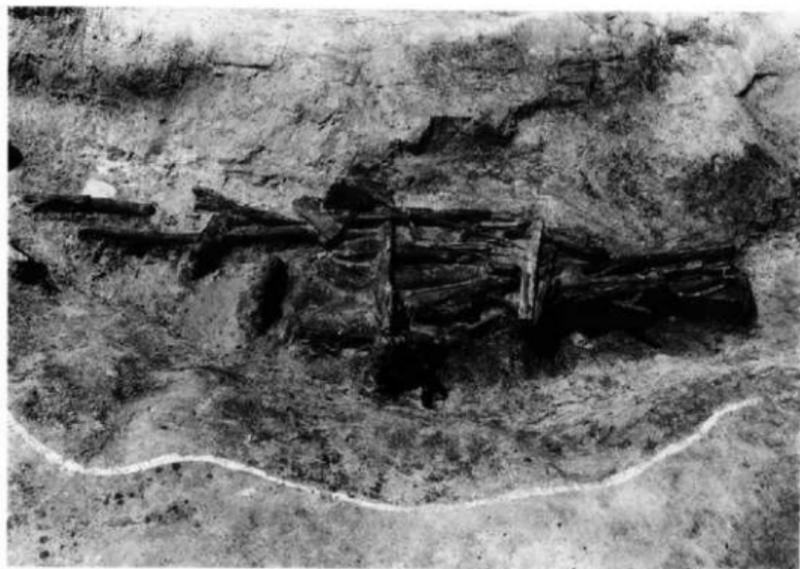
1 SD-50舟出土狀態



2 SD-50木器出土狀態



1 SD-50木器出土狀態



2 SD-50木器出土狀態



1 SD-50木器出土狀態



2 SD-50木器出土狀態



1 SD-50木器出土狀態



2 SD-50木器出土狀態



1 SD-100土层断面



2 SD-50土层断面



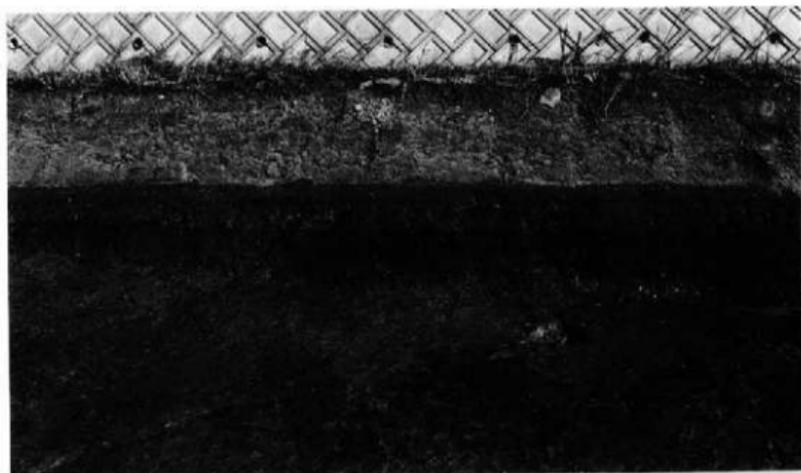
1 SD-100土层断面



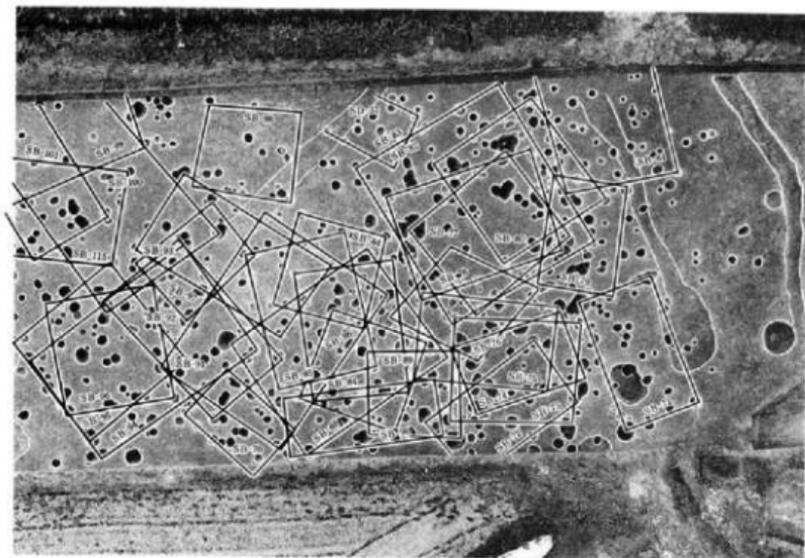
2 中央台地土层断面



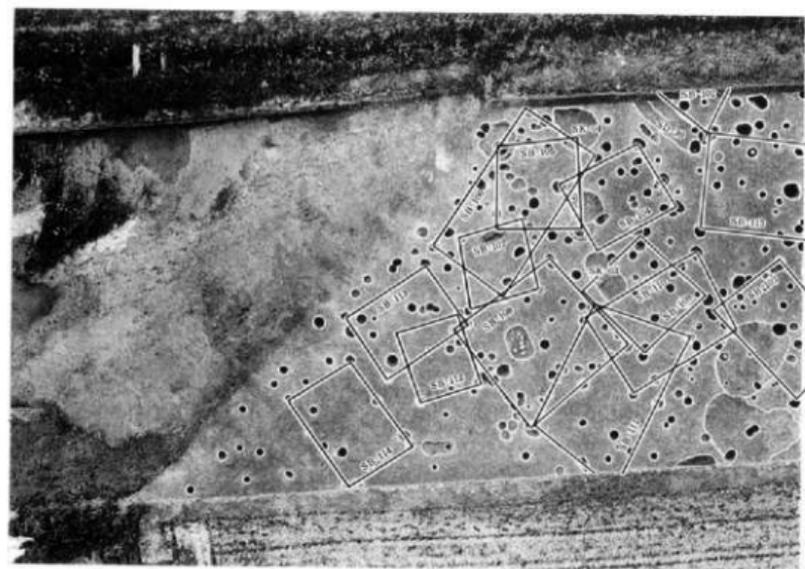
1 中央台地土層断面



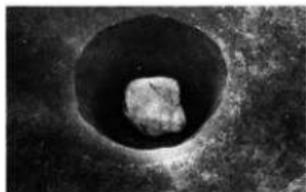
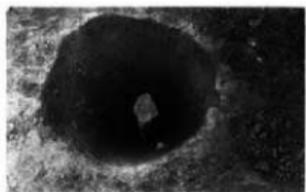
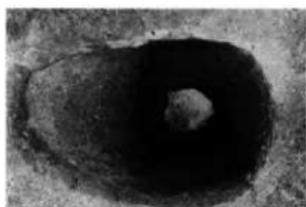
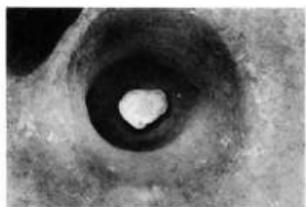
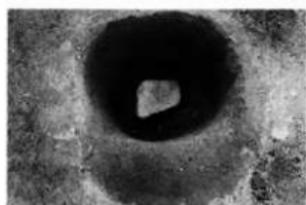
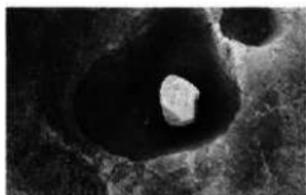
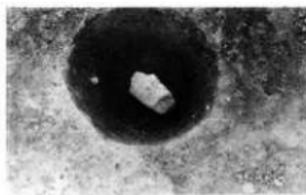
2 中央台地土層断面



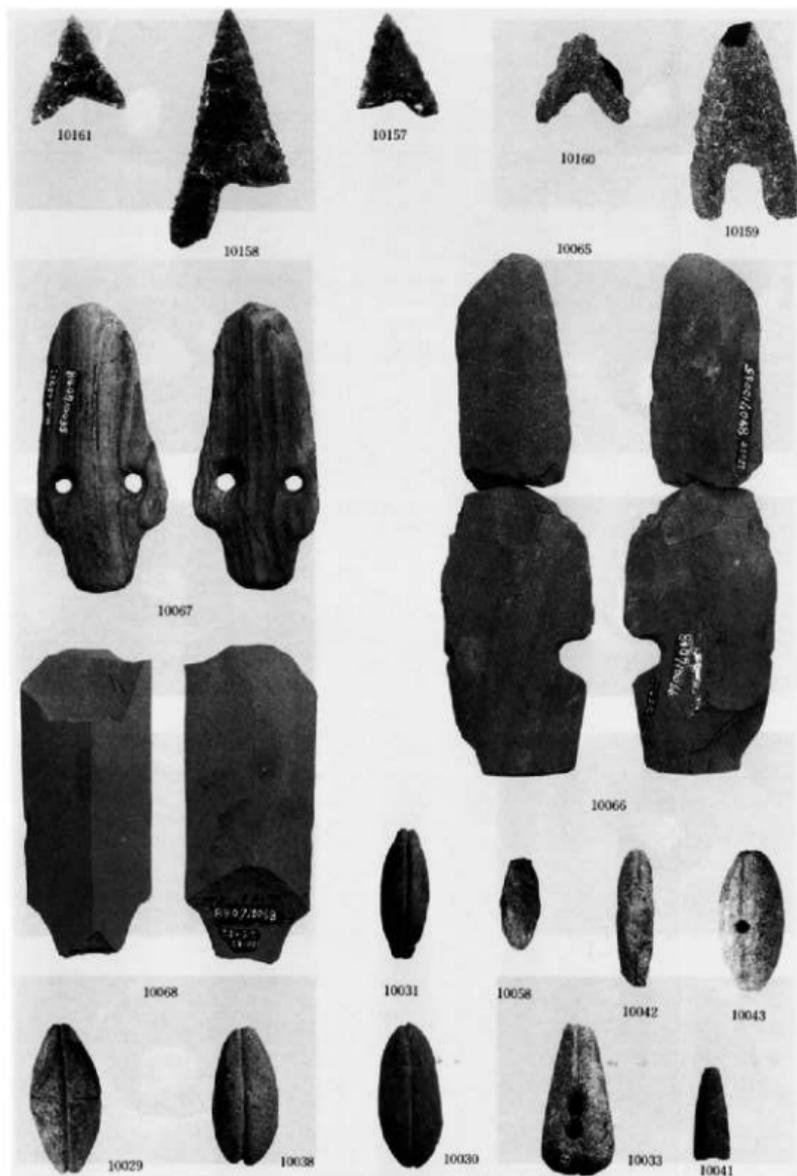
1 北台地遺構検出状態



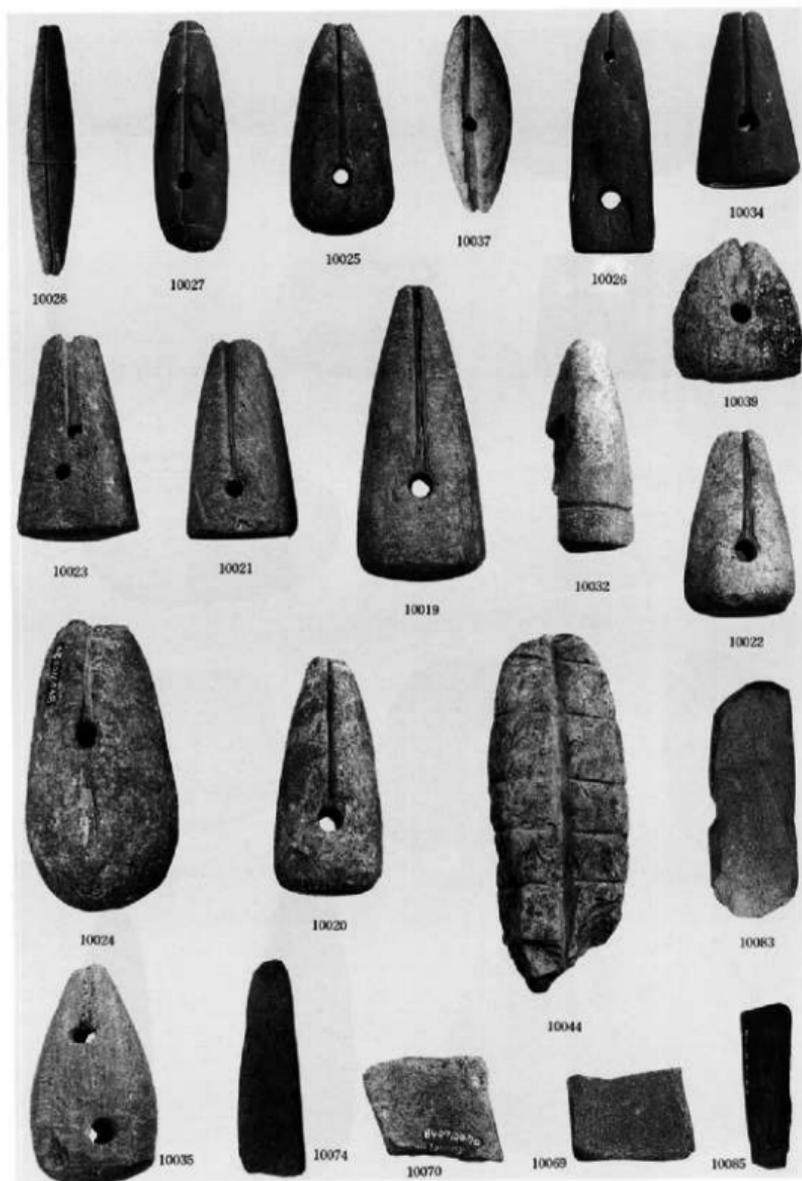
2 北台地遺構検出状態



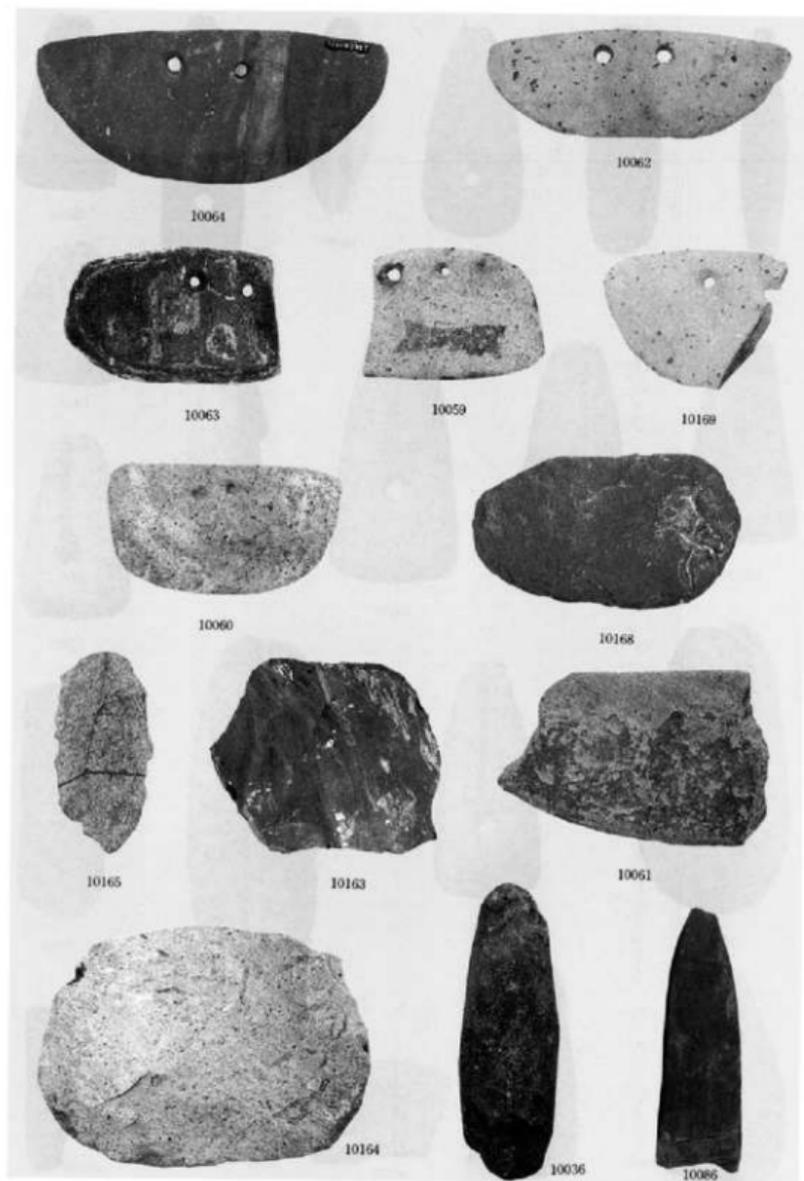
北台地柱穴礎盤検出状態



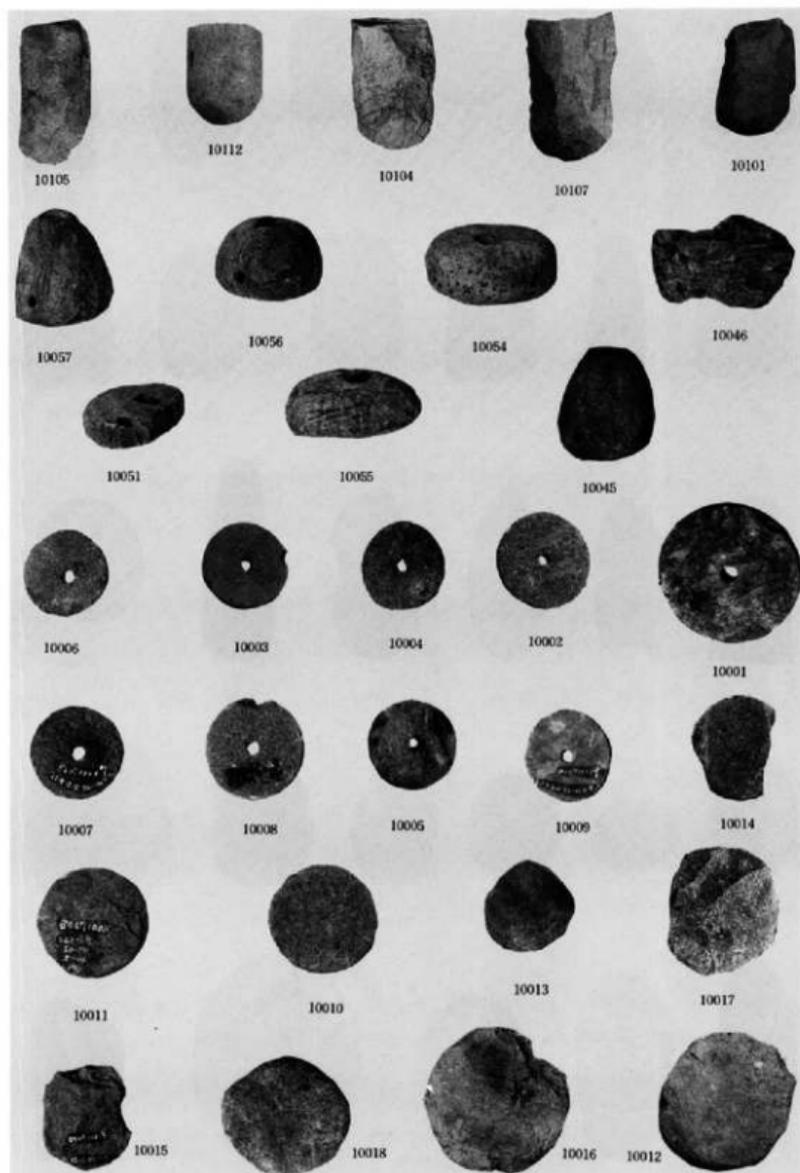
石器-1 (縮尺不統一)



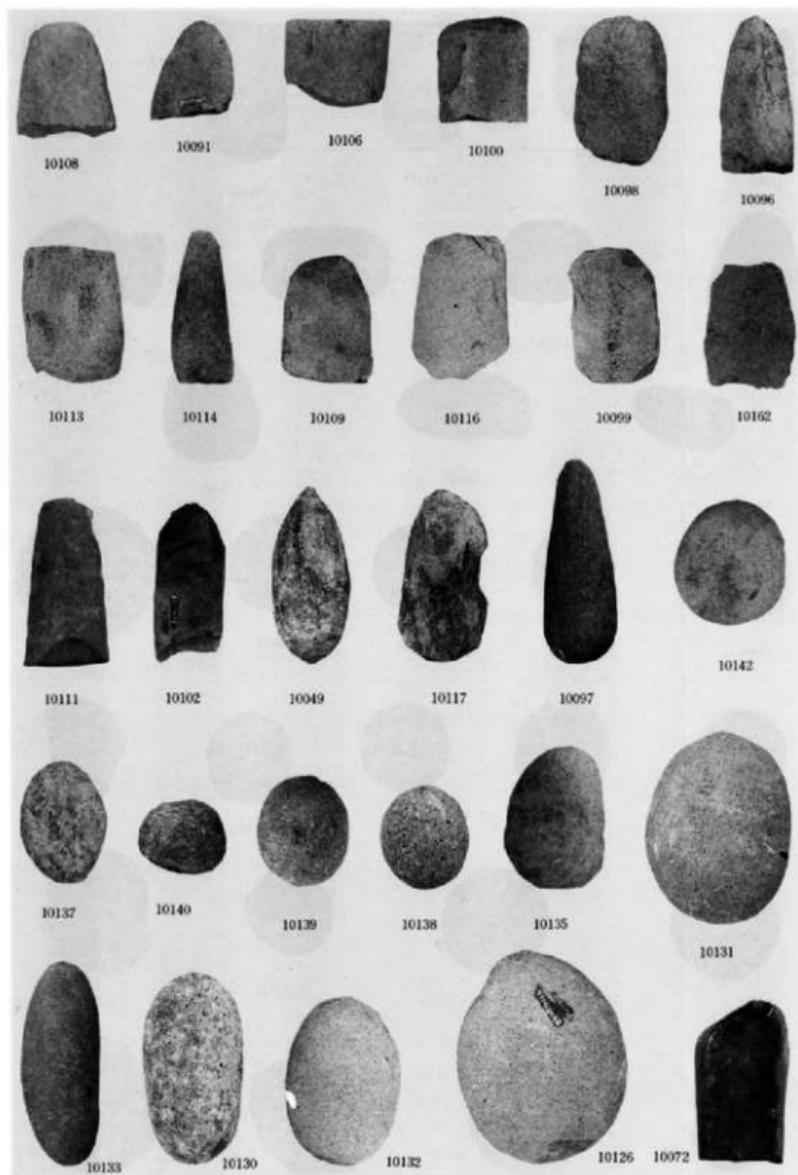
石器-2 (縮尺不統一)



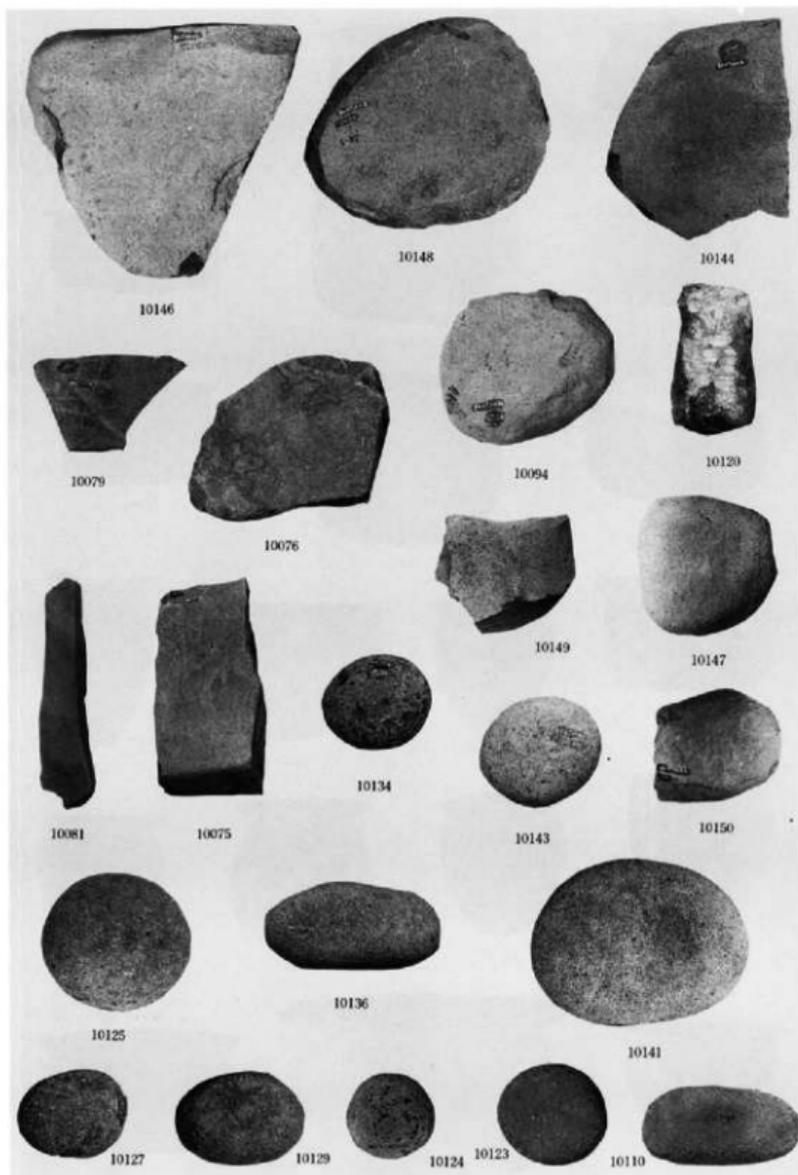
石器-3 (縮尺不統一)



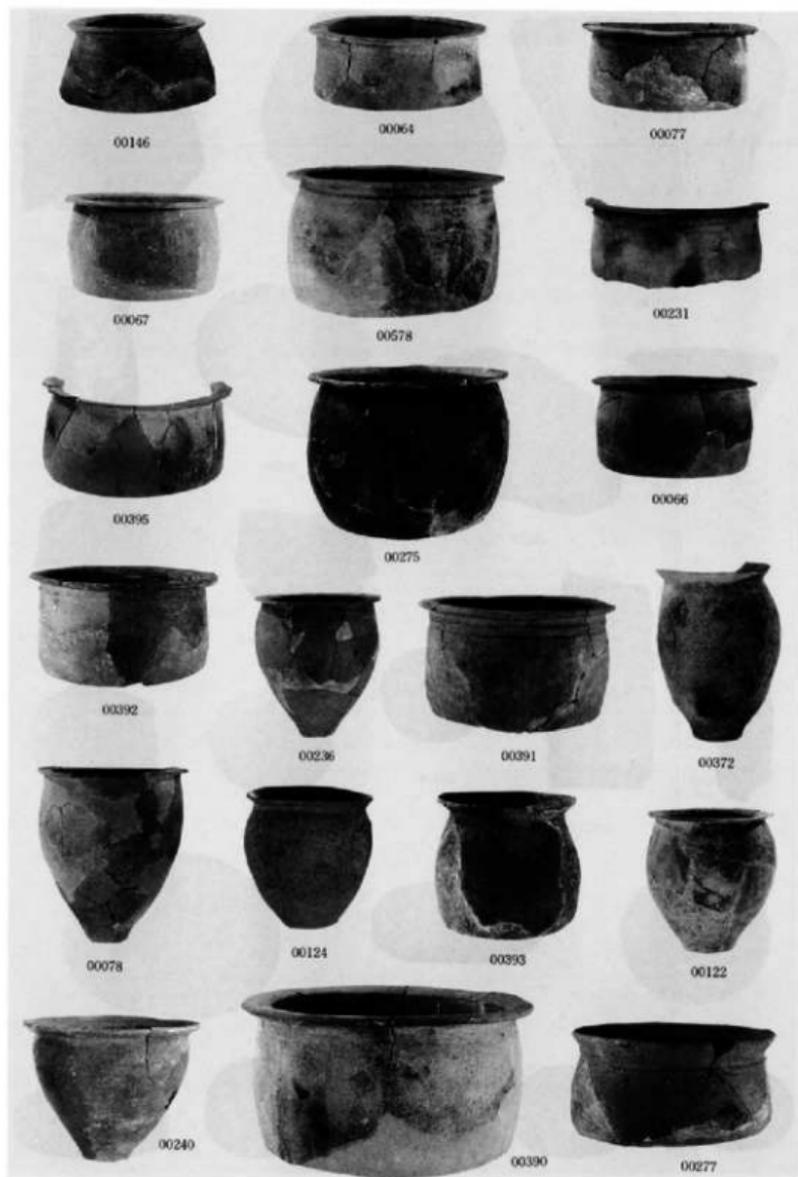
石器-4 (縮尺不統一)



石器-5 (縮尺不統一)



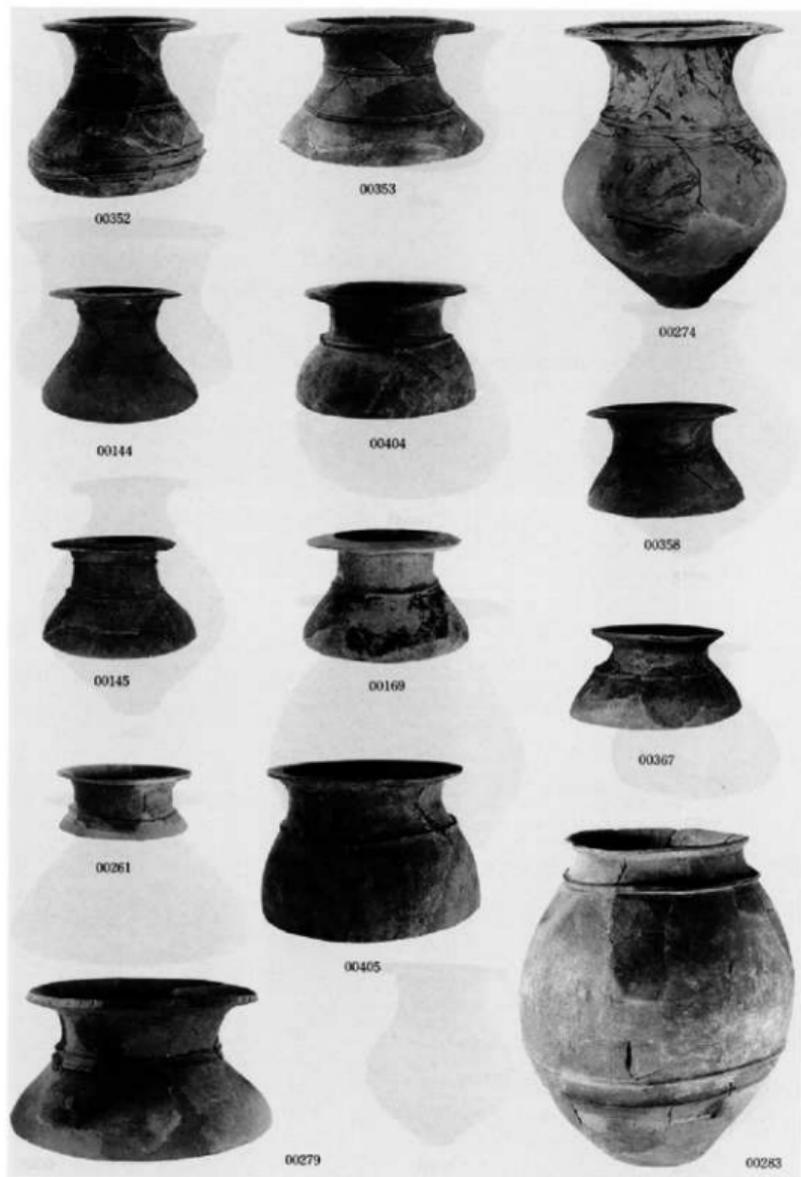
石器-6 (縮尺不統一)



土器-1 (縮尺不統一)



土器-2 (縮尺不統一)



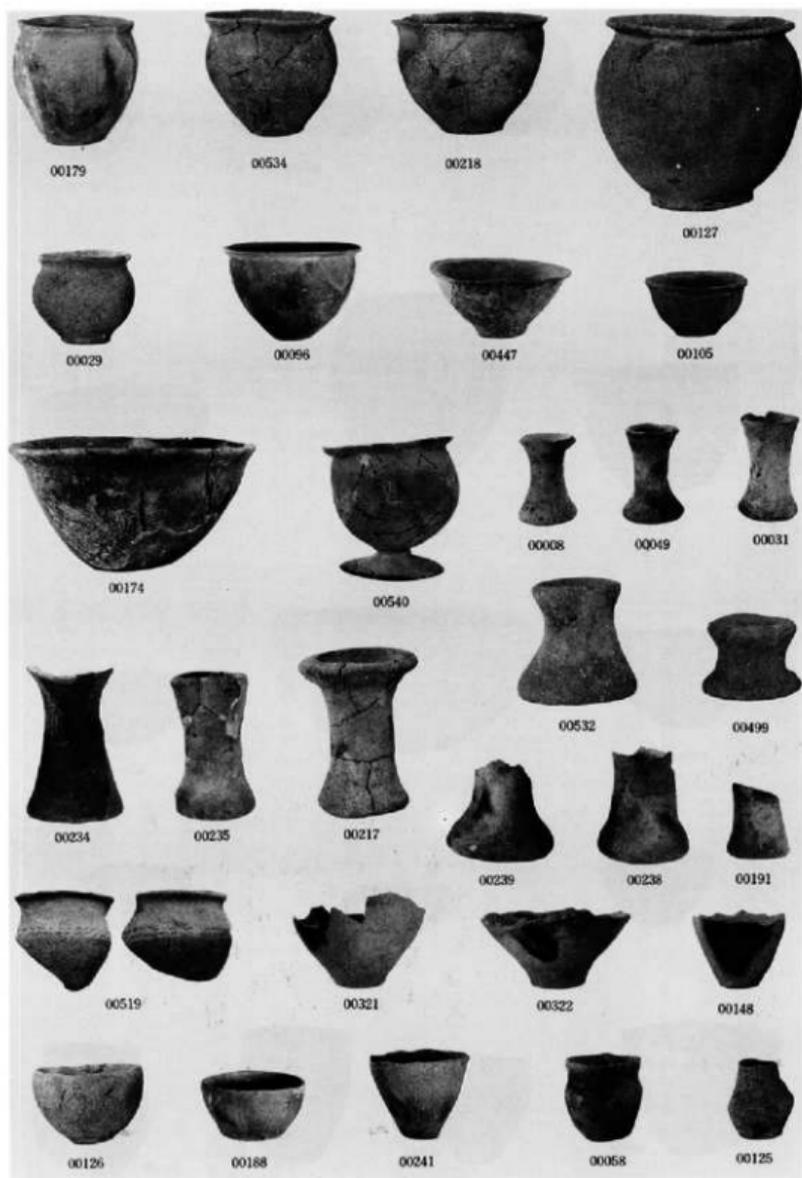
土器-3 (縮尺不統一)



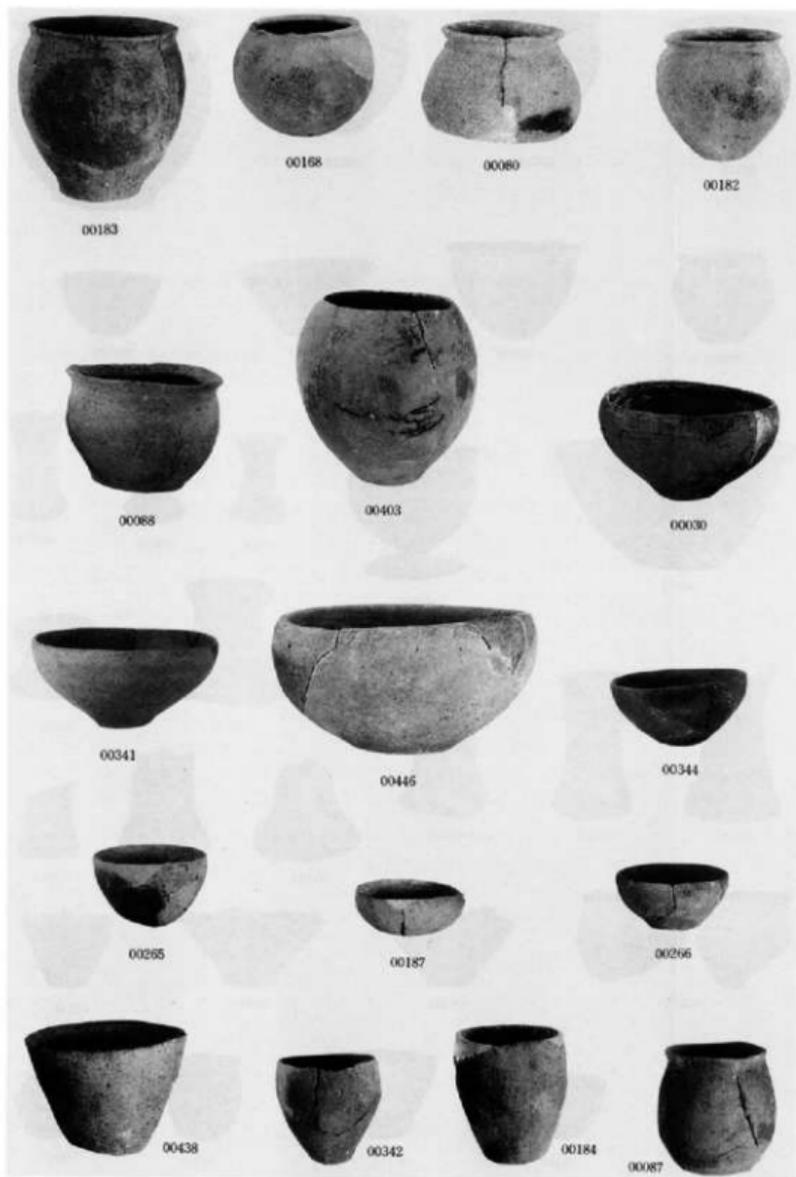
土器-4 (縮尺不統一)



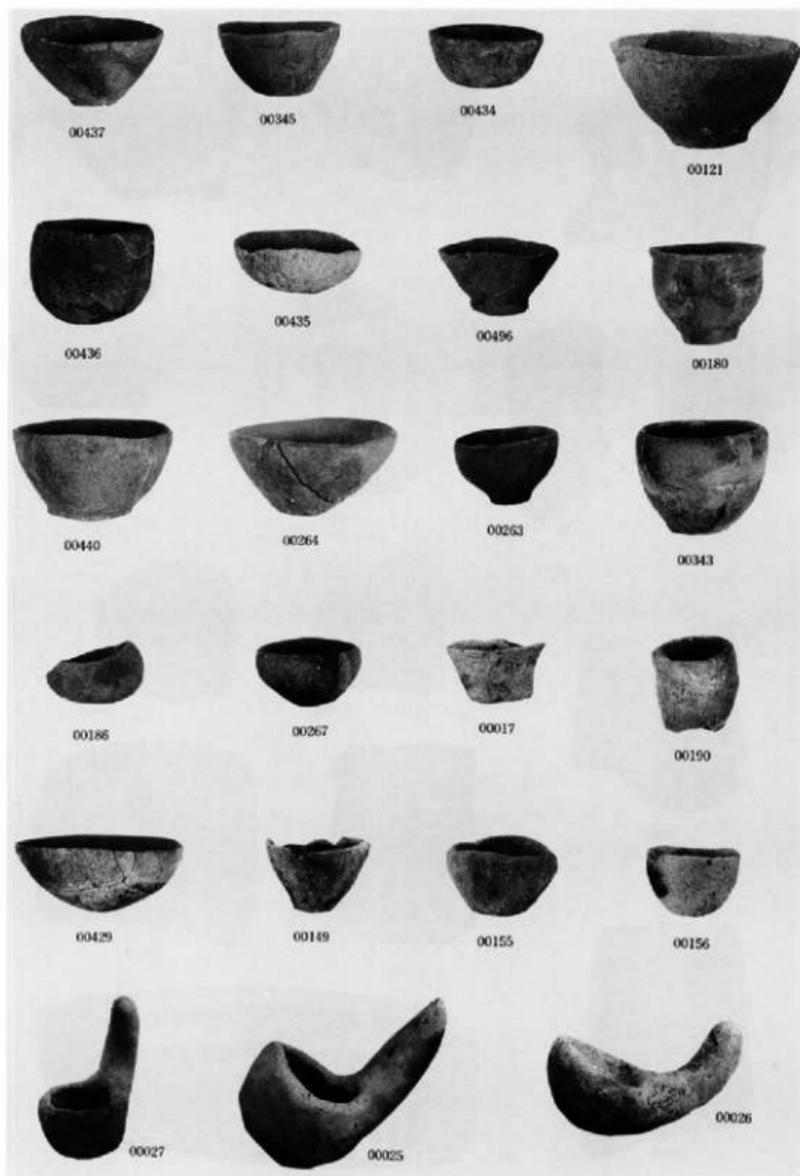
土器-5 (縮尺不統一)



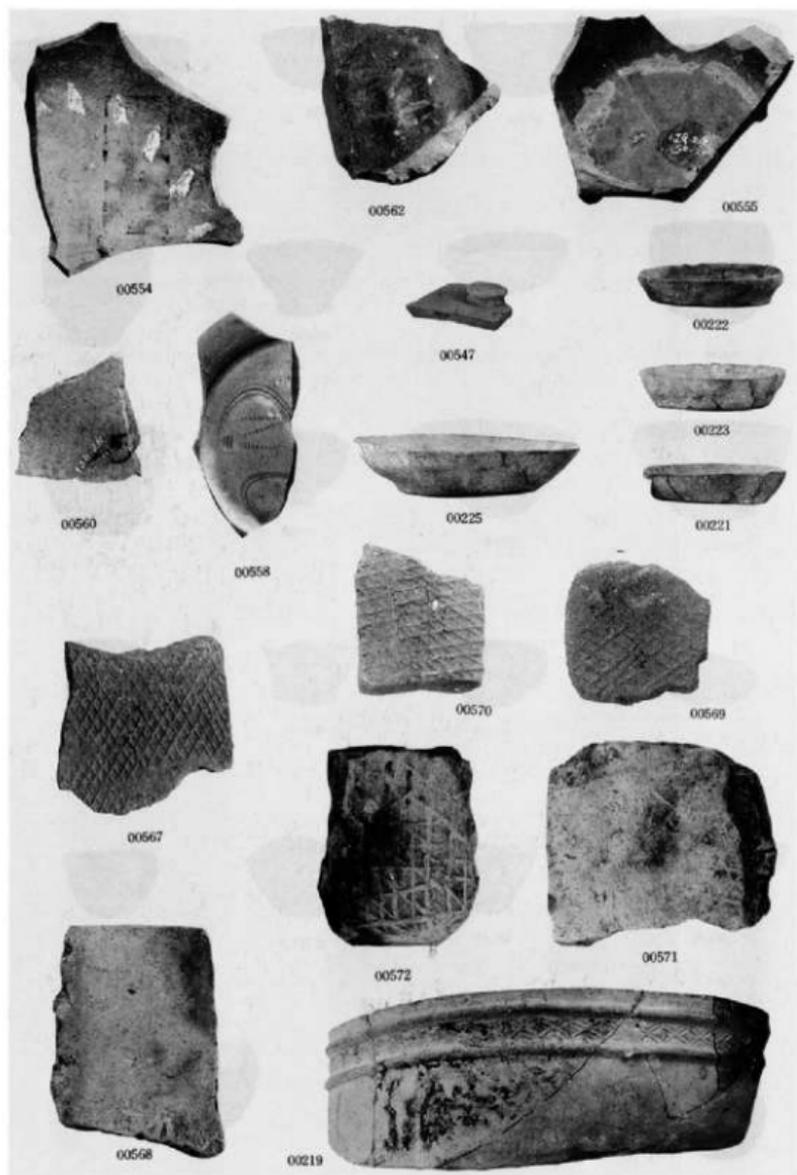
土器-6 (縮尺不統一)



土器-7 (縮尺不統一)



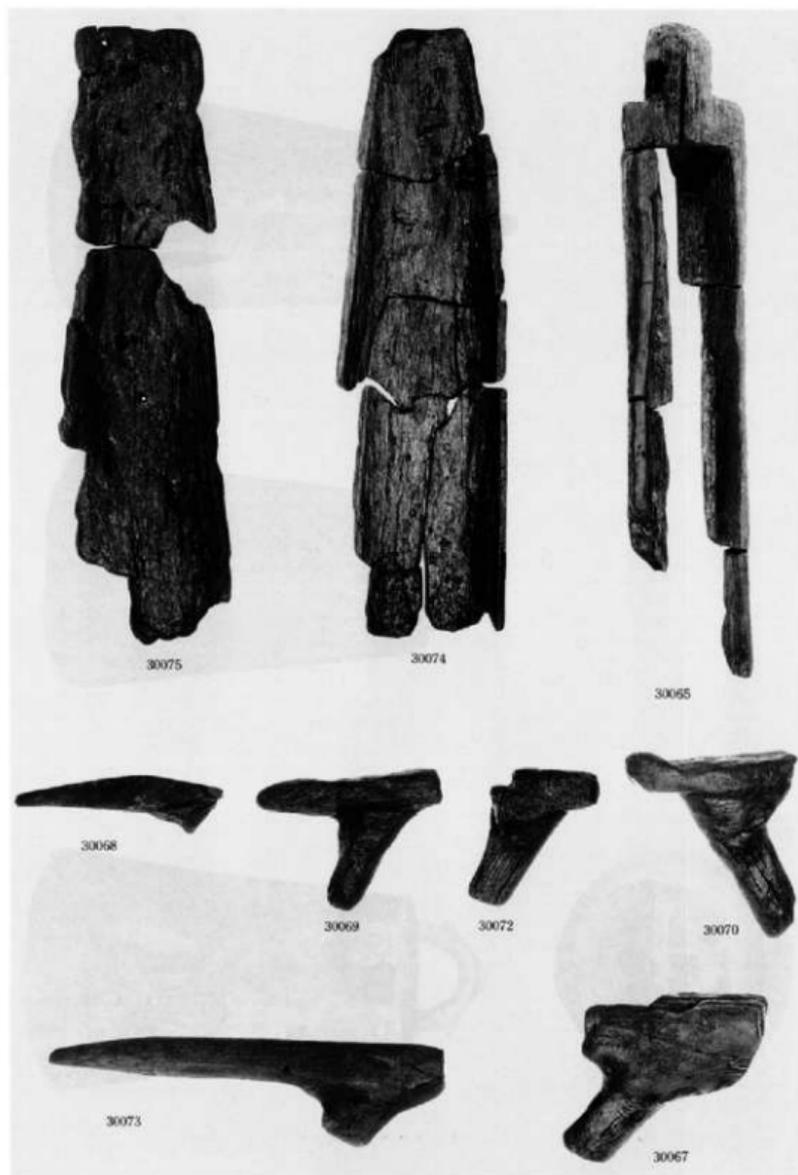
土器-8 (縮尺不統一)



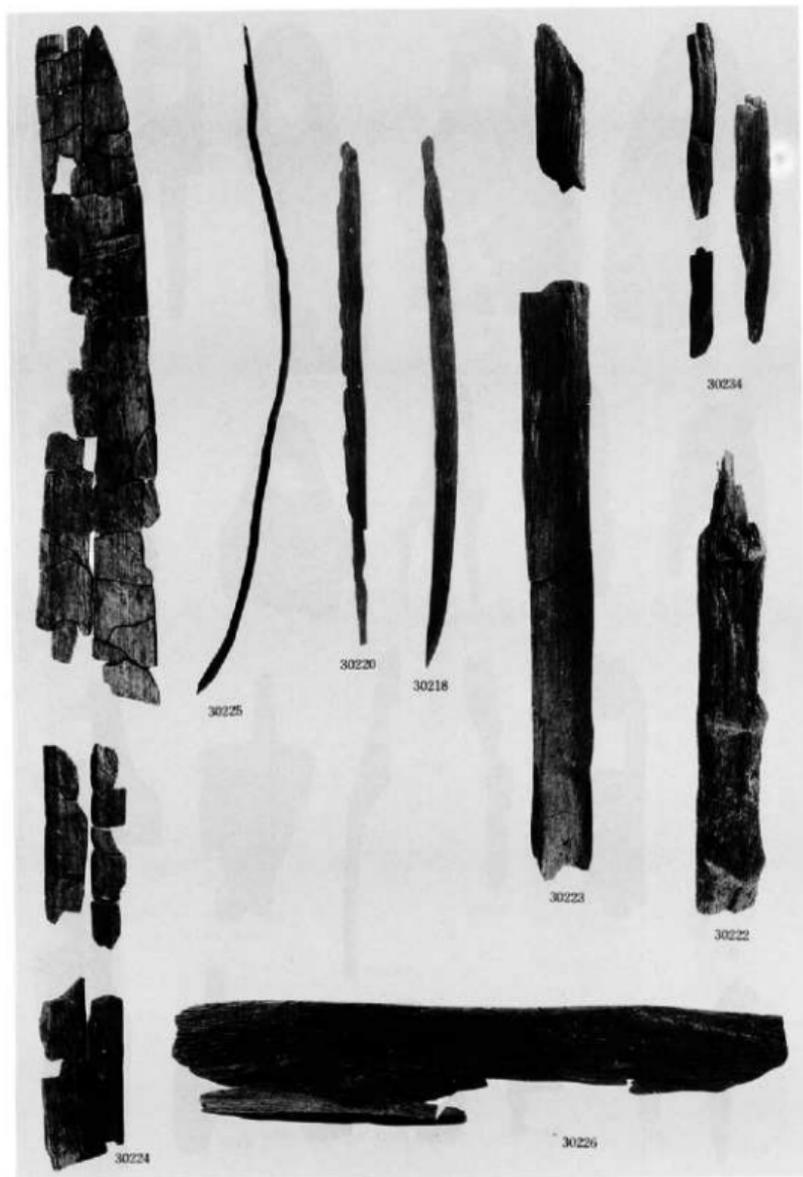
土器-9 (縮尺不統一)



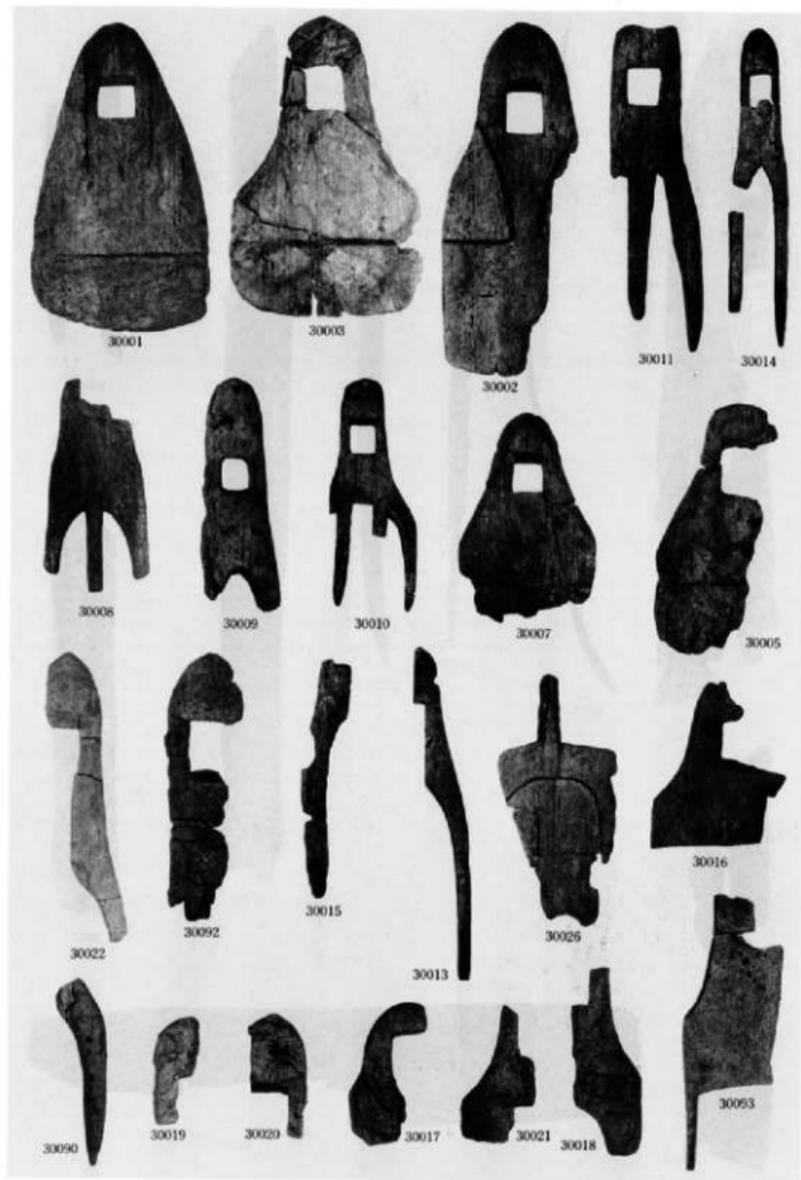
銅錘型銅製品 (縮尺不統一)



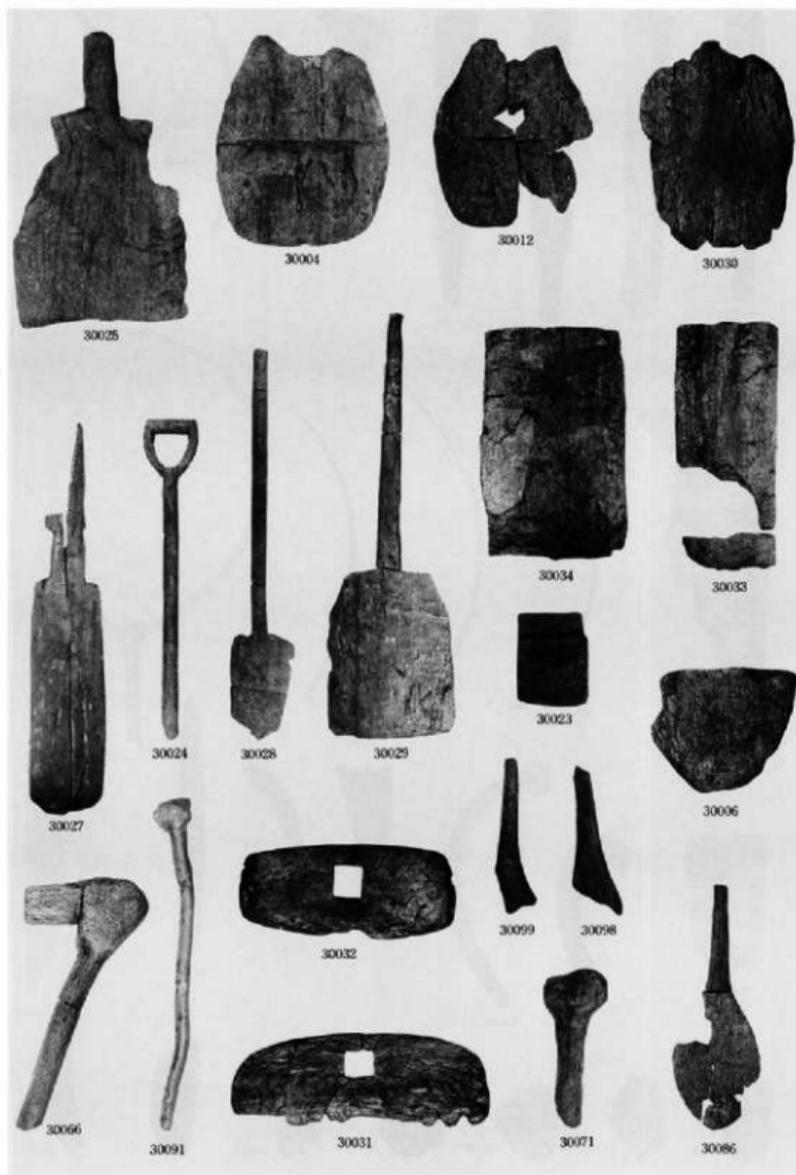
木器-1 (縮尺不統一)



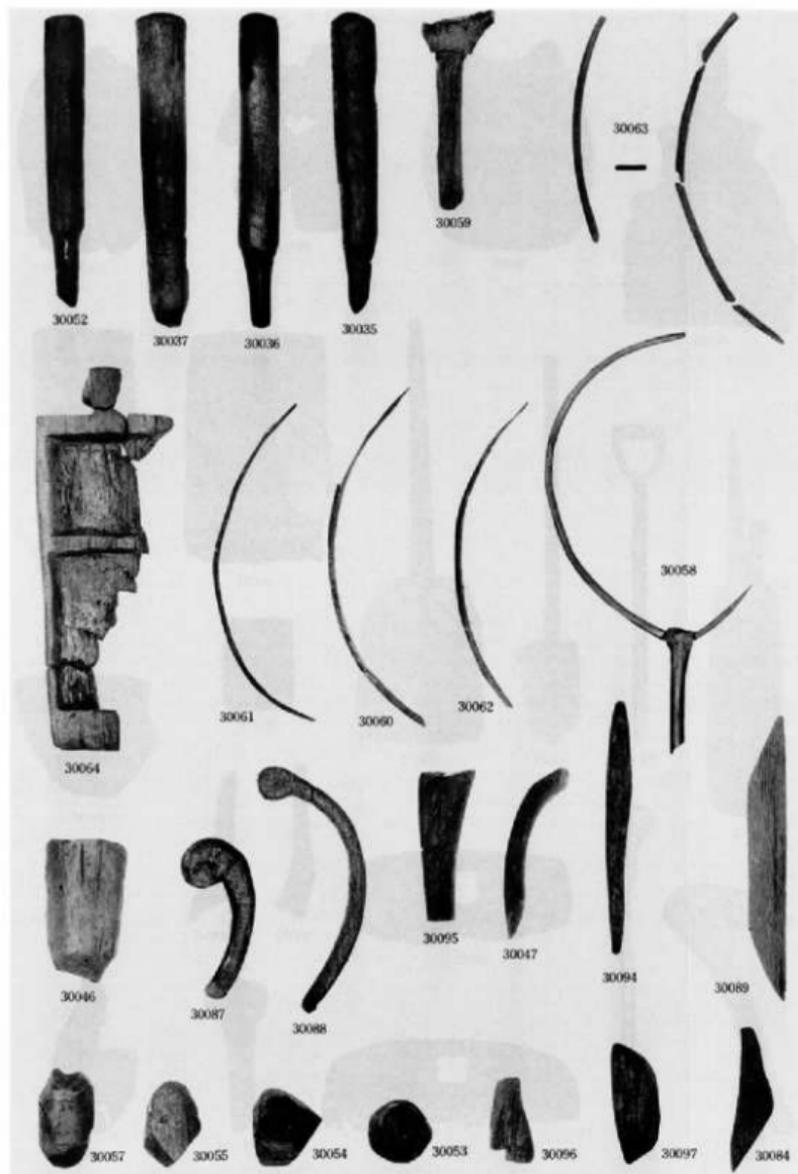
木器-2 (縮尺不統一)



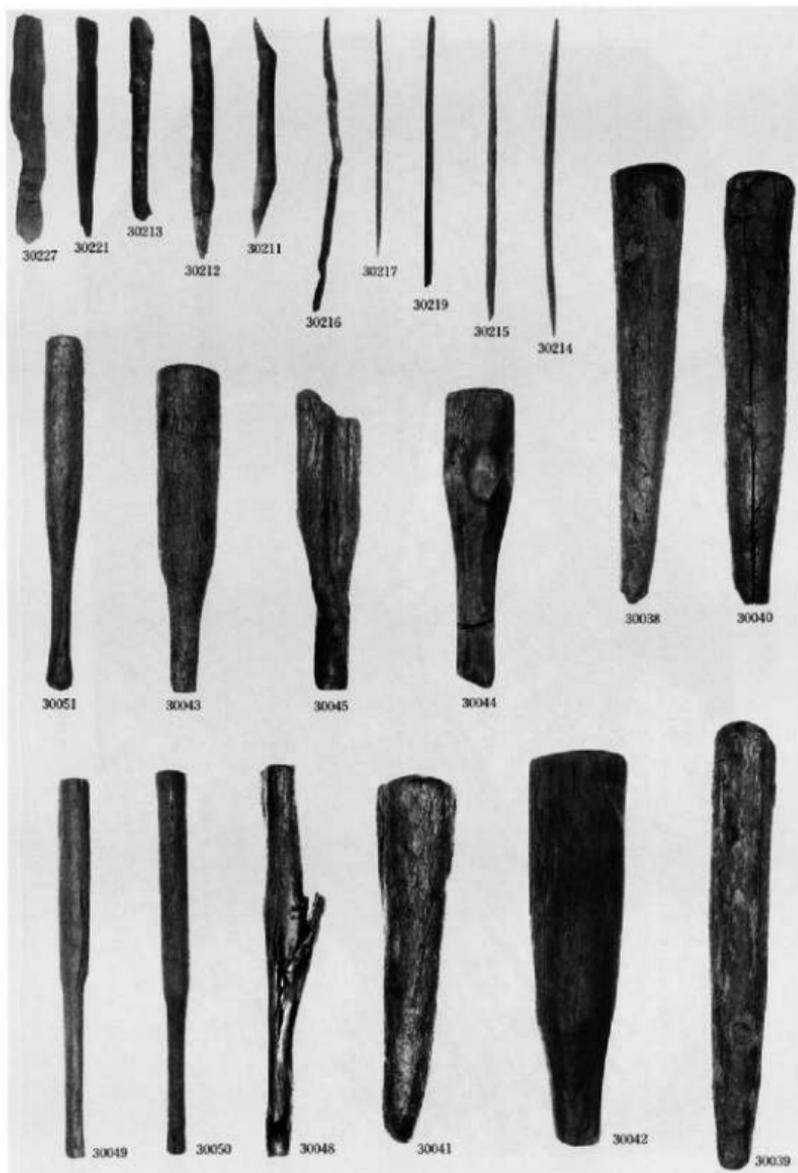
木器-3 (縮尺不統一)



木器-4 (縮尺不統一)



木器-5 (縮尺不統一)



木器-6 (縮尺不統一)



竹籠 (縮尺不統一)

福岡市

今宿五郎江遺跡II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第238集

1991年1月10日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 徳西日本新聞印刷

